長谷健賞

こころにしみる

「子どもの命」珠玉の作品集

心にしみる「子どもの命」珠玉の作品集　目次

監修にあたって
元・国立大学法人福岡教育大学学長　松尾　祐作　1

第一回長谷健賞＝平成十（一九九八）年度

最優秀賞（柳川市長賞）　動物虐待
柳川市立昭代中学校　二年　嶺川　侑香　2

優秀賞（柳川市議会議長賞）　私の夢
柳川市立柳南中学校　三年　森田　愛　3

優秀賞（柳川市教育委員会賞）　おおあめのひ
山門郡瀬高町立南小学校　一年　たくま　ゆうこ　4

優秀賞（柳川文化協会賞）　妹になったおばあちゃん
柳川市立柳河小学校　四年　葉玉　翔太　5

優秀賞　カブト虫のかんさつ
柳川市立城内小学校　二年　ふじよし　やすひろ　6

優秀賞　私の夏休み（日記から）
那珂川町立南畑小学校　三年　久賀　彩紀　7

優秀賞　車イスの犬
柳川市立城内小学校　五年　松藤　由紀　8

優秀賞　組体操
柳川市立城内小学校　六年　田代　由佳里　9

優秀賞　「地球交響曲」を見て
柳川市立柳南中学校　一年　田島　由理　10

優秀賞　自然と動物の絶滅
柳川市立蓮池中学校　二年　広松　絢子　12

第二回長谷健賞＝平成十一（一九九九）年度

最優秀賞　ホームステイがくれた宝もの
太宰府西小学校　五年　久賀　幸恵　13

優秀賞　ぺんぎんのぼうけん
小郡市立三国小学校　一年　大つぼ　なおみ　14

優秀賞　大すき、おばあちゃん。
柳川市立柳河小学校　二年　中しま　あや　16

優秀賞　プランクトンのエビゾー君
昭代第一小学校　三年　江上　智恵実　17

優秀賞　元気の森をめざして出発進行
太宰府市立太宰府西小学校　四年　久賀　とし明　18

優秀賞　「五体不満足」を読んで
水巻町立伊左座小学校　五年　安藤　麻矢　19

優秀賞　またきてね、おじいちゃん
久留米市立篠山小学校　六年　米倉　慶　20

優秀賞　カメと私
水巻町立水巻中学校　一年　宮原　さやか　22
優秀賞　長崎で学んだこと
柳川市立柳南中学校　二年　加藤　由美　23
優秀賞　教訓「健康第一」
大牟田市立白光中学校　三年　松本　万葉子　24
柳川市長賞　十年後の私
柳川市立蒲池中学校　三年　佐々木　麻衣　25
柳川市議会議長賞　くねくねあおむしくん
行橋市立行橋南小学校　三年　くわ　原理　26
柳川市教育委員会賞　「市民のつどい」に参加して
柳川市立柳南中学校二年　北原　絵美　28
柳川文化協会賞　駅前の通りが映すもの
柳川市立蒲池中学校　三年　大渕　理映　29
第三回長谷健賞＝平成十二（二〇〇〇）年度
最優秀賞　「Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｄ」“大好きだからさようなら”
福岡市立青葉中学校　二年　田中　綾乃　30
優秀賞　ぼくのおとうと
三橋町立藤吉小学校　一年　かいだ　こうへい　32
優秀賞　ハムスター
三橋町立藤吉小学校　二年　ひろはた　さやか　33
優秀賞　こんにちは、竹の子さん
三橋町立垂見小学校　三年　山田　美穂　34
優秀賞　命が生まれるとき
柳川市立東宮永小学校　四年　山田　徹　35
優秀賞　老人保健施設に行って
山門郡瀬高町立大江小学校　五年　向　俊行　36
優秀賞　掘割から世界への願い
柳川市立城内小学校　六年　古澤　千紘　37
優秀賞　リサイクル活動
柳川市立柳城中学校　一年　蒲池　桃子　38
優秀賞　支えられること、支えること
城島町立城島中学校　二年　中園　唯　39
優秀賞　大切なこと
福岡県行橋市立行橋中学校　三年　田中　陽子　40
優秀賞　ポコの家・ポコの願い
伝習館高等学校　一年　河口　綾香　42
優秀賞　アンドロイド
伝習館高等学校　二年　石橋　由香利　43
優秀賞　チップと願い岩
福岡県立久留米高等学校　三年　園田　早苗　45

優秀賞　「親子日記」
柳川市立両開小学校　一年　かじたにまさや　46
柳川市長賞　おばあちゃんのお米となみだ
柳川市立東宮永小学校四年　平田　貢詳　48
柳川市議会議長賞　近所
柳川市立城内小学校六年　山科　可珠子　49
柳川市教育委員会賞　夢と人との絆
福岡市立青葉中学校三年　大谷　恵理果　50
柳川文化協会賞　母の教え
福岡県立伝習館高等学校　一年　原田　路子　51
第四回長谷健賞＝平成十三（二〇〇一）年度
最優秀賞　おにやんまの伝言
福岡市立育葉中学校三年　田中　綾乃　52
優秀賞　お父さんの背中
大和町立大和中学校　三年　武末　舞　54
優秀賞　命のリレー
福岡県立伝習館高校　二年　古庄　圭一　55
優秀賞　オシロイ花の観さつ
柳川市立矢留小学校　四年　荒巻　愛実　56
優秀賞　弟の教えてくれたこと
調布市調布中学校　三年　長嶋　亜沙美　57
優秀賞　ある日の事故から
福岡県立伝習館高　一年　武下　優子　58
優秀賞　特攻隊員とその家族
福岡県立伝習館高校　一年　岩松　靖子　59
優秀賞　スズ虫日記
小郡市立三国小学校　三年　大坪なおみ　60
優秀賞　ムツゴロウの海
柳川市立東宮永小　六年　宮崎　司　61
優秀賞　つばめの「チュン」の観察日記
柳川市立城内小　三年　小西　たくと　63
優秀賞　ぼくの夢
柳川市立両開小学校　四年　江口　卓見　64
優秀賞　熱発して―。
三橋町立三橋中学校　一年　山田　美和　65
優秀賞　夏の部活
柳川市柳南中学校　一年　高椋　草美　66
優秀賞　はしれ！　ゼウス
久留米市立荒木小学校　二年　川しま　あか音　67
福岡県知事賞　巣立ち
鈴木　由美子　68

優秀賞　雨の目
伝習館高校一年　松尾　信輔　71
特別賞　干潟の向こうに
龍　達男　74
特別賞　横山先生
古賀　雁来紅　75

第五回長谷健賞＝平成十四（二〇〇二）年度

長谷健賞大賞　郵便受けの向こうには
相模原市立大野北小学校　六年　竹森　香以　77
福岡県知事賞　「freebird」～また自由に翔べる様に～
城東高等学校　一年　田中　綾乃　78
福岡県教育委員会賞　鳥が渡る日
鈴木　由美子　80
東京都台東区長賞　タイムトンネル
三橋町立三橋中学校二年　山田　美和　83
東京都台東区教育委員会賞　出窓の境界線の外から
柳川市立柳城中学校　二年　山科　可珠子　85
福岡市教育委員会賞　カラフル
文京区立文林中学校　三年　鈴木　千鶴　86
柳川市長賞　地雷について
柳城中学校　三年　蒲池　桃子　87
柳川市教育委員会賞　ハーフタイムで
柳川市立柳城中学校　三年　橋本　圭司　88
柳川市議会議長賞　花と緑のバードアイランド　―よみがえれ三宅島―
東京都府中市在住　高校・一般　小山　節子　89
柳川文化協会賞　勇勝丸の再出発
芦辺町立田河中学校　一年　佐藤　貴成　91
優秀賞　おじいさんの素敵なお店
福岡市立青葉中学校　二年　水城　優花　92
優秀賞　一期一会のホタルたち
久留米市立荒木小学校　五年　川島　早織　93
優秀賞　アイヌのくらしを見つめて
柳川市立柳南中学校　二年　高椋　草美　94
優秀賞　きっと、大空を
小郡市立三国小学校　五年　大坪　裕美　95
優秀賞　「いただきます」の意味
柳川市立東宮永小学校　六年　古賀　有美　97
優秀賞　やさしさのおくりもの
北九州市立南小倉小学校　二年　小やなぎ　ゆみ子　98
優秀賞　「We are the bridge」
福岡市立城南中学校　一年　大鶴　翔貴　99

第六回長谷健賞＝平成十五（二〇〇三）

長谷健賞大賞　主　将　腕　章
福岡県福岡市立三宅中学校　三年　池田　香織　100

福岡県知事賞　「私の八月六日」
福岡県柳川市立柳南中学校　三年　高椋　草美　102

柳川市長賞　赤い葉ひらり
福岡県福岡市城東高等学校　二年　田中　綾乃　103

東京都台東区長賞　いのちは見えるよ
浅草小学校　二年　和田　亮平　104

福岡県教育委員会賞　「ひまわりの種」
福岡県福岡市立箱崎中学校　三年　村山　紗織　105

柳川市教育委員会賞　この一球
福岡県柳川市立柳城中学校　三年　野口　晴加　107

東京都台東区教育委員会賞　見かけ
東京都町田市立鶴川第二中学校　二年　夏目　愛　108

福岡市教育委員会賞　祖父と私の暑い夏
福岡県久留米市荒木小学校　六年　川島　早織　109

柳川市議会議長賞　キャプテン悠太郎
福岡県柳川市立東宮永小学校　五年　山田　悠太郎　110

柳川文化協会賞　家族のたからもの
福岡県柳川市立東宮永小学校　三年　山田　もも子　111

東京浅草ロータリークラブ会長賞　ポンタの手じゅつ
東京都台東区浅草小学校　三年　久田　絢天　112

第七回長谷健賞＝平成十六（二〇〇四）年度

長谷健賞大賞　待っている光
福岡工業大学付属城東高等学校　三年　田中　綾乃　113

優秀賞（福岡県知事賞）　何階ですか
柳川市立矢留小学校　四年　あらまき　かえで　115

優秀賞　東京都台東区長賞　一人の人間として
調布市立調布中学校　三年　和田　さゆり　117

優秀賞（柳川市長賞）　涙が笑顔にかわる時
久留米市立荒木小学校　五年　川島　茜音　118

優秀賞（福岡県教育委員会賞）　いつもとちがう夏休み
柳川市立柳南中学校　二年　松藤　貴之　119

優秀賞（台東区教育委員会賞）　ドはドングリのド
文京区立誠之小学校　二年　島貫　真亘（さだのぶ）　120

優秀賞（福岡市教育委員会賞）　孤独なランナー坂を上れば
福岡市立三宅中学校　三年　太田　麿紀子　122

優秀賞（柳川市教育委員会賞）　白い運動靴
福岡県柳川市在住　一般　福山　修持　123

優秀賞（柳川市議会議長賞）　育つということ
東京都立川市在住　一般　中村　万里　126
優秀賞（東京浅草ロータリークラブ会長賞）
「たったひとつのたからもの」を読んで
台東区立浅草小学校　六年　横尾　将道　128
優秀賞（柳川文化協会長賞）　おじいちゃんの忘れ物
佐賀県佐賀市立城西中学校　三年　清水　郁　129

第八回長谷健賞＝平成十七（二〇〇五）年度

長谷健賞大賞　最期の言の葉（ことのは）
早稲田大学教育学部国文学科　一年　田中　綾乃　131
優秀賞（福岡県知事賞）　心の傷・心の支え
柳川市立柳南中学校　一年　森戸　愛子　133
優秀賞（台東区長賞）　生まれてはじめておよげた
台東区立浅草小学校　二年　ブラナム　アイラ　134
優秀賞（柳川市長賞）　スタートライン～風を感じて～
久留米市立荒木中学校　二年　川島　早織　135
優秀賞（福岡県教育委員会賞）　八月十五日
柳川市立柳南中学校　一年　江口　莉加　137
優秀賞（台東区教育委員会賞）　ぼくも松井せんしゅになれるかも
文京区立誠之小学校　三年　島貫　真亘　138
優秀賞（福岡市教育委員会賞）　歪（いびつ）な円
柳川市立昭代中学校　二年　河村　智里　139
優秀賞（柳川市教育委員会賞）　わが家はみんな祭り好き
柳川市立柳河小学校　四年　古賀　武尊　140
優秀賞（東京商工会議所台東支部会長賞）　星　空
町田市立金井小学校　五年　小川　遥加　141
優秀賞（柳川市議会議長賞）　夢の中の炎
大牟田市立甘木中学校　三年　古賀　みか　142
優秀賞（柳川文化協会賞）　人と人の出会い
柳川市立昭代中学校　三年　高田　千穂　144
優秀賞（ＮＰＯ子どもの命と心のネット長谷健顕彰会東京事務所長賞）
何かが変わって…
町田市立鶴川第二中学校　二年　多田　詩織　145

第九回長谷健賞＝平成十八（二〇〇六）年度

長谷健賞大賞　詩　の　よ　さ
柳川市立東宮永小学校　六年　奥薗　真希　146
優秀賞（福岡県知事賞）　ひまわりの種
福岡県立柳川市立東宮永小学校　四年　北浜　実樹　148
優秀賞（柳川市長賞）　さくら
柳川市立蒲池小学校　四年　大坪　駿　148

優秀賞・柳川市議会議長賞　言葉のチカラ
柳川市立昭代中学校 二年　吉丸　佳成　149
優秀賞（福岡県教育委員会賞）　有明海
柳川市立昭代中学校 三年　古賀　秀寛　150
優秀賞（福岡市教育委員会賞）　祖父の命
柳川市立昭代中学校 二年　篠倉　理恵　151
優秀賞　暗闇の中で学んだこと
柳川市立昭代中学校 三年　梅崎　智子　152
優秀賞　私は料理するのが好き
柳川市立東宮永小学校 六年　古賀　由依　153
優秀賞　私のお父さん
柳川市立東宮永小学校 五年　堤　なつき　154
優秀賞　飼育係の仕事
柳川市立蒲池小学校 六年　中村　紗耶佳　155
優秀賞　ある日　～ＯＮＥ　ＤＡＹ～
柳川市立昭代中学校 三年　佐藤　稜　157
第十回長谷健賞＝平成十九（二〇〇七）年度
長谷健賞大賞　天上の雫
（一般の部）　佐賀県唐津市在住　宮﨑　清子　158
優秀賞（福岡県知事賞）　不戦
柳川市立東宮永小学校 五年　荒巻　萌　160
優秀賞（東京都台東区長賞）　まゆげ事件
東京都台東区立柏葉中学校 三年　国分　霞　161
優秀賞（福岡県教育委員会賞）　鬼女マリア
早稲田大学教育学部 三年　田中　綾乃　162
優秀賞（台東区教育委員会社賞）　本当の心の成長
台東区立忍岡中学校 三年　山口　佳奈　164
優秀賞（福岡市教育委員会賞）　大空高く
福岡県小郡市立三国中学校 三年　大坪　尚美　165
優秀賞（柳川市長賞）　ブルースカイ
柳川市立昭代中学校 一年　江上　明里　166
優秀賞（柳川市議会議長賞）　「沖縄」を見た
柳川市立蒲池中学校 三年　北原　いくみ　169
優秀賞（柳川市教育委員会賞）　生きているということ
福岡県久留米市立城島中学校 一年　西村　仁菜　170
優秀賞（柳川文化協会会長賞）　責任と達成感と喜び
福岡市立元岡中学校 三年　中村　友香　171
優秀賞（柳川文化協会会長賞）　ボンジュール
福岡県みやま市立江浦小学校 六年　田中　真帆　172
優秀賞（東京浅草ロータリークラブ会長賞）　言葉を超えるもの
東京都文京区立第六中学校 二年　八幡　侑磨　173

優秀賞（東京商工会議所台東支部会長賞）　フジ子・ヘミング運命の力
台東区立浅草小学校 六年 清水 りさ 174
優良賞・佳作・努力賞・特別賞など入賞者一覧 175
資料 183
「初めての方へ」松永 伍一審査委員長自筆の経歴書 183
「追悼のことば」 183
長谷健顕彰会専務理事 堤 輝男 183
「長谷健賞の十年の歩み」 184
編集後記 184
東宮永小学校校長 今村 公昭 184
保健医療経営大学教授 川島 秀樹 184
ご協力をいただいた方 185

監修にあたって

元・国立大学法人福岡教育大学学長

松尾　祐作

第一回長谷健賞＝平成十（一九九八）年度

最優秀賞（柳川市長賞）

動物虐待

柳川市立昭代中学校　二年　嶺川　侑香

私は猫が大好きです。特に家で飼っている「プリン」がとてもとても言葉に出来ないほど大好きです。きっと私以外にも猫やその他の生き物が大好きな人はたくさんいると思います。

しかし、この世の中には動物が嫌いな人や動物がいたら困る人がいます。

そして、動物好きの人が動物を可愛がるように、動物嫌いの人のうちの数人が動物を虐待します。それはいらいらした時のうさばらしにしたり、理由はさまざまですが、とても自分勝手なものが多いのです。

私が読んでいる猫雑誌のあるコーナーでは、虐待されていた猫の事が書いてありました。その内容はこんなものです。子猫の目にマニキュアをぬったり、ペットボトルの中に猫を入れて窒息死させたり、買物袋の中に猫を入れてどこかに掛けて窒息死させたり、バットで思いっきり殴ったり、罠を仕掛けて捕獲して実験用に売ったり、毒入りのエサを食べさせたり―。

猫好きの人が、バットで猫を殴り、追い回している人を止めようと必死に注意をしても、その人はこう言ったそうです。

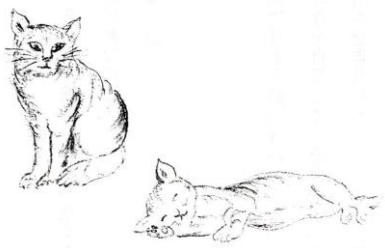
「別に貴方が飼っているわけじゃないから、この猫がどうなろうと関係無いだろう。」と。それに、ほとんどの虐待者は注意された時、それと同じような事を言っているそうです。その猫好きの人は、追い回された猫たちを全て飼う事は出来ないからと、せめて世話をして本当に可愛がっていたそうです。野良猫を飼うつもりも無いのに可愛がるのはいけない事だけど、(そのうち他の野良猫もたくさん来るようになって、世話出来なくなるから) その猫たちが虐待されているというのに、あんなふうに言われたらその人の人格を疑ってしまいます。

そんな人たちは、自分の子供たちが殺されそうになっていても、ただ眺めるだけでいられるのでしょうか。

自分の大切な人や動物や物はそれぞれ違うのに、なぜ大切な動物が人間で、その人間という種類の動物が虐待された時だけ人は騒ぎ立て、虐待した人を罰するのでしょうか。人間はおかしな動物です。

もし、動物虐待者が人間を虐待していたら、きっとみんな白い目でその人を見るだろうけど、その人が人権、差別、いじめとかの作文で賞でもとろうものなら、人間はその人が動物虐待者だと知っていてもほめちぎるでしょう。もしも、猫が人間以上に頭が良く、力の強い動物に進化して、今までのお返しで人間をたっぷり虐待したりしたら、人間は口をそろえて『差別反対』とか『虐待反対』とか言ってデモ行進したり、学生たちの夏休みの宿題には必ず『猫たちの人間差別についての作文』や『猫たちの人間虐待についての作文』なんかが出て来るでしょう。そして、そこに学生たちは今まで人間がして来た事を棚に上げて猫たちへの文句を書くでしょう。

ああ、人間も動物なんだから。ちょっと進化が早かったくらいでいばりくさって。人間は一体何者なのだ！『人間よ、調子に乗るんじゃない。』



《評》　世の中には動物好きと動物嫌いの人がいます。作者は猫好きを自認して、その立場から動物虐待の非情さを告発していて、いろいろな事例を私たちに知らせてくれました。こうして事実を伝えて、やがて動物の一員である人間がいかにうぬぼれて自己中心的になっているかを説いていきますが、その論理は見事です。終わりに近く、猫が進化して人間に復讐したときの人間のそれに対する反応を仮説として出していますが、それにはドキンとさせられました。そして結語は痛烈です。人間のエゴは限りない奢りから出たものですが、この一言は猫に対してだけでなくすべてに適応されるでしょう。まさに人類への警告です。

松永　伍一

優秀賞（柳川市議会議長賞）

私の夢

柳川市立柳南中学校　三年　森田　愛

私の夢は獣医になることです。それも、できれば野生の生き物を保護するような所に勤めたいです。

なぜ野生の動物をあつかいたいかというと、人に飼われている動物は、病気をしたりけがをしたりすると、動物病院へつれていってもらい治療してもらえます。でも、野生の動物たちそんなことはしてもらえないし、人間のせいでけがをしたとしても、ほうっておかれることが多いと思います。だから、野生のけがをした動物を一匹でも多く救いたいと思い、野生にこだわりを持っているのです。

獣医になりたい、と本気で思ったのは、まだ夏休みに入る少し前でした。その日、私は部活を終えて数人の友だちと冷水機の前にいました。すると、大きな丸い柱のすぐ近くにうようよと動く鳩のひなが落ちていました。上を見上げると鳩が巣を作っていました。ひなの近くには黄色い腹わたのようなものが飛び散っており、すぐに巣から落ちたのだと思いました。

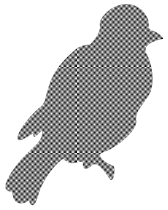
私たちはしばらくそれを見ていましたが、誰かの提案でひなを移動させようということになりました。さすがに素手では触れることができず、職員室へ行き袋をもらい、私がそのひなを持ちました。ぐるぐると歩き回って人の目につかない所をさがしたけれど、そんな場所は見つかりませんでした。

私たちは途方に暮れながらひなをまじまじと見ました。ピンクの肌にうっすらと黄色い羽毛が生えており、鳩の特徴ともいえる鼻をもつこのひなは、胸の所から内蔵が見えてはいましたが、私の手の中で胸を上下させ弱弱しい呼吸をしていました。元の所へ戻すほかなく、私たちは歩きだしました。途中、袋を覗くとひなの体液と思われる汁が少し溜っていました。痛々しくて何もできない自分に腹が立ちました。

元の場所へつくと、近くに理科の二村先生がいらっしゃったので、どうすればいいか尋ねました。すると。近くの堀に投げてやれ、と言われました。このままにしておいてもいずれは死ぬし、この傷じゃ苦しいだけだということでした。

私たちは二村先生と別れた後、ひなが元いた場所へ戻り、一度ひなを置きました。誰も投げようとは言いませんでした。すごく悩んだ後、私が堀へ投げました。私が袋を捨てに行っている間、皆泣いていました。私の手にはさっきまで手の中にいたひなの温かさが残っていて、何もできなかった自分に悔しくて泣きたくなりました。そして、その日の帰り、「獣医になる。」と決意したんです。

がんばって夢を現実にしようと思います。



《評》

獣医になりたいという夢を抱くようになった動機を、実に鮮やかに書いていて、そこにこめられた真実に私も胸を打たれました。鳩のヒナが落ちている現場の様子がよく描写されていますし、友だちといっしょにあれこれと対策を立てて動くときの心理がとても良く書けています。「かわいそう」という気持ちをその言葉で書いてしまわずに、死にそうになっている生きものの形や臭いを描き出すことで、「何もできない自分に腹が立つ」いら立ちと、くやしさと、いのちへのいとおしさが切々と伝わってきました。この体験がこれから先の人生にきっと深く影響を与えるでしょう。作者の未来が見えて来るようです。

松永　伍一

優秀賞（柳川市教育委員会賞）

おおあめのひ

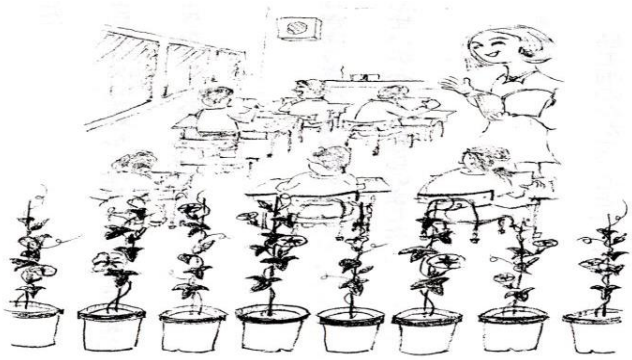
山門郡瀬高町立南小学校　一年　たくま　ゆうこ

せんせい、あのね。
きょう、かみなりあめがふりました。かぜがつよくて、たんぼにふきとばされそうでした。
がっこうについたら、あさがおがたおれていました。にねんせいがおこしてくれました。でも、また、いっせいにたおれてしまいました。
なつきくんとみつよしくんが、「はよ、いれよ。」
といったので、みんなで、あさがおをきょうしつにいれました。おともだちのもいれました。みきちゃんがせんせいのもいれました。
みんなのかみのけが、びしょびしょになりました。しゃわあーみたいでした。あさがおもびしょびしょだったから、ぞうきんをしきました。
わたしのあさがおになめくじがついていたから、しょうたくんが、えんぴつでつついてすなのうえにおとしてくれました。
せんせいがきて、
「わあすごい。いちねんせいえらい。」
とほめてくれました。
あさがおできょうしつがにぎやかになりました。あさがおが、みんなのべんきょうをみているみたいでした。
わたしが、
「あさがおのじゅぎょうさんかんみたいね。」
といったら、せんせいがふふふとわらいました。

《評》

暴風雨のなかで、心とからだを一つにして朝顔鉢を教室に片づける様態が、簡潔に、ヴイヴイッドに描かれています。動きが見えて、そこにこめられた子どもの心理が光っています。大切に育てている朝顔への愛情が、個人のものではなくみんなの共通のものであることが、動きを通じて見えるのです。雑巾を敷くことやナメクジを鉛筆で落とすところも大切なポイントです。教室に入れた朝顔が、こんどは教室の子どもたちを観察しているという視点は大変鋭く、「朝顔の授業参観みたいね」という観点でイメージが完結しました。先生もそんな見方はしていなかったのでしょう。とても鋭い発見で、私も感心しました。

松永　伍一



優秀賞（柳川文化協会賞）

妹になったおばあちゃん

柳川市立柳河小学校　四年　葉玉　翔太

一月十五日は、せたかのおばあちゃんの六十八才のたん生日でした。でも、おばあちゃんは、かぜをひいていたので、一週間おくれのお祝いになりました。ぼくのたん生日には、いつもおばあちゃんからプレゼントをもらうので、今日はぼくからプレゼントをする番です。ぼくは、お母さんと相談してケーキを買って行く事にしました。ケーキ屋さんで、バースデーケーキをたのむと、

「お名前は？」

と聞かれました。でも、ぼくは、はずかしくて答えられませんでした。なぜなら、おばあちゃんの名前は、「やちよ」だったからです。「やちよ。」なんて名前、何だか古くて今時あんまりいないからです。ぼくが、だまっているとお母さんが、

「やちよです。」

と答えてくれました。

すると、ケーキの上には

「やちよちゃん。」

と書かれたおかしのカードがのせられました。ぼくとお母さんは、顔を見合わせて笑ってしまいました。次にお店の人が

「ろうそくは、何本おつけしますか。」

と聞かれたので、ぼくは、

「どうしよう。六十八本はむりだから。何本にしようかなあ。」

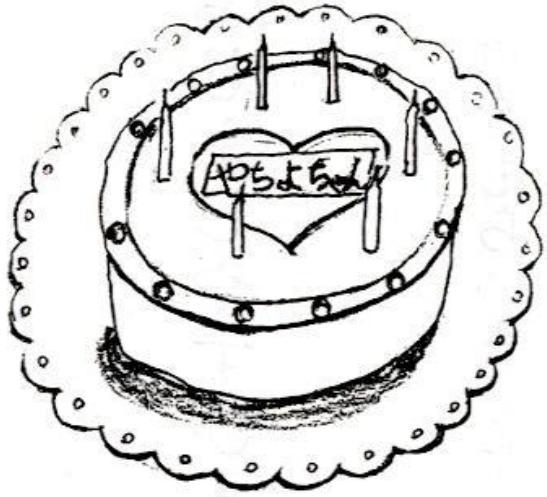
とまよっているとお母さんが

「大きいのを六本おねがいします。」

と言いました。

六十八本もは立てられないので大きいろうそく一本で十才分にしようと、お母さんは、思いついたそうです。お店の人は、六才のやちよちゃんという女の子で、たぶんぼくの妹だろうと思ったにちがいありません。

おばあちゃんの家に着いてケーキの箱を開けるとき、その話をするとおばあちゃんは、「やちよって名前のどこがはずかしいとね。日本一いい名前やんね。」と言って笑いました。お店の人のかんちがいで、とっても楽しいお祝いになりました。このケーキが、まほうのケーキで、食べたおばあちゃんが、本当に六才のやちよちゃんになったらもっとおもしろいのになあと、ぼくは思いました。



《評》

まずタイトルに驚き、いったい何が書かれているか期待を持って読み進んで、話の展開の巧さに感心しました。事実あったことでしょうが、必要最小限の、無駄のない説明でちゃんとした文章の骨組みをこしらえています。

ユーモアもありますし、おばあちゃんが店の人に六歳の「やちよちゃん」と勘ちがいされていくあたりでテーマが完全にわかりますが、そこで話が終わったら、ただそれっきりです。そのケーキを食べたおばあちゃんが「本当に六才のやちよちゃんになったら」と想像するところで、見事な完成度の高い童話に仕上がったのです。題材もいいですが、息づかいといい間の取りかたといい抜群でした。

松永　伍一

優秀賞

カブト虫のかんさつ

柳川市立城内小学校　二年　ふじよし　やすひろ

なつ休みに、ぼくは、カブト虫のよう虫をもらいました。体長は、八㎝で、色は白く、とても大きなよう虫で、びっくりしました。

ぼくが、手でさわろうとすると、

「こら、手でさわったら、でけん。」

と、おとうさんがさけびました。わけをきくと、

「人間の手には、目に見えないばいきんが、たくさんついているから、よう虫がしんでしまうからだよ。」

と、おしえてくれました。だから、ぼくは、わりばしで、よう虫をカブト虫をそだてるはこにうつしました。

土をしめらせるために、きりふきで水をかけると、よう虫は、よろこんで体をくねくねさせました。よう虫は、土の中にもぐったり、外にでたりして一日をすごしていました。

よう虫をもらってから、二、三日すると、じっとしてうごかなくなりました。そのうち体の色が、白から黄色、ちゃ色にかわっていきました。ちゃ色にかわるころには、手や足がはっきりしたさなぎになりました。ぼくは、このとき、よう虫がうごかなくなったわけがよくわかりました。カブト虫になるじゅんびのために、うごかなくなったのです。

さなぎになってから三日ほどたつと、さなぎの色は、まっくろにかわりました。そして、なんと、ひとばんのうちに、それまでみじかかったつのが、ぐーんとながくのびていました。それを見つけたぼくは、

「おかあさん、カブト虫のつのが、のびとるよ。」

と、さけびました。すると、おかあさんとおとうさんがとんできました。そして、おかあさんが、

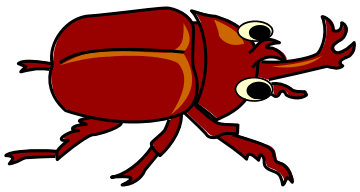
「ほんとだ。カブト虫のつのって、ひとばんで、のびるとねえ。おかあさんはじめてしったよ。やすくん、すごいはっけんをしたね。」

と、ほめてくれました。

やがて、だっぴをして、大人のカブト虫に生まれかわりました。まだ、はねのところだけは、白っぽくて、時間がたつにつれ、体と同じ色にかわっていきました。よう虫が、カブト虫になったので、ぼくは、すばこに、木のぼうを入れてやりました。

カブト虫は、ひっくりかえると、じぶんでは、おきあがれないので、木のぼうにつかまって、おきあがれるようにするためです。えさも、水分のおおいすいかやあまいももにかわりました。えさのとりあいで、けんかをして、力のつよいカブト虫のじゅんばんで。エサをたべるのを見て、おどろきました。エサでけんかをするところは、ぼくとおとうとがけんかするのとおなじだなあとおもいました。

はじめて、カブト虫をそだててみて、本では、わからないことをしることができてよかったです。



《評》

大人よりも子どもの観察眼が鋭いということを、改めて考えさせられる文章でした。ただの観察記録ではなく、昆虫の生態を通じて生命力というものの不思議に心を動かされていく息づかいが伝わってきます。ある部分にだけ目を向けるのではなく、変化していく様を忠実に追っていますから、そのところどころで読者も作者の目と重ねて「なるほど、そうなるのか」と、カブト虫の色や形をイメージすることができます。そして私たちは、いのちあるものへの愛情でこの観察が貫かれていたこと、この世界にある強者と弱者の関係についても知らされました。作者は人間との比較においてその厳粛な事実を発見したのです。

松永　伍一

優秀賞

私の夏休み（日記から）

那珂川町立南畑小学校　三年　久賀　彩紀

七月二十四日　晴　父の手じゅつ

。「お父さんの手じゅつ、せいこうするかな、」。と心配で心配で、備ち合い室でも、トイレでも、「成こうして下さい。」といのっていました。「手術中。」という赤いランプが消えて、お父さんが出てきました。。」ぽーっとしていました。

わたしを見て二コッとしただけで、エレベーターで、つれて。いかれました。ベットにねかされたお次さんの左の手には、大きな注しゃがつながっていまレた。早くよくなってね。

七月三十日　晴　（せみの音楽会）

「ジージージー・・・ジーッ。」

じりじり暑い午後二時。となりのもちの木やみかん木。うちの松の木。うらの富安さんの木でも、せみたちが一ぺんに鳴き出して、やかましいぐらいです。でも、よく聞くと、エリズムがあるようです。

「ジージージジジッ　ジジジージージーッ。」

まるで音楽会をしているみたい。おすのせみは、すきなめすのために、一生けんめいに、「ジージージーぼくは君がすきだよ。」

「ぼくは、だれより元気だよ。」

と歌っているみたいです。

「ジソ〃」

と指き者が鳴くと、みんな一せいに歌をやめます。おやつの時間でしょうか。

「せみさん、生まれてたった二週間の命だそうですね。力一ぱい歌って楽しんで下さい。」と、私はおうえんしています。

八月十三日　晴　かにのシャーベット

「わあっ、かにのシャーベットだ。」

かには私の大こう物。シャリシャリ、口の中で氷がとけて、甘いかにの味が広がります。ごっくん、ゆっくりとのみこんで、かにの味がもう一度口の中に広がります。

お父さんもかにが大すきでかにの中身を出すのも上手で、かにの身を私の皿にのせてくれていました。今は入いん中で来ていません。

「ばりっぱりっ。」「かりっかりっ。」

とおじいちゃんがはさみで、かにのからをわってくれたので、どんどん食べて、からの山が、どんどん大きく高くなっています。妹も母もぱくぱくと、大まんぞくの顔です。

八月三十日　晴　柔道のしあいに出た

今日は太宰府東中でじゅう道のしあい日。「ドン。バタン。」「やあー。」「よいしょ」今はだん体の部です。私は個人の部に出ます。「三年生。」「はじめ。」

私はじゅう道着をぎゅっとにぎって小内がりをかけましたが、なかなかかかりません。相手がカ強く体落としをかけたので、ひょろひょろとかかってしまいました。一生けんめい、ひぜひざを立てて「まて」を待ちましたが「わざあり。」で負けてしまいました。足がぴょろっとならないとよかった！とざん念です。

足やこしをもっと強くしたい、と反省します。

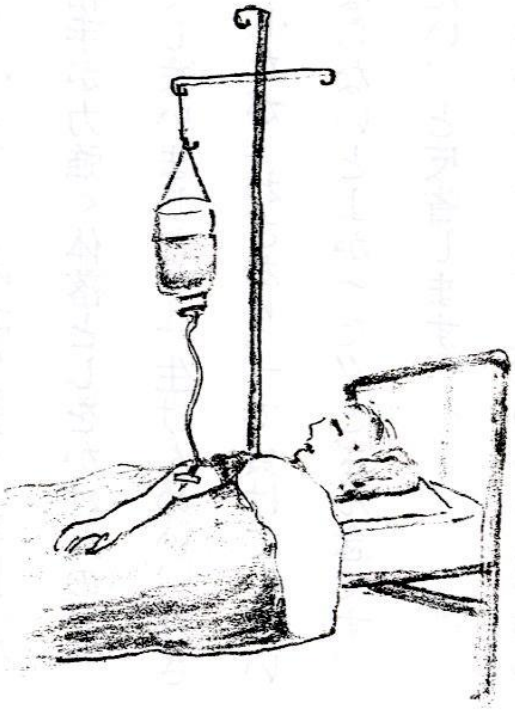
体の細い人が大きい人に勝ったり、スピードのある人が勝っていました。

《評》

日記というのはその日の出来事を選んで書くのですから、同じことがつづけて出て来るはずはありません。ここでは四日分、四つの出来事が書かれていますが、内容がみんなちがうので、それぞれの場面での作者の対応や心の動きが描かれて、そこから夏休みの全体が想像されました。「父の手じゅつ」では父に対する子どもの思いが、「せみの運動会」では自然へのやさしい観察が、「かにのシャーベッ

ト」では食べるたのしさが、「柔道のしあいに出た」では、試合の体験がすべて過不足なく表現されています。この四つの組み合わせもうまいものです。こんな感受性を持った子どものこれからの成長がたのしみです。

松永　伍一



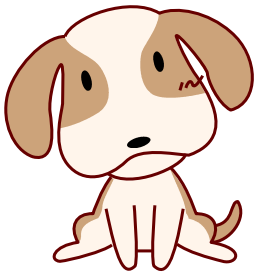
優秀賞

車イスの犬

柳川市立城内小学校　五年　松藤　由紀

「犬は、かわいがられていいね。」
と、私が習いに行っている習字の先生がぽつりと言った。私は不思議に思い、
「どうして。」
と聞いてみた。すると、先生は話し始めた。
「この前、道を歩いていた犬が車にはねられてね。その飼い主がちりょうするために病院に連れて行ったんだけど・・・。」
と悲しそな顔をしている。実ば先生も犬を二匹飼っているが、子どものようにかわいがり大切に育てている。だから、人ごとではないのだろうと思った。そして、車にはねられた犬はだいじょうぶかなと心配した。
「それで、犬は片足なくなってね。飼い主は保健所に連れて行ってくださいって、病院の先生に言ったんだって。病院の先生は、かわいそうだから、私が飼いますと言ったそうよ。」
と、先生ゆ話は続いた。私は、どうして飼い主は片足がなくなったからといって、保健所に連れて行くように言ったのか不思議でならない。犬だって家族なのに。それまでいっしょにくらしていて、かわいがっていたはずなのに。「保健所に行ったら殺されるのに。どうして最後まで飼ってあげないのだろうといかりがこみあげてきた。
「でね、すぐそばにいた女の子がその話を聞いててね、犬の足のかわりになる車みたいなのを作ってあげると言って、女の子は毎日一生けん命に作ったんだけどうまくいかなくて・・・・・。そしたら、近所の大工さんが手つだってくれて、とうとうりっぱな車イスができたんだって。それを、病院に持って行って、さっそくはめさせたら、犬は大喜びでカランコランといわせて走り回ったんだそうよ。」

と、先生の話は笑顔で終わった。私もうれしくなって、いっしょに笑った。
私は、この話を聞いて、人間って身勝手だなと思う気持ちと、人間ってやさしいんだなとほっとする気持ちでいっぱいになった。片足がなくなったからといって保健所にやろうとする飼い主には本当に腹がたった。でも、見も知らぬよその犬のために一生けん命の女の子のやさしさには、感心したし、それを見て手伝ってあげる大工さんの親切心にも感動した。いい話を聞けてよかったと思った。
以前、箱を持って泣いている女の子を見かけたことがある。箱に入れられて道にすてられた小犬を持って帰ったが、家に入れられず外に置いたままにしていたら、小犬が箱からぬけ出して車にひかれて死んでしまったのだ。その女の子と習字の先生の悲しい顔がだぶって見えた。私は、この二つの話から、動物を育てるとき、人間と同じようにかわいがり、人間と同じ一つの命として大切にすることや責任を持つことの必要性を実感した。



《評》
ペットを飼っている人たちのモラルがよく問題にされますが、この作文はそのことを具体例をあげて告発しています。ここでは事実を並べていく手法をとらずに、対話によって事柄の成りゆきを示していきますので思いがストレートに伝わってくるのです。片足を失った犬は保健所で始末してもらおうという人間の非情さに対して、車イスを作ろうというやさしさを女の子と大工さんの行為で示して読者の心をとらえます。こういう対比を通して作者はいのちの尊さを感じていきますが、そのことを率直に書いても頭でっかちに思われないのは会話によってイメージを豊かに広げていたからでしょう。バネのある文です。

松永　伍一

優秀賞

組体操

柳川市立城内小学校　六年　田代　由佳里

運動会でする組体操の練習をしています。私は去年は土台でしたが、今年は上に乗る方でした。真由さんと私の二人組で電柱やサボテンをするときに、土台の重さや痛みが分かるので、すぐに
「だいじょうぶ？」
と聞いてしまいます。私も上に乗るのは初めてなので、とてもこわくて出来ませんでした。そんな時に、真由さんもがんばっているんだから、私もがんばらなくちゃいけないなと思い、勇気をふりしぼって立ち上がりました。そして、出来上がっておりたときは、二人とも喜びの笑顔でいっぱいでした。
他にも、三人組の灯台やしゃちほこ、五人組の花やおうぎ、六人組のピラミッド、そして、六年生の女子でドミノやウエーブ、むずかしいのやきれいなの、たくさんあります。こわいのがあったときは、土台の人の気持ちも考えるようにしています。でも、残念なことに、二段ベットの持ち上げる方が私はできません。だから、家で妹と練習したり、時々、うでたてふせを何回かしたりして、うでの力が強くなるように努力しています。
真由さんも
「がんばってね。」
と応援してくれるので、たくさん練習しなくちゃいけないなと思います。
また、友だちがむずかしくて困っている時には私たちが手伝ってあげたり、しやすいように教えてあげたりしてあげています。反対に私たちも教えてもらったりしています。
そうやって、むずかしいのもこつをつかんで簡単に出来るようになったりして、とても楽しくなってきました。五年生は今年、初めてなのにほとんど上手に出来ていて、すごいなと思いました。五年生には絶対に負けられないなと思

いました。
騎馬戦やリレーは思いきり、競い合い、同じブロックの人を応えんしたり、そして、五・六年、心を一つにして、みんながおどろくようなそんなきれいな組体操にしたいです。

《評》
これは心のやさしい人の文章だとすぐにわかります。運動会でやる体操の種目のなかで「組体操」はとくに人目を引くものですから、やる側も張り切りますし、失敗しないように練習に励むことになります。その過程を女の子の感覚できちんと見つめ、心の動きを書きこんでいます。去年は土台の役で、今年は上に乗ることになり、ちょっと勝手がちがってきたことから、下で支えてくれる人の立場を考えるようになったその思いやりが、素直に書けています。心にショックを与えるテーマではありませんので、見落としがちですが、こういう身辺の出来事を見つめていくことも、人間を鍛えていく大切なポイントでしょう。

松永　伍一

優秀賞

「地球交響曲」を見て

柳川市立柳南中学校　一年　田島　由理

今日私は、「地球交響曲」という映画を見るため、図書館のＡＶホールに行きました。その映画は、星野道夫という日本人の記録でした。
星野さんは、一人でアラスカに旅に出たとても勇気のある人です。星野さんには多くの友だちがいて、その中の一人ビルさんは星野さんに息子のように接していました。
星野さんはもうこの地上にはいません。クマにおそわれてなくなったそうです。
でも、ビルさんは、
「道夫はクマをにくんではいないであろう。クマをそれだけ愛していたからだ。」
と言いました。私もきっとそうだと思います。道夫さんはなくなる前のテープでも、「またクマが人間をおそうということが新聞に書かれていました。こういうのは良い事ではありませんが、ほっとします。クマが人をおそうということは、まだ自然が残っている、ということですからね。」
と言われたからです。私たちは、クマの気持ちはわかりませんが、星野さんには、私たちの考えのおよばない自然との深いつながりがあったのではないかと思いました。
。星野さんは、これまでたくさんの本を出版されています。私はちょうどその時、社会で寒い地域を調べようと思い、星野さんの事は知りませんでしたが、偶然にも参考資料として、星野さんの書いていた『アラスカ探検記』という本で調べていました。その本には、アラスカの人々の生活の様子をくわしく、そして、とてもわかりやすく書いてありました。

星野さんの友だちの中には「インディアン」もいます。私はそんなことは考えたこともないのに、すごいことをよく次々に話せるなと思うくらい星野さんについて述べていました。

インディアンは、

「死はとても幸運。次の世代に受け渡すから。死には偶然などない。」

と言われるかと思うと最後には、

「宇宙は大いなるたましい－神だ。」

と言われました。私はその言葉に感動しました。それは、人の死を宇宙とつなげて考えているからです。死んでからもいろんな人たちから尊敬されるなんて、星野さんは幸せな人だと思いました。

この地球をより平和な自然豊かな星にするため、世界中でめぐまれない人々を助けに行く人、町を美しくするため運動をおこす人などがふえてきているようです。私たちは友だちや家族との関係の中で小さな事にこだわり、どうでもよい事に腹を立てたりして毎日をすごしています。そんな心の幼い私にとって、星野さんの存在はとても大きくたくましく見えました。これから私もいろいろと学び、星野さんたちのように物事をもっと大きくとらえられる人になりたいです。

《評》

アラスカで熊に襲われて死亡した写真家の星野道夫さんは、その生き方と仕事の中身によって人々に問題を投げかけつづけています。この文章は映画を観たあとの感想の形をとっていますが、そこで星野道夫さんの人柄に触れ、そこから発せられる問いかけにきちんと応えています。感動したことを書くのは易しいのです。その感動のあとに人間として目指さなくてはならない方向に気がついたのです。

「宇宙は大いなるたましい－神だ」という星野道夫さんの言葉の深い意味に作者が抱きとめられ、日常のつまらないことにこだわっている自分を反省している様が、力みのない文で素直に表現されていました。

松永　伍一

優秀賞

自然と動物の絶滅

柳川市立蓮池中学校　二年　広松　絢子

私は、理科で世界の絶滅のおそれのある動物たちの事について調べていた。「地球があぶない！」と叫ばれる中、地球と同じように危険な立ち場にある絶滅寸前の動物たちがいる。すでに絶滅してしまった動物たちだってたくさんいる。あの有名なドードーなんて、絵でしか見たことがない。この星から消えてしまうおそれのある動物は、どんか岫物で、どのくらいいるのか、興味を持ち調べてみた。

調べていくうら、まず、その数の多さに驚いた。こんなにも絶滅のおそれのある動物がいるのか、と思った。

そして、次に驚いたのが、絶滅しそうになっている理由は、すべて「人間のせい」ということ。毛皮のため、狩猟・乱獲、森林伐採、環境破壊・・・・・・全部、人開かいなければあり得ない事だと思う。進歩していると思って便利さを求めて生活域を広げるにつれて、動物たちはすみに追いこまれていく。

ある本に、「動物はどんなに強くても、自然を壊すことはできない。けれども、人開け子供でも自然を壊す術を知っている。」という言葉が載っていた。私はそれを見て、何かじＩんときて、本当にその通りだな、と思った。調べている途中、私の好きなユキヒョウに絶滅の危機があることを知って少しショックだった。ユキヒョウの写真のとなりに、「ときに家畜を襲うため害獣として殺されることも多い。彼らの生息域へ入りこんだのは人間のほうなのに・・・・・・。」と害かれてあって、何だかとても悲しくなった。

そして、また悲しくなったのが、動物園。ヤマバクというのがいるが、そのヤマバクは、動物園への輸出用に乱獲が行なわれ、大量に死なせてしまったと書かれていた。考えてみれば、動物園なんて、人間だけが楽しいだけで、きゆうくつな檻に入れられた動物たちはストレスがたまるだけだと思う。芸を覚えさせる事も無意味だと思う。

人間は、自然をたくさん壊してきた。その往返しが、人間だけに返ってくるならいいけれど、地球は人間だけの星じゃないから、地球を汚した分、他の動物たちや植物たちが苦しめられていくだけだと思う。

今まで壊してきた自然は、もう完璧には戻らないけれど、人間に自然を壊す力があるなら、自然を守る力もあると思う。自分たちだけの星じゃない事をしっかり理解して、そして、自然々動物に何をすることが大切なのかを考えて、それを言うだけじゃなく、きちんと実行すれば、ほんの少しは昔の健康な地球に戻れるような気がする。

《評》

よく「地球が危い」と指摘されますが、作者は絶滅寸前の動物について調べていきながら、そのことにはっきりと気づいています。実態を知るということが出発点になるのは当然ですが、そのようになっていくのが「人間のせい」という視点に立ったとき、問題の本質にわけ入ることができるのです。「動物はどんなに強くても、自然を壊すことはできない。けれども人間は子供でも、自然を壊す術を知っている」と知らされた作者は、地球は人間だけの星ではないと気づいて、これから何を成すべきかを自分に問うています。気負いのない書き方で、そこから作者の人柄もにじみ出て好感が持てました。

松永　伍一

第二回長谷健賞＝平成十一（一九九九）年度

最優秀賞

ホームステイがくれた宝もの

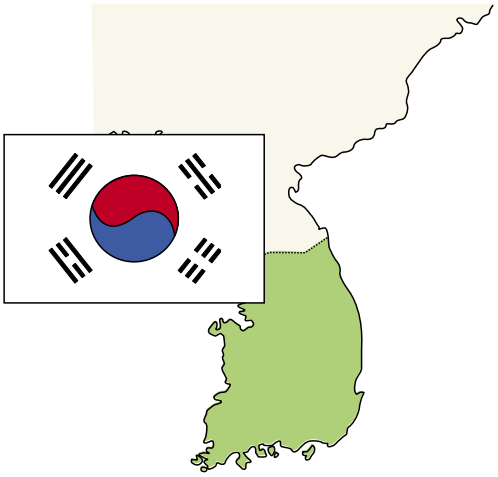
太宰府西小学校　五年　久賀　幸恵

「サチエ、キョンチ。」
お母さんのよび声が耳をかすめて目がさめました。キョンチも目をこすっています。夜中に背のびをしてころりんと落ちたベットで。
今、七月二十四日、午前七時。二十二日から、キョンチのおうちにホームステイに入って三日目。髪をといてきゅっとしめてくれるお母さんの手が、きのうよりも暖かい気がしています。
「チャール・モッゲスムニダ（いただきます）。」大きな声で話すお父さん。茶目っ気の弟、なつっこいキョンチさん達との最後のお食事を楽しんでいます。おじいちゃんが育てている
七面鳥やにわとり達、水色や黄色のインコ達、かわいい子牛ともお別れです。私はみんな大大好きになってきたのに・・・。
リュックがおみやげで重くなったので、お父さんに車で送ってもらうことになりました。
自転車で競争した歓声、紙風船をとばし合ったにこにこ顔、お買い物のときの弟の茶目・気が、姿と窓に浮かびます。
「今まで楽しかったです。」
とんとんと私の肩をたたいてユ・キョンチがさびしげな顔で会話集を指しています。
「ネーネー。」
と目と目で信号している間に学校に着きました。
リュックを背負って、ホームステイの方と手をつないで話がはずんでいる人達、きっと楽しかった事やうれしかった事を、一ぱい一ぱい心にきざみこんでいることでしょう。キーナムちゃんとお母さんも来てくれました。
「会えてうれしい。また手紙かくね！」
とにぎった手に力が入ります。
九時ー百済初等学校でお別れ式。
「これから普通の生活にもどるのですが、長い人生の中で、ずうっと心に残るいい思い出となるでしょう！」
校長先生の一言一言が納得です。じいんと私の心にしみこんでいます。
この学校での感動がもう一つあります。それは、男女共に胸をはって堂々と、国家を歌ってくれた姿です。私達は強く国を愛し、誇りに思っていますよという気持ちが、じんじんと伝わりました。また、韓国では、笑顔と豊かな表情や身ぶりで気持ちを表現してくれました。この事もみ習いたいと思っています。
日本では、太鼓や茶道など昔からの伝統文化があって、躍動感や落ちついた気持ちになれます。これは自信をもって世界に知らせたいと思いました。
私の太宰府西小学校校門には「国際理解は人間理解」と書いてあります。今年ユ・キョンチさんの家で熱烈歓迎を受けました。去年クォン・キーナムさんを熱烈歓迎しました。言葉を越えて、心が通じ合ったと思います。
私は考えます。日本人同志は言葉が通じます。もっと心を開いて、もっと多くの人と心を通わせて、明るい生活を楽しみたいと。

《評》
お隣りの韓国との交流の美しい姿がよく描けています。「サチエ、キョンチ」と呼びすてにするところから書き出されていますから、この作文の目ざすところがそれでわかります。交流が大事だからといって、そのことを説明するだけでは、読む人の心を打つことはできません。どうしたか、そこはどんな様子だったか、どう感じたかを書くことが大切で、あなたはその三つのポイントをバラン

スよくとのらえています。会話もうまく入れこんでいますし、七面鳥やにわとりやインコも、別れのつらさに色どりを付けています。韓国の国歌を歌う人の誇りに触れたあと、「君が代」につなげず太鼓や茶道のことを出してきたのはちょっと意外でしたが、視野がひろがって新鮮に感じました。文中「暖かい」は「温かい」に直しましょう。

松永　伍一



優秀賞

ぺんぎんのぼうけん

小郡市立三国小学校　一年　大つぼ　なおみ

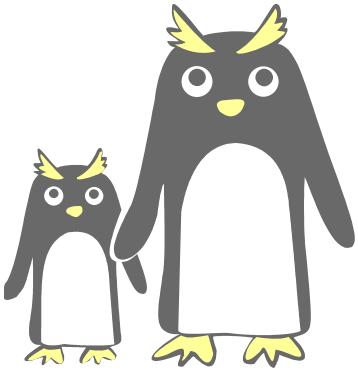
あるひ、べんぎんのぺんちゃんとぎんちゃんがあそんでいると、おとうさんがやってきて「おうい。べんちゃんぎんちゃん、ふねができたから、たびにいこうよ。」
といいました。
「うわあ、こおりのふねだ。」
「さっそくのろう。」
べんちゃんもぎんちゃんも大よろこび。
おかあさんは、
「いってらっしゃい。きをつけてね。」
と、しんぱいそう。
なみは、ザバーンザバーンときれいなおとをたてています。こおりのふねは、ゆうらりゆうらりゆりかごみたいにゆれています。
　おとうさんは、たくさんさかなをとりました。ぺんちゃんとぎんちゃんは、たのしくなってうたをうたいました。
おなかがすいたら、おなかいっぱいおさかなをたべました。なんにちもなんにちも、たのしいたびがつづきます。
　ところが、だんだんふねがとけてきました。
「どどどうしよう。ぼくたちはまだおよげないよう。」
　ぺんちゃんとぎんちゃんは、おとうさんにしがみついて、ふるえました。
「おとうさんのおよぎをよくみてなさい。」
とおとうさんはいいました。
「はあい。でも、こわいね。」
ぺんちゃんもぎんちゃんもまだひとりでおよいだことがありません。こおりの

ふねは、どんどんとけてちいさくなっていきます。
「さあ、おとうさんにつかまってとびこむんだ。さあはやく。」
「わ、わかったよう。」
ぺんちゃんはそういうと、とびこみました。
バッシャーン。
とみずしぶきがぎんちゃんのかおにあたりました。ぎんちゃんもまけずにバッシャーン。こおりのふねは、とけてなくなってしまいました。
「あっおよげた。おとうさん、みて、およげたよ。」
「そうそうそのちょうし。」
3にんは、うれしそうにおよぎまわりました。
「そろそろかえろうか。」
とおとうさんがいいました。
「あっそうだ。おかあさんに、おさかなおみやげにもってってあげよう。」
おさかなをたくさんとって、かえりました。
「まあ、およいでかえってきたの。さかなはあなたたちがとったのね。」
「うん。そうだよ。」
「もうゆうがただね。おそとがきれいだよ。」
そのひのばんごはんは、おいしいさかなでした。
「このおさかなおいしいね。」

《評》

ぺんぎんの兄弟を「ぺんちゃん」と「ぎんちゃん」と名づけたのがおもしろく、そのときからこのお話はうまくまとまるな、と思いました。「こおりのふね」って、なんてきれいでしょう。そのすきとおったふねに、白黒のはっきりしたぺんぎん親子が乗っている姿は美しいですよ。その「こおりのふね」はかならずとけてしまうとわかっていますから、そのとき「ぺんちゃん」と「ぎんちゃん」はどうするのか、読む人はそれを心配していたのです。ふねがとけたおかげで、いのちがけで泳ぐことができて、ほんとによかったですね。めでたしめでたし。ムダがないすっきりしたまとめ方でした。「3にん」はそのままにしますか、言いかえますか、考えてみてくださいね。

松永　伍一



優秀賞

大すき、おばあちゃん。

柳川市立柳河小学校　二年　中しま　あや

わたしのおばあちゃんは、リュウマチでからだがふじゆうです。びょういんにも、まい日かよっています。

だけど、いつもにこにこしていて、あかるくて、わたしが学校からかえってくると、

「おかえり。」

と言ってくれます。わたしはそのこえを聞くと、うれしくなります。そして、おばあちゃんは、少しでもからだがうごくようになるために、まい朝ラジオたいそうをしたり、じぶんで考えたたいそうをふとんの上でしたりしています。たいそうをしている時のおばあちゃんは、とてもいっしょうけんめいです。ゆっくりだけど、からだじゅうに力を入れて、しんけんです。それを見ていて、わたしは、えらいなあと思います。わたしは、少しでもおばあちゃんのやくに立てるように、くつ下をはかせてあげたり、ふとんをかけてあげたりしています。

おばあちゃんは、べんきょうもがんばっています。

たんかというものを作っています。ふじゆうな手だけど、ふでをつかぞじょうずな箋まき紙にたんかを書いた手紙を書いたりします。ふじゆうな手なのにきれいな字を書けるおばあちゃんは、すごいです。

そんなおばあちゃんを見ていると、なんだか元気がわいてきてわたしもがんばらないといけないなあとかんじます。おばあちゃんは、とてもおしゃれです。まいにち、おけしょうをします。口べには、いちごみたいなきれいな赤色です。パーマやさんにもよくいきます。きれいにセットしてもらってきます。そんなおばあちゃんがいるわたしの家はいつもにぎやかです。わたしは、そんなおばあちゃんが大すきです。

「おばあちゃん。なが生きしてね。」

《評》

リュウマチという病気をかかえたおばあちゃんの毎日の暮らしぶりが、とてもよく描けています。病気に負けないように、まず心でからだを支えようとがんばるおばあちゃんの態度が見えてくるようです。病気をかかえても明るく、いつも前向きで生きておられるおばあちゃんから、あなたは人間として大切な力をもらっているのです。くつ下をはかせてあげたり、ふとんをかけたりしてあげるあなたも、おばあちゃんからも、らった力で成長しているのです。おしゃれのおばあちゃんもすてきですね。口べにがいちごみたいに赤いなんて、おばあちゃんの気持ちそのまま出ています。お年よりに学ぶことが大へん多いということを、あなたぐらいの年れいで知ったということは、うらやましい。これからも大事にしてね。

松永　伍一

優秀賞

プランクトンのエビゾー君

昭代第一小学校　三年　江上　智恵実

わたしは、三重県の鳥羽天ぼう台でエビゾー君のしいくセットを見つけました。通しょうはブラインシュリンプ、本名はマルテミアサリーナというプランクトンだそうです。わたしは、むずかしい名前だなあと思いましたが、エビゾー君という名前はかわいくて、すぐにおぼえられました。

「これ、育ててみたら。」

とお母さんにすすめられて、自分のおこづかいで、このしいくセットを買いました。

セットの中に説明が書いてありました。かんそうしているたまごはねむっていて、しお水につけると二十四時間から四十八時間でふかするそうです。ふかりつは五十パーセントから六十パーセントで、おとなになるまでには三週間から一か月かかるそうです。おとなの大きさは五ミリから十ミリぐらいだそうです。わたしは小さい生き物だと思いました。そして、ぜったいにふかさせたいと思いました。

楽しい旅行から帰って、さっそくエビゾー君をしいくすることにしました。まず、せんめんきにニリットルの水を入れ、そ、の中に六十グラムのしおを入れ、海水よりしょっぱいしお水を作りました。次に、そのせん面きの中に水そうを入れて動かしながら中の空気をぬきました。あわがでなくなったので水そうをとり出し、小さなスプーンいっぱいのたまごをそっといれました。そして、わたしのへやのつくえの上においておきました。

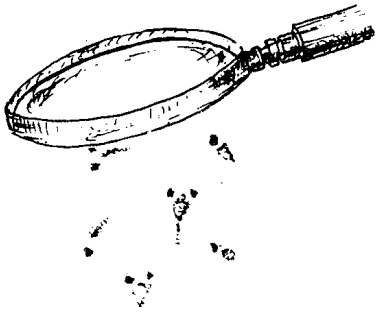
次の日の夜九時ごろ、小さな小さなゴミのようなものが、ごちゃごちゃ動いていました。わたしは、さいしょ何だろうと思いました。それで、お母さんに「見て見て。小さなものがたくさんいるよ。」と言ったら、「これがエビゾー君たい。わあー。山んごとおるねえ。」と、お母さんもびっくりしたようすでした。

わたしは、こんなにいっぱいふかさせることができて、すごくうれしかったです。さっそくえさを持ってきてふくろをあけました。中に緑色のこなが入っていました。スプーンですくって水そうに入れてあげました。緑色のこながなくなったら小麦こでもいいそうです。

二、三日たつとマ「、リぐらいの大きさになっていました。大きな虫めがねでかんさつしました。体はとうめいで、すいすい上へのぼったり頭からすうっと下へおりたりして、とてもいそがしく動き回っていました。

エビゾー君がもしたまごを生んだら、スポイドでとってティッシュでかんそうさせておくと、たまごはねむったまま、いつまでも生きられるそうです。六か月すぎたたまごは、しお水につけると、またふかできるそうです。

わたしのエビゾー君が、早くおとなになり、たまごを生んでくれたらいいなあと、たのしみにプランクトンのしいくをしています。



《評》

とてもしっかりした文章で、しかも内容が正確に書かれています。プランクトンのエビゾー君のしいくセットを買ってきて、それを育てていく順序が、小さいところも見落とさないように記録されているのに、私は感心しました。「二十四時間から四十八時間」とか「五十パーセントから六十パーセント」とか「五ミリから十ミリ」とかの数字が出てきますが、これが大事です。いのちを育てていくのにこういう数字の裏づけがあり、そこにお母さんとの会話が加わって本当のしいくの様子が見えてきます。あなたは気持ちのやさしい方でしょう。そのうえ鋭い観察の目を持っておられるようで、それが文章のすみずみに生きて

いますので、最優秀賞の有力な候補にあげたくらいです。

松永　伍一

優秀賞

元気の森をめざして出発進行

太宰府市立太宰府西小学校　四年　久賀　とし明

くま本の元気の森をめざして、トロッコ列車が発車します。

五、四、三、二、一、ポッポーッ

すずしい風が、ぼくのほっぺたをなでて走ります。トロソコ列車は、昔、材木を運んでいたトロッコをかいそうして、人が乗れるようにざ席をつけた屋根つき、まどガラスはすっかすかの列車です。

ガタンゴトン　ガタンゴトン　パッパー

三十m下に川がきらきらさらさら流れています。左側の山と右側の山の間の谷川は石こんろごろ、ごろ石の上を水は、つき当ってはねながら流れています。ぼくが水だったら石をよけれるかな。スリルがあって、魚とも会えるかな。緑の木々の間の赤い鉄橋をわたり、パッパー　六十m下に川がぴかぴか流れています。川のはばが広くなったはずなのに細い。

ガタンゴトン　ガタンゴトンガタンゴトン　ガタンゴトン　パッパー。八十m下に川があります。川の上八十mを走るトロッコ列車に乗っているぼくは、

「落ちたらどうしよう。落ちないように。」

下を見ないように！　と思いながら、下を見ているぼく。ぞくぞく。落ちたら死ぬぞう！　にぎりしめている手に汗、ひや汗だ。おねえちゃんは、おかあさんにだきついています。左側のたきが、つまようじみたいに細い。

次は一kmの長いトンネルに入りました。まっ暗い中に電とうが、ぽつ　ぽつついているだけです。魚とか、森の動物とかいてあったらたのしいのになあ。ぼくは、「リスが木の実を食べている。」とか、「きつねが　なわばりあらそいをして『うおおっ。』とほえている。」など、トンネルのかべにおいてみます。

ぱっと明るくなって、いねが一面広がってみどりがびかびか光っています。すうっと　風が　いねの葉の上を走ります。いねの仲間たちがさわさわとおうえんして、風のウエーブが走ります。すうっとむこうまでつながって、白さぎと遊んでいます。ぼくも　いねのじゆうたんで　白さぎと遊べたら　すてきだなあと　うきうきします。

八月十五日　ようやく行けた家族旅行です。

さあ、元気の森、とうちゃくです。

アスレチックが三十こもあります。どれもきけんがついています。

レイン・ウオールでは、(晴れを探せ)というヒント。目玉をぎろぎろさせて、ぬれないように全力で進みます。ぬれなくてゴールしました。

みんなパスしたときは、くったくた。

「ふうっ、つかれた。でも、楽しかった。」

「もっとしたい。」

とおねえちゃんとぼくは、しんこきゅうです。

「山の木々たち、紅く色がついたら来るね。」

とやくそくをして、帰りの車に乗りました。

《評》

私は詩人として、あなたのリズムを承ったスピードのある文体に心をひかれました。トロッコ列車が動き出すしゅんかんから、道中の様子が、あなたの気持ちの変化と重なってよく書けています。下に流れている川を見て、もし自分が水だったら石をよけていけるだろうか、と考えるよゆうは大したものです。つぎに「川のはばが広くなったはずなのに細い」と感じる目も鋭いですね。落ちたらどうしようと不安になっていることと、たきが「つま

ようじみたいに細い」という描き方がピタリと重なり合いますし、トンネルのかべに自分の好きな絵いてみるのもおもしろいし、いねの上の風と白さぎの描き方は見事でした。「紅く色がついたら来るね」もあなたらしい感覚です。最優秀賞にあげたくなった作品でした。

松永　伍一

優秀賞

「五体不満足」を読んで

水巻町立伊左座小学校　五年　安藤　麻矢

今、乙武洋匡さんは、レポーターとして、テレビに出演しています。

テレビの画面では、初め上半身しか写らないので、手や足がないことが信じられないです。レポーターとして取材している姿を見ると、とても明るく楽しそうに見えます。

あれだけの障害がありながら、なぜ、あんなに明るく前向きな考え方ができるのか、私には不思議に思えたので、乙武さんの書いた本を読んで見ることにしました。

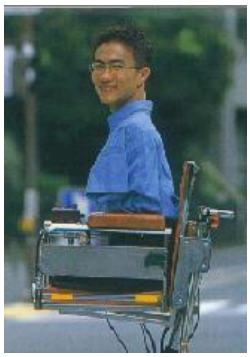
最初にびっくりしたのは、乙武さんの両親です。普通わが子が、手や足がなく生まれてきたら、おどろいたり悲しんだりして、どうしていいのかわからなくなりそうだと思うのに、乙武さんの両親はちょっと違っていた。

ものすごく前向きな考えをする人達だと思った。子供が障害をもっていたら、家の中に閉じ込めてしまいそうだけど、いつも一緒に連れて歩いて、外の世界をたくさん見せて、周りの人達にも知ってもらおうとすることに、私はおどろきました。

感動したのは、乙武さんの周りの人達です。小学校へ入学た時に出会った担任の先生、学校での生活にいろいろと工夫をして、みんなと同じように学校生活を送れるように考えてくれたりしてくれた周りの同級生。特別な目で見るのではなく、友達として素直に受け入れたことです。

そういう学校生活が、中学、高校、大学へと進んで行きます。学校生活の中で、大ぜいの人と出合いながらも、自分が障害者だと意識して生きてきたことがないと言います。両親や友達が、「やってあげる」ではなく「あたりまえのこと」として、自然に手助けをしてくれたり、障害者だからと言って、いじめを受けたこともなく、何かを制限されたということも少ないそうです。自分が障

害者であるということを、自覚する必要も、機会もなかったと言います。
そういう考え方が、出来る乙武さんが、すごいと思いました。障害者には、出来ないこともたくさんあると思うけど、障害者にしか出来ないこともたくさんあると思うから、乙武さんは、害者の代表として、たくさんいろんなことにチャレンジして、乙武さんの目から見えたもの、感じたものを、また私達にも教えてほしいと思います。
周りの人達は、みんな健康な体で生まれてくるのが、当り前と思っています。でも、乙武さんは違っていました。
この本を読んでたくさんのことを学びました。乙武さん、ありがとう。



《評》
乙武洋匡さんのあの明るい笑顔から、いま多くの日本人は生きる勇気をもらっているのではないでしょうか。私もそのひとりです。テレビの画面に映し出された乙武さんのさわやかさに感じ入って、それから「五体不満足」を読んでいるので、「どうして」というあなたの疑問が、頁をめくりながら一つずつ解けていったのですね。ふつうは「障害者」という目で見ますが、見られた方が人生に自信を持ち堂々としていて、かえって教えられるのです。「障害者には、出来ないこともたくさんあると思うけど、障害者にしか、出来ないこともたくさんある」とあなたが感じたことは、とても大きな人生上の発見をしたことになるのです。読書感想文としてもよくまとまっていて、あなたの素直さがこちらにひたひたと伝わってきます。

松永　伍一

優秀賞

またきてね、おじいちゃん

久留米市立篠山小学校　六年　米倉　慶

おじいちゃんが亡くなって四十九日目、今日は納骨です。お墓の下の石を、お坊さんがズズッとひきずると、ぽっかり空間が見えました。おおっと思いました。中には、骨壺が、三つ入っていました。ご先祖様だと思いました。ぼくの家の仏間に飾ってある写真の人達の顔が浮かんできます。お坊さんがその横におじいちゃんの骨壺をそっとおきました。ゴトゴトと小さな音がしました。
ここは梅林寺。おじいちゃんとよくお参りしたものです。階段を登り、お寺様を拝んで裏の高い階段を登ると、このお墓があります。おじいちゃんといっしょにお参りしていたのに、もう今はいません。悲しいです。ここに一人でいるのは、さびしかろう、雨にぬれんかなあ、おじいちゃん、帰ってきてと思いました。
やさしいおじいちゃんでした。梅林寺の帰りには、ラーメン屋さんに連れていってくれました。宇宙の話も面白かったです。太陽や地球はボールやビー玉を使って、教えてくれました。ぼくの好きなおかず、からあげやお肉をぼくにくれました。歌も好きで、どんぐりころころはよく歌っていました。
おじいちゃんの命を奪ったのは癌でした。せきがよく出ていました。苦しそうでした。食欲がなく、体には管をまきつけています。ぼくが最後にお見舞いにいった時は、まだ意識があり、何か、いいたそうでマスクをとりました。
「とったら苦しいですよ。」
とお母さんはすぐにマスクをしました。口をうごかしているおじいちゃんを、今でも思い出して悲しいです。それから二日後、おじいちゃんは亡くなりました。七十七歳でした。
それから四十九日の間、ぼくの家では精進をしました。辞書をひくと「身心を清く保つこと」と書いてありました。肉や魚は食べませんでした。野菜と玉

子だけの料理でした。お父さんは玉子も食べませんでした。自分のお父さんを大切に思っているからでしょう。お母さんは、玉子のニラとじ、納豆、肉なしシチューなどいろいろ工夫しています。でも、最後のころには「何を作ろうか。レパートリーがなくなった。」といっていました。おばあちゃんは元気がありません。しょぼんとしています。だから、時々おばあちゃんの横でねます。

初盆が来ました。十三日は丸い団子、十五日、おじいちゃんが帰る日は長い団子をあげました。おじいちゃんが背中にしょって帰るように長くするのだそうです。夜は、精霊流しをしました。船に果物や砂糖をのせて筑後川にうかべました。船に灯油をかけて、提灯ごと火をつけました。パーッと炎が上がってゆっくりかたむきながら流れて行きました。花火を入れていたけどなりませんでした。

「バイバイおじいちゃん。またきてね。」

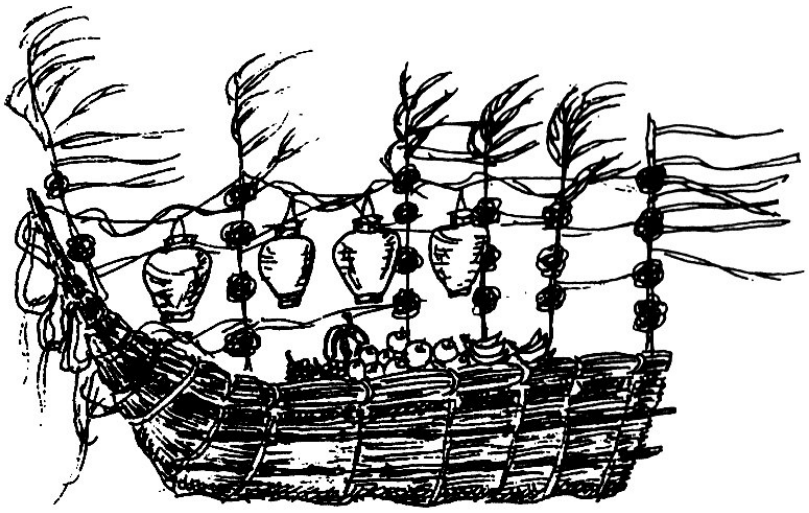
暗い川面には、たくさんの灯がちらちら動いて、とてもきれいでした。

《評》

大好きだったおじいちゃんの死に立ち会って、あなたは人の一生というものがどんな形をとるのかを教えられたのです。先に死んでいく人は何かをこの世にのこしていきます。あなたはそれをしっかりつかんだのです。しっかりとつかんだから作文の骨組みがしっかりしたものになって、人の心にひびきます。納骨の様子から書きはじめたのがよかったですね。その場面からあなたの思い出が広がっていき、おじいちゃんの人柄や亡くなられるときの姿も見えてきます。「精進」を辞書で調べたのですね。そういうこともあなたの将来にプラスになるでしょう。

精霊流しの模様もよく書けています。花火は点火しなかったようですが、あの一行も大切でした。来年のお盆にはまたおじいちゃんと会えますね。「またきてね」が光ってます。

松永　伍一



優秀賞

カメと私

水巻町立水巻中学校　一年　宮原　さやか

私が一番好きな動物はカメだ。カメをみているとおちつくしほのぼのとしてしまう。カメはなんだかそういうオーラを発しているのだ。でも、私の家のカメはほかの家のカメとはひとあじ違う。おっとりなんて全然してないし、ベランダにいるんだけどすぐ家にあがりこんでくる。それが日常茶飯事だ。

ある日のこと。私が部屋でテレビを見ていたら、なんだかガサガサ聞こえてきて、もしやと思い見てみたら案の定カメだった。でも、まだその時は良い方だった。私はカメをベランダに出し、もう入れないようにドアの所に、洗たくする時に使うアタックなどの洗剤をおいてへいを作った。でも、私は少しカメのことをみくびっていたようだ。カメは、私がもう大丈夫とゆだんして去っていくのを見とどけると、しめしめとばかりにへいを乗りこえ、家へ入り込んでいたのだ。私はそうとも知らず、テレビを部屋でのうのうと見ていた。しばらくして、私は体がだるくなったので、ふとんで寝ながら見ようと思い、ふとんにばたんとたおれこんだ。するとなぜだか私の下から「シューシュー。」という鳴き声が聞こえてきて、何やらもぞもぞ動いているのだ。これには私もびっくりして、急いでふとんをめくってみた。そしたら、あろうことに、そこにいたのはなんとカメだった。そして、かめは何事もなかったように走りだして、部屋の中をうろちょろしたあげく、私への復讐なのか、私の机のいすの所に糞をして、満足そうにベランダに帰っていった。私は、「あなどりがたしカメ！」と思った。このように、私の家のカメは、少し、いや、かなり、ほかの家のカメとは違うのだ。

しかし、今までのはほんの悪ふざけとして、今一番困っているのは、カメたちのえさ代だ。もうシャレにならんくらい、食って、食って、食いまくる。えさも、なくなった時はにぼしをやっているが、箱のやつだと一週間前後でなくなる。すごい食欲だ。そして、箱もにぼしもなく、2日間ぐらいえさをやらなかった時などは、私がベランダを開けたとたんに、ダッシュでやってきて、これでもかというほどくびをのばして、えさを求めてくる。すごい執念だ。でも、なぜなのか、そんなカメのことを一度として嫌だと思ったことはない。むしろだんだん愛着がわいてくるのだ。そして、私の家のカメがやってきて約二年、今はもう意気投合して素手でえさをやっている。でも、こんな単純なことでも、このごろうれしかったりする。こんな私は、自分でも本当にカメのことが好きなんだと思う。それに将来もカメに関する仕事をするつもりだ。つまり私にとってカメは、かけがえのない親友であり家族であり、一生をともにするパートナーなのだ。

これからもずっと一緒にいようね。

《評》

カメはときどき見かけますが、飼っている人は少ないでしょう。だいたい想像はつきますが、あなたの書いたものを読んで、カメというのは見かけによらず頭のいい動物だな、と感心しました。それはあなたの観察のし方と表現のし方が上手だったからです。ふとんの中で「シューシュー」と鳴き声がするところや、机のところに糞をして逃げ去るところなど、読んでいて笑いがこみあげてきます。洗剤の「アタック」でへいをつくったのをカメが突きくずして部屋に入ってきたと書いていて、その様子が見えるようですが、私からアドバイスをします。「アタック」とは英語で「攻撃する」という意味です。カメがその意味を知っているはずはありませんが、そのへんをちょっと書けばよかったですね。

松永　伍一

優秀賞

長崎で学んだこと

柳川市立柳南中学校　二年　加藤　由美

八月六日の出校日に、平和授業がありました。そこで、原爆がどんなにおそろしいものかということを、あらためて思い知らされました。そして、私が平和に興味をもつきっかけにもなりました。

八月十五日。私は家族で長崎へ行ってきました。長崎はとても大きな街で、戦争時の面影は何一つ残っていないようでした。でも、そのまま通り過ぎてしまうような街中に、原爆の爆風で片足をもぎとられたという片足鳥居がありました。坂道をのぼると、平和公園がありました。小さいけど如己堂もあったし、被爆校舎が残っている城山小学校もありました。

一見、わかりにくい所にあるものもあるけど、長崎の人達は決して忘れようとせず、平和を願いながら生きているんだな、ということが感じられました。

私が一番印象に残っている所は、長崎原爆資料館です。小学校の修学旅行で前に来たことはあったけど、もう　度じっくり見られたのでよかったです。でも、じっくり見れば見るほど、館内に響く戦闘機Ｂ29のエンジン音が映像となって私の頭の中に出てきました。しかも、どの写真も衝撃的で、気持ち悪くなるようなものもありました。

ふと周りを見ると、みんな緑色のＴシャツを来ている三～四十人ぐらいの団体があるいていました。話している言葉をきくと、中国あたりの言葉でした。どのような団体で来ているか分からなかったけど、同じ団体の一人が子供達に、熱心に写真の説明をしていました。他の国でも、原爆についてもっと知ろうとしている人達がいるということに、とても感心しました。

資料館の展示品の中に、長崎に投下された原爆の実物大の模型がありました。約三メートルぐらいの長さでした。もっと大きいように思っていたけど、これぐらいの大きさで、あの広い長崎を一面の焼け野原にしたんだなとおどろきました。この原爆の名前はファットマンといって、この中から出る放射線などで、ケロイドとかになるそうです。ケロイドの治療方法は、今だにみつかっていないそうです。他にも白血病になったり、髪の毛がぬけ落ちたりと、あらゆる症状が出るのです。

私は、いろいろな被爆資料の展示を通して原爆の恐ろしさと、平和の大切さをしっかりと学びました。機会があれば、広島にも行ってもっとくわしく調べたいと思います。

《評》

戦争について考えることは、平和のありがたさを考えることにつながります。戦争の中を生きぬいてきた人と、戦争を直接経験していない人とでは、そのとらえ方や感じ方にちがいが出て来るのは当然でしょう。私は中学三年のとき、大牟田の近くの軍需工場から長崎の原爆のキノコ雲を見ました。あなたは五十年ほどたったいま原爆資料館を訪れて、その悲惨な実態を想像した　のですね。そこから戦争の怖ろしさに気づき、いのちが生き永らえるためには平和がいかに大切かを考えるのは、人間の義務です。この作文は長崎旅行の流れとして書かれていますが、どこかに焦点を当ててそこを掘り下げて考えていくようにしたら、戦争と平和といのちというテーマが、もう少し感動的に伝わって来たのではないかと思いました。

松永　伍一

優秀賞

教訓「健康第一」

大牟田市立白光中学校　三年　松本　万葉子

一昨年、友人Ａが盲腸で入院した。昨年、友人Ｂも盲腸で入院した。お見舞いに行った時、冗談で

「次は私が入院したりしてー。」

と言ったら、今年の夏、あっさり私も盲腸にかかり入院した。初めは、下腹部が妙に痛むとは思ったが、あまり気にしていなかった。放っておけば治るだろうと、甘く見ていたのである。しかし、時間の経過に比例して、その痛みはだんだん激痛へと変わり、右の方へと集中攻撃を始めた。長時間にわたっての腹痛にいいかげん頭にきた私は、何を思ったかヤケ食いをした。もちろん悪化した。

もうこれは洒落にならないと思い、夜中に病院へ行くと、トントン拍子で入院が決定。いろんな事を把握したのは日付けがとっくに変わってからだった。病院のベッドの上で点滴をうちながら、何で私がこんな目に・・・・・・と咳いたことを誰が知るであろうか・・・・・。

夏特有のすがすがしい朝。けれど、私は一睡も出来なかったので、さわやかに目覚めるのは無理であった。しかも、昼には早速手術があると告げられ、更にダークな気分になる。別に怖いというわけではないのだが、自分の体を切られるのには抵抗があった。しかし、抵抗があろうがなかろうが、当然手術は行われる。

麻酔がしっかり効いていたので手術中の記憶は無い。けれど、同じように手術をした友人達に訊いてみると、感覚は麻痺していたけれど意識はあったと言うのだ。手術中に呼吸が出来なくなって手を振ったら、暴れるなと怒られたとか、何故か鼻の頭がかゆくなったので、看護婦さんに掻いてもらったとか証言していた。

手術が終わり、まだ自由に動かすことのできない脚に戸惑い、体勢を変えようと四苦八苦していると、看護婦さんがやってきて、

「頭動かすと、麻酔のせいで頭痛がするようになるから安静にしててね。」

と、天使のように微笑んで言った。しかし、思いっきり頭を動かした後に言われても・・・・・・。おかげでそれから一週間、私は頭痛に悩まされることになる。それにしても、入院生活はヒマである。上体を起こすと頭がぐらぐらと痛むので、ほとんど寝たきりだ。なんだかとても重い病気にかかったみたいだ。窓の外を見て、

「あの最後の一葉落ちた時・・・・・・」

と、某小説の名シーンを連想してみたりする。だが、夏まっ盛りなので外の木には青々とした葉が生い茂っていた。気分がだいなしだ。

その後、普通一週間で抜糸のところを驚異的な再生能力で四日に縮め、逃げるように退院した。

もう入院なんざ、こりごりである。

《評》

私があえてこの作品を優秀賞に選んだのは、病気とか手術という暗い出来事を、突き放すような目でユーモラスに描いてるからです。自分のこれからのことを真剣に書いた作文も心を打ちますが、人生の部分をユーモアをこめて照らし出し、読む人をクスッと笑わせる文章もこれからは書けるようになってほしいと私は願っています。

書き出しから、おもしろく、腹痛のときのヤケ食いや手術のあとの看護婦との応対や、夏の青葉のなかで、オー・ヘンリーの小説の一場を連想するところなど、なかなか気がきいています。決して人生を軽く見ているわけではなく、重く受けとめるところでも軽いタ

ッチで書けば笑いをさそう作品になるのです。こういうのをショート・ショート（掌編小説）の一種に見立てることもできるでしょうね。

松永　伍一

柳川市長賞

十年後の私

柳川市立蒲池中学校　三年　佐々木　麻衣

十年後、「そんな先の事」とは思うけれど、私はきっと看護婦になっているだろう。看護婦になって、重い病気と闘っているたくさんの人々を救うことが私の夢だ。

私の祖母は長い間ずっと入院していて、私が小学校四年の頃に亡くなった。病院では、いつも看護婦さんたちが忙しそうに早足で歩いていた。忙しくてたまらないのに、たくさんの患者さんたち一人一人に優しい笑顔で接していた看護婦さん。そんな看護婦さんが私は大好きだった。祖母が私に、

「大きくなったら、あんなふうな看護婦さんになって、おばあちゃんのように病気で苦しんでいる人を助けてあげんね。」

と言ったのを今でも覚えている。私はその時こんな看護婦になりたいと思った。今では、看護婦の中でも外科の看護婦になりたいと思っている。事故などで大けがをした人の手術、重い病気をもっている方の何十時間にも及ぶ大変な手術。そんな手術に付き添ってみたいと思っている。ぜったい直したい、元気にさせたいという気持ちと同じにー。

看護婦という仕事、それは患者さんを元気にさせるだけではなくて、人の気持ちまで豊かにする大切な仕事だと思う。「看護婦さんのおかげで悩みや心のもやもやが消えた」そんな人がたくさんいると思う。私も病気を直すだけではなくて、カウンセラーのように悩みもいっぱい聞いてあげれるような看護婦になりたいと思っている。

そんな看護婦になるためにはー。ここで、二つの道があると思う。一つは高校の看護科に行くこと。こっちの方が看護婦への近道であろう。もう一つは、高校の普通科を卒業してから看護婦への道に進むことである。私はこちらの方法で進みたいと思っている。それは、高校で一般的なことをたくさん学んでお

くと将来、何かに役に立つかもしれないかだ。そして私はその後看護大学に入ろうと思っている。遠回りでの看護婦への道を私は歩もうと思っている。そして、将来は大学病院など、大きくてたくさんの重い病気と闘っている人たちの入院している病院で働けたらいいと思っている。できれば、保健婦の資格もとりたい。そして、一生優しい看護婦の仕事をやっていきたいと思っている。一人でも多くの人が元気になって退院していくことを夢みて―。これが私の夢だ。

十年後、「まだそんな先の事は分からない。」でも、一つの夢に向けて、一歩一歩歩きだそうと思う。

《評》

看護婦になりたいと言う夢を実現しようと、真剣に考えている気持ちが紙面ににじみ出ているように感じました。

現代では人の嫌がる仕事を敬遠する世の中です。それをあえて看護婦になって、病人や老人を元気付けようと努力するあなたの看護する姿が目に見えるようです。

しかし、看護婦になりたいと希望するあなたは初志を貫徹せねばなりません。決してくじけてはいけません。

十年後のあなたに待っているものは勇気と決断です。

この文章が生きる為には、立派な看護婦となって生きることです。

あなたの未来に心から応援したくなったのが率直な感想でした。

佐伯　亮三

柳川市議会議長賞

くねくねあおむしくん

行橋市立行橋南小学校　三年　くわ　原理

ある所に、あおむしくんがいました。あおむしくんは、いつもほかの虫たちにわらわれていました。そのわけは、いつもくねくねと歩くすがたが、おかしいからです。あおむしくんは、

「ぜったいくねくねしないぞ。」

と、思いました。

あおむしくんは、ど力しました。せなかに力をいれて、まっすぐ歩こうとしました。北きょくに行ってこおったり、体に重いものをくくりつけたりしました。でも、やっぱりくねくねします。あおむしくんは、かなしくなってきました。

あおむしくんは、自分ではいい考えがうかばないので、みんなに聞くことにしました。

「ねえ、ありくん、ぼくどうしたらくねくねしないのかな。」

と聞いても、ありくんは、わかりません。とんぼくんも、小鳥くんも、みんな、

「わからないよ。」

と言うばかりです。

あおむしくんは、もの知りのカブトムシくんに聞きにいきました。

「どうしたら、ぼく、くねくねしなくてすむかな。」

するとっカブトムシくんは、

「だいじょうぶだよ。しだいになおるから。」

と、わらって答えました。あおむしくんは、なんだか意味がわからないけど少し安心しました。そのばん、あおむしくんは、ぐっすり家でねました。

次の日のことです。ありくんたちがあおむしくんの家へ遊びにいきました。

「おうい、あおむしくん遊ぼうよ。」

と、ありくんがよびました。何度も何度もよびました。でも、あおむしくんは、出てきません。
「どうしたんだろう。家の中に入ってみよう。」
と、一ぴきのありくんが言いました。中に入ると、あおむしくんは、ベットにねています。ふとんをはぐって、みんなは、びっくりしました。
「あおむしくんが、かたまっているぞ。」
ありくんたちは、すぐにカブトムシくんをよんできました。カブトムシくんは、ベットの中のあおむしくんを見ると、
「だいじょうぶ。あおむしくんは、さなぎになったんだよ。」
と言いました。一ぴきのありが、。
「さなぎって何」
と聞きました。カブトムシくんは。
「さなぎはね、大人になるためのじゅんびだよ。だから、三週間くらいたったら、もう一度来てごらん。」と、教えてくれました。
「ふうん。」
ありくんたちは、ふしぎそうに家へ帰ってゆきました。
三週間がたちました。ありくんたちは、みんなそろってあおむしくんの家に行きました。
トントントン。
戸を開けて家に入ると、一ぴきのチョウがいました。羽がきらきら光って、美しいチョウです。あおむしくんが、大人になったのです。ありくんたちは、みんな、
「よかったね。」
と、言っていっしょに遊びました。
それからのあおむしくんは、もうくねくねあおむしくんなんて、言われなくなりました。だって、あおむしくんは、今では、アゲハだからです。

《評》
すべての生き物が成長してゆく時に、あおむしくんは他の虫達に笑われているのがどうもくやしくてたまらないようです。　くねくねしているあおむしくんはまっすぐ歩くことができるように努力します。
奇抜な着想に感心させられましたが、生きるということは大事な事です。
さなぎから美しい蝶になったことで、大人になった喜びが目に見えるようです。
筋の運び、会話のうまさ、本当に立派な童話に仕上げて呉れました。ありがとうと言いたい位です。
二十一世紀の成長を楽しみにしています。夢と希望を与えていただいて、何度も読ましていただきました。
もう一度、ありがとう。

佐伯　亮三

柳川市教育委員会賞

「市民のつどい」に参加して

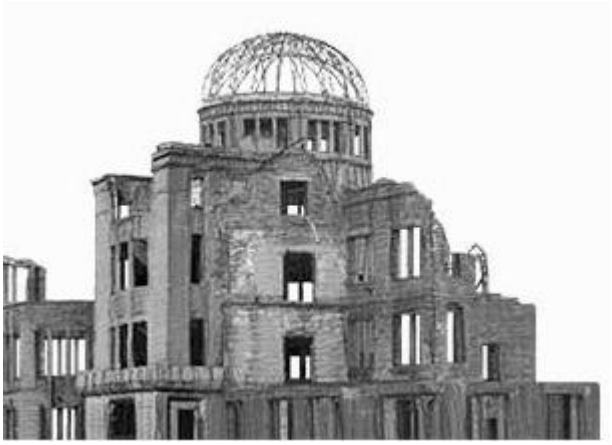
柳川市立柳南中学校二年　北原　絵美

夏休みに、友達に誘われて私は『９９市民のつどい』に参加しました。『平和都市宣言』という事で、これにちなんだハンドベルの演奏や宣言文の唱和、平和祈念の黙とうが行われた後に、私がこの市民のつどいで一番心に残った、ピーター・フランクルさんの講演がありました。ピーターさんは私達に、自分の今までの体験、今の日本や世界についての考えや役割を、真剣にありのままに語ってくださいました。聞いていて、自分の意見に自信をもっているという事が伝わってきました。ピーターさんの講演を聞いていて一番強く思った事は、私は世界の事、そ「して日本人でありながら日本の歴史の事を、あまりよく知らないという事です。そういう事もあり、ピーターさんの話を聞いていて、日本人として中学生として、何だかはずかしいような複雑な気持ちになりました。でも、それらは、今からでも見直していく事ができるはずです。そうしていく事で、少しずつ自分の考えがもてるようになり、またその心がけの積み重ねが、自分に自信をもてるきっかけになるかもしれないと、私は考えられるようになりました。

もう一つ、私が今回の『市民のつどい』で思った事は、もう二度と核戦争を繰り返してはならないという事です。ハンドベルの演奏の中に、「原爆許すまじ」という曲がありました。『ふるさとの街焼かれ、身よりの骨うめし焼け土に、今は白い花咲く、ああ許すまじ原爆を、三度許すまじ原爆を、われらの街に』・・・・・・とても悲しい曲でした。原爆の恐ろしさ、家族の深い悲しみ、そして、もう二度とこの惨禍を許してはいけない、繰り返してはいけないという気持ちがこめられている歌でした。宣言文の中にも、『恒久平和は人類共通の願望である。』とあります。

テレビや新聞で内戦や核兵器と騒いでいる今こそ、みんな一人一人が、これらが正しいのか、平和とは一体何であるのかを考えるべきであると思いました。

今回、『市民のつどい』に参加して私は、また一つ勉強になったと思いました。これから私達が大人になって社会に出ていく時、きっと役に立ち、支えてくれると思います。



《評》

言葉で「平和」を口にすることは簡単なことです。あなたは「平和都市宣言鱒市民のつどい」に参加されました。その時、ピーター・フランクルさんの講演を聞かれました塗費ンドベルの賜爆許すまじ」の演奏を聞いて、いよいよ恒久平和を祈念する立場になられたようです。日本人はみんな平和を願望して居ります。

しかし、いくら核禁止を呼びかけても、核保有の国があっては永久に平和はやってきません。

あなたの文章を読んで、二十一世紀はあなた達の時代であると思いました。輝やける未来を築き上げる為にも、「市民のつどい」で誓った願いを、しっかり踏まえて、一人一人の平和の輪をひろげることが、あなた達の使命です。日本人として世界平和のさきがけとなりましょう。

佐伯　亮三

柳川文化協会賞

駅前の通りが映すもの

柳川市立蒲池中学校　三年　大渕　理映

私の通う塾は駅前にある。いつも定位置で母を待っていると、いろいろな人が目の前を通り過ぎていく。サラリーマン、学生など。駅前はまるで甘いお菓子に群がる、ありのような気がする。そんなことを考えながら、眺めていると、一人のおばあさんが、ゆっくりゆっくり、一歩一歩、かみしめるように歩いてきた。どうもそのおばあさんは、下半身不随のようだ。一歩、二歩歩いたら、休けいの繰り返しで、ゆっくり歩いていく。

次の日、また私はそのおばあさんと会った。歩道橋のところで、足をのばして、ストレッチをしていた。

また次の日も、そのまた次の日も、おばあさんはゆっくりだけれども、乳母車をおしながら、一生けん命に、歩いていく。でも、私はすごい声を聞いてしまった。

「クソババア、じゃまだ。」

これがおばあさんにかけられた言葉だった。確かに彼女が歩いているのは車道だから危険である。言葉を発した若くて髪が金色でいかにもヤバそうな人は、彼女のことを知らないだろう。でも、年老いた人にはそんなことを言ってはいけない。その人はそんな言葉を、自分の家族に発しているのか。恐ろしい世間だ。

しかし、おばあさんは、言葉にめげずに歩き出した。私は罵声を消して思った。おばあさんは、わずかな光を求めて歩きだしている。足の自由がきかなくても、少しでも動けるようにがんばっている。一つの動作に時間がかかっても、やりぬこうとしているおばあさん。私はそんなおばあさんを応援してあげたいと思った。そして私も自分にあるかもしれないわずかな光を求めて旅立ちたいと思った。

おばあさんは私に自分の限界までがんばろうという心を教えてくれた。きっと今も、ゆっくり、ゆっくり歩いていると思う。おばあさんの足は、きっとよくなるだろう。今度、会ったら、あいさつしてみたいと思う。

そして、駅前は、現在の社会の状態を、映し出しているような気がする。言葉の乱暴な若者、私もそうかもしれない。自分の利益だけを考え、他の人のことを考えずに行動する人々。さびしい世の中だ。でも、みんながみんな、そうではないかもしれない。私はさびしい世の中の人間にはなりたくない。温かくて安らげる人になりたい。

私が大人になった時、駅前は、おばあさんみたいな心と、温かい心のあふれる駅前であってほしいと思う。

《評》

「くそ婆あ、邪魔だ！」と一人のおばあさんをどやしつけた金髪の若者の声を聞いて、あなたは心を痛めますね。

毎日、駅前で、下半身不随のそのおばあさんを見て、挨拶をしてみたいと思っても、仲々勇気が出ません。老人に手を差しのべて、声を掛けたりしたら、どんなに喜ばれることでしょうか、

あなたは心やさしい女生徒です。あなたにお願いしたいことがあります。世の中には多くの老人がいらっしゃいます。これからはいたわる気持ちと、勇気をもって、老人に声を掛け，心やさしさと、思いやりを持って接してゆけば、きっと和の輪がひろがって、明るい世の中になりますよ。

駅前の群衆の中の一点をしぼって書かれたのは抜群です。

佐伯　亮三

第三回長谷健賞＝平成十二（二〇〇〇）年度

最優秀賞

「Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｄ」“大好きだからさようなら”

福岡市立青葉中学校　二年　田中　綾乃

もうすぐ秋だね。今年の夏も暑かった。

でも、二の暑さよりも、もっともっとあつい思い出が夏にはあるんだ。せつなくっていとおしいお話を特別に教えてあげる。

二年前の七月。夕立ちが上がって草のにおいが青臭く立ちのぼるそんな日、その子を拾ったの。小鳥というには育ちすぎ。でも、まだ口の端がほんのりと黄色いつばめの子。つばさが少し変な風に曲がって、ふるふると震えてた。痛くてたまらないんだろうな。威かくする元気もないくせに、くるくるとした黒い瞳は一直線で、全身で私のことを拒んでた。そうっとタオル地のハンカチでつまみ上げると、観念したみたいに目を閉じた。

「どうしたの？こわくないよ。」

優しく静かに話しかけたけど、わかってもらえたかなあ。きっと巣立ちに失敗したんだね。このままでは旅に出られないね。私は子つばめを胸に抱いて家に持って帰った。

小っちゃな箱にティッシュをいっぱい敷きつめて、寝床を作ってあげたの。お母さんに頼んで、野鳥用の生きた虫や練りえをペットショップで買ってきてもらった。野生の傷ついた鳥を育てるなんて初めてだったけど、必死だったの。せっかく拾った小さな命、どうにかしてあげたかった。

いやいやするくちばしを無理矢理こじあけて、虫を三匹、四匹と放り込んだ。

「あたしのこと、大嫌いになってもいいから食べてちょうだい。」

本当はもちろん好きになって欲しいけど、元気になってもらいたいから、憎まれ役になろうって決めたんだ。

二日くらいは、うつらうつらしてて元気がなかったけれど、そのうち体つきが生き生きしてきて、変わってきたの。

運よく目のつく所に落ちてきて、運よく車にもひかれなくって、運よくけがもたいした事なくって・・・・・・。なんて強運の持ち主。

“ラッキー”。いつからか、その子つばめをそう呼ぶようになった。

ラッキーは日に日に元気になっていたよ。えさ箱を目の箭に出しただけで、じいじいとおねだりの声をあげるし、かえるみたいな大きな口をかばかば開けて、もう大変。心配してた羽もしっかり元どおりになって、部屋の中なら十分飛び回れるようになった。

でも、私は心の中に大きな問題を抱えてた。最初から、そう、この子を連れて帰ってきた日からわかってたことだけど・・・・・・。

ラッキーは渡り鳥。家の中で飼い鳥として育てるわけにはいかないの。外の夏の風の中でたくさんの友達や兄弟たちが待っている。なのに、このかわいい幸運の小鳥を、私は手離したくなくなってた。いつまでも自分のものにしておきたくなってしまったの。

おまけにラッキーときたら、ほとんど手のりになっちゃったんだ。「ラッキー」って呼ぶと、カーテンの上からすいっと飛んできて私の手の中にもぐり込んできてね。ぶかぶかに羽をふくらませて、あくびなんかしちゃうんだよ。まるで自分の寝床はここなんだって言わんばかりに。信用しきって。

私はラッキーを、空に返すことに決めた。

野生の鳥は人間に慣れすぎちゃいけないんだ。これ以上一緒に時をすごすと、お互いにつらくなってしまう。

そんなことを思ってないくせに、その気持ちをめちゃくちゃに心の奥深くに押し込んだ。次の日の朝、私はリビングからサンデッキへつづく窓を、わざと少し乱暴に開けたの。指にとまったラッキーは、外に出てもきょとんと飛ぼうとはしないまま、こっちを見てる。

「おうちにお帰り。みんなが待ってる本当のおうちに。」

細い足でつかまれてるその指を、小さく揺すると、ぱるる・・・・・・と羽

の音をさせて、ラッキーは飛び発った。一度小さくこっちに向かって旋回し、そして、青空にすい込まれていった。近くで飛んでたつばめたちに負けないくらいの力強さで。その姿を見送りながら、涙がぽたぽたと落ちてきた。嘘だよ、ラッキー。戻ってきてよ、また手のひらにもぐってきてよ。私の心はそう叫んでた。でも、ラッキーは戻ってこなかった。

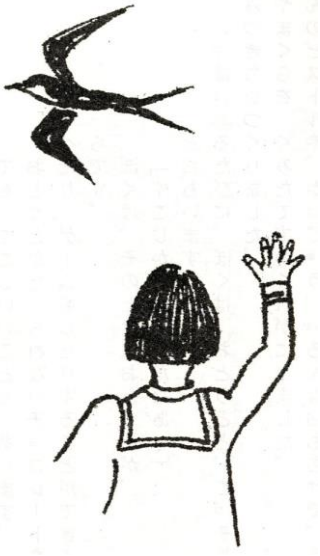
今年ももうじき暑い夏が終わる。あれからつばめの季節が来るたび、空を見上げてラッキーを捜すけど、私にはもう、どれがラッキーだかわからない。でも、わかってることがただ一つあるんだ。私は確かにあの日、ラッキーをハッピーバードにしたんだってこと。

《評》

書き出しからグッと気持ちを引きつけられ、これはきっとおもしろくなるぞと感じましたが、期待どおりの力作でした。拾ったつばめの様子から、もうすでに作者とのドラマが始まっていることを暗示させて、その展開が楽しみになります。読む方は、つばめがどうなっていくのか少し心配になりながら、作者の愛情と心づかいできっと元気になるにちがいないと思い始めます。ところが、つばめは飼い主を信じきってなついてしまいます。その喜びと不安とが重なっていることを作者はよく知っていて、心の動きを実によく書きこんでいます。

愛情が深ければ、別れは悲しいものです。でも、「悲しい」と書いていないので、かえって別れの悲しみが読む者の胸を打つのです。ラッキーは今も元気でいるでしょう。つばめの飛んでくる季節になったら、作者の心になって、私たちもあのラッキーを探したくなりますね。

松永　伍一



優秀賞

ぼくのおとうと

三橋町立藤吉小学校　一年　かいだ　こうへい

ぼくのおとうとは、ぼくが四さいのときに、うまれました。ぼくは、いつも、いっしょにテレビをみたり、ほんをよんであげたりします。でも、すぐにけんかをして、おかあさんに、おこられます。おとうとは、いつも、ぼくについてきて、なんでもまねをします。ぼくがあそんでいるおもちゃを、ほしがるので、

「これは、ぼくのだからだめ。」

というと、すぐ、おおきなこえで、なきます。

「おにいちゃんだから、かしてあげなさい。」

と、おかあさんは、いつもいいます。

「なんで、ぼくばかりおこられるかなあ。ぼくがおとうとだったらよかったのに。」

と、ときどきおもいます。

でも、すこしいいことも、あります。おとうとがたべられないチョコレートをたべたり、ゲームをしたりすることができるからです。ぼくは、そのときはおとうとが、

「すこしかわいそうだなあ。」

とおもいます。

あめが、いっぱいふるたびに、ぼくは、おとうとと、こっそりふとんでひみつきちをつくりました。

もうふやまくらを、くみたててかくれがにしました。たくさんのピストルや、かいじゅう、いろんなおもちゃで、うちゅうせんごっこをしてあそびました。

そして、ほんもよんであげました。おかさんが、かえってきて、

「また、こんなことして、かたづけなさい。」

とおこられましたが、

「でも、よくできてるね。おるすばんありがとう。」

といってくれたので、うれしかったです。

ぼくは、これからも、おとうととなかよく、たくさんいろんなあそびを、したいです。

《評》

とてもかわいいおにいちゃんですね。だれでもときどきはけんかをしますが、すぐになかよくなります。おかさんからしかられたとき、「ぼくがおとうとだったらよかったのに」と、おもうところや、おとうとのできないことをやれるとき、「すこしかわいそうだなあ」とおもうところなど、とてもよく書けています。

あめのふる日のあそびもたのしそうで、ピストルやかいじゅうなどのおもちゃであそんでいるようすが、目にみえるようです。

おかあさんは、はじめは「かたづけなさい」としかりますが、すぐに「おるすばんありがとう」とほめてくれましたね。きみたちがなかよくあそんだことが、おかあさんはうれしかったのです。これからもなかよくして、よいおにいちゃんになってください。

松永　伍一

優秀賞

ハムスター

三橋町立藤吉小学校　二年　ひろはた　さやか

　ハムスターをもらいました。いもうとは、目のくりくりしたほうをもらいました。わたしは、白の毛があまりないほうをもらいました。わたしは、名前をハムとつけました。いもうとは、ちゅうちゅうねずみくんとつけました。ハムをさわるとぴょんぴょんにげるので、
「どうしよう。」
と、思いました。でも、だいてみるとおとなしくなりました。わたしは、
「あったかいな。」
と思いました。
　ハムとちゅうちゅうねずみくんは、あなをほるのが大すきです。いつもトンネルみたいなあなをいっぱいほってじぶんのひみつばしょにしています。ほおぶくろに、えさをいっぱいいっぱいためて、そのひみつばしょでえさをたべています。そして、のどがかわくとひみつのばしょから出てきて水をのみます。こくこくと音をたててのみます。とてもおいしそうにのんでいます。はこでつくったトイレでじっとしているので何だろうと思ったらおしっこをしていました。そして、でてきたら
「ああ気もちよかった。」
と、いっているようでした。
　わたしが、手を三かいトントントンとたたくと、ハムとちゅうちゅうねずみくんがよってきます。わたしが、ハムとちゅうちゅうねずみくんにまほうをかけたみたいです。ハムはおてんばで、家をうしろむきにしたり、えさいれをひっくりかえしたりします。えさは、ひまわりとかぼちゃのたねをぱりぱりかんで中みをたべています。わたしには、たねのあじはわからないけど、ハムはおいしそうにたべています。
　六月三日にハムの赤ちゃんがうまれました。生まれたときの色はピンクで、大きさは三センチぐらいでした。六ぴきかさなっていました。
　三日目、小さな赤ちゃんが一ぴきすからとび出していきました。わたしは、おかさんのおっぱいがのめないと思ったので、わりばしにわたをつけてすにいれてあげました。
　四日目。からだにもようがでてきて耳もしっぽもでてきました。人がくるとおかあさんのハムは赤ちゃんをおなかでかくします。おかあさんのおっぱいをのむとき、おなかを上にむけて足がちょっぴりみえて元気いっぱいおっぱいをのんでいました。
　八日目に一番小さい赤ちゃんが二ひきしんでいました。おはかを作ってあげました。二ひきいなくなってさみしいです。
　十二日目。四ひきのあかちゃんは、はじめてすきなところへさんぽにいきました。おかあさんのハムは一ぴきずつ口にくわえてすにいれますが、すぐにまた、すから出ておさんぽにいきます。もうすこし大きくなったら、手の上にのせて、ともだちみたいにいっしょにあそびたいです。

《評》
　ハムスターはかわいい生きものです。二ひきの名が、「ハム」と「ちゅうちゅうねずむくん」ではずいぶんちがいますね。でも、それがずいぶんおもしろくて、二ひきのいろんなうごきがあいきょうのあるものになります。
　ハムスターのえさのたべかたとか水ののみかたとか、おしっこのしかたなどを、あなたはよくかんさつしています。また、あかちゃんが生まれたあと、すからとびだした一ぴきをわりばしではさんですにかえしたところや、二ひきがしんだあとおはかをつくってあげたところなどから、あなたのやさしさが

つたわってきます。
かわいがってそだて、ハムスターの動きをきちんと見ていますので、ほのぼのとしたものが、読むもののむねにつたわってきます。こういう文を書いていくことで、あなたのこころも成長していくのです。

松永　伍一

優秀賞

こんにちは、竹の子さん

三橋町立垂見小学校　三年　山田　美穂

五月、おばあちゃんの家に竹の子ほりに行きました。いとこのあやちゃんとまさしくんとまさとくんもいっしょに行きました。
竹の子山へは、おばあちゃんの家のけいトラックにみんな乗って行きました。トラックがゴトゴトゆれるので、わたしは、
「わあ、たのしい。ジェットコースターみたい。」
と言いました。
竹の子山には、竹が数えきれないほど、たくさん生えていて、とてもすずしかったです。
上の方からお日さまの光がところどころさしこんでいました。地面には、竹のはが茶色になって、たくさん落ちていました。
わたしは、なじめ竹の子がうまく見つけられませんでした。その時、しんせきのおじちゃんが、
「葉っぱが小さくて山になっているところところに竹の子があるんだよ。」
と教えてくれました。さっそく教わった見つけ方で竹の子をさがしました。
「ここかな。」
とわたしは思って、手でその小さな山をくずしました。そこには、ほんとうに小さな小さな竹の子のほ先が、ひょっこり顔を出していました。わたしは、うれしくて、うれしくて、大声でいとこたちに、
「あった、ここ、ここ。」
とさけびました。わたしは持っていた竹の子をほるとうぐわで、
「よいしょ、よいしょ。」
と力をいれてほりました。からだ全体に、力がもりもりわいてき、ました。それはとても大きな竹の子でした。三十分ぐらいかけて一本の竹の子をほりました。あせがだらだら出てきました。あと少しの所になると赤いぷつぷつが見えてきました。
あやちゃんが
「みほちゃん、がんばれ。」
とおうえんしてくれました。
さいこのし上げは、しんせきのおじちゃんがしてくれました。とうぐわで竹の子を持ち上げる時、バキバキと音がして竹の子が土からきれいに出てきました。伯父ちゃんが、
「はい、みほちゃん。」
と言って、わたしの手にのせてくれました。手にのせてもらった時、赤ちゃんぐらい重かったです。わたしは心の中で、今日は竹の子さん、と言いました。
手は真っ赤です。でも、わたしはがんばったしょうこだとおもいました。

《評》
竹の子ほりのたのしいようすが、よく書けています。山に出かけるときのけいトラックに乗ったみんなのこころのうごきと、竹ばやしのしーんとしたしずけさとが、うまくくみあわさって、とてもいいかんじでした。
おとなから教えてもらわないと竹の子のあ

りばし二はわかりませんが、教えられたとおりにさがすと、ちゃんと見つかるものですね。さがしまわってやっと見つかったときのうれしさが、すなおにつたわってきます。

さいごのところでとうぐわをつかって竹の子をとりだすとき、バキバキと音がしたという書き方はとてもいいですよ。

それを手にとったとき、「赤ちゃんぐらい重かった」というかんじ方は、みごとです。だからこそにんげんにはなしかけるように「こんにちは」と言えたのです。よかったですね。

松永　伍一

優秀賞

命が生まれるとき

柳川市立東宮永小学校　四年　山田　徹

「がんばれ。がんばるんだよ。」

ぼくは、庭でせみのような虫がふ化しているところを見つけた。

それは、小さくて、ふるえて、枝から落ちそうになっていた。

ぼくは、がんばれとおうえんをし続けた。

すると、少しずつ体が割れてきた。

出てきたばかりのせみの羽は、短くて、小さくしぼんだようになっていた。

ぼくは、感動をおぼえながら、この小さなせみの誕生を見守り続けた。

三十分たつと、羽が偉びてきた。ろう細工のような羽をしていた。生まれてきたばかりのせみの体の色は青白く、羽には血の流れも見ることができた。

次の朝、ぼくは、起きるとすぐ庭のせみのところへ見に行った。

せみは、元気な成虫になっていた。

ぼくは、そうっと手にとると、

「くもの巣や人間のあみにかかるんじゃないぞ。」

と言って、飛ばしてあげた。

せみはぼくの言葉がわかったように喜んで行った。

母に、ぼくが生まれたときのことをたずねてみた。

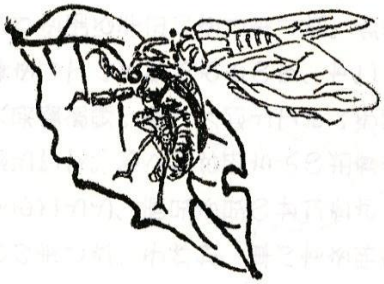
「徹が生まれた時はね、首にへそのおが、しっかりまかっていて、とても大変なおさんだったんだよ。生まれたばかりの顔はきずだらけで、まるでねずみの赤ちゃんみたいで、色が黒くなっていたんだよ。」

と教えてくれた。

その話を聞いて、ぼくは、お母さんもせみと周じように、ぼくを苦しんで生んでくれたんだなあと思った。

お母さんからもらった大事な命だ。

一生けん命、生きていこうと心にちかった。



《評》

命が生まれでるときは、いつでも感動をおぼえます。

「こういう場合はだれだって感動するものだ」と頭で先にわかってその場面を見るのではなく、見ているうちにそうなっていくのが自然ですね。

あなたはすなおに命の生まれでる場面を見つめ、その不思議な力に感動したのです。そうすれば、きちんとかんさつしないと気がすまなくなります。そして、せみを空に飛ばしてやったあと、自分の生まれたときことをおかあさんにききたくなったのですね。とても大切なことです。

あなたは命の誕生について二つのことを知り、それが一つのものであることに気がついたのです。自分の生まれたときの様子をだれからもきかずに一生終わってしまう人もいます。あなたは小学四年生でそれを生んでくれたおかあさんにきいたのですから、ほんとにしあわせですね。

松永　伍一

優秀賞

老人保健施設に行って

山門郡瀬高町立大江小学校　五年　向　俊行

ぼくは、お母さんがつとめている老人保健施設に行きました。お母さんが仕事をしている三階には、五十人のお年寄りが入所しています。重い障害がある人や介ごが必要な人がたくさんいました。ぼくは、車いすを押す手伝いをしました。お母さんが、

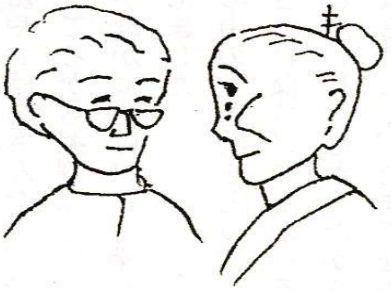
「車いすをぶっつけないように押してね。」

と言いました。ぼくは少しきんちょうしました。車いすを押してみると、ぼくが思っていたのより重くて、曲がる時がちょっと思うようにいきませんでした。だけど、二、三回したらなれてきて、うまくできるようになってきました。お母さんから車いすを押す時の注意を教えてもらいました。それは、車いすを押す時は、乗っている人の手を車輪にまきこまないようにすることと、両足を足のせにきちんとのせること、車いすを速く押さないようにすることなどです。ぼくはお母さんの注意を守って車いすを押せたのでよかったです。

ぼくは、老人保健施設で働く人はとてもいそがしいんだなあと思いました。お母さんは一日じゅう仕事をしている時があるので、すごいなあと思いました。昼ご飯の時間になったので、おしぼりを配る手伝いをしました。食堂のテーブルの上に一つずつおしぼりを置いていきました。置いていく時におじいさんやおばあさん達から「ありがとう。」といってもらいました。

ぼくは、ちょっとうれしくなりました。でも、おしぼりは熱くて五十枚も配るのは大変でした。しばらくすると配ぜん車が上がってきました。お母さんや他のしょく員の人達が食事を配ります。その後、自分で食べられない人の食事介助をしていました。食事介助は簡単そうに見えるけどとてもむずかしそうです。ご飯をのどにつまらせないように注意して、その人のペースに合わせて食べさせていました。ぼく達は、何の不自由もなく生活しているのにお年寄りの

人達は大変なんだなと思いました。その日は日曜日だったので、面会に来ている家族の人がたくさんいました。面会に来られているお年寄りの人は、とてもうれしそうに笑ったり、なみだを流したりしていました。ぼくは、お年寄りの人が早くよくなって家に帰れたらいいのになと思いました。お母さんの仕事が終わるまで待って、それからいっしょに帰りました。お母さんの仕事場には前にも何度か行ったことがあったけど、一日中いたのは今度が初めてでした。ぼくは、老人保健施設で働く人の大変さやいろいろな事が勉強になったのでよかったと思いました。



《評》

これからお年寄りがだんだん増えていきます。病気で寝たっきりになる人も出て来ます。あなたはその様子をしっかり見つめ、そこにいるお年寄りのつらい思いと、そこで働いている人たちの大変さに気づきました。

見るだけでも少しはわかりますが、手伝いをすれば身にしみてわかるのです。あなたの文は、いっしょうけんめいに手伝おうとしている気持ちがよく現われていて、私はそこにあなたの「心の汗」を感じました。

お母さんがそこで働いておられるから、あなたはこういういい経験をすることができて、ほんとによかったですね。あなたのこれからの人生にもきっと大きなプラスになることでしょう。ここであなたがおぼえたことは、身につくばかりではなく、いのちの尊さを知る一つの物差ともなっていくにちがいありません。

松永　伍一

優秀賞

掘割から世界への願い

柳川市立城内小学校　六年　古澤　千紘

「昔は、掘割の水がおいしかったね。」
「そうだね。ホタルなんかもいたし。」
「あ、そうそう、魚もたくさんいたしね。」

私たちは、そういうおじいさんやおばあさんたちが子供だったころの掘割にもう一度したいという願いをもち、五年生のころから掘割についてしらべています。掘割のことをしらべるまでは、水になんて興味がなかったけれど、深く深く調べていくうちに、興味がわいてきてもっともっとと調べ始めました。

六年生になってからは、掘割の中の生き物をとりにいきました。そこで、どうしてにごっている所の水に、とう明で、きれいなスジエビがいるのかが不思議に思いました。それに掘割に、スジエビがいたことじたいしらなかったから、みんながスジエビをとっている時とてもびっくりしました。しばらくして、たまごをもっているスジエビをとりました。

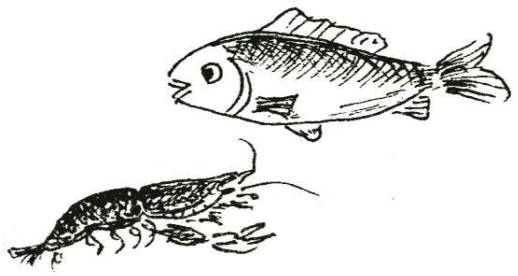
たまごがふ化してほしいなあと思っていたら、そのスジエビのたまごは、海でしかふ化しないと教えてもらいました。そういうスジエビが掘割にいるのが、また、不思議でした。

ほかにもおもしろいものがいました。それは、ほんとうに手が長いテナガエビでした。また、ドンコもいました。ドンコは、口にはいるものは、なんでもたべるそうです。そんな新しい発見につつまれながら、それと同時に、疑問もたくさん出てきました。

だから、まだまだ疑問を一つ一つつ解いていき、掘割と生物のつながりを知っていきたいです。私たちの掘割調査は、これからです。さらに、新たな発見ができるといいなと思います。私たちに命があるように、掘割にも命があります。私は掘割がすきです。見ているだけで心がおちつくし、いやなことがあっ

てもなぐさめてくれる、そんなやさしい掘割です。現在、柳川には、掘割のことを考えて、水をよごさないように工夫したり、ゴミをとったりしている人がいます。だから、私たちは、その人たちの努力をむだにしないように、ほかの人にその努力の輪をつないでいく役目をしたいです。そして、それがいずれ、世界のに広がるようにしたいです。

私たちは、海でつながる仲間です。掘割の水が汚れれば、世界の海にこの掘割の汚れた水が流れ出してしまいます。だから、私たち柳川の人間が、今、一番大切にしなくてはならないものは、掘割だと思います。今、行動をおこすことが、私たちの課題です。これからずっと、掘の命が、世界の海や川の命がかがやいていくことが、私の願いです。



《評》

地球環境が汚されていくことを琶界中の人々が心配しています。そして、やれるところから何とかしょうと努力をつづけています。

あなたが自分の住んで柳川地方の環境に目をつけたことは当然のことで、とても大切なことです。掘割にすんでいる生物を調べていくうちに、オヤッとおもうことやいろいろな疑問も出てきて、そこであなた自身が成長している様子が、文章によく出ています。

それだけでなく、あなたの環境調査は世界を見つめる目を育てたのです。地球がわかっていくためには、自分の住んでいる足もとをしっかり見つめなくてはならないとよく言われますが、あなたはそれを実行しているのですね。柳川の掘割が世界につながっているというとらえ方は、みなさんまだ不十分ですから、これからも訴えつづけてください。

松永　伍一

優秀賞

リサイクル活動

柳川市立柳城中学校　一年　蒲池　桃子

私たちは、ゴミ問題にどのようにかかわったらいいだろうか、柳川市はどういうことにとりくんでいるのだろうか、知る必要があると思いました。

柳川市のとなりの大牟田市は五分別をしています。びんにしても白色、茶色、緑色とこまかく分けられているので、リサイクルがしやすいだろうなあと思いました。リサイクルできない油かん、化粧びん、なべ、などは埋めたてられるそうです。

福岡市では、ごみの四分別収集が導入されました。空瓶、空きペットボトルの取り残しが増えている。飲み物の消費が増える夏に入り、絶対量が増える上に、まだ家庭での分別の仕方が決められた通りになっていないケースが多いため、指定外のごみが混ざっていて回収されずに取り残されるものが、四分別収集が始まった四月と比べて七月は倍以上になったと新聞にのっていました。せっかくこのような取り組みがおこなわれているのに、一人一人の責任もった行動が必要であると思いました。

私たちの柳城中では、生徒会の人たちがリサイクル活動をしているのです。私はあまり参加していませんでしたが、これからは協力的に参加したいと思っています。そして、空かんのふたにしても、いっぱい集めることによ，て、障害者の方の車いすができると聞いていたので、私も集めることを心がけています。

道路に置かれているごみ袋の中にペットボトルを見かけることがあります。このままの状態ではダイオキシンの問題も考えられるので、使い捨てではなく再利用できる形を作っていってもらいたいです。

今では、新聞で毎日環境問題のことは一つはとり上げられています。厚生省によると、産廃処分場は新たな用地が確保できなければあと一・六年で満杯に

なる一方、処分場建義は迷惑施設として住民の反対が根強く、陸地への新規の立地は困難という事が書かれてありました。
ごみの山にならないように今一人一人の行鋤が重要になってくると思います。
これから買う前に考え、捨てる前に考えようと思いました。

《評》
リサイクル活動というのは、いまから先の人類の大きなテーマとなってきました。使い捨てをいいことのようにおもってきた心のおごりが、ここできびしく問われているのです。
あなたは大牟田市や福岡市のことも新聞で調べていますね。そこで柳川市はそこまで徹底しているだろうかと疑問をいだいたのでしょう。
厚生省の調査を新聞で読んで。このままでは大変なことになると感じているにちがいありません。ドイツや北欧などの図々がいかに努力をしているかを調べたら、日本のリサイクル活動がいかにおくれているかがよくわかるとおもいます。
あなたの文の結びが、「これから買う前に考え、捨てる前に考えようと思いました」となっていることに、私は心を動かされました。

松永　伍一

優秀賞

支えられること、支えること

城島町立城島中学校　二年　中園　唯

私は先月、十四回目の誕生日をむかえました。はやいものです。十四歳になったな、という実感はあまりないのですが、生まれて十四年たっていると思うと、その間がとても大きく感じます。でも、そんな十四回目の誕生日がむかえられたのも、多くの人たちの『支え』があったからだと私は思います。
十四年前、母は実家の広島の病院で私を生んだそうです。何時間も何時間も苦しみ、帝王切開という、母のお腹を切り赤ちゃんを出すという手術をしたそうです。母は兄を生む時も帝王切開だったので、さぞ辛かったことでしょう。母は何十時間も苦しみ続け、私を生んだそうです。外は暗い夜だったそうです。
これだけの事でもたくさんの人に支えられました。けれども、私は次の日とても大きな支えをしていただいたのです。もう夜中だったので私の父や母の両親たちは、ひとまず家へ帰りました。次の日の朝五時頃、病院から電話があり、母の両親と父は病院へ来るように言われたそうです。そして、病院へ行くと私は保育器という、ガラスでできた四角い箱の中に入っていたそうです。そのすぐそばに若い先生がいて、呼ばれた父たちに私が今どんな状態かを話したそうです。私は生まれた時、へそのおが首に二回まきついており、生まれた後呼吸困難になったそうです。先生は私を保育器に入れ、呼吸が止まるとガラスをコンコンとたたいて、まだお若いのに、一晩中私をはげましてくれました。そして、先生は母の両親を呼び出し、
「死ぬかも知れません。」
と言ったそうです。それでも、先生はその日の夕方まで私を見ていててくれていて、私はなんとか一命を取り留めたそうです。
その後、私は元気に育ち、いろいろな人から支えられてここまで生きてきま

した。私はこんな自分を誇りに思います。そして、そんな私を生んでくれたお母さん、とても心配してくれたお父さん、おじいちゃん、おばあちゃん。とてもうれしく思います。

そして、なによりもうれしかったのが、私が小学生の時に両親からもらった手紙です。その内容は私が生まれた時の事を書いてくれた手紙でした。今でも大切にもっていますが読むたびに思います。両親は私にこう言いたかったんでしょう。「あなたが生まれてくる時、とても多くの人たちに『支えて』もらったんだ。人を支える大切さ、身にしみて分かっていると思う。だから、あなたには、人を『支える』人になってほしい。」と。

人を支えるのは、どんなに大変で、どんなに難しいか分かっているつもりです。けど、私は『支える』大切さを知っているから、これから大人になっても、人を『支える』人間（ひと）になっていきたいです。

《評》

十四歳の誕生日に「そうか、十四年生きてきたのだ」と感ずることは、だれでもできます。そういう数とか時間ではなく、あなたはまわりの人びとの支えがあって、いまこうして生きているのだと感じたのですね。

生きているのは言い方をかえると「生かされている」と言うことです。あなたはそういう考えの入口に立っていますね。

自分の生まれたときの様子は人にきかなければわかりません。あなたは心のやさしい両親から手紙を通じてその事実を知らされました。ありがたいことではありませんか。

病院の若い先生が「この子は死ぬんだ」と決めてしまって手を抜いたら生まれてすぐにあなたは死んでいたかも知れません。でも、その先生があなたを生かそうとがんばってくださったおかげで、いま元気に十四歳を迎えることができたのです。そのよろこびが文中に満ちあふれています。

松永　伍一

優秀賞

大切なこと

福岡県行橋市立行橋中学校　三年　田中　陽子

「あっ、お姉ちゃん、ちょっと頼んでいい。」

この一言がきっかけで、私は障害について考えさせられた気がします。

夏休みが始まり、つい最近盲腸の手術を終えた弟を、お見舞いに行った時の事です。

お昼頃になり、売店へ買い物に行く途中、見知らぬお婆さんに声をかけられたのです。

「あっ、お姉ちゃん、ちっと頼んでいい。」

お婆さんは、車椅子を上手に操作できず、困っていました。私は、

「はい、何をすればいいですか。」

と答えました。お婆さんは、近くにある公衆電話へ行きたいようです。私は、喜んで引き受けました。

しかし、快く引き受けたものの、車椅子は私の言う通りに動いてくれません。右へ行たり左へ行ったり、なかなか上手に操作ができませんでした。それでも、なんとか公衆電話まで行くことができました。私はこの時、車椅子の操作は簡単ではないし、力がいる事を実際に体験してわかりました。

こうして見ると、足の不自由な人たちや、筋肉がおとろえてくる老人の人たちは、私以上に大変だという事もわかりました。

ふと、お婆さんを見ると、今度は電話をかけられずに困っていました。そこには、公衆電話が三台あったのですが、車椅子用に低くしているのは一台だけでした。

しかし、車椅子用の公衆電話は、テレホンカード専用の公衆電話で、あいにくおばさんが持っていたのは、十円玉だったのです。仕方なく、公衆電話を取

り替えたのですが、公衆電話の位置は高く、車椅子に乗ったままでは、ボタンを押すことができませんでしたお婆さんは一生懸命ボタンを押そうとするのですが、押せるのは下のボタンだけ、上のボタンにはかすりもしないのです。私はお婆さんに番号を教えてもらい、ボタンを押すと、おばあさんに受話器を渡しました。この作業にかかった時間、およそ十分。私だったらもう電話も終わり、部屋に戻れる時間です。

ようやく電話も終わり、私もほっとしていた時、おばあさんがこんな話をしてくれました。「ありがとう、お姉ちゃん、助かったね。お姉ちゃんがおらんやったら、大変やったよ私ね、色々な人に助けられながら、病気と闘いよう（る）けど、一人になると心配でね。病院は安心だけど、退院してからは、周りのみんなが他人やろ。お姉ちゃんみたいに優しくしてくれるのは、ほんのわずかなんよ。」

私は、この話を聞いた時、とても復雑な気持ちでした。

もし、町を歩いていて、車椅子に乗った人が困っていたら、私はきっと助けていないと思ったからです。

そんな私の表情に、お婆さんは気づき、

「どうしたの。何か悪い事、言ったかな。」

と優しく聞いてくれ、何故か私が思っていた事を素直に話せたのです。お婆さんは、最後まで話を聞いてくれ、最後に一言、こう言ってくれたのです。

「いいんだよ、それで。最初は誰だってそうだよ。気づいてくれただけで、うれしいよ今日は、本当にありがとう。」

お婆さんは、この一言を言って、病室へ戻っていきました。

お婆さんとの話が終り、ふり返ってみれば、たくさんの事を教わった気がします。日本には、まだ障害を持つ方々への完全な設備が整っていない事。障害を持つ方々への知識を、みんながもたなくてはならない事。様々な事を思い、考えさせられました。

この体験を通して、私たちにとって大切な事がわかった気がします。それは、障害があってもなくても、誰に対してでも、優しい心で接して、素直な気持ちで話す事です。

今、この世界で生きている人の中には、大切な事を忘れている人がいます。大切な事は逃げたりしません。

だから、大切な事を忘れかけている人は、もう一度大切な事に気づいてほしいです。

そして、世界中の人々が、大切な事に気付いてくれる事が、私の最大の願いでもあります。

《評》

あなたは尊い体験をしましたね。だれかよその中学生が車椅子を押している光景を見ても、きっと感動するにちがいないのですが、あなたは偶然にその経験をしたのですから、自分でもおどろいたでしょうが、こういう手伝いというものが心にどんなにひびいて来るのかを、ひしひしと感じたことでしょう。文章のすみずみにそのことがにじみ出ています。

あなたの心のやさしさは自分で書くものではありませんが、いろいろな動作にそれがちゃんと反映するものです。事実を書いていくと作者の心もおばあさんの心も読めてきます。それだけでなく、おばあさんの語りも紹介していますから、お年寄りの置かれている立場がはっきり見えて来るのです。そして、その声はあなたの心の底にひびいて、あなたへの問いかけにもなっていきました。

最優秀賞につぐ作品だと思いました。

松永　伍一

優秀賞

ポコの家・ポコの願い

伝習館高等学校　一年　河口　綾香

こんにちは。ぼくは子だぬきのポコ。お母ちゃんだぬきとポンタ・ポン吉・ポン子・ポメ美、そして、ぼくことポコの五つ子で、ぼくは末っ子だぬき。

ぼくの家は、ある田舎の学校の中庭に面した鉄筋コンクリートの俳気口の中で仲良く暮らしている。

昼間は学校の生徒がいてうるさいけど、風も気持ちいいし、雨も入り込んでこない、おまけに食べ物にもありつけるから、まあ・・・・いい所かな。

ぼくは今年の六月ごろに生まれた赤ちゃんだぬきだ。大好きなお母ちゃんは五月の中ごろぼくたちを身ごもった大きな体で、この地へ引っ越してきた。外にお出かけしていた時、人間によく見つかっては隠れていたんだって。なんていっても今でもぼくらは学校のアイドルだからね。ぼくたち家族を見ると幸運がおとずれるなんてばかげたジンクスを信じている生徒がぼくたちが現れないか目を光らせて待っている。ぼくらから見れば人間てばかだなぁ。迷惑しているのが分かっているのかなあ。外で遊べないし、昼寝もできない。そういえばもっとひどいことだってあったっけ。

七月だったかな。ぼくの家の上にある教室一年二組。そこが中庭掃除でさ、そのクラスの男子生徒なんかもう最低だよ。ぼくが外にお出かけしているとき、掃除している人にみつかっちゃったの。そしたら男子生徒が、このかよわいぼくをほうきで追い回してきたんだよ。びっくりして全速力で走ったら逃げることができたけど、悲しかったなあー。殺されるのかと思ったもん。二度と外にお出かけはしたくないと思ったね。

悪く言うばかりじゃーぼくの“めんつ”が立たないからね、百歩ゆずってお世辞言ってあげる。まず学校の食堂のカレーは鼻をそそるからね。あとは吹奏楽部のきれいな演奏を夕焼けを見ながら聞くのが好き。こういう人間は大好きなんだけどなぁー。

せっかくこんな機会があるんだし、一言、いや二言言わせてもらうよ人間さん。昼ごはんを中庭に捨てるのは、同情の心から、それとも単なる好奇心から。どっちもぼくらはいやだけどあとの方は特にいや。おいしいけどさぁー、演技しながら食べるのってたいへんなんだよね。でも、この前の野菜いためおいしかったよ、一年四組の女の子。

あと一つぼくたち親子がなぜ排水口なんかで暮らしているのかを考えてほしいと思う。人間たちが山々を切り開いて、ぼくらの食料を奪っていったからなんだ。ぼくらも生きているし、食べ物を食べなければ死んでしまうから、しかたなく民家の田畑の農作物をいただくのに、電流やら何やらを使ってぼくたちをじゃま者扱いして殺そうとする。ぼくらの本当の家は自然が豊かな森の近くにあった。でも、人間がぼくらの家を壊して、アパートや住宅地にしてしまった、とお母ちゃんに聞いた。ぼくらだけじゃなく、他のたくさんの動物たちも、家がなくなったから、こんな平野や家の下なんかに引っ越したんだよ。だから、人間のみなさん、ぼくらのことをもう少し真剣に考えて下さいね。

ああー、たくさんお話ししたからもう疲れて眠たくなっちゃた。今日はいい天気で風も気持ちがいい・・・・・・

おやすみなさい。

《評》

山に暮らすことができなくなって町にいろんな動物が下りて来る話しをよく聞きます。このたぬきの親子もそういう背景をもっています。

折々にそんなたぬきを観察して作文に仕立てることもできますが、あなたはそれをやらず、たぬきに人間を観察させる方を選びました。この書き方が成功しましたね。

ここでたぬきたちが困る様子は、じつは人間たちの愚かさを指摘していることだし、い

いなぁとたぬきたちが感じていることは、人間にとっても好ましいことなのです。つまり、たぬきの目を借りて「人間とはなにか」を考えさせるという、とても大切な役目をあなたの作文は果していると思います。

この作文を読むと、自然を壊して平気でいる人間のエゴが鋭く批判されているのがわかり、その犠牲となったたぬきに対して「ごめんね」とおわびを言いたくなります。

松永　伍一

優秀賞

アンドロイド

伝習館高等学校　二年　石橋　由香利

ときは二十三世紀・・・・・・。アンドロイドが二、三万円もあれば手に入る時代である。ついにぼくは貯金をはたいて買うことにした。学校では、親友だと思っていた人に裏切られ、家では親が優秀な兄にかまうようになって、僕は人間がいやになったからだ。

「ピーンポーン」

ついに待ちに待ったアンドロイドがやって来た。彼は僕と同じ十三歳ぐらいで背が高く、顔が整っていて、人間だったら絶対もてそうなタイプだ。僕は彼に「プロト」という名前を与えた。プロトはぼくの命令に忠実に従う。いつでも僕の傍にいてくれる。僕は安心感と幸せを感じた。

こうして一カ月が過ぎた。僕は幸せなはずなのに、何かが満たされなくなった。僕は考えた。

「そうか、プロトだけではだめなんだ。」

そこで僕は、兄に夢中な母の財布から四万円を抜き取り、もう一体買うことにした。

「ピーンポーン」

今度は、十歳ぐらいの女の子が来た。僕はその子に「エマ」という名前を与えた。エマはプロトより一万円高いだけあって、より高性能で、命令に従うだけでなく、僕が笑うといっしょに笑ってくれるし、僕が泣くと頭をなでてくれた。

僕はまた、幸せを感じた。

でも、それは長くは続かなかった。プロトやエマが悪いわけではない。僕は思った。

「そうか、プロトとエマだけではまだ、足りないんだ。」

そこで僕は、仕事と兄にしか興味がない父の財布から八万円を抜き取り、もっと性能のいいアンドロイドを買った。

「ピーンポーン」

今度やって来たのは、ヤンキー風の金髪男だ。僕は彼に「ビル」という名前を与えた。ビルはとても面白いギャグやジョークを言うので、僕は楽しい日々を送った。

しかし、それもたったの三カ月だけだった。別にビルのギャグがつまらなくなったわけではない。もちろん、プロトとエマに不満があるわけでもない。僕は思った。

「やっぱり、まだまだ足りないんだ。」

僕は、思い切って、母のへそくり貯金の四十万円で買えるだけのアンドロイドを買った。

そこら辺の歌手以上に歌が上手いケイト、サラリーマン風のポート、とても

美しい絵を描くミドン、手品が得意なテール、モデル並にきれいなエルア・・・・・
でも、僕は満足しなかった。僕はそこで初めて気付いた。いや、最初から分かっていたのかもしれない。
「アンドロイドは、僕が一番求めていたもの、『心』を持っていない・・・・・・。」
彼らは、僕の言うことを何でもきいてくれる。僕が頼んだことを何でもしてくれる。でも、そんなに時間が経っても、僕に対する彼らの態度は変わらない。変わったのは、僕の心だけだ。僕が彼らに話しかけても、彼らは決まったことしか答えない。僕がひどいことをしても、彼らは怒らない。それは感情、つまり『心』がないからだ。
僕は彼らを返品した。でも、僕はアンドロイドに出会う前の僕に戻ったわけではない。僕の中の何かが変わった。
僕は久し振りに外に出てみた。一枚も葉っぱをつけていなかった桜の木が、きれいなピンクの花に覆われていた。上を見上げると、限りなく続く空があった。僕は空の美しさに驚いた。
「空って、こんなに青かったっけ・・・・・・」
僕は今まで気づかなかった。家の周辺の美しい自然を満喫し、自分の部屋に戻ることにした。すると、。突然後ろから肩をたたかれた。振り返るとそれは、僕を裏切った親友だった。
「よう、久し振り。・・・・・・俺、あれからいろいろ考えたけど、お前には本当に悪いことをした。ごめん。もう一度、親友になってくれ。」
僕はこの言葉を聞いたとき、アンドロイドと過ごす間、感じることのなかった不思議ないい気持ちを感じた。僕は言った。
「もちろん。これからもよろしく。」
家に帰ると、父、母、兄がそろっていて、
「どこに行っていたんだ。心配したんだぞ。」
と言った。僕は答えなかった。というより、答えられなかった。なぜなら、僕の目には涙があふれていて。体中が奮えていたからだ。
僕の知らない所で、僕の事を考えてくれていた。アンドロイドは僕の傍にいたけれど、僕の事を考えていなかった。僕は分かった。人は人を傷付けるけれど、人を癒すのも人なんだと・・・・・。
僕は今までの遠回りした時間を取り戻すべく、自分の思いを伝えようと口を開いた。

《評》
二十三世紀の人類の進歩と悲哀とを、いまから先取りした話しです。
空想科学小説の一種として読むこともできますが、科学の進歩していく速度から考えて、かなり現実感のある話しで、二十三世紀といわずもっと早く、これに近いような出来事が起きるかもしれませんね。
どんなに精巧なロボットが完成したとしても、心や感情はもちませんから、おたがいに戯れることはできても、ほんとの対語は成り立ちません。それが限界です。ロボットの限界というより科学の限界でもあるのです。あなたはそれをよく見定めています。
この文の終わりの方で、裏切った友と信頼を回復したり、家族が心配していてくれたことに感謝する「僕」の中に、人間の美しさを見出すことができました。この都分は二十三世紀といわず、私たちが生きている二十世紀の「今」の詣しと言ってもいいでしょう。

松永　伍一

優秀賞

チップと願い岩

福岡県立久留米高等学校　三年　園田　早苗

遠い遠い南の島の小さな村に、お話好きのルウという男の子がおばあちゃんと二人で暮らしています。

「ねえ、おばあちゃん。何かお話してよ。」

「そうだねえ、昔々のお話だよ、」

そう言うとおばあちゃんは、この村に古くから伝わる“願い岩”の語を始めました。

昔、この村にチップという元気な男の子が幸せに暮らしていました。ある日チップは森へ遊びに行き、キラキラと虹色に光る、不思議な岩を見つけました。

「うわあ・・・・・・！　きれいな岩だなあ。お母さんのお土産にしたいなあ。」

そう言って、チップが足を踏み出した時です。

「だめだよ、チップ！　それ以上その岩に近づくんじゃない！」

チップがびっくりしてふり返ると、そこには、となりに住んでいるテトラおばあちゃんが立っていました。おばあちゃんはゆっくりと話し始めました。

「いいかいチップ。この岩は“願い岩”というんだ。何でも願いを一つ叶えてくれる。けれど、代わりに命を吸い取られてしまうんだよ。だから、この岩に近付いちゃいけないよ。」

「うん。わかったよ、おばあちゃん。」

チップはおばあちゃんと約束をしました。

ある日、チップがいつものように森で遊んでいると、村の方で大きな音がしました。

「何の音だろう。」

チップは不思議に思い、村全体を見渡せる小高い丘へ登りました。すると、村が真っ赤に燃えているのが見えました。チップは驚き、夢中で村へと走りました。しかし、チップが村にたどり着いた時には、すでに辺り一面、焼け野原でした、チップは何度もみんなの名前を呼びました。しかし、誰一人として返事をしてくれる者はいません。チップはこみあげてくる涙をこらえて、一生懸命、父さんと母さんを捜しました。でも、父さんも母さんもいませんでした。とうとうチップは空を見上げ、大声で泣きました。

「うわぁん。父さん、母さん、みんなーっ」

すると、家の後ろの小屋の中からけがをしたテトラおばあちゃんが出てきました。チップは急いでかけよると、村に何が起こったのかを聞きました。おばあちゃんは、となりの大きな村が、チップの小さな村を支配しようと攻めてきて、みんなを殺し、村に火をつけたのだと言いました。

「じゃあ、おばあちゃん以外の人は・・・・・・。」

「ああ、みんな殺されちまったよ。」

おばあちゃんはそう言って泣き出してしまいました。チップは、あふれる涙をふき、森の方をきっとにらみ、

「大丈夫だよ、おばあちゃん。僕が村を救ってみせるよ。」

そう言うと、チップは森へと走り出しました。おばあちゃんには、チップのやろうとしていることが分かり、また涙を流しました。

チップは走って走って走り読け、頭い岩へたどりつくと大きな声で叫びました。

「どうかお願いです、願い岩さん。僕の命をあげるから村のみんなを生き返らせて。村を元通りにして下さいー。」

すると、岩から声が聞こえてきました。

「本当にいいのかい。お前の命がなくなってしまうんだよ。」

チップは大きくうなずきました。

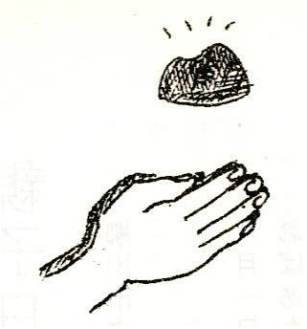
「僕はこの村が、村のみんなが大好きなんだ。だから、村がなくなっちゃう方が悲しいよ。」

そう言うと、岩は、これまでに見たことのない程まばゆく光り出しました。テトラおばあちゃんは、その光を見たあと、気を失ってしまいました。

テトラおばあちゃんが目を覚ました時、村はすっかり元通りになっていました。おばあちゃんは一生懸命チップを探したけれど、チップはどこにもいません。おばあちゃんは、村のみんなと願い岩へ行き、願い岩の横の美しい光を放

つ、小さい岩を見つけました。おばあちゃんや村のみんなは、それをチップだと思って、毎日心をこめて磨きました。

おばあちゃんが話し終わると、ルウは目にいっぱい涙をためて言いました。
「おばあちゃん。僕もチップみたいに強い子になるね。そうだ、明日、チップに会いに行こうよ、おばあちゃん。」
「そうだね。チップもきっと喜ぶだろうよ。さあ今日はもうお眠り・・・・・・。」
「うん。おやすみなさい。」
こうしてチップが命にかえて守った村は、今も人々が幸せに暮らしています。そして、チップは今もこの村を見守っていることでしょう。



《評》
童話としてはとてもまとまっていて、筆の運びもスムーズです。
世界中のあらゆるところに神話（民話）があって、そこに住む人たちに代々語りつがれてきました。生きていく力を与えられたり、知恵をもらったりするためです。お年寄りから子供に語られていくケースが多いのですが、あなたもその形をとっています。
しかも、物語の中でも「テトラおばあちゃん」と「チップ」という男の子がドラマをくりひろげていきますから、共通した組合わせになっていて、そこがおもしろいと私は感じました。
童話を書くという点では成功していますが、欲を書えば、あなたの「いま書かずにおれないもの」の切実さが足りないようです。あなたの心の中からにじみ出て来た童話を、これから書いていかれることを願っています。

松永　伍一

優秀賞

「親子日記」

柳川市立両開小学校　一年　　かじたにまさや

八月一日
おばあちゃんとあさはやく
さんぽにいったよ。
たかいたかいはしのうえで、
うみをみたよ。
おばあちゃんが、
「しおがみちている。」
と、いったよ。
ふたりでずっとみてたよ。

うみは、しおみずがふえたり、へったりしているんですね。まだ。むずかしいかもしれないけど、うみには、そんなしくみがあるんです。ふしぎね。こんどは、おかあさんもいっしょに、さんぽにいきたいです。

おかあさんより

八月三日
きょう、ともだちのひろくんと、ちかくのおみやへ
せみをつかまえにいったよ。
つかまえたけど、
にがしてやったよ。
だってかわいそうだったから。

「せみをつかまえるよ。」
と、いそいでいったのに、つかまえたら、にがしたんだね。

どうして、かわいそうだとおもったかな、こんど、きかせてください。
せみのほうは、にがしてもらって、きっとうれしかっただろうとおもいます

おかあさんより

八月八日
ゆうごはんをたべているとき、
まどからゆうひがしずんでいるところをみてたら、
いつものゆうひより
あかるかった。
ぼくのかおもあかくなった。

きれいなゆうひでしたね。
「みて、みて、きれいか。」
と、おおごえをだしていました。
いつもゆうひをみていたなんて、しりませんでした。ゆうひがあたって、おじいちゃん、おばあちゃん、おとうさん、いもうとのあやみちゃん。そして、おかあさんのかおまで、あかくなりました。
おちゃわんのごはんもあかかったですね。

おかあさんより

八月九日
きょう、がっこうで、
「かわいそうなぞう。」
を、よんでもらいました。
とてもかなしかったです。

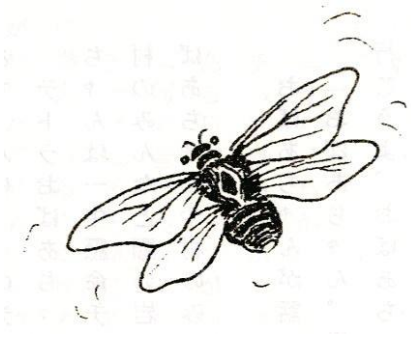
「かわいそうなぞう」のおはなしは、とてもこころにのこったようですね。
おとうさんとおかあさんに、くわしくはなしてくれました。こんどいっしょに、このほんをよみましょうね。せんそうといういみが、すこしわかったかな。
どうぶつたちは、かわいそうだね、

おかあさんより

八月十二日
きょう、おとうさんと、さかなつりにいったよ。
おおものがつれたよ。
さいごにちゅうくらいのめばるがつれたよ。
つったさかなは、
おばあちゃんのおみやげにしたよ。
またいきたいな。

とてもあさはやく、しゅっぱつしたので、ねむくなかったのかなと、しんぱいしました。でも、しんぱいしなくてよかったようです。たくさんつっていたとおとうさんからききました。おとうさんも、びっくりしていましたよ。
「めばる」というさかなをしっていたとは、おかさん。びっくりでしたよ。
おばあちゃんがよろこんでくれてよかったですね。

おかあさんより



《評》
まさやくんの五日かんの詩は、どれもきもちよく書けています。
いいところをみつけていますね。やさしいこころをもっていることも、よくわかります。おかあさんの感想がまたぴったりで、親と子の向き合うすがたが、ほのぼのとした空気をつくっています。
これからの親と子のあり方を考える上で、とてもいい見本を示してもらったような気がします。こういう親子共作があってもいいし、たくさん集まって来ることを期待し、今回は別枠扱いにしました。

松永　伍一

柳川市長賞

おばあちゃんのお米となみだ

柳川市立東宮永小学校四年　　平田　貢詳

ぼくが毎日食べているご飯は、おじいちゃんとおばあちゃんが育てたお米です。そのお米を作るためには、大変な世話がいるそうです。

ぼくは、白いご飯が大好物です。おじいちゃんの家に遊びに行くと、おばあちゃんが作ってくれたおにぎりをたくさん食べます。その時のことでした。

「今の子どもは、おなかいっぱい何でも食べられて幸せねえ。」

と、おばあちゃんが一人言のようにつぶやきました。それを聞いて、ぼくはおばあちゃんがどうしてそんなことを言うのかなと思いました。それで、おばあちゃんにたずねました。すると、

「おばあちゃんの子どものころは、戦争があってね。食べ物がない時代だったんだよ。白いご飯なんて、めったに食べられなかったんだよ。」

と、話してくださいました。おばあちゃんの目は、何か遠くを見ているようでした。ぼくは、おばあちゃんが小さかったころを思い出しているのだろうと思いました。よく見ると、おばあちゃんの目には、なみだがうかんでいました。きっと、おばあちゃんの弟のことを思い出しているのでしょう。おばあちゃんの弟は、病気で死んでしまったそうです。そのころは、戦争がひどくて薬もないし、栄養になる食べ物もないので、どうしてやることもできなかったそうです。ぼくはおばあちゃんのなみだを見ていたら、胸がいっぱいになり、ジーンとしてきました。

なぜ、戦争をするんだろう、戦争っていやだな、二度と、おばあちゃんのような思いをする人をつくってはいけない、と思いました。

今、食べ物が豊かになり、とてもそまつにしていると思います。外国では。食べ物がなくて死んでいっている子どもたちの話も聞きます。食べる物があって当たり前の気持ちがぼくの心の中にもあります。ぼくはもっと食べ物に感謝しなければならないと思いました。

ぼくの食べているお米は、おじいちゃんとおばあちゃんが、汗水流して作ってくれたものです。一つぶ一つぶを大切に食べなくてはと思います。

《評》

おばあちゃんの弟さんは、戦争中、食べ物も薬もない時に亡くなりました。あなたがおにぎりを頬張って食べているのを見て、弟さんの事を思い出して涙を流していました。

おじいちゃんとおばあちゃんが汗水を流して作ったお米を炊いた白いご飯を食べることが出来るのは幸せであると気付いたのはいい事です。それに戦争で亡くなっていく人を思い出して、二度と戦争の悲劇をくり返してはならないと決意したことは偉い事です。

物を大切にすることをおばあちゃんから学んだことは良かったですね。

二十一世紀はあなたの時代です。これから頑張って下さいね。

佐伯　亮三

柳川市議会議長賞

近所

柳川市立城内小学校六年　山科　可珠子

私は、両親が共働きなので祖母の家に居ることが多い。祖母の家の周りには田があり、車がやっと通るくらいの道路のいなかにある。近所にはいろんなおばあさんがたくさん住んでいる。ななめ前には魚屋さん、もう片方は八百屋さんがある。毎朝、決まった時間に魚屋さんが来ると、みんなあいさつしながら集まって来て、世間話をはじめる。どこに赤ちゃんが生まれたとか、どこの人が亡くなったとか、どこの人が入院したとか近所のことがすぐに分かる。魚を買うのは後まわしである。それから、年に三回あるお観音さんのお祭りでは、小さなお堂に女の人がみんな集まって夜までがやがや話をしている。お参りに来る人はおかしやお豆がもらえる。私と妹もおさい銭をもってお参りに行く。すると、おばあさん達が「よう来たね。」と言っておかしやお豆をくださる。お観音さんのお豆はとても甘くておいしい。そして、何だか心が温かくなる。

こんなふうに、毎日みんなあいさつをしたり、情報交換をしたりしているから、近所のつながりが深いのだと思う。しかし、近所のつながりが深いのは、いなかだからだと思う。

いなかの人達は、他人に関心を持ち、近所同志協力しようという意識を持っているからだと思う。私のいとこは都会にすんでいるけれど、近所のことをほとんど知らない。だから、近所とのつながりがなく、不安だと言っている。

この前、祖父が入院した時、夕方荷物をとどけるのに、祖母と母が病院へ行くことになり、私と妹が留守番することになった。祖母が隣に事情をはなし、「子供二人が留守番をしている。」ということを伝えて行った。すると、留守番中に隣のおばさんが何度も様子を見に来て下さったのだった。来るたびに「だいじょうぶね。」「さびしかったら、いつでも来ていいけんね。」と言って下さり、「おなかすいたろう。」と言って、おにぎりまで作って持って来て下さった。そんな、やさしい心づかいがつまったおにぎりは、とてもおいしかった。もう外はまっ暗になっていたけれど、全然怖くなかった。

今までは、近所っていいなと、なんとなく思っていたけれど、今は近所って心強いなと思うようになった。そして、この体験を通して改めて近所のよさが分かった。私は近所の大切さを知った。だからこそ、私はこれからも、このつながりを大事にしていきたいと思っている。

《評》

近所のつき合いのありがたさに気付いたことはあなたのしあわせであったと言ってもいいでしょう。

現代は自分だけよかったら他人の事は考えない時代です。それを、お年寄りから学んだことは良かったですね。

近所つき合いは大きく広まれば、世界の平和につながるものです。おじいちゃんが入院された時、留守を守るあなた達を見守って下さった近所の人達。助け合いの精神が広まればこれは立派な行いです。

あなた達がこれを守って、これから実行することがあなた達のつとめです。頑張りましょう！

佐伯　亮三

柳川市教育委員会賞

夢と人との絆

福岡市立青葉中学校三年　大谷　恵理果

夢を持っている人と持っていない人では違いがあるのでしょうか。よく夢があればどんな辛いことにも耐えられると言われるけれど、本当にそうなのでしょうか。夢とともに、にんげんの絆も大切ではないでしょうか。

私は夢と人間の紳という言葉から、ある幕末の人物を思い浮かべます。それは坂本竜馬です。竜馬の魅力をひとくちにいえば、とてもかっこいい男です。私はそんな竜馬のかっこよさに心を打たれました。竜馬という人は自分の夢を追いもとめながら、つぎつぎと新しいものをとり入れようとする開明的な人物でした。その竜馬の夢には、例えば世界をまたにかけた海運業や貿易がありました。このような大きな夢を竜馬が持てたのも、勝海舟や河田小竜といったような人々との絆があったからだと思います。

そもそも志士といわれるような人々はみんな絵になるようなりしぱな人物です。あの幕末という時代に、竜馬のような開明的な思想の持ち主が、独自の道の道をすすんでいけた理由の一つには、忍耐つよい努力者だったということもあると思います。しかし、それだけではなく、たくさんの人と出会えたということが重要なきっかけとなったということを忘れてはいけません。そのような人間関係が竜馬の行動を支え、歴史を動かすまでの原動力になったということを竜馬から教えられた気がします。

ところで、今の世の〜種のブームであるかのような少年犯罪の影には、いじめやつめたい人間関係があるということを忘れてはいけません。

人間には、誰にでも夢があると思います。竜馬のように世界を視野に入れての大きな夢もあるでしょう。人から見たら大したことではなくても、その人にとってはとても大事な夢であることもあります。好きなこと、愛すること、やってみたいこともあるでしょう。

きっと、事件を犯した少年たちにも、夢は、それぞれにあったと思うのです。しかし、竜馬との違いは、彼らには、人間の絆がなかったといえるのではないでしょうか。むしろ、反対に、いじめ等で孤独感が強まり、ついには自分の抱いていた夢さえ忘れてしまい、犯罪に走ってしまったのではないでしょうか。もし、彼らに、本当に信じることのできる人間との心の通った出会いがあったなら、彼らも、自分の夢を実現していけたのにと思わずにはいられません。

このように人と人とのコミュニケーションによって生みだされる力は。自分一人では作り出せない勇気を与えてくれます。それによって独自の夢をいだいて努力する自分になっていけるんだと思います。

私も、これから竜馬のように人との出会いや人間関係を大切にして、自分の夢を実現していきたいと思います。

《評》

人間は夢ばかり見てはいけません。希望を持たなければいけないのです。その希望を実現する為には努力を積み重ねて実行することです。

現在、テレビや新聞で報道される学校のいじめ、不登校、学級崩壊を考える時、あなたの気付かれた人との絆が無いことが思い知らされます。

人間は一人では何にも出来ないものです。坂本竜馬を例にとって、論旨を展開されたことは天晴（あっぱ）れです。

小さな事にこだわらず、世界を視野に入れて考える時代―二十一世紀の幕開けも間近です。あなたの作文を読んで頼母（たのも）しく思いました。

ありがとう！

佐伯　亮三

柳川文化協会賞

母の教え

福岡県立伝習館高等学校　一年　原田　路子

穏やかな春のある日、空から何か冷たい物が落ちて来た。
「お母さん、お空から何か落ちて来たよ。」
「ああ、春雨ね。」
「はるさめ？」
「春に降る酵かな雨を、春雨って言うのよ。」
「春雨かあ。じゃあ、春雨さんは優しいね、だって、お花さんたちに、『早く大きくなるんだよ』って。パワーをあげてるもの。」

蒸し暑い夏の午後、急に空がまっ黒になった。
「ねえお母さん。急にお空が黒くなったよ。それに向うの方が何かゴロゴロ言ってる。」
「夕立ちが来るわね。」
「夕立ちって恐いの？」
「そうね。雷が鳴るし、雨もいっぱいお家を叩くの。」
「ええ、恐いよ。僕、隠れちゃおう。」
「大丈夫。すぐに晴れるわ。」

長閑な秋の日、蜻蛉を追いかけて鞍んでいたら、雨が降ってきた。
「雨が降ってきた、もうちょっとでとんぼをつかまえられたのに。」
「あのさ、これ、時雨って言うんだぜ。」
近所のお兄ちゃんが自慢気に言った。
「時雨って何？」
「う・・・・・・さ、さあな。」
お兄ちゃんはさっさと帰って行った。
「ただいま、お母さん。ねえ、時雨って何？」
「時雨はねえ、秋から冬にかけて降るのよ。でも、いつ降ったりやんだりするのかは分からないの。」
「我がままな雨だね。」
「そうね、誰かさんみたい。」
「ちがうよ。僕じゃないよ。」

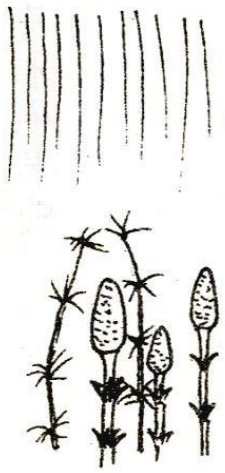
肌寒い冬の日、空から白くて冷たい物が降って来た。
「あ、雪だ。雪が降っているよ。」
「大きい雪ね。あ、ほら、外のお水が凍っているわ。きっと外は寒いわ。」

「あのね、僕、不思議に思ったんだけど、どうして、隅じ雨なのに、春雨とか夕立ちとか時雨とかって言うの。」
「それはね、昔の人の心よ。それに、雨もずっと同じじゃないわ、季節によって降り方も役割も違うわ。お母さんやお父さんのように、雨にも仕事があるのよ。それを、昔の人がその仕事にあうような名前を付けたのよ。分かった？」
「そうか、段割りか・・・・・・。僕も自分の仕事をしなくちゃ。」
「がんばってね。」

《評》
四季折々の雨を主題にして、「僕」は疑問をお母さんに投げ掛けます。お母さんは俳句をたしなむ方ではないかと思います。
お母さんに教えられたことを、こなれた会話で、あなたは溢れる創作力を以て、応（こた）えてくれました。
「温故知新」（おんこちしん）という言葉がありますが、あなたは、ふるきをたずねて、新しきを知る」よりは、新しさを創ることを心掛けていられるようで、流石（さすが）だと思いました。

知識ばかりの集積でなく、知恵を以て作文に表現した、あなたの将来を楽しく期待するばかりです。

佐伯　亮三



第四回長谷健賞＝平成十三（二〇〇一）年度

最優秀賞

おにやんまの伝言

福岡市立育葉中学校　三年　田中　綾乃

梅雨のたれ込めたような曇天を切りさき、どこまでも高く蒼い空をなびかせながら、今年も夏がやってきた。

咲き誇るひまわり、川遊びの中で光るしずく、のどを潤す西瓜の甘い汁。楽しさづくしだった夏の思い出は、中学三年になった今、朝早くからの夏期講習、山積みの入試対策プリント、迫りくる模試の嵐にとってかわった。

いつからだろう、刺すようなきらきらした一直線の陽ざしを、少し不愉快に感じるようになったのは。

（・・・ったく、暑すぎて勉強どころじゃねえんだよ・・・・・・。）

普段は決して使わない下品な言葉を、心の中でぶちまけながら、塾のテキストをバッグに放り込む。

ふくれ面をしたまま外に目を移すと、家の前に広がる空き地で羽を休める一匹のおにやんまが見えた。道路のフェンスにからまる夏葛の葉の上で、黄と黒の腹部が鮮やかに、でも、不思議と自然に緑に溶け込んでいる。

それを見つけた途端、私はハッと胸をつかれた。

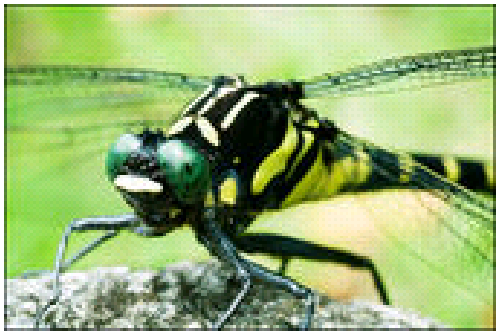
（ひいばあちゃん・・・・・・？）

明治生まれの曽祖母が亡くなったのは、二十一世紀をあと四日後に控えた十二月の末の事だった。九十歳を越えてなお、祖父との同居を断り、戦死した曽祖父の位牌と共に明るく精力的に生きてきた。大老人とは思えぬ頭の回転の速さ、大きな笑い声、若者並みの食欲、てきぱきと何でもこなすエネルギー。

しゃれのきいた話もなかなか得意で、いつか一人で暮らすのは物騒だという

話が出た時、こともなげに、
「うちに泥棒に入ったってなあんもとるものなんかありゃあせん。すもうでもとって帰りゃいい。」
とすました顔で言ってたっけ。
再婚もせずに、戦争未亡人として女手一つで祖父を大学まで育てあげた根性は、時として気の強さが勝ってしまい、嫁に入った祖母にきつくあたることも多々あったらしいと聞いたが、戦後の混乱期を歯をくいしばり、頑張り抜いた気合いは並々ならぬものだったのだろう。
そんな曽祖母が、新築の私の家に祖父たちと一緒に遊びにやってきたのは今から二年前の春のこと。洋風の、まるでバービー人形の館のような我が家は、とても明治生まれの曽祖母の好みにあうとは思えなかったが、
「ハイカラなおうちじゃねえ。どんな可愛いお姫様が住んどるんじゃろうか。」
などと、気のきいたお世辞で私を喜ばせた。
近所を散策しながら、菜の花やタンポポを摘みつつおしゃべりしたが、ややもすると、私より遅れがちになる曽祖母の足。
「いくら元気ちゅうても、もうじきたったら百歳やけんねえ。さすがにスキップしながら散歩はできんわ。」
けろけろと笑いながら息をはずませ、一歩一歩道を進んでいた曽祖母。その訪問から半年後、体調不良で入院した。末期ガンだった。
母はいつだったか教えてくれた。
「人は死ぬとねえ、初盆の夏にとっても親しかった人のところに、おにやんまに姿を変えて会いに来るんだって。さよならをいうためにだったり、伝えたいことを知らせに来たりね。理由はいろいろらしいけど。」
今、目の前の夏葛の葉に止まって小首をかしげたような格好で、こちらを向いているあのおにやんまは、曽祖母なのだろうか。
(ひいばあちゃん・・・・・・)
心の中で呼びかけてみるが、おにやんまはこちらに飛んでくるわけでもなく、飛び立つわけでもなく、ただ静かに羽を上下させながら休んでいる。 もしあのおにやんまが曽祖母ならば、何を伝えに来たのだろう。曾孫の私に、たださよならを言いに来たのだろうか。それとも・・・・・・。

(くずくず泣き言ばかり言って、なんねその仏頂面は。夏が暑いのは当たり前受験生が勉強するのも当たり前や。しゃきっとした気持ちで塾行って、帰り道アイスキャンデイーでもなめながら、空見あげて大きく伸びしてみい。お日さまバンザイ。夏バンザイ。)
どこかで、そんな声が聞こえたような気がした。
近寄るでもなく、消えるでもなく、程よい遠さからこちらを見ているおにやんま。
窓こしに見えるその羽に小さく手を振って、私はちょっぴり元気がでてきた気がしながら塾へと向かった。
今日は無心で講義を聴いて、終わったら、とびきり冷たいアイスを食べよう。



《評》
素晴らしい文章でした。暑い夏に、愚痴をこぼしている今の自分から書き出して、おにやんまにめぐり合う前半の情景がとてもよく描けています。おにやんまが、曽祖母の霊の化身かもしれない、と一瞬思ったところから、生前の曽祖母の話に移し変えた手際は見事です。腰のすわった明るい性格の人だったことを、会話で感じさせるところも大変うまいし、とても自然です。
おにやんまが死者の化身という証拠はないけど、そう思って見て小さな生きものから亡き人の声を聴きとって、自分の心を整えていく作者の態度に、私はいたく共鳴しました。
松永　伍一

優秀賞

お父さんの背中

大和町立大和中学校　三年　武末　舞

私のお父さんは子供の頃から漁業（海苔）を手伝っていました。そのせいか、根っこからの海男のような人です。すごくたくましくてすごく立派で、すごく男らしい私の自慢のお父さんです。

ある日、お父さんが部屋でテレビも見ないで、悲しそうに沈んでいる姿を見かけました。私はお父さんの顔を見てそう思ったのではなく、背中を見て、そう悟ったのです。こんなお父さんを見たのは、初めてだったのです。お父さんはなぜ、悲しそうにしているかというと、漁業（海苔）をやめると決意したからです。それを聞いた時、私は正直信じられませんでした。私は『海イコールお父さん』って感じだったので、やめるなんて絶対ありえないと思っていたからです。でも、人生そんな甘いものではないと私はやっとその時感じました。選択肢は一つしかないのです。お父さんはとてもつらくて勇気が必要だったと思います。これまでの人生にピリオドをうち、再スタートをしなくてはならないのです。お父さんの身にしみるようなつらさと勇気がしみじみと伝わってきました。

そして、とうとう大きな海苔の機械を引き取りに、会社の人が来ました。それから二、三日後とても大きな機械が跡形もなく、なくなりました。その日の夜、お父さんとお母さんは一言も口を開かず、すべての気力を失ったかのように沈んでいました。

それから何日かたったある日、お母さんが「船はとっとってもよかやんね。魚釣りとか趣味に使うとよかやんね。」って言いました。すると、お父さんは「未練が残るけんとっとかん。」って言いました。私はこの時、胸が切なくて涙があふれ出てきそうでした。

今、お父さんは、照りつける太陽の下、一生懸命、土木の仕事をしています。どんなに暑くても、どんなにきつくても、お父さんは弱音や文句をはきません。本当にお父さんは心から強いんだなあと、つくづく思いました。私に何かできたらと思うけど、私にできることは、笑顔で「いってらっしゃい。」と言って見送ることと、「お帰りなさい。」と言って迎えることです。

お父さんはいつも、「みんなのためにもがんばるぞ！」と言います。私は優しくて、がんばり屋のお父さんが大好きです。そして、お父さん、感謝の気持ちでいっぱいです。

《評》

子供のころから有明海の魚介類を食べて育ち、東京に住んでいる今も問題をかかえている有明海のことを考えている私は、この「お父さんの背中」を読んで、悲しみに似た思いをいだきました。

それは、あなたの作文が素直によく書けていたからです。

「父親は背中で語る」と言われていますが、その通りで、あなたのお父さんの無言の心理をよく読みとっています。代々漁業に生きてきた人の無念さを感じ取ることは、とりも直さず有明海の危機を見つめることに他なりません。そこには歴史の風が吹いています。お父さんとお母さんとの対話も胸にひびきます。

松永　伍一

優秀賞

命のリレー

福岡県立伝習館高校　二年　古庄　圭一

広い広い草原の中心に、一本の大きな大きな木が立っていました。その木は「命の木」と呼ばれ、木陰にやって来る動物たちを愛していましたし、動物たちからも愛されていました。長い枝を大空に向かって伸ばしている姿は、進化を続ける生命の象徴でした。青々と茂った葉は、自分の命を精一杯生きている生命の分身でした。木陰で多くの動物たちを休ませる様子は、小さな生命を育てる母親そのものでした。

太陽の光が降り注ぐ夏のある日、動物たちは命の木の下で楽しい時を過ごしていました。木の側には泉もあり、木漏れ日は心地よく、それはまるで永遠に続くかのような、平穏で幸福な時間でした。ライオンは言います。

「ここには苦痛も争いもない。毎日自由に生きている僕たちは、なんて幸せなんだろう。」

「本当にその通りです。」

シマウマが答えます。

「それも命の木のおかげですね。いつもお世話になっているから、何か恩返しをしたいです。」

「それなら、肩たたきはどうだろう。いつも同じ姿勢だと、きっと凝りているはずだよ。」

どこに肩があるのかな、と思いながらもウサギが提案します。みんなが笑います。トラもウシもアヒルもシカも。みんなの笑い声を乗せた風までもが、まるで笑っているようです。終わりなんていうものは存在しないような、そんな素敵な時間です。

会話も一段落して、ウサギがあくびをし始めたころ、シカがぼそりと言いました。

「だけど、何だか怖いんだ。あまりにも幸せすぎて。いつかこの幸福が壊れてしまいそうで。」

「そんなのは考えすぎだよ。」

みんなが口を揃えて言いました。それは、本当に幸せだから言えることだと知っていたから。この幸せな時間を失ってしまうことなど、考えたくもなかったから。みんながこの話を打ち切って、楽しい話を始めようとした時、今までずっと黙っていた命の木が、静かに口を開きました。

「シカの言うとおりだよ。幸福は永遠に続かない。私の命も、もう長くはない。」

それは、幸福の終わりを告げる、あまりに残酷で無慈悲な言葉でした。

やがて秋が来て、冬を越し、春を迎えて、再び夏が巡って来ました。しかし、そこにはもう、葉を茂らせてそびえ立つ雄大な命の木の姿はありませんでした。枯れ果てた巨大な幹だけが、過去の面影を空しく残していました。

「悲しむことはないよ。形ある物は、いずれ滅するものだから。だけど、形を持たない物は、いつまでも存在し続けることができるんだよ。君たちが私から命を受け取ったように。君たちもその命を次の誰かにつなげておくれ。命のリレーが続く限り、私はいつでもそこにいるよ。」

それが、冬を越せなかった命の木が動物たちに向けた最後の言葉でした。命の木を失って悲しんでいた動物たちも、夏が来る頃には元気を取り戻し、今までどおりの生活を送っていました。ただ一つ、命の木が存在しないということを除いては。そんなある日のこと、動物たちは草原の中心で、ある物を見つけました。それは、枯れた幹に守られるようにして生えている小さな新芽でした。ふと、命の木の最後の言葉が聞こえたような気がしました。その時、動物たちの胸にわき上がった決心。この新芽を育てよう。きっと、それが、自分たちにできる一番の恩返しだから。

それは、一年前のあの日のような、太陽の光が降り注ぐ、平穏で幸福なある日のことでした。

《評》

これは空想のお話ですが、動物たちを描いた絵本を読んでいるような気分にさせられました。

動物たちもきびしい自然条件のもとで暮らしていますが、それだけに生き死について過敏に反応し、どこが安全かを本能で感じ取ることができるのです。ここでは「命の木」が動物たちのよりどころでした。

しかし、生きているものは必ずいつかは滅びるのです。「命の木」も動物たちもそういう運命を担っているますが、その辺のことがよく書けています。終わりに近いところで、枯れた「命の木」から新しい芽が出ているのを発見するところがありますが、それでこの作品が光を放ちます。

松永　伍一

優秀賞

オシロイ花の観さつ

柳川市立矢留小学校　四年　荒巻　愛実

八月一日に、オシロイ花の観さつをしました。その日は、はれで観さつするにはぴったりでした。まず、私はじっと近づいて見てました。アリがオシロイ花の中に入って何かしていました。私は、何をしているのだろうと思い、よく見てみました。そしたら分かりました。アリは花のみつが好きなので、オシロイ花のあまいみつをのんでいたのです。一つオシロイ花のみつがアリに好まれるあまいみつだということがわかりました。

次に、一つ花をちぎって、花の中をのぞいてみました。すると、細い糸みたいなのに、黄色い小さな丸がついているものがありました。私は、不思議に思って調べてみました。すると分かりました。私が不思議に思ったのは、おしべでした。これで、おしべのことも分かって、二つのことが分かったので、今度は明日の昼に観さつすることにしました。

次の日の昼になりました。オシロイ花を見たら、花がとじていました。びっくりして、きのうの観さつした時間を思い出してみました。きのうは、夕がたの四時半ぐらいだったけど、今日はこ時半ぐらいです。これで、私は、もう一つオシロイ花のことが分かりました。オシロイ花は昼はとじていて、夕がたにきれいな花をさかせるのです。これで、花のことは三つ分かったので、オシロイ花のたねのことを調べることにしました。

まず、花と同じでじっと見てました。オシロイ花のたねは黒くて、デコポコしていてとてもかたいです。そんなたねをじっと見ていたけど、変化がありません。だから、私はたねをわってみました。わってみると私が知っている、白くて丸い物が入っていました。私は、いつもせっしているたねの中身の名前が知りたくなりました。たねの中身は、「はいにゅう」というそうです。私は、何か自分が考えていた名前とあまりにもちがいすぎたので、少しびっくりしまし

た。
　最後に、オシロイ花の葉を調べることにしました。花やたねといっしょでじっと見てみました。黄緑で三角形が丸くなったような形です。さわってみたら少しザラザラでした。
　私は、花、葉、たねのことが分かって、オシロイ花のことと観さつすることが、今まで以上に好きになりました。この観さつをしてとても勉強になったので、これからも観さつをたくさんして植物となかよくなりたいです。

《評》
　あなたのこの文章を読んで、目の付けどころの良さと、あなたの熱心さにすっかり感心しました。
　「見る」というのと「観さつ」するというのはちがうのです。「ある日」もいいのですが、「八月一日」という日付があると、いっそう実感が出てきます。
　こうして一つずつ観さつしながら、疑問点を解いていったり発見したりして、それがあなたの知識になっていくのですから、たのしいです。
オシロイ花は昼は花びらが閉じていて夕方になると開くというのを読んで、私もそれを思い出して、なつかしい気分になりました。

松永　伍一

優秀賞

弟の教えてくれたこと

調布市調布中学校　三年　長嶋　亜沙美

　私には四つ年下の弟がいました。しかし、五歳の時に重い病気にかかり亡くなってしまいました。この時、一気にいろんなものを無くしたような気がしました。実際、弟はこの世にいなくなってしまったし、どうでもよかった思い出が宝物になりました。もう会えないと思うと、さらに悲しくなってしまいました。だけど、今は悲しくありません。弟はとても大きく、大切なことを教えてくれたからです。
　弟が私に教えてくれたこと。それは“生きていることが大切だ”ということです。私は弟に教えてもらうまで生きているということは何か考えたこともありませんでした。でも、弟に教えてもらい、生きていることは他人を自分のできる範囲で助けることだと思いました。虫だって、小動物だって、すべての生物が支え合って生きているのです。弟が亡くなってから気づきました。二人でけんかしたことや泣いたことだって、一緒に生きて、励まし合っていたことが幸せなことだったのです。
　もう一つ、気づいたことがあります。それは実在していなくても、気持ちがつながっていることがあるのじゃないかと思います。私はこの世から去ってしまった人は、天国へ行くと思います。でも、天国はどこにあるのでしょうか。そんな疑問が頭をよぎりました。でも、弟のことを思い出したら、ある結論が出ました。この世を去る人、一人ひとりの天国の場所が違うんじゃないかと思います。川の好きな人は川が天国になると思うし、山が好きな人は、山にいる気がします。そして、弟が今でもどこかにいるとしたら、三年間ずっと病院にいたので、今は家にいて、住んでいられなかった三年間を取り戻しているような気がします。目には見えなくても、心がつながっているかもしれません。だ

から、これからも話しかけ続けたいと思います。
弟の死で、命のもろさも知りました。弟はやるだけやったけど、もっと大きくわくを広げてみれば、生まれてすぐに亡くなってしまった子や、生まれる前に亡くなってしまった子もいます。原因はいろいろだと思います。だけど、もしかしたら少し気をつければ、防げたのかもしれないと思ってしまいます。弟は原因不明だったけど、小さいころに何か原因があったのかと思ってしまいます。でも、ささいなことで、病気になったり、亡くなってしまうのです。
今の時代、すぐに自殺を考える人が多いと思います。だけど、生きているということはすごく大切で幸せなことです。弟には生きていたときも、亡くなってからもたくさんのことを教わりました。そして、教えてもらったことを考え、これからの生活をどうするか考えようと思います。

《評》
人と死別するということは悲しいのですが、死んだ人から大切なものをもらい受けたと思えるようになったときから、
その人に対して感謝の心が湧いてくるものです。
あなたは弟さんを失なってから、心の中に宝物を手に入れました。そのことが人間の幸せにつながっているということも発見できたのです。
私が感心したのは、あなたが天国について独自の考えを持っている点で、弟さんは三年間病院暮らしをしていたので、きっと今は家にいるだろうと考えるところは、兄弟の深い結びつきを表しています。これからも弟さんはあなたの心の中に生き続けるでしょう。

松永　伍一

優秀賞

ある日の事故から

福岡県立伝習館高　一年　武下　優子

太陽が容赦なく照りつける夏休みの午後一時、私はだらだらと、自転車を左右に動かしながら、友だちと部活から帰っていた、
と、その時、思わず顔をしかめるような大きく高い音が後方から閉こえてきた。私が顔をしかめたまま、とつさに後方を見てみると、そこには七十歳くらいの老人が道路の中央で倒れていた。老人の横には、無造作に倒されたような自転車があった。それを見た瞬間、今の大きな高い音は、車の急ブレーキだと確信して私は気づいた。交通事故だ。私は、そう思ったと同時に反射的に自分が乗っていた自転車を放り投げて、老人の傍（そば）へ走りつけた。
それからどれくらいの時間が経過しただろうか。一一九番に電話して、救急車が到着して、老人は近くの病院に運ばれて五分もたたないうちに、事故があった道路は、何ごともなかったかのように何台もの車が次々に通り過ぎていった。しかし、道路にくっきりと残された急ブレーキの跡や、赤くしみついた血痕（こん）が、事故が起こったことをリアルに実感させる。交通事故が起きた原因は、老人が横断歩道も信号もない道路を突然自転車で横断したからだそうだ。
その日、家に帰りついても、交通事故の現場が頭に焼きついて離れなかった。今まで交通事故なんて見たこともないし、実際に体験したこともなかったから、今日初めてその恐ろしさを思い知らされたような気がする。それと同時に、今まで私が犯してきた交通ルール違反の数々が頭の中をよぎった。朝、学校に遅刻しそうになって、信号なんて当たり前に無視していた自分が思い出される。私は、今まで交通事故にあってもおかしくなかったのだ。もし事故にあったのが老人ではなくて私だったら、と考えると、体が震えて止まらなかった。
私は今まで、交通ルールをあまく見過ぎていた。「ちょっとだけ」というよう

な理由で信号を無視して事故にあってしまったら、きっとすごく後悔するだろう。それに、交通ルールとは、一人ひとりが守っていくからこそ成り立つのであって、一人でもいいかげんにルールを違反してはいけないのだ。私は今日一日で、交通ルールに対する考えが一変したと思う。自分がほんの少し安全を心がけることにより、生死に関わる問題をまぬがれることになるのだから。

《評》
いつ、どこで、どういう交通事故があったかが、無駄のない正確な文章でよく描けています。
一つの出来事をありのままに表現する文章もあってもいいのですが、それが成功するためには冷たい観察力と描写力が必要です。たとえば小説家志賀直哉のような。
でも、若いころは「見る」ことと「感じる」ことを重ねて書けばいいのです。そして、人間としてどうしていけばいいのかを「考える」ことです。その点でこの作文は骨組みのしっかりした、とてもよい出来上がりです。
このごろは事故が多い世の中です。交通ルールを守っていきたいものです。

松永　伍一

優秀賞

特攻隊員とその家族

福岡県立伝習館高校　一年　岩松　靖子

今年の夏休みに、日帰りで鹿児島県の知覧へ行った。知覧は、父が以前から行きたかったところで、本土最南端の特攻基地として知られている場所である。
知覧には、知覧特攻平和会館があり、私たち家族はそこに入館した。中に入ると、たくさんの写真があった。その写真は、十代や二十代という若い年齢で亡くなった特攻隊員の方たちの写真だった。その写真が飾ってある下のガラスケースには、特攻隊員の方たちが残された遺書や、家族へ送った手紙、寄せ書きなどがあった。
私は出撃前の笑顔で写っている特攻隊員の方たちの写真がまぶしかった。今から死ぬ、というようには全く見えないその笑顔が、とても美しく見えた。死ぬ、と分かっているならば、つらいはずなのに。
私が一番印象深かったことは、特攻隊員の方たちが家族へあてた手紙だった。どの手紙も字がきれいだった。文章が難しくてなかなか読めなかったが、意味は分かった。父はたくさんの手紙の中で、一人の特攻隊員が母にあてた手紙のことを話してくれた。手紙を書いた隊員の父親は再婚して、その隊員には新しい母親ができたという。しかし、なかなか「お母さん」とは呼ぶことができなかったらしい。そんな中、出撃前に書いた手紙には、今まで「お母さん」と呼べなかったが、今は呼べる、と書いてあったそうだ。私は何とも言えない気持ちになった。きっと、やっとの思いで書くことができたのではないだろうか。その母親はうれしかっただろう。その思いとともに、もう帰ってこない息子のことを思うとつらかっただろう。この手紙のように、何か心に響いてくるものがたくさんあった。それらは飛行帽、ハチマキ、手紙、写真、遺言などたくさん展示されているものから、にじみ出ていた。私は胸が熱くなっていくのを感

じた。
私たちは全く戦争を経験せず、平和な時代に生まれてきた。暮らしも豊かになっている。そんな中、私たちは戦争を忘れてはならない。語り継いでいかなければならない。戦争の恐ろしさを知り、亡くなった方の深い思いを感じ、平和を維持しようと絶えず努めなければならない。今回家族で行った知覧では、たくさん学ぶことができた。今まで戦争について何度も考える機会はあったが、一番身近に感じ、別の視点から考えることができたのではないかと思う。平和な時代に生きている私たちはとても幸せだ。私はこの経験を忘れない。知覧に行き、家族で平和について考えた、この経験を絶対に忘れない。

《評》
太平洋戦争が終わりに近づくころ、鹿児島県の知覧や鹿屋から特攻隊員の若い兵士がつぎつぎに飛び立って行き、ついに還って来ませんでした。平和の今では考えられないようなことが、戦争の中では起こるのです。
あなたが、失われたいのちに向き合ったことは後のためにも貴重な体験となるでしょう。その中で、若い隊員が義理の母にあてた手紙に目をとめ、初めて「お母さん」と書いたその心を読みとろうとしたことに私も心を打たれました。死を目前にして母が母になり、子が子になるというのは、なんとも切ないものですが、それがまた戦争の残酷なところです。そこにもう少し重点を置いて書いたらよかったですね。

松永　伍一

優秀賞

スズ虫日記

小郡市立三国小学校　三年　大坪なおみ

七月二十九日（日）　手があるぞ？！
わたしの家にスズ虫がいます。十六ぴきぐらいいて、イリコやなすび、スズ虫のえさなどをやっています。
そのスズ虫のえさの食べ方が、まるで手を使っているようなんです。虫めがねで見て、はっきりと分かりました。口の近くにあるしょっかくみたいなのが手の役目をしていたのです。
大発見です。

八月一日（水）　ふうん、とぶんだ！
えさをかえてあげている時、いきなり長い足で、バッタのようにぴょんってジャンプ！　スズ虫ってとぶんだ。
はじめて知ったなあ。

八月三日（金）　白くなったしょっかく
黒かったしょっかくや足が、だんだん白くなってきました。さいしょは、病気かと思って心配だったけれどだいじょうぶでした。大人になったしょうこかもしれない。

八月八日（水）　とうとう鳴いた
夜になって、とうとうリリリリと鳴き出しました。
小さくて弱々しい声だったけど、ちゃんとわたしにも聞こえました。羽と羽をこすり合わせて、オスだけ鳴きます。スズ虫の声を聞いていると、よくねむれました。

八月九日（木）　だっぴで大へんしん
　なすびのところにスズ虫が。えっ死体。また死んじゃった。あれ、よく見ると、しょっかくがない。
　あっこれ皮だ。あそこに羽が白くなっているのがいる。
　へえ、スズ虫のだっぴ、はじめて見た。皮もスズ虫そっくりだ。

八月十日（金）ああ心配
　おばあちゃんの家にとまったので、心配でたまりませんでした。
　元気にしているかな。

八月十六日（木）なれた
　なんと、スズ虫が、わたしの手に乗って鳴き出しました。一番声のきれいなスズ虫でした。
　うれしくて、しばらくじっとしていました。すずをふっているようなひびくきれいな声でした。

《評》
　矢留小学校四年の荒巻愛美さんの書いた「オシロイ花の観さつ」と読み比べてみて、書き方が二種類あってそれぞれおもしろいと思いました。
　あなたのスズ虫観さつは、目付があって、毎日毎日の変化がとてもよく分かります。書き方もテンポが速いので、まるで詩を読んでいるように気持ちがいいです。
　日付の下に観さつのポイントを書き出したのは気がきいています。それが観さつしているあなたのよろこびを表しているようです。注意して見ていくと生き物はおもしろいですね。
　あなたはこの夏とてもいい経けんをしました。

松永　伍一

優秀賞

ムツゴロウの海

柳川市立東宮永小　六年　宮崎　司

　ここは江戸時代、柳川地方では干拓事業が盛んでした。このお話は、そのころの海の中のお話です。
　ムツゴロウの五郎は、有明海の干がたでみんなと仲良く暮らしていました。ある日、みんなと遊んでいると、貝があわててやってきました。
「どげんした貝君、そんなにおおいそぎでやってきて。」
「大変ばん。人間が石とか木とか運んで来て干がたになんか作りよるばん。」
「なんばしょるとやか。」
五郎たちはそこへ行ってみようと言いました。

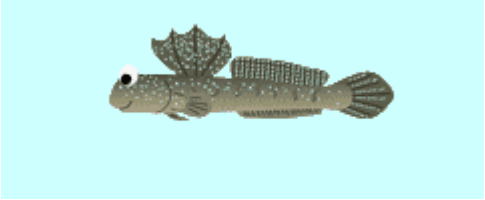
　五郎たちが行ってみると、人間がおおぜいで仕事をしていました。そのうち一人がこう言いました。
「よく聞け。まだまだ干拓が完成するまでは遠かぞ。仕事にがまだせよ。」
「ええっ。干拓を作る。そんなもの作られたらすみかがなくなるよ。」
五郎が辺りを見回すと、周りは変わっていました。その時、
「あっ。」
　くちぞこが何かを見つけました。
「ここ、うなぎの巣のあったとけ。なくなっとるぞ。」
みんなはうなぎを探しました。でも、見つかった時はもううなぎは死んでいました。
「こっちもヒラメの死んどるぞ。」
「こっちもだ。」
工事があっている所の近くに暮らしていた魚たちは死んでしまいました。

それから何年かたちました。五郎の友だちはどうすることもできずに次々と死んでしまいました。腹を立てた五郎は人間たちにさけびました。
「干拓なんか作らんでもいい。干がたをかえせ。もう作るのをやめろ。」
それでも人間は聞きません。五郎は仲間をつれてきてまたさけびました。
「もうやめてくれんかん。仲間もどんどんおらんごつなって、最後は全滅してしまう。やめてくれ。」
みんなでいっぜいに大声でさけびました。でも、人間は見もせず、その声は耳にもとどきませんでした。しかも五郎たちにも気にもとめず石をならべていきました。五郎たちは毎日人間にやめろとさけんでも、人間たちは気づきませんでした。

それから何十年もたちました。五郎はさけび続けても、人間は一人も気づかずに干拓を作り続けて、とうとう完成に近づいてきました。五郎の命も残りわずかに近づいてきました、五郎は、昔の海のことを思い出していました。
「あの日々干がたで暮らしていたのに干拓が作られ始めて仲間がたくさん死んだな。ぼくもあとすこししか生きられない。」
と言ってなみだを流し、死にました、それと同時に干拓は完成しました。

《評》
これは江戸時代のことをモデルにして書いた童話です。民話にも通じるものがあります。米をつくるために干潟を埋めてきたのは人間でした。命令を出すのは政治家でした。
干拓によって被害を受けるのは魚や貝たちです。この童話では主人公のムツゴロウの五郎が、人間たちのやることに鋭く批判をしています。その声は今の干潟の生き物たちの声でもありましょう。今もつづいていますから。
会話が柳川地方の方言で書かれているのは、とてもいいことですが、ところどころに標準語が混じっているのは残念です。お父さんやお母さんにきいて、会話をきちんとした方言に書き直すことをすすめます。

松永　伍一



優秀賞

つばめの「チュン」の観察日記

柳川市立城内小　三年　小西　たくと

七月八日

きのう、真悟君たちから鳥のひなをもらった。くちばしは、横が黄色く前が黒い。体は灰色、首はまだ赤い。コーヒーの空き箱にティッシュを三枚ひいてひなをそっと入れた。えさがほしくなると鳴くので、ウグイスのえさをやった。ぼくの指先に水をつけて、ひなのくちばしにつけると、水をのんだ。ひなが鳴かなくなるまでえさをあげないといけない。くいしんぼうらしい。ぼくはこのひなに「チュン」という名前をつけた。

七月九日

毛が少し生えてきて、体も少し大きくなった。よく毛づくろいをするようになった。ぼくは、空き地でバッタをつかまえた。ねりえにバッタをくっつけてやると、首のすきまにバッタがとびこんだ。バッタがにげたので大変だったが、ぼくがつまんで口に入れてやった。

七月十日

体に灰色のたんぽぽのような毛が生えた。ちょんまげみたいな形をしているしっぽのつつが一本とれ、黄土色の毛が出てきた。

七月十一日

羽のつつが、どんどんぬけてきて、体の色が黒くなってきた。時々のびをする。かた方ずつ羽をのばした後、両方の羽をバサバサバサとはばたくように動かす。チュンはすずめじゃなくて、つばめだった。

七月十六日

よくはばたくようになったから、鳥かごを買ってきた。わらで作った巣を鳥かごに入れた。えさをほしがっているようなので、つまようじの先にねりえを付けてやると、チュンはおいしそうに食べた。

七月二十一日

羽のつつが二本になった。しつぼのつつは、全部とれた。チュンは家の中を飛び回るようになった。人差し指を差し出すと、とまってくる。頭をなでると「カチッ」と音をさせておこる。ねりえを食べなくなったので、三センチメートルぐらいのバッタやミルワームをあげた。

七月二十七日

よく飛ぶようになったから、チュンをにがしてやることにした。鳥かごから出すと、屋根の上を一周飛んできて、電柱にとまった。「チュン」と、ぼくが声をかけたけれど、飛んでいった。そして、見えなくなった。チュンを見送りながら、うれしいようで、ちょっぴりさみしいような気持ちになった。

《評》

よく観察していますね。「くちばしは、横が黄色く前が黒い。体は灰色、首はまだ赤い」という書き方は、そっちょくで気持ちがいいし、すがたが見えるようです。

また「チュンは、すずめじゃなくて、つばめだった」も、ちょっとおどろかされます。これだけで何の説明もしなかったところが、とてもいいです。

よけい空に返してやった最後の日の文も、余計なものがなくて、あなたの気持ちはきちんとかけています。

「ぼくが声をかけたけれど、飛んでいった」けど、つばめはきっとあなたにお礼を言ったでしょう。

松永　伍一

優秀賞

ぼくの夢

柳川市立両開小学校　四年　江口　卓見

二〇〇一年八月。ここは、熊本県八代の高速道路、十六番上片岩トンネル、百六十メートル、十七番馬廻リトンネル、二百十メートル。あっという間に、暗やみの中を、通りすぎた二つのトンネルは、お姉ちゃんが生まれる十四年前に、お父さんが苦心して造った自まんのトンネルだ。

お父さんは、ずっと前にコマーシャルで歌っていたように、地図に残る仕事をしているからすごい。ぼくが生まれる時は、神戸、妹の莉加の時は、びわ湖で仕事をしていて、大きな橋やビル、トンネル、高速道路などを設計して造っている。

そして、今、お父さんは、日本で四番目に長い六千二百五十一メートルのトンネルにちょう戦中。完成までに四年もかかるらしい。

お父さんはいつも

「ひとつのものを完成するには、設計、かん理、現場、みんなが自分の持ち場に責任をもつて、がんばつて協力し合うからできるんだ。」と話してくれた。

二〇〇〇年四月。くま川の満開の桜の中、ぼくは、お母さんとお姉ちゃんと莉加でＪＲで人吉のお父さんの仕事現場を見に行った。大きな山の中に、半円になった穴があいていて、むずかしい機械がならんで立っていた。なんだか少しこわくて、ビクッとした。入り口には、横断まくが、「がまだしとります」とあった。みんなの汗が見えそうな気がした。

それから、この夏休み（二〇〇一年八月）今度は、お父さんの車で宮崎へ旅行した。

その時、ぼくは、またお父さんのトンネルが見られると思って、ワクワクして出発した。緑のくま川をながめて、お父さんが、気持ちよく車をとばしていくと、次から次へ二十四のトンネルが、目にとびこんできた。

ナンバー　十六、十七、お父さんのトンネルは、ビューン、ビューンとあっという間に山をこえて、加久藤トンネルに近づいた。

「ほら、あの左がわ。」

急にお父さんがみんなに大声でさけんだ。

「がまだしとります。あと二千五百メートル。」

あの時の横断まくが目に入ってきた。

「卓、いよいよ先が見えてきたぞ。」

トンネルを見て、お父さんが力強く言った。

長さ、六千二百五十一メートル。雨の日も風の日も、昼、夜と工事にがんばる人たち。それを、うらで支えているたくさんの人たちの応えん。みんなの汗のかたまりだ。

二〇〇三年四月、いよいよ完成よてい。地図の中にお父さんたちのトンネルが残る。

みんなのためにー。そのころ、ぼくは六年生。

ぼくの夢、

「お父さんに負けないぐらい大きな地図を残すことだ。」

《評》

この文章を読んで私は、父たちの作ったトンネルを抜けて　　行く息子の幸福を思い、うらやましいぐらいです。

日本の地図の上に、いや実さいにトンネルがあって、その中を通り抜けて行くと、父たちのやった大工事がいかに世の中のために役立っているかが実感できるでしょう。でも、どのトンネルにもそれを作った人びとの名前は書きこまれてはいません。だから、それを知っている家族がよくおぼえて、子孫に伝えていくべきです。あなたはきっとそれができる人です。それはこの文章から

伝わってくるお父さんの思いと、スピードのある言葉づかいから証明できます、あなたはその夢を食べていますね。

松永　伍一

優秀賞

熱発して―。

三橋町立三橋中学校　一年　山田　美和

その三日前、私は発熱した。三十九度四分。頭の中が真っ白になった。私は、三十九度の熱を出している帰り道、三日後の諫早野外活動の二泊三日の流れを、それでも必死に覚えながら帰った。

二週間前、諫早野外活動の実行委員長に選ばれた私は、先生方や実行委員のメンバとの打ち合わせに奔走していた。家では、夜中まであいさつ文を考えたり、次の日の実行委員会の提案内容を考えたりしていた。私の体は限界に達していた。しかし、それにも増す責任感が私の心の底からわいてきた。

この諫早野外活動を成功させたい。

あと三日。何としてでも、熱を下げてみんなと一緒に諫早に行きたい。もし行けなければ、今までの努力は何だったのだろうか。私の頭の中は、その二つの思いが堂々めぐりをしていた。涙があふれ出てきた。

毎日二本の点滴と座薬の繰り返し。朝は熱は下がるが、夕方になるとまた熱が上がる。これで行けるのだろうか。私の胸は、張りさけそうだ。布団の横に置いている諫早への荷物も私を悲しく見つめていた。

出発の朝。

三十八度。座薬を入れて中学校へと向かった。私の姿を見た実行委員のメンバーや話したこともない一年生の仲間が、かけ寄って来てくれた。

「美和ちゃん、もう熱下がった。大丈夫。」

「心配しよっとそ。」

うれしかった。涙が出そうだった。話したこともない仲間が声をかけてくれる

ことは、今までに一度もなかった。私は、この仲間を心から大切にしたいと思った。

諫早に着くと、入所式が始まった。私の実行委員長としてのあいさつは、予定通りに言うことができた。

二日目。山登りがあった。私は用心のため参加しなかった。担任の野田先生から、水まくらをしてもらったり、水分補給のためにジュースも買ってきてくださったり、親切にしていただいた。

「ゆっくりしとかんね。」

とおっしゃった言葉が今でも忘れられない。山登りから帰ってきた友だちが

「美和ちゃん、熱あがらんやった。」

「美和ちゃんのおらんやったけん寂しかった。」

と、気遣ってくれた。

出発の朝、座薬を入れて中学校へ向かった私をこれまでに、温かく思いやってくれる仲間たちに、私は学んだ。人は優しささえあれば、心と心が通い合い、素晴らしい仲間になれることを。

この諫早野外活動を私は一生忘れない。

《評》

一つの目的のために気持ちを集中していくうちに体調をこわしてしまうことがよくあるものです。とりわけ責任ある立場ともなれば、病気をすればどうしていいかわからず、苦しむことになります。そのあたりがよく書けています。

責任感の強い人でしょう。病気をかかえて一つの目標に向かっていくとき、友だちの共感と友情がどんなに深いものであるかをあなたは知りました。尊い体験です。このことはずっと後まで記憶されていくことでしょう。病気はつらく苦しかったのに、周りの人びとのやさしさで救われたよろこびが、あなたの財産として光りつづけるはずです。

松永　伍一

優秀賞

夏の部活

柳川市柳南中学校　一年　高椋　草美

雲一つない青空が青々と広がり、今朝も白い夏の光がようしゃなく降り注いでいる。それでもせみは、輝く太陽の光を喜んでいるかのように、勢いよく鳴いている。夏休みに入ってまだあまり雨も落ちてないのに、雑草も田んぼの苗も青々として、背すじをピンとのばし並んでいる。大粒の汗が体中からふき出して体を伝わっていく。そんな夏まっさい中を、私の自転車が学校まで向かっていく。さあ、今日も夏休みの部活の始まりだ。

職員室からかぎをかりて、汗をふきながらむし暑い音楽室に入る。しばらくすると、準備する楽器の音と部員の人たちの声が広がっていく。

太陽であたためられた空気が充満するろう下で、私たちのパート練習が始まった。クラリネットを吹き続けていると、頭の先から足まで玉の汗がふき出してくる。顔の汗が楽器にまで伝わってくるのが見える。同じパートの先輩や友だちのひたいにも大きな汗の粒が光っている。ちょっとした休けいに入ると、みんないっせいにハンカチでパタパタと顔をあおぎ始める。

「暑くて、やる気が出ないね。」

それだけの会話しかないくらい、暑かった。ときおり、開けた窓から水色のすずしい風が吹き流れてくると、汗をかいた体に、またやる気をおこしてくれる。一しゅんのオアシスという気分でとても気持ちがいい。その風もしばらくするとやんでしまい、また体中から汗がじわっと出てきた。

一時間あまりのパート練習が終わると全員で、練習した曲などを合わせる。チューバのしっかりした低音、トランペットのけいかいな音、ユーボアニュームやトロンボーンの丸みのある音、サックスやクラリネットのなめらかな音など、個性あふれるさまざまな音が音楽室のすみずみまで広がる、今日もそれぞれが、すがすがしい一つの音をつくり出していった。

こんなに暑いと部活に行きたくない心が、もちあがってくることもあるのに、それでも私を部活にむかわせるものは一体何だろう。きっと入部したころの大きな発見の喜びと、部活を始めて毎日の充実した生活が送れているうれしさかもしれない。練習が終わり、楽器を片付曽祖母の話に移し変えた手際は見事です。腰のすわった明るい性格の人だけていると、

「暑いけれど明日もがんばろう。」

そんな気持ちがわいてくる。

小学生のときまで無駄に使ってしまうことの多かった夏休み。しかし、部活が私の中学生になって始めての夏休みを有効に、そして充実した生活に変えてくれた。二学期からもそんな充実した生活を送っていきたいと思う。

《評》

暑い夏の部活の様子が、大へん丁寧に書かれています。書き出しの風景のことは省略して、いきなり「職員室からかぎをかりて・・・・・・」で始まってもいいかもしれません。そうした方が部活の内容にしぼりこめるし、練習の大変さが読む人に伝わってくるでしょう。

「水色のすずしい風」というたとえは新鮮です。それから楽器の音の使い分けもうまいですね。「しっかりした低音」「けいかいな音」「あたたかい音」「丸みのある音」「やさしい音」「なめらかな音」など、まさに個性があって、それを聴き分けてきたあなたの感覚はすばらしいです。

松永　伍一

優秀賞

はしれ！　ゼウス

久留米市立荒木小学校　二年　　川しま　あか音

「足のわるいシーズー犬がいるんだけど、もらってそだててくれないかな。」おかあさんのともだちのくまおばちゃんからでんわがありました。くまおばちゃんの家では、六ぴきの子犬が生まれたけど、その中の二ひきの子犬の体の上にダックスフンドがのって、足のかんせつが外れてしまい、こしから下がうごかなくなってしまったそうです。ほかの四ひきは、ペットショップにもらわれたけど、足のわるい子犬は、ひきとってもらえなかったそうです、それで、まえから子犬をほしがっていたわたしたちに、れんらくをしてくれました。

もらってきた子犬は、てのひらにのるほど小さく、やっぱりこしから下がうごきませんでした。おしっこやうんちをするたびに、しっぽや足がよごれてしまい、そのたびにおふろばであらってやりました。そんなすがたを見て、このまま一生歩けなかったらどうしようかと、まい日心ぱいしました。そこでギリシヤしん話に出てくるかみさまの名まえ、「ゼウス」と名づけました。

ゼウスは、こしから下はうごかなかったけど、えさもよく食べ元気いっぱいでした。一ケ月がすぎて、二ケ月目にはいったとき、ほんのすこしだけど、足に力が入るようになり、ひきずっていたうしろ足を立てられるようになりました。でも、足をまげたり、のばしたりすることができないので、いつもピーンとのばしたままです。それでもすこしずつ歩けるようになりました。ただうしろ足がわるいので、わたしたちが、

「ゼウス、おいで！」

とよんでも、めっくり、ゆっくり歩いていてくるだけです。わたしたちは、どうしてもゼウスといっしょに広いのはらをはしりまわりたくて、まい日、まい日さん歩につれていきました。

そして、三ケ月がたったころ、ゼウスにきせきがおきました。なんと、はし

れるようになったのです。
「ゼウス、おいで。ここまでおいで。」
「ゼウス！　はしれ。はしっておいで。とこえをかけると、うごかないうしろ足をはずませながら、わたしの元にかけよってきました。わたしはもううれしくて、うれしくてゼウスをだき上げ、ほおずりしました。ゼウスもうれしかったのか、ペロペロとわたしの顔を何ども何どもなめました。それからのゼウスは、はしるスピードもましてきて、今では、ふつうの犬とかわらないくらいになりました。わたしは、ゼウスのことが大すきです。
これからもずーっといっしょにはしっていきたいです。
「はしれ！　ゼウス。」

《評》
足のわるい犬をよくそだてましたね。
もし、あなたがもらわなかったら、この犬はどうなっていたかわかりません。
元気な犬をそだてていくのはかんたんですが、足が不自由な犬に愛じょうをそそいで、希ぼうをもつて世話をしていくのは、大へんです。
「ゼウス」という名まえをつけてあげたのも、あなたの犬への思いがよく表れています。そんなすてきな名まえをもらった犬は、あなたの愛じょうにこたえて、きせきを呼びこんだのです。はしれるようなったのですから。
犬をくれたおばちゃんに報告しましたか。きっと感動されるでしょう。

松永　伍一

福岡県知事賞

巣立ち

鈴木　由美子

今思えば、みんなの心が妙にざわざわしたり、しっとりしたりしたすずめ騒動は、感動の涙で幕を閉じた体育会の翌々日から始まったのでした。
「先せーい！　ひなが死んどう！」
と、ちょっと声高に叫びながら、ゆりちゃんがちりとりを持って職員室に入って来だのにも、担任の鈴木先生は気がつきませんでした。
鈴木先生は我が三年Ａ組が率いる黄色ブロックが優勝したせいか、その朝、どの先生より気の抜けたサイダーのような放心状態だったからです。
「先生、鈴木先生、すずめですってよ。」
よく気がつく梅野先生に声をかけられて、はっとしたように、鈴木先生はちりとりの中をのぞきこみました。
青い無機質なプラスチックの上で、二羽のヒナは、すでにただの肉片となり、千からびかけていました。生きているのは、その肉片をばい回る白いウジ虫だけです。鈴本先生は日常目にしない、あからさまな死の姿にちょっとたじろいでしまい、ゆっくり聞きました。
「生まれたてやね。どこにあった？」
「教室のベランダに落ちとった。上の換気口に巣を作っとうよ。」
すずめの巣と聞いて、鈴木先生は、ははーんと思いあたることがありました。国語の授業中、Ａ組のみんなの顔がやけにしまりがないのに気がついて、これは喝を入れてやらねばと思った時のことでした。その指差す方向は、ベランダの避難用棚の上です。
なんと、二羽のすずめが交尾の真っ最中。「避難用の棚は、すずめにとっては格好のデートの場所になっちゃったね。」
と、赤くなる年でもない母親のような鈴本先生は、笑いながら言いました。

春の風が、ふんわりと教室の中をなでるように通り抜けて、気まじめで姿勢のよい小目君さえも、にこにことい つまでも聞こえるきえずりに耳を傾けているようでした。
あの二羽が親鳥だったんだと、鈴木先生はうなずきました。ゆりちゃんもそうだという目をしています。何だか余計切なさが増して、校庭の隅に垣められたひなの姿を、先生は忘れられませんでした。まだ、目も開けない為ノちに死んだヒナを触ることさえできなかった自分の弱さも・・・・・・。
すずめ騒動は一件落着したかのようでした。
しかし、二羽のヒナが死んで二週間程過ぎ、みんなすずめのことはすっかり忘れてしまったころ、また、あの青いちりとりが登場したのでした。
「せんせーい！今度は、もう毛がはえとうよ。」
と、クラスで一番元気娘の知ちゃんが、駆けこんできました。
「まだ、生きとうよ。動きよるもん。」
知ちゃんの目は、うれしそうにきらきらしています。たしかに、弱ってはいましたが、以前のヒナよりも大きく、目も聞いています。
どうしたものか・・・・・・。生きているのだから、やはり巣にもどしてやらなくてはいけないだろうと、小さな生き物が苦手な鈴木先生もついに決心しました。死んだ二羽のヒナの姿が頭をかすめた甘いでもありました。
さあ、職員室とA組は大騒ぎになりました。すずめの巣は、換気口のふたが外れてできたすずめがやっと入るくらいの小さな穴です。しかも、ベランダのかなり上の方に位置していたので、はしごを架けて登らなくてはなりません。その穴に、小さな小さなひなを無事にもどすことができるのでしょうか。
「誰か登って。ひなを入れてやらんね。」
と、この騒ぎを聞くや否や、すぐさま駆けつけてくれた梨光先生は、A組のみんなに声をかけました。がっちりと体格もよく、頼もしい存在の梨光先生も、鳥が大の苦手で、この時ばかりは目をパチパチさせ、しきりにひげをさすっているばかりです。
「おれがするけん。」
優しいけれど、ちょっと気分屋の元樹君が率先して、このたいへんな役を即席に引き受けたのに、鈴木先生は少し驚きました。
「先生、穴がナべり台みたいに斜めにかっとる。だけん、落ちたっちゃね。』はしごの一参上で、元樹君は穴をのぞきこみながら、下のみんなに向かって言いました。
「手の臭いがつくけん、ひなつかめんよ。」
そうだ、ひなに人間の手の臭いがついたら、野生の親鳥は二度とエサを与えないと聞いたことがあります。鈴木先生は、元樹君の意外な知識と落ち着いた様子に、またうれしい驚きを感じていました。
「新聞に載せて入れたら？」
と、誰かが言うともなしに、新聞紙がさっと手放されます。しかし、穴の入り口は下向きになっていて、容易にひなを入れこむことはできません。ひなを載せた新聞紙を持つ、元樹君の指先がぷるぷると震えています。
「元くん、軍手でしてみようか！」
上ばかりを見つめていた中の一人が、軍手を捜しに教室を飛び出していきました。
軍手を通して、初めて人の手に抱かれたひなは、また少し弱ったように見えました。
「ふわふわしてあったかいよ。こいつ。」
と言いながら、元樹君がそおーっと、息を詰めるようにして犬ひなを穴に入れます。さらに、筒状にした新聞紙でひなのおしりを押してやると、ひなはつっと中へ入っていきました。
「やったあ！」
みんなの顔に、安堵の色が広がりました。
下りてきた元樹言の顔中に、玉のような汗が吹ぎ出して、初夏の朝日にきら谷ら輝いて見えました。
しかし、このたいへんな作業は一回では済みませんでした。多い時には、二〜三時間ごとにひなは落ちてしまうのです。その度に、はしごを架け、ひなを巣にもどす作業が繰り返されました。元樹君は、辛抱強く続けますが、代わってしてくれる子が現れ、鈴率先生は内心ほっとしたのです。
ひなは、落ちる度に少しずつ弱っていくようでした。巣穴からはニメートル以下もあるのですから無理もありません。見かねて、鈴木先生は、ベットボト

ルで受け箱を作り始めました。巣穴のすぐ下に取り付けて、ひなの落下の衝撃を和らげようという作戦です。果たして、うまくいくでしょうか。
「親鳥が入られんけん、もっと下、もっと。」
興奮気味の親鳥が飛び回る中、あの梨光先生が、この作業をかってでてくれました。
ペットボトルの透明な底を見上げるのと同じくらい、気をもんでいる事が鈴木先生にはありました。
四月から、やっと登校し始めた隆君のことです。教室に入れず、すずめ騒動の外にいるような披に、みんなの奮闘ぶりを知らせたくて、隆君をベランダに誘いました。もちろん誰もいない放課後のことです。
「元樹君が、はしごで何回も入れたんよー
ふーん・・・・・・。」
と、まぶしそうに目を細めて、隆君は巣穴を出たり入ったりする親鳥をぼんやりと眺めています。
「元君、たいへんだったんだから・・・・・・。」
「こんど、ひなのこと聞いてみたらいいね。」
隆君のことを何くれとなく気にかけてくれている元樹君のことだけに、鈴本先生は四回カが入った言い方になってしまうのです。

落ちちゃったんですが・・・・・・。」
少し風が強く吹き出して、夕立ちになりそうか気配です。中体連を目前にした野球部のかけ声が、いつまでも響いていました。
事態が変わったのは、やはり休み明けの朝でした。またもや、青いちりとりです。今度は、生徒会役員のしっかり者のかんなさんが、早朝から、ずっと鈴木先生を待っていました。
「あと、ちょっとだったのにね・・・・・・。」
かんなさんの大きく見開いた目は、死んだひなの今にも飛べそうに広げた黄礼の羽を、じっと見つめたままでした。その羽をさするように触って、二人は土をかけました。

「あんなに・・・・・・。みんなでしたのにね・・・・・・。」
かんなさんのつぶやくような一人言は、鈴本先生の胸にも、痛いほど刺さりました。
自然淘汰の力なのでしょうか。それ以後、ひなが落ちることは、一度もありませんでした。やがて、はしごが片づけられ、あっという間に、残りのひなは巣立っていきました。
一学期の終業式の目、ベランダの大掃除をしていた知ちゃんがボツリと言いました。
[ちょっと、さびしくなったね・・・・・・。]
「来年も、巣をこの穴につくるやろうか?」
と、ふんの跡を、デッキブラシでごしごしこすっていた手を休めて、元樹君が答えます。
[あんなに落ちたけん、もうつくらんやろ。]
「でも、おれ達も来年はここにおらん・・・・・・。」
[見に来ればいいよ。どじなすずめが待っとうかもしれん。]
どっと笑い声が弾けて、すずめのさえずりとハーモニーを奏でているようです。
みんなが帰った後、鈴木先生はピカピカになったベランダで一人、あの受け箱を見上げていました。
自然のおおきな力の前には、人間の力など無に等しいことはわかっていたけれど、何かせずにはいられない、生きようと懸命な命に寄り添わずにはいられない・・・・・・。どじで落っこちてしまうひなも、愛しい・・・・・・。
なぜか、みんなの顔がひとりひとり浮かんでくる。あの受け箱は、もう少しの間、せめて、みんながこの教室を巣立っていくまでは・・・・・・。
鈴木先生は、長い夏休みに入る空っぽの教室に静かに鍵をかけました。

《評》
鋭く透きとおた観察眼と、生あるものへの慈しみの心とが、ごく自然に結び合って「愛情物語」を作りあげています。

無駄のない、てきぱきとしたストーリーの展開と、そこに顔を出す人物たちの表現に見入って、美しい文体にめぐり合った思いです。
これは鳥の巣立ちを予見させるものであります。元樹君がこれからどう成長するか、たのしみがふくらんで来ます。私も幸せな気持ちになりました。

松永　伍一

優秀賞

雨の目

伝習館高校一年　松尾　信輔

パシンー
乾いた音が教室全体に静かに響く。何が起こったのかと、その視線を一斉に音の発信源へ向ける。
回りの反応はおかまいなしに女子生徒、福山鈴奈が大声で叫んだ。
「あんた、その言い方はないでしょう。もっと他の言い方もあるでしょうが」
「他の言い方をしても言いたいことは同じだろう。それならわざわざ言い方を変える必要はない。」
教室の端のほうで睨み合う男女。教室の雰囲気がどうもよくないのは、天気予報も大当たりの雷雨だけのせいではないようだ。
他の生徒はその光景を遠巻きに眺めていた。特に止めようとする者もいないように思われた。が、彼らの隣にいる女子生徒、水谷梢が二人を止めようとする。
「城くんも鈴奈も止めてよ。私の事はいいから喧嘩は止めて。」
だが、梢の説得も虚しく、鈴奈は相手の男子生徒、高宮誠を指差して言った。
「よくない。こいつはいつもそうなんだ、相手の気持ちを少しも考えようとしない。」
「俺は一人でできる作業だから断っただけだ。たったそれだけの事で何が悪い。」
だが、言い方が気に食わなかったようで、またしても鈴奈が突っかかってくる。
「言い方が問題なんだよ。あんたはいらないの一言で梢の親切を踏みにじったんだぞ。それでも梢は傷つかないって言えるのかよ。それは『それだけの事』なのかよ！」

「それだけの事だ。それに同じような状況でも俺なら傷つかない」
城は睨みつけながら言った。それに負けじと鈴奈も睨み返す。
その時、城の横合いから一人の男子生徒が声をかけた。
「高宮、お前の負けだ。どう考えても福山の言い分が正しい。きちんと水谷に謝れ。」
「余計なお世話だ。俺は別に悪い事をしたとは思っていないし、謝る気もない。」
「それでいいよ。二人の喧嘩が収まるなら。」
梢はそう言って笑ってみせた。
まだ鈴奈は納得のいかないようだったが、最低な奴、そう一言吐き捨てて自分の席に着いた。
教室に平和な騒がしさが戻った。

誠は昔から人を頼りにしようとはしなかった。何でも一人でして、そして全て完璧にこなしてきた。母親はすでに他界しており、父親は仕事で帰りは遅い。となると、必然的に家事一般は誠が一人でしなければいけなくなる。誠の一人で何もかもやろうとするクセはこの辺りが原因なのである。
今朝も彼は、梢の助けを必要としなかった。だから、いらないと言っただけなのである。
しかし、そのままストレートに言ってしまった事が鈴奈は気に入らなかったのだ。それが衝突の原因なのである。結局、誠もイライラしたままその目の授業を受けた。

放課後、誠は一人昇降口のところで立ち尽くしていた。
激しく地面を打ちつける大雨。天気予報を見ていなかった誠は、傘を忘れてしまい、こうして雨の勢いが少しでも弱まるのを待っているのだ。
（今日はとんだ厄日だ。樋山の奴にはさんざん文句を言われるし、傘は忘れるし、だいたい、いらないと言っただけでなぜあんなにも言われなければいけないんだ。）
誠はそんな事を考えながらとどまる所を知らない雨を眺めていた。

雨のせいだろうか、少し辺りは冷えていたが、誠の心の炎を静めるまでには至らなかった。
もう、待ち続けて十分以上経つ。こうなったら濡れて帰るしかないと誠は割り切った。
一歩昇降口から出ると、雨が容赦なく誠の体を襲う。これでは風邪をひいてしまうと、誠は小走りに雨の中を進んだ。
傘を待った生徒たちを何人も追い越す。中には他人の傘に入れてもらっている人もいるようだが、あいにく誠に、そんなことをしてくれるような人はいない・・・・・・はずだ。
誠は傘を差しながら早足に歩く女子生徒を追い越そうとした。ちょうどその時、その女子生徒と目があった。彼女が後ろを振り向いたのだ。
「ちょっと待って！」
誠はその声と顔に覚えがあった。彼のクラスメイトであり、今朝の惨事の当事者である梢のものだった。
「何か用か？　急いで帰りたいから用件は手短に頼む。」
誠はそう言って相をせかした。が、相は何も言わず、誠を傘に入れた。誠は思わず彼女とその傘を交互にみつめた。誠には全く理解できなかった、なぜ彼女がわざわざこんなことをしたのか。
「何のつもりだ？何か用があるんだったら早く言ってくれ。」
「いや、特に用があるわけじゃないよ。ただ、雨が冷たそうだったから。」
「なぜ福山がそんな事を気にする必要があるんだ。」
「なぜって言われても・・・・・・。」
梢は本当に深刻な顔をして回答を探そうとしている。なかなか答えないので誠は自ら切り出した。
「俺は今日、まああいつの言葉を借りれば、お前の好意を踏みにじった。その事をお前は怒っていないのか？」
「う～ん、まああの時は少しグサリときたけど、怒るほどのことでもないよ」
梢はいつものように穏やかな微笑を浮かべた。
誠はその態度に、その笑顔に、何かを感じた。強いて言うならば温かさ。そう、今まで感じたことのなかった温かさ。これが優しさなのだろうか？　そし

て、もう一つ。彼女はなぜこんな風に笑えるのだろうか、そういう疑問だ。
「やっぱりね、私、人が困っているのを見ているだけってのがダメなの。何とかしてあげたいって思っちゃうの。朝の誠くんもね、少し困ってるように見えだから。」
そして、その後こう付け加えた。「お節介だけど。」と。
確かに誠もお節介だと思った。今朝の出来事もこの傘の件も。しかし、悪い気はしない。これが人に対して優しくする事なのだろうか、誠は思った。
「いまいち納得できない。福山がこうしていることは、他人に『優しく』していることなのか？」
彼は自分の抱いている疑問を梢に投げかけた。
「どうかな、それは相手の人のとり方しだいだと思う。それに優しさって言っても、その意味は人それぞれだろうし。でも・・・・・・。」
そこで一度言葉を切ってこう続けた。
「たぶん、たぶんだけど、相手のことを考えることが一番に大切じゃないのかな。あなたが言った言葉が、した行動が相手にどんな感情をあたえるのか。」
相手のことを考える、誠はその言葉を反省した。今朝も鈴奈から同じ事を言われたような気がするが、その時は聞き流していた。しかし、今回は違うような気がする。
「優しくするってことはね、そういう相手への思いやりの上に成り立つと思うの。それがなかったら、やっぱりただのお節介になるんじゃないかな。」
激しく降り続ける雨の中で、その言葉ははっきりと聞こえた。その言葉は誠の中に浸遠していく。まったく新鮮な感情だった。
それからは、二人とも一言も発することなく途中で分かれ、それぞれの帰路についた。
人に優しくする、誠は部屋で一人、もう一度考えてみた。
他人のことを考える。そんなこと誠は今までめったに無かった。あったとしても数えるほどだろう。そういえば、自分は他人から優しくされたことがあっただろうか。覚えてはいないが、今考えてみると沢山あったのではないだろうか。自分がそれに気づかなかっただけで。だから、あのぬくもりが新鮮だったのかもしれない。

自分はそういう他人の優しさを、踏みにじってきたのだろうか、お節介であるという理由で。やはりそれは、相手にとってつらい事なのだろうか。自分ならなんとも思わないにちがいない。しかし、自分と他人は遠う。あたりまえのことだ。なら考え方は？　もちろん遠う。なら、相手の捉え方もいろいろあるだろう。
今朝の樋山の見せた笑顔が誠の心をきつく絞める。
他人に優しくすることの意義とは？　それはすぐには見つからないだろう。もしかしたら、永遠に見つけ出せないかもしれない。しかし、その答えを探すことにより少しは変わるかもしれない。これは一つの罪滅ぼしだ、今まで踏みにこつたかもしれない優しさへの。
彼は変われるのだろうか。いやもう変わっているのかな。少しだけではあるが。
窓の外ではいまだに激しい雨が降り続いている。が、遠くの雲間からは、かすかな光が差し込んでくる。

《評》
小説の一部分と思って読みました。若い人の心理はある程度書かれていますが、この分量で一つの短編小説にまとめていのは、なかなかむずかしいと思います。ここでは女の心の動きよりも、誠の生活環境や頑固なところがいくらかよくとらえてありますが、対話の息づかいとか喋り麻がもう少しはっきりしてくるといいですね。
でも、よく頑　張って書きました。これから小説を勉強したければ、大正から昭和にかけてのすぐれた短編小説をたくさん読むことをすすめます。

長谷健賞審査委員会

特別賞

干潟の向こうに

龍　達男

命のゆりかごだった有明海は、今、息をしていない。まさに瀕死の重傷のようだ。

毎年、春秋の彼岸の日に故郷の筑後略を訪ねているが、筑後川の河口の堤防に立ち、干潟を眺めると痛切にそのことを実感する。

特に夕暮れどきの海辺は、風が粛粛として川面を渡り、渚をたたく彼の音も弱々しく、島の影さえ見えない。魚介類を含めた生き物の息遣いもなく、群生していた葦もまばらだ。

百日に照らし出された、ドライブ・ウェーのような堤防のコンクリートの無機質な壁面だけが目立つ。あの豊饒な海の香りは、一体どこにいったのだろうか。

じっとここに佇んでいると、昔日の春先の風景が、潮騒のざわめきのように甦ってくる・・・・・・。石積みの防塁の上に盛土した堤防は野性的な温もりがあった。葦の葉先と子供の背丈ほどに伸びた菜の花が混じり合い、その黄緑色の帯が堤防を包み込むようにして、どこまでも蛇行しながら続いていた。

そっと菜の花を押し広げ、裸足で堤防の上を歩くと、にょきにょきと生え出した幕の新芽が足裏をくすぐった。干潟ではシギやカモが群れ、シオマネキは、ぐちやぐちやと泥を食み、ムツゴロウは、びっくりしたようなどんぐり眼で、額を寄せあっていた。

実家の近くに、漁船の溜まり揚がある。幅二百メートル、奥行き一キロほどのU字型の小さな港。その両側の岸に四、五十艘の大小の漁船が繋がれている。堤防のたもとには張り付いたように漁師の家並みが軒を連ね、小学時代に遊んだ友人たちの家も、そこにある。

このところノリの凶作が続いているが、彼らの家は大丈夫だろうか。

「もう、滅茶苦茶ばい。ノリばっかりじゃなか、カギもアサリもタイラギも、何もかんも、おらんごつなったばい。」

と、友人たちのぼやき声が聞こえてきそうだ。

いずれ専門的な調査が進むにつれ、問題になってる長崎県諫早湾の干拓事業を含めて、河川上流のダム群、農薬、たれ流しの生活雑排水など、有明海の疲弊の原因とおもわれる複合的な要素が特定されるだろう。

「有明海の海こそ、四県漁民が生きる根拠地である。魂が響き合う関係であっても、いがみあう関係では決してない。分断と対立を超えて手をつなげ合えないか―私が願うのはその一点だけである。」との西日本新聞長崎総局長の提言は子供の頃、干潟でおどけたムツゴロウの顔を見、泥を食む力二の舌鼓に耳を傾けながら貝を採った私にとって、切ないまでの郷愁と限りない共感が込み上げてくる言葉である。

一日も早く、かつての母なる有明海が甦り、湾岸漁民のすべての人々に幸せがもたらされることを、祈らずにはいられない。

ところで先日、『地球文明の寿命』（松井・安田共著、ＰＨＰ研究所）という本を読んだ。人類は今、その文明の岐路に立っているとの書き出しから始まって、宇宙、地球、人類を俯瞰的に眺め、その視点から文明の行方を考えていこうとする諭旨には、共鳴できるものがあった。特に両氏の主張のニュアンスが興味深い。

ストック依存型の物質文明（工業文明）に目覚めた人間は、もはや後戻りはできず、破滅への道を歩むしかないという松田氏に対し、安田氏は、いや、フロー依存型文明（農業文明）に美しい世界があったように、人間は新たな文明世界を構築できるのではないか、と主張する。私は双方とも真理を言っているように思う。が、好みと希望から言えば、東洋哲学的な思想の強い安田氏の主張を、私は支持したい。

それにしても、自分のこれまでの生きざまを振り返ってみると、近代物質文

明への希求こそが、人生最大の生き甲斐としてきたことの誤りに気付くのに、私自身、実に六十九年間かかったことになる。しかも、それへの懺悔の気持ちがこのごろ田舎恋しさにつながっていることは、ほぼ間違いない。

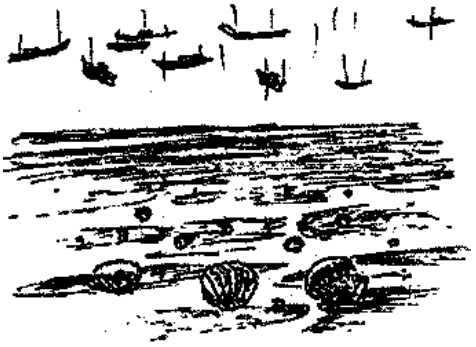
久しぶりに、船溜まりの港を歩いた。まばらに生えている堤防の葦の新芽が、それでも必死に伸びようと真っ直ぐに上を向いている。

昔の貝殻のすえた匂いと潮風が入り混じった、こってりとしたどぎつい空気は、その匂いのかけらもなく、さらっとしている。まるで人工的な大きい箱庭の港のような感じがする。

ふっと、北原白秋の『帰去来』の詩が脳裏に浮かんだ。“山門は我が土産、雲騰る南風のまほら、飛ばまし今一度、筑紫よかく呼ばへば恋ほしよ潮の落差、火照沁む夕日の潟。盲ふるに、早やもこの眼、見ざらむ、また葦かび、籠飼や水かげろふ。帰らなむ、いざ鵲かの空や櫨のたむろ、特つらむぞ今一度。故郷やそのかの子ら、皆老いて遠きに、何ぞ寄る童こころ”

もし、白秋や長谷健氏が存命であれば、その生家の近くの船溜まりを見て、どんな詩と文章を書かれたことであろうか。

干潟の向こうに、そんな思いを馳せながら、私は突堤の端に腰を下ろした。



《評》

なつかしさと洞察力とが一つに融合した、重量感に富んだすぐれた文章でした。

私も同じ年代で近くの三瀦郡に生まれていますので、有明海の現状に心を痛め、明日はどうなっていくのだろうかと、郷愁をつなぎながら思い悩むことがあります。

この文章を読みながら、自然と文明の衝突が、具体的に有明海の上にも現れていることを改めて思い知らされました。そして、この文意に共感しました。

松永　伍一

特別賞

横山先生

古賀　雁来紅

ボールを叩くラケットの音、気迫十分の掛け声、それらが秋晴れの青空に研して誠に爽快である。通りかかった私は藤棚の下で杖を止めた。「お花」の由緒あるテニスコートでテニスを楽しむことの出来る恵まれた人達はいかなる星のもとに生まれたのだろうか、等と羨望と敬愛の思いで溌剌と動く人々に見惚れていたのである。

突然、逸れ球が金網の僅かな隙間をくぐって勢いよく藤棚の下に飛んできた。私は反射的にボールを拾った。ボールを追ってきた人に投げ返す。受けた人は「有り難う」と言ったが、なにを思ったのか

「おいくつですか。」

と訊ねる。

「九十二。」

「九十二才！　これは素晴らしい。」と両手左右に大きく開いて驚く。九十二才がそんなに素晴らしいのか、私にはよくわからない。その人はボールをコートに投げ返して私と向き合った。

「これからは自由に生きて下さい。自分の好きなことだけする。嫌いなことは一切せぬことです。」

面白い。言論の自由、思想の自由、就職や結婚の自由、その他いろいろの自由についてよく耳にするけれど、嫌いなことは一切せぬという自由については聞いたことも、考えたこともなかった。

「あなたは？」

「他の人に迷惑はかけない、というルールだけは守ること。義理や世間体（せけんてい）わづらわしいお付き合い等には関係しないことです。年寄りは一つか二つ、病気をもっていて用心深く生きている人が殆どで、病気を持っている

人は自由には生きられない。それがあなたは出来る。素晴らしいことです。折角健康に恵まれたのだから一日一日を楽しく生きて下さい。」
素晴らしいという言葉の意味が少しわかったような気がした。
「あなたは？」
「横山です。若い頃アメリカで暮らしたこともあるが、アメリカの人達は約束は守る、自分の言葉に責任を持つ、他の人に迷惑かけないなど社会的ルールをよく守る。そして自分の自由を非常に大切にすると共に他人の自由を尊重する、いい国です。若者たちは老後の自由な生活に憧れて、希望をもってまじめに働いている。日本も早くそうならねばならぬ。」
と言って横山さんはコートに向かって行かれた。
あれから一ケ月。その日も美しく晴れた日であった。数人の人達がコートに集まってコートの整理をしていた。テニスの練習日と思われた。私はコートに近づいた。
「横山さんは？」
「先生ですか。先生は今日は見えません。」
「先生は久留米にお住まいですが、来られる時は必ず前の日に連絡されます。」
みんな先生、先生という。私は知らぬが佛で横山さんなどと失礼な呼び方をしていたようだ。みんなの話を要約すると
「先生は沖の端生まれ、昭和初期には伝習館のテニスの名選手として活躍され、医学の専門学校に進学、更にアメリカに留学されて医学を深く研究、久留米大学の招聘によって帰朝。以来、大学教授としてこの道に精進された。八十才近くなられた今日も研究を続けておられる。」
先生のプロフイルが明らかになった。私ははからずも学識経験豊かな、そして、高潔な人格者の先生のご指導を受けた。先生が沖の端お生まれということも、わがことのように嬉しかった。今後は先生の片言隻語も忘れないで、一日一日を楽しく生きたい、と思う。
今からでも遅くはない。

《評》
簡潔で内容の濃い文章です。イメージが鮮やかで、しかも明るく、描かれた雰囲気の裏に生の強さと知性のひらめきを発見することができました。
対話が始まっても相手が誰だかわからないというのもおもしろく、やがてその人が横山先生だとわかり、作者がゆったりと納得していくのも、読者へのあたたかい配慮と受け取りました。健やかに生きておられる二人の顔が、読後にくっきりと脳裡に焼き付きました。うれしいことです。
松永　伍一

第五回長谷健賞＝平成十四（二〇〇二）年度

長谷健賞大賞

郵便受けの向こうには

相模原市立大野北小学校　六年　竹森　香以

冷たい風がまとわりつき、氷のかけらがふきつける――。涼が両親の元を離れて祖母のいる山奥の村に移ったのは、そんな冬のある日。不安がなかったわけではないが、新しい土地は涼の心をおどらせた。が、なにもかもが上手く行くはずなどなかったのだ。

ことの始まりは転校初日、自己紹介の時。「僕の名前は前西涼です。こちらにはまだなれていませんが、よろしくお願いします。」そう言った涼を呆然と見つめたのはクラスメイトたち。先生も困っている様子。

「あの、僕、なにか言いましたか。」涼の問いに、困惑しながら先生は言った。

「うーん。いや、前西は、あたり前やけどむこうの言葉で喋るんやな。」

「むこう」というのが住んでいた東京を指すのは涼にもわかった。周りが驚いていたのは自分が話す言葉と涼の話す言葉が違っていたからだろう。互いの言葉が理解できない訳では決してない。でも、涼は自分がとてつもなく遠い所に来てしまったように思った。

時が過ぎても涼とクラスメイトたちの間にできた「溝」は広がるばかりだった。無理に東京の言葉で話そうとする先生。どこかよそよそしいクラスメイト達。続かない会話。そして、孤立する涼――。そんなクラスをよそに、季節はめぐり、夏は訪れた。

夏休みといっても、友だちも兄弟もいない涼に遊ぶ相手はなかった。庭に咲く季節外れの紫陽花を、どこか周りとずれた自分と重ねずにはいられなかった。

たえられずに庭に背を向けると、机の上の母親からの手紙が目に入った。それは、涼が引っ越してからもらった最初で最後の手紙だった。それきり、両親からは全く連絡がない。あれほど手紙を送ると言っていた友達からはとうとう一通も来なかった。もう、涼のことなど忘れてしまったのかもしれない。そう思うと、涼は無性にさびしくなるのだった。

その時、庭の方でなにか物音がした。驚いて庭を見やると、走って行く人影が見えた。

「待って！」

反射的に涼は声をあげた。そして、人影のあった辺りへ急いだが、そこには誰の姿もなかった。

何があったのかわからないまま辺りを見ると、郵便受けには何かはさまっているのが見えた。手紙のようだ。さっきの人物が持ってきたのだろうか。中を読むと、確かに涼あてだ。「前西君へ。お元気ですか。暑いけれど体に気を付けて。」

たったそれだけの内容。差出人もわからない。でも、突然届いた手紙に驚きながらも、涼は嬉しさを隠せないのだった。

次の日も、その次の日も、手紙は届いた。いっこうに差出人はわからないし、いつもたった二、三行だ。それでも、涼への手紙であることにかわりはないし、涼にとって一人ぼっちの夏休みのただ一つの楽しみだった。

夏もそろそろ終わりを告げようというある日のこと。蝶を追いかけて庭に出ていた涼は郵便受けに手紙を入れようとする少年の姿をはっきりと見た。それは、クラスメイトの光だった。

「光君？どうしてここにいるの？」

涼が驚いて声をかけると、光はびくっとして涼の方をふりむいた。

「前西！すまん。見つからんようにしてたんやけど・・・・・。」

「それよりいつも手紙をくれたのは君だったの？。」

「いや、その、手紙はみんなで書いたんよ。・・・・前西が学校でさびしそうにしてたんは俺らの責任やから・・・・・・。」

光の言葉を聞いて、涼は涙がでそうになった。そして、今までずっと一人ぼっちだと思いこんでいた自分が情けなく思えてきた。

二学期が始まったらみんなともっと仲良くなりたい。この土地のこともっと知りたい。涼はそう思った。

昨日まで激しくうなっていた台風は、さびしい気持ちと一緒にどこかへ行ってしまったようだ。庭では向日葵が残り少ない夏の光を受け、辺りに金色の光の粒をまき散らしている。八月はもう終わるけれど、僕らの夏は終わらない。

《評》

ひとりの転校生の不安と孤独の感じが淡々とした書き方なのにきっちりと伝わってきます。生活環境がちがえば生き方も当然変わってきますが、そのうちにおたがいの友情が芽生えていく姿が手紙を通じて浮びあがっています。まさに郵便受けの向こう側に人間同士の信頼の輪が光り始めていたのです。

ときは夏。移り行く季節のなかで心にも希望が生まれてきます。文章の結びの数行は見事な表現で、私はすっかり感心しました。「八月はもう終わるけれど、僕らの夏は終わらない。」から明日の輝きが予感できます。

松永　伍一

福岡県知事賞

「freebird」～また自由に翔べる様に～

城東高等学校　一年　田中　綾乃

「学校行きたくねぇんだ・・・・・・。」

携帯の向こうで、ため息混じりの声が私の耳に届いてきた。

「頑張んなきゃ、ダメじゃん。」

“頑張る”という言葉が一番キツいとは知りつつも、思わず口をついて出てしまう。

五月中旬、周りの風景はまぶしいくらい緑をはじいて爽やかなそよ風の中、ショウヘイだけが春のあの日から歩き出せないでいた。

“俺様”が口癖のショウヘイは、りすの様な愛くるしい外見とは裏腹に、ライオンの様な激しさと猛々しさを持った同級生だ。なにかと自分に自信を持てない私とは違い、いつでも肩で風を切って歩く自信家だった。

県内でトップの公立高校の願書を出す際も、自分の学力と相談しつつ最後まで迷いに迷って決めた私とは対照的に、一貫してその高校しか眼中にないといった感じで当然の様に決めたショウヘイ。時にそんな姿が妙にむかつく事はあったが、その一方で本当はうらやましくもあったのだ。

互いに相手の成績を意識しながら、けなしあい、励ましあい、試験当日を迎えた三月。不安と緊張で肌が粟立つ思いを必死で押さえ込み、今まで蓄えた全ての力を答案用紙に注いだ。

試験から一週間後、ぬける様な青空の下、合格発表が行われた。自分の番号がない事を凍りつく様な思いで確認し、周りで湧き上がる歓声の中、私は自分の入学を許さなかった憧れの高校の門を足早に立ち去った。

“死にものぐるいの努力は必ず報われる”と連呼した塾の講師達“これだけ頑張ったんだから絶対に大丈夫”と肩を叩いた両親。嘘つき、嘘つき・・・・・・。

自分の部屋で声を押し殺し、ただただ疲れ果てるまで泣き続けた。
翌日、同じ不合格者の友人たちの中に、あのショウヘイもいた事を人伝えに聞いた。

自分が望んではいなかった私立高校の制服に袖を通し、それでも私は前を向いて歩き始めた。
そんな中、久しぶりに男子校の制服に身を包んだショウヘイとばったり再会したのだ。
「絶対ここでは終われない。」
彼は確かにその時そう言って唇をかんだ。私も同じ気持ちだと伝え、互いの携帯のアドレスを交換し、よきライバル関係を続ける為、近況報告をしあおうと約束し、別れた。
あれから一ヵ月後、彼はまだ現状を拒否したまま、今やるべき事を理解してはいても、やる気を奮いたたす事ができず、苦しみ、悩み、立ちつくしている。
志望校に合格した友人たちとの交流を絶ち、かといって自分の高校で積極的に友人を作るわけでもなく、たまにバスの中から登下校中の姿を見かける時も、常に独りで自転車を走らせていた。
あの発表の日まで、掌の中に大事に握っていたキラキラした夢も希望も目標も、全て自ら封印し、はじける様な自信は、一体心のどこに閉じ込めているのだろう。
彼から毎日のように来るメールには好きな音楽や、野球や、サッカーの話題はあっても私が一番聞きたい“今、学校楽しいぜ！”の一言は決してないままで、私は胸の奥がツキンと切なく痛み、ショウヘイの心に刺さった蒼いかけらが見える様な気がして、毎回携帯を閉じるのだった。
「立ち直ってないねぇ、元気ないよ――。」
たまに冗談っぽく核心に触れようとすると、
「うるせぇ、いらん世話。」
と笑うショウヘイ。でも、本当は笑ってなどいない事ぐらいすぐにわかった。
彼がさまよっている挫折とプライドの波の苦しさを私は知っている。力及ばず勝負に負けたと認めるのは、心が潰れそうなくらいに痛い。本心を言えば私だって心の底から全て納得できたわけではないのだ。私の心の中にだって蒼いかけらは刺さったままなのだ。折れた翼はいつかは癒えても傷跡は残る。
同情する余裕など私にはない。ただ同じ痛みを経験した友人が未だにねじ曲がった翼をひきずりながら、飛び発てないでいるのを見て見ぬふりは出来なかった。
色んな未来への期待や想像を背負って、まさに大空へはばたこうとした瞬間、羽をもがれ、地面に叩きつけられる思いをした二〇〇二年十五歳の春・・・
でも、時間はいつでも確実に流れている。違う道をまた自ら手探りで捜しながら新しく歩きださなければ。新たな扉は開かれたばかりなのだ。
お互い心の支えになり、横で併走しながら相手を励ます事は出来るが、最後に翔ぶのは私自身であり、彼自身だ。私の滑走路の準備はできた。

「何でもいいから、話をしようね。」
そう言って携帯を切った。
傷はもう治ってるはずだよ、空はそこに広がってるよ、翼を伸ばしてみてよ、掌の中の自信を翔ばそう。
私が心の中で叫んだ精いっぱいのエールはショウヘイに届いただろうか。

《評》
誰にも未来が待っているのですが、その生体はまだつかめません。だから、あせったり、すねたり、嘘をついたりするのです。とりわけ思春期にはその傾向がきわだってきます。
志望校に行くことのできなかった「私」と「ショウヘイ」との心の揺れが、冷静な目で見事に描き出されています。「折れた翼はいつかは癒えても傷跡は残る」の前後の文章はテーマをしっかり言い当て、終わりの方の「空はそこに広がってるよ、翼を伸ばしてみてよ」に生き生きとつながっています。とにかく文

章表現の豊かさに私は感心しました。
松永　伍一

福岡県教育委員会賞

鳥が渡る日

鈴木　由美子

十一月にしては暖かな朝、島の中学校の松葉を揺さぶるように、教室から歌声が響いています。今日は合唱コンクール本番の日。

「うまくなったな・・・・・・。さすが三年生！」

鈴木先生は教室の隅っこで一組の子供たちの歌声にじっと耳を傾けていました。

「あっ、渡り鳥が！あんなにいっぱい！」

突然、歌の途中で秀美さんが指さしました。

雁でしょうか？

窓の外には、百羽以上の大群となって、渡り鳥が今まさに渡っていくのが見えました。

「あんなにたくさん来るのって、初めて！」

窓から身を乗り出さんばかりに叫んだのは、秀美さんと大の仲良しの和ちゃんです。

いつの間にか、歌そっちのけで窓際にみんな集まっています。ゆったりと、朝空を上下に区切りながら、飛んでいく渡り鳥・・・・・・。

「ほら、見て！縦に一列に並んで、一緒に飛んでいきようよ。」

「はんとやね、一番前が隊長やろか？」

「まるで俺たちみたいや！」

後ろからふいに、元樹君の太い声がして、思わずみんなはうなずきました。元樹君の傍らにいた隆君も、じっと空を見つめています。

あっという間に渡り鳥は干潟を目指し飛び去り、後には薄曇りの空が広がるばかりです。

鈴木先生の胸の内にも、この日までのことが柔らかく広がっていくのでした。

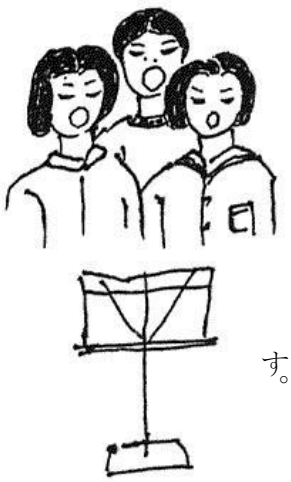
「たいへんですよー！鈴本先せーい！」
元気者の梅野先生に驚かされるのはいつものことなので、鈴本先生は呑気に構えています。
「隆君が、食べて、教室で給食を食べてるんですよう！」
聞くや否や、まだハァハァ言ってる梅野先生を置き去りにして、鈴本先生は二階の教室へ駆け出しました。
一歩も保健室から動かなかった隆が・・・・・・どうして・・・・・・どうして急に・・・・・。
二年近く登校しなかった隆君が、保健室に来るようになって半年。うれしさともどかしさが交差する毎日・・・・・・。
混乱状態の鈴本先生を迎えたのは、いつもと変わらぬ、ぺちゃくちゃたわいのないおしゃべり、楽しそうに給食を食べているみんなの姿でした。
「どうしたんすか？先生、遅かったですね。」
三杯目のいつものおかわりをよそいながら、にこにこ顔の大村君が尋ねます。
「先生！今日の給食うまいよ！」
揚げたレバーを突き刺して、元樹君が大声で叫びました。と、その声のすぐ横に隆君は、ぎこちなく座っていました。少し緊張気味の面持ちで・・・・・・でも、何とも言えず口もとがほころんで見えます。
「先生、私たち演技上手でしょ！隆君が教室に来ても普段通りにするって約束してたんよ。」
いたずらっぽくくるくると黒い瞳を動かしているかんなさんの打ち明け話に、鈴本先生だけが、一口の給食も喉を通りませんでした。
この日以来、隆君は少しずつ教室でみんなと過ごすようになりました。
そして、迎えた秋の最大行事合唱コンクール。一度も参加したことがない隆君は、人前で歌うなんてと尻込みするばかり・・・・・・。しかし、リーダー元樹君とゆりちゃんはひるまず、あの手この手で練習に誘います。程なく、歌の指南役をかって出た生徒会長の直人君が、隆君にぴったり寄り添って、野太い声を響かせるようになりました。
秋の深まりとともに、皆の歌声も日に日に、空高く澄んでいくようでした。
幾つも思いを巡らせながら、鈴本先生は、ステージに上がる一人一人に声をかけます。
「真紀ちゃん、落ち着いて・・・・・・大丈夫よ。」
「先生、うち・・・・・・こわい・・・・・・」
ピアノ伴奏の真紀ちゃんの手は、ひやっとするほど冷たくなっていました。思わず、先生はその震える指先をぎゅっと握りしめました。
いもうとよ
今夜は　雨が降っていて
お前の木琴が聞けない
静かな歌い出しの「木琴」は、空襲で死んだ妹を悼む兄の思いを歌った混声三部合唱曲です。戦争を知らない教師と子供たちが、どこまでその怒りと悲しみを伝えることができるのだろうか。本番の日まで悩み続けた鈴本先生の目に、ステージの二十七人が写りました。
前列の一番端で、直人君の陰に隠れるような隆君・・・・・・。下向き加減の顔、でも確かに口を動かしています。励ますように、鈴本先生も口ずさみ始めました。
早く街に赤や青や黄色の電灯が
電灯がつくといいなつくといいな
上気した頬、顔を真っ直ぐ挙げた梨歌ちゃんの透き通るソプラノが響き始めると、会場から拍手が沸き起こりました。去年は、声がかれて悔し涙だったのが、うそのようです。
あんなに　いやがっていた戦争が
戦争が　戦争が　戦争が
お前と木琴を焼いてしまった――
クライマックスの強く悲しい歌声は、大きなうねりとなり、すべてを揺さぶりました。
その時、聞こえていたはずのピアノがはたと止まっていることに、鈴本先生ははっとしました。凍りついたかのような一瞬――。
しかし、指揮者の元樹君は平然と、いや一層力を込めて、タクトを振り続けています。すばらしい歌声は、何事もなかったよう・・・・・・
誰一人、気づかないのでしょうか？

「いいや、そんなことはない！真紀ちゃん、元樹君がんばれ！みんな、がんばれ！」
鈴本先生には、心の中で祈ることしかできません。永遠に続くように思われた恐ろしい時間も、それほどもなかったのでしょう。
程なく、ピアノが聞こえ始め、最後の寂しげな雨音の余韻を残しながら、終わりました。
割れんばかりの拍手、歓声、大きなため息。
第二位という結果に、泣き崩れた真紀ちゃんの肩を抱いて、一緒に泣いているゆりちゃん、秀美さん・・・・・・。
「うちのせいやん、ピアノ失敗したから・・・・・・・」
「真紀のせいやない！それより、みんなで本番歌えたから、それでいいって！」
「俺やら、賞とかどうでもよくなってきたし、俺たち的には、最高の出来やったね！」
元樹君の照れたような、でも自信にあふれた笑顔に、ふっと何かが軽くなったような気がします。
「僕、全然気づかんやった・・・・・。皆の声しか聞こえんかった・・・・・・」
ぼそっとつぶやいた隆君の一言に、真紀ちゃんはやっと微かに微笑みました。
「また、皆で一緒に何かしたいね。」
負けたのに、こんな気持ちは始めてでした。
雲はいつの間にか切れて、小寒い秋風がザワザワと松葉を揺らしています。しかし、それにさえ心地好さを感じられるのが、皆一様に不思議でした。
その合唱コンクールの数日後のことです。
「待ちなさい！君たち、どこ行くの？」
音楽科の安中先生の甲高い声です。バタバタと走りさる足音は、幾つも重なってどうやら保健室へのようです。鈴本先生は、何やら胸騒ぎがして、立ち上がりました。
果たして、保健室のソファには隆君がぽつんとひとり・・・・・・。養護の月山先生も心配そうです。鈴本先生は、膝を着いてそっと近寄りました。
「隆君、どうしたの？」
「・・・・・・・・・・」
「音楽の授業、受けたくないのかな？」
「・・・・・・・・・・」
「きょう歌のテストなんです。だからたぶん」
困惑している先生に助け船を出そうと、駆け寄ってきたかんなさんがささやきました。
おびえたような目、こわばったままの顔。鈴本先生は、隆君の膝にそっと手を載せて、
「皆と一緒に歌ったよね。上手だったよ。」
微笑みながら言いました。隆君の長いまつ毛がじんわりと濡れ、何度も何度も瞬きします。
一人二人とソファの周りは、いつの間にか皆でいっぱいになっています。口々に隆君に声をかけ続けますが、頑として動かない隆君。
皆にとっては越えて当たり前の小さな坂道も、隆君にとっては自分との大きな闘いなのでしょう。
とうとう、皆は音楽室に戻らざるを得ませんでした。残念そうに振り返り、振り返り戻る顔・・・・・・。
「隆、俺たち、ずっと待っとうけん！」最後まで粘っていた元樹君が、言い残して出ていきました。実は、元樹君の弟も学校に行っていないと聞いています。だからこそ、元樹君の一言は、先生の胸にずーんとこたえました。
「隆君、ステージで歌った隆君は、二年前の隆君じゃないよ！ずっと強い強い隆だよ！」
先生は、隆君の両手をぐっと握りました。隆君がその手を、わずかに握り返したように感じました。
「僕、風呂場で練習したんだ・・・・・・毎晩・・・・・・」
先生はうん、うんとうなずきました。ついに、隆君は立ち上がりました。そして、ゆっくりと半歩歩き出しました。
その瞬間、ワアという歓声と共に、どこに隠れていたやら、皆が一斉に駆け寄ってきたのです。驚いている隆君を抱えるようにして、あっという間に外へ駆け出していきました。
何が、隆君を立ち上がらせたのでしょうか。自分自身の底なる力、あるいは

大人になったら失われてしまう純粋な絆の力でしょうか。
もしかしたら、あの渡り鳥が不思議な力を隆君と皆に授けてくれたのかもしれません。
犬走りを数珠繋ぎになり、飛ぶように走り抜けていく子供たち・・・・・。先頭はやはり、元樹君のようです。
晩秋の鈍い薄陽の中、あの朝のように、渡り鳥は、鈴本先生の心の中を飛び続けているようでした。

《評》
渡り鳥の大群が空を飛んでいく美しいイメージは、ここではイメージ以上の役割を果たしていてテーマを一段と深く、象徴的に光らせています。隆君に寄せるクラスメイトたちの心理も、ひとりひとり上手く書き分けられており、それでいて全体の雰囲気をこわさぬ描き方はさすがです。
隆君の生き方をクローズアップしすぎないで、クラスメイトたちの動きや語らいによってふんわりと表情をのぞかせる手法をとっていますので、渡り鳥のイメージが背景としても効果を発揮して、読後に爽やかさが残ります。

松永　伍一



東京都台東区長賞

タイムトンネル

三橋町立三橋中学校二年　山田　美和

中学二年生の夏休みのことである。
「そろそろ、小さいころの物は整理しないと部屋が手狭になってきたね。」
と、母の声がする。ベビーダンスやおし入れの中には、私の生まれる前からの品物や洋服が山程ある。母子手帳、保乳ビン、お宮参りの着物、御湿、からい帯。下の段のひき出しには、幼稚園の頃から小学校六年生の頃までにかけての作品。手提げ、ベビー服。三、四センチ程の毛糸の靴下。はっきりは記憶にはないけれど、アルバムの中によく写っていた洋服。
押し入れの上段には、ガラガラと音が出るおもちゃや、外で水遊びをした時に使っていた象の形をした如雨露。どれもこれも、私が生まれてきた時からの私の生きてきた証。
母は、その一つ一つを部屋に広げながら、独り言のように私の思い出を語ってる。母の声を聞きながら、私は、不思議な気持ちになってきた。そう、タイムトンネルに入って過去へ戻るような――。

私がこの世に生まれた日が父と母の人生において最も幸せな日だと母は言う。確かに、ベビーダンスから出てきた品物一つ一つを見たり、私が幼い時のビデオや両親が作っている、私用のアルバムなどから見て、父と母そして祖父母のあふれんばかりの愛情に包まれて、大切に大切に育てられてきた。
小さな両手を重ねて「マンマ　マンマ　どぉーじょ。」（どうぞください）という片言の言葉が家族を大いに喜ばせたそうだ。その年の両親の年賀状の言葉にはこんなことが書いてあった。
燦々ト降リ注グ真夏ノ太陽ノ
光ヲ受ケテ生マレタ

向日葵ノ女ノ子
小さくても逞シイ命ノ炎ハ
何ト明ルク周リヲ照ラシテ
クレルコトダロウ

この年賀状の言葉を読んだ時、私の心の中から熱いものが込み上げてきた。それは私から両親への産んでくれたことへの感謝ならまだしも、両親の私への感謝であったからだ。

私は生まれてきただけでも不思議に思うことがよくあるのと同時に、私が生まれることはどういうことだろうか。私はよくこの問題に立ち止ることがある。家族を太陽のように照らしているということなのだろうか。又、単なる家族の一員としての存在なのだろうか。一つの命がまた次へのバトンを渡す存在としての私なのだろうか。

私が生まれるとはどういうことか。

人間は、人と人との間で生きるということを聞いたことがある。つまり、人と人との関わりの中で生きていくということなのであろう。そう考えると、家族も含め、地域や社会、世界の人々との関わりの中で生きるということになるのではないだろうか。

愛情あふれる家族の中にいて、私はその愛情を受けるばかりではなく、人と人との関わりの中で愛情を表現していることに生まれてきた価値があると思う。

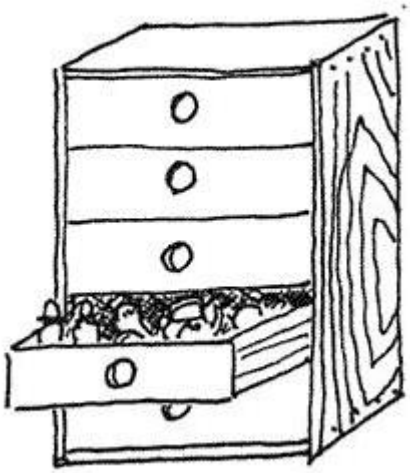
タイムトンネルの中から、ベビーダンスの前にいる母の独り言がまた聞こえてきている。

小さいころの思い出がつまった一つ一つの品物を整理したり、処分したりするのは、母もさみしそうだ。私もさみしさを感じる。しかし少しずつ、自立をしていかなければならないということなのかもしれない。

《評》

いのちは両親からいただいたものです。そのことをときどき思い出すと、当然感謝の念が湧いてきます。作者は自分が小さいとき使った道具を見たり手に取ったりしながら、その当時の両親がどんなに愛情をもって育ててくれたかを考え、それらのイメージを手がかりにして、感謝の思いをつのらせています。そして、そこで留めないで「私が生まれるとはどういうことか」という問いかけにまで高めています。そこが大切なところです。もう要らなくなった道具を処分することと、自立の覚悟をもつこととをつないでいるのもいいですね。

松永　伍一

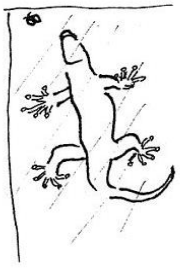


東京都台東区教育委員会賞

出窓の境界線の外から

柳川市立柳城中学校　二年　山科　可珠子

「ほら見て見て。食べた。」
「かわいか。ほんとによく食べるね。」
僕は、半年前この家が建った時からここに住ませてもらってる。後ろには広い田んぼや畑があってエサが山ほどいるんだ。そして、今、僕が住んでいるのは台所の出窓のガラス。僕は、ヤモリである。
ある日、僕はちょっとおもしろくなって家の中に入ってみたんだ。そしたら大きな叫び声とともに僕は“ほうき”と呼ばれる人間の武器で外に投げ返された。とてもびっくりでもうだめかと思った。あれ以来、僕は人間が怖かった。でも、このごろ何か変なんだ。僕が窓に登場すると熱い視線を感じるし、大きなえものをしとめた時は、家の中から拍手までもらうことがある。それで、僕も家の中の住人のことが知りたくなってのぞいてみた。
ここのご主人は、よく言われる仕事人間で土、日もなく働いている。よく働いてよく食べ、少しの時間をおしみ三秒で寝るという、すごく健康なご主人である。とても太っていること以外は・・・・・・。この太ったご主人の奥さんは、甘いものが好きで「アーモンドチョコレート」やらをよく食べる。それなのに太らないから不思議でたまらない。このごろ、よく子供に白い髪の毛を抜かせているのを見る。蚊にさされたところまで子供にかかせている。よく子供をつかう奥さんだなぁとも思った。それに、この奥さんは、子供を叱る時に手の方が早く出るようで、バシンッとたたかれる瞬間を何度も見た。結構、強暴なようだ。
この家には、あと老夫婦と子供が二人いる。この老夫婦は、この家によく来て孫のめんどうを見ている。おじいさんの方は、少々ぼけているが、孫にはやさしい。健康ブックを手放さず、ビタミンやカロチンなど健康食には、人一倍詳しいという特技を持っている。
おばあさんは、自分で「出張女中」と名のり、この家に来ると、すぐに散らかっているのを片付けて、おいしい夕食を作ってくれている。僕は食べることはできないが、「おいしいおいしい」と家の中から聞こえてくるからそうだろう。家の中がきれいなのは、出張女中のおかげだと僕は思う。あんまり働き過ぎるから、腰が曲がってしまっている。それでもこの出張女中は、今もなお文学少女で、本の中に埋もれ、たえず文章をしたためている。
ここの上の子は、よく食べるよく食べる。一日中、口が動いている。僕もよく食べるから、その子とそっくりだと言われる。よく食べるくせして、すぐ「太った太った」と大さわぎしている。そんなに気にするなら、食べないといいと思う。
下の子のほうは、もう四年生にもなるのに、まだまだ甘えんぼうだ。よく兄弟げんかをするが、なかなか姉にはかなわない。たまに、かわいそうになる。
最初、僕は人間に対して恐怖心を抱いていた。でも、何もしなければ何もされない。逆に、僕が大きな虫を食べると、家の中の人々は、大変僕をほめる。太っていたり、強暴だったり、少しボケていたり、腰が曲がってしまっていたり、兄弟げんかは多かったりするけど、この家族と僕は出窓の境界線をこわさない限りとても平和に暮らせている。今、僕はとても幸せだ。



《評》
ユーモアがあって、とても楽しい作品です。タイトルを上手く考えつきましたね。「僕はヤモリ」でも悪くはありませんが、やっぱりこの方がいいです。
ヤモリによる人間観察はなかなか鋭いので、この家庭の生きざまがくっきりと見えてきてそれぞれがみんな個性に富んでいます。しかもヤモリに見られていると気づかずに行動していますから、いっそうおかしいですね。最後にヤモリが「この家族と僕は出窓の境界線をこわさない限りとても平和に暮らせている」と感じるところで、ホッとします。

松永　伍一

福岡市教育委員会賞

カラフル

文京区立文林中学校　三年　鈴木　千鶴

例えば、この空が黄色だったら、きっと太陽なんて必要ないくらい、毎日が明るくなるだろう。空の青さを別の色に変えてしまうと、それはもう空とは呼べない。定着した色を変えることは出来ない。この青は、空のものだ。そう、例えば、世界が無色だったら。そんなことは到底ありえない話だが、考えただけでぞっとする。色の無いそんなつまらない世界だったら、そこに人は生きていけるだろうか。どんな色も、いつかは色褪せてしまうが、決して消えることはない。不変のものなんて、人を退屈させるだけだ。空気を吸い、水を飲み、色に包み込まれて世界は生きている。

「黄色」「青」この二色から受ける印象はそれぞれ、次のようなものが多いのではないだろうか。元気、明るい、暖かい。暗い、冷たい。黄色や青に限らず、どの色も人に与える印象は大きい。そして、強く心に残った色を人は美しいと、そう感じるのではないかと思う。又、ほっと落ち着いたり、和ませてくれたり、勇気付けてくれる色がある。家族や友人がかけてくれる言葉に等しい力が、それぞれにはある。色は、人の心や気持ちなどの目に見えない繊細なところに、確かな影響を齎してくれる。色は、不思議な力を持っているのだ。

それは唐突に、私の言葉を奪った。昨年の夏休みに参加した四阿林間学校で目にした景色。私はそれを忘れることが出来ない。塗りたてのペンキのように青く、大きく開けた空。そこに所々浮かんだ雲は、まるで新品のキャンバスの白だった。空を取り囲む山々の深緑、焼けつくアスファルトのグレー、道端に揺れる草木の明るい緑色。真夏の色はどれも、目が痛くなる程に鮮烈だった。そして儚げだった。手付かずの、そのままの色、自然の色を見ていて不快に思ったことは一度もない。それどころか、何故だろう。涙が溢れてくるのだ。喜び、悲しみ、痛み、怒り、これらのどれにでも当て嵌らない感情が、込み上げてくるのだ。汚れのない空気の中、自然の色に我を忘れた。言葉にして表せない存在が、私の前に広がっていた。

この世界の無数の色はきっと、途方もない遥か昔から全てを彩ってきたのだろう。それはこの先ずっと変わらず、遠い遠い未来までへも続いて行くのだろう。人は色の中で生き、人は色を大きくする。どんな色も、この地球上の何かを造っている。街を歩けば、溢れる色の波。どうして「世界は美しい」と、言えるのだろうか。それはきっと「世界は色で満ちているから」だ。

そう例えば世界が無色だったら。そしたら私は、筆とパレットを持って思い切りカラフルに染め上げてみたいと思う。

《評》

私はこの文章を読んでかなりおどろきました。空が青色であると決めておりますから、もし別の色であったらどうなるかと、正直なところ考えたことがなかったのです。

あなたは鋭い感覚と想像力を持っている人で、色が人間の心をどんな風に変えているかについて書いています。そして頭の中でだけでなく四阿林間学校での体験を記したことで、あなたの感じ方があなた独自のものだとわかって、私は安心しました。だからこそ、途方もない昔から遠い未来につづく変わることのない色への、あなたの思いを信用します。

松永　伍一

柳川市長賞

地雷について

柳城中学校　三年　蒲池　桃子

「地雷」、最近よく耳にする言葉です。先日テレビでアフガニスタンの子供達の様子を放送していました。その子供たちの中には地雷によって手足を失ってしまった子供もいました。授業中、子供たちは先生の話を一言一句聞き残さないように勉強しています。取材の方がその子供たちに「夢は」、と尋ねると「先生になりたい。国を良くするために手伝いたい。」と笑顔で答えていました。あの子供たちの目がいきいきしているのを私は見て胸が熱くなり「地雷」の事を知りたくてインターネットで調べて見ました。今まで知らなかった地雷の怖さがわかってきました。

もし、自分自身が地雷を踏んでしまったら人生はどう変わるだろう。今の私たちには、このような状況がつかみにくいかもしれません。世界でもアフガニスタンやアンゴラ、カンボジア、イラク、ラオス、の国で地雷が最も多く残っていて、今でも二十分に一人の割合で地雷によって命を奪われ傷ついている人がいるのです。そして、世界中にはまだ一億個以上の地雷が埋められており、それらを撤去するには三十世紀までかかるともいわれています。

私はなんのために地雷を作っているのだろうと不思議に思いました。地雷とは人を殺傷する事を目的として使われ、地中に埋めてその上を通る人や戦車を爆破する装置の事で、その多くが民族同士の争いに用いられているそうです。地雷を作るのにはそれ程お金もかからず効果が長いからです。実際に被害を受けているのは地上を遊び回ってる子供たちで、戦争が終わっても地雷はそのまま放置されることが多いので被害にあうのは子供たちで後をたたない、と載っていました。苦労して一個除去しても二十個またどこかの国で作られ埋められているという状況はとても悲しいです。

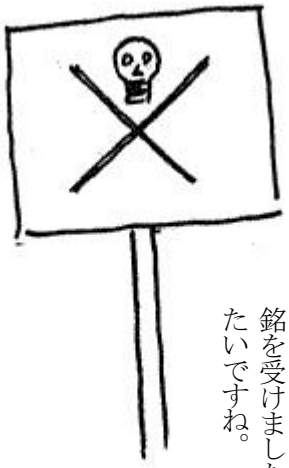
私は、地雷で苦しめられながらも、ノートや鉛筆ペン等を持たず不自由な生活をしながらも国をよくするためにひたむきに勉強している子供たちの姿を見て感動しました。私は今の自分たちがどのくらい贅沢かがわかりました。「勉強しとなか。」とか平気で言っていた自分がおかしく思えました。勉強できる事がどんなに幸せな事かよくわかりました。私は地雷によって傷つく人がこの世の中からいなくなってほしいと思います。そして、世界中の人たちがお互いを認め合い、この世から戦争をなくし平和な社会を築いてほしいです。「大地、肉体、そして生命。壮大な資源の浪費に世界はほとんど気づいていない。」の言葉を残してなくなった英国のダイアナ妃の地雷撤去活動を世界中の国々で取り組んで欲しいです。地雷を撤去するには、一年間で三七〇〇万円位かかるそうです。私も三年生最後の生徒会活動でユニセフ活動に力をそそぎたいです。

《評》

地雷に限らず、人間の作る武器は人間を殺傷することを目的としています。なんでこんな恥知らずなことをするのでしょう。とりわけ地雷はやっかいで世界のあちこちでいまもその犠牲になって苦しんでいる人がたくさんいます。

あなたのこの文章は、地雷がどういうものかを調べ、こんな危険なものをどうしてつくるかを憤り、アフガニスタンの子供たちの悲しみに心を痛め、自分でもなにかできることをしたいと思いを述べたもので、わたしも感銘を受けました。武器の要らない世の中にしたいですね。

松永　伍一



柳川市教育委員会賞

ハーフタイムで

柳川市立柳城中学校　三年　橋本　圭司

八月後半、北九州で「車イスバスケットボール大会」が開催された。僕は会場へ行きたかったが用事が重なり行けなかったのでテレビを見ていた。

「すごい。」

僕は思った。今までに一度として感じたことのない執念とあふれんばかりの活気が僕をつつんだ。この代表の選手がどれだけ努力をしたのかが歓声とともに伝わってきた。

実は僕も七月引退するまでは部活で「バスケット」をやっていた。そのせいか、このテレビでみた試合は何か心にしみるものがあった。体にハンデをおいながらもがむしゃらにボールにくらいつくあの姿。倒れても倒れてもおき上がるあの争闘心。何をとっても僕が勝っているものはなかった。

僕らは、今こうして普通に生活している。選手たちも、生まれてきた時は足があり事故でなくしてしまった人だっているにちがいない。そんな彼らは心からすばらしいといえる人たちだろう。僕たちの何倍、何十倍もの辛い思い、練習をのりこえ「戦いの場」に立っているのだから。

彼らの「普通の生活」とは、僕たにとって考えられないようなことだ。移動は車イス、足で立つこともできず、走ることもできない。僕は母に、

「辛かろうね。」

と、聞いた。しかし母は、

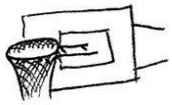
「この人たちは自分達がハンデを負っているとか思っとらんよ。何でも前向きに考えて、生きて、すごく心が広いよ。」

と、言った。僕は、母がわかったような口調をしたので不思議に思ったが、次の日、ちょうど両腕、両足がない外国の人がテレビに出ていた。そして母がいっていたとおり、

「僕は何でもできるんだ。誰にも負けないよ。」と、言っていた。その人はバスフィッシングの大会で優勝したり、少年ソフトボール大会で優勝したりとすごいかっやくをしていた。そして、何よりおどろいたのが、近所の誰にも親切で子供たちからも大人気だったことだ。僕はその時、母の言葉を思い出し、確信した。

この中三の夏、勉強づくしで頭がいたかったがいい体験ができた。そして、これからの自分に役立てたらいいなと思う。

「車イスバスケットボール」という活気あふれるゲームから得たものはすごく大きく、そして、心が強くなった気がした。同じコートで一つのボールをおいかけ、汗を流していたあのころを思い出し、今、夏を終えようとしている。さあ、そして、第三クオーターが始まろうとしている。この経験を胸に、最後に笑えるよう、自分との試合に勝てるようにこれからもがんばりたい。



《評》

からだに障害をもつ人たちの「車イスバスケットボール大会」を観ての感想文ですが、自分が部活でバスケットをやっていた経験に照らしての比較なので、思いの深さが伝わってきます。

おかあさんの「この人たちは自分達がハンディを負っていると思っとらんよ」の言葉によってあなたの見方が鋭く変わっていき、かれらの頑張りの出どころをきちんとつかんだのですね。その感動がこの文章をたいへん熱っぽいものにしています。あなたはスポーツを越えて人生を学んだのです。

松永　伍一

柳川市議会議長賞

花と緑のバードアイランド　―よみがえれ三宅島―

東京都府中市在住　高校・一般　小山　節子

みなさんは、アカコッコという鳥を知っていますか。おそらくあまり見たことがないと思います。なぜかというと、御蔵島や三宅島にだけ生息している天然記念物だからです。頭が黒くておなかが赤い。スズメより一回り大きい鳥です。村人が畑仕事をしていると、足元まで地上をはねあるいて来てミミズや虫をつかまえる「かわいい赤い鳥」という意味でアカコッコ。三宅島は、東京からはなれること二百キロ、黒潮にうかぶ小さな島です。島の深緑の原生林は日本有数の野鳥の天国として「バードアイランド」とよばれて有名でした。

平成十二年八月に島の中心の雄山が大噴火しました。九月には全島民に避難が決定され、村人は三宅島に住めなくなったのです。そして、東京各地の空いている団地にバラバラに引っこしをしてきました。団地では犬やネコを飼えないので、獣医師会が引き取って世話をしました。

鳥はどうしたのでしょう。羽があるので飛んでにげました。アカコッコもそうでした。近くの御蔵島ににげたようです。ふん火が少し収まると、三宅島に飛んで帰ってきました。けれども三宅島には、鳥が落ちついてくらしていくための、木や土や水が確保されていません。少しでも早く木を植えて、花と緑の三宅島にもどさなければ鳥は住めないのです。もちろん人間もです。

毎日のように三宅島の様子がテレビに映りました。さとし君とてつや君は、いつものようにキャッチボールをして遊びました。夕方になると、どちらからともなく座って話し始めました。

「三宅島のことなんだけど。」

「うん。」

「ひどい様子だね。」

「アカコッコはどうしているかな。」

「はやく緑をとりもどしてあげないとアカコッコも三宅島に居着かないね。」

「ぼくたちにできることはないかな。」

さとし君とてつや君は、以前学校獣医の木村先生の指導を受けて、十五小学校の鳥の巣箱の調査をしたことがあります。その時学校の巣箱は玉川上水や野火止用水の巣箱とちがって、ゲラ類にこわされることなくシジュウカラが何度も巣作りしたことが分かりました。

また、十五小学校には、夏みかん・サクラ・ピラカンサ・梅・アンズ・スモモ・ブルーベリーと実のなる木が多いので鳥が来るのだと知りました。

そこで、三宅島に実のなる木を植える募金活動をしようと二人は思い立ちました。四年生の時に、赤い羽根募金で新小平駅に一時間ずつ二回立ったことがあります。二人は帰りの会で、「来週の水曜日の放課後、新小平駅前でアカコッコのための募金活動をしますのでよろしくお願いします」とクラスの友達に話しました。

「募金が役に立つのでしょうか。」

「手伝う人がいなくてもやるのですか。」

友達からいろいろ質問が出ました。二人はひとつひとつていねいに答えました。

「その日は、用事があっていけないけど、がんばってね。」

と言ってくれる友達もいました。

次の日、さとし君とてつや君は担任の森先生といっしょに校長先生をたずねました。そして「三宅島のアカコッコのために募金活動をしたいのですが、いいでしょうか」と申し出ました。

「家族の許しを得ること。また、駅前で募金活動をするにはルールがあるので、ルールにしたがってのことならば、どうぞ。」

と返事をいただきました。担任の森先生がその手続きをやってくださいました。

さとし君とてつや君はカレンダーの紙をつなげて裏の白いところに「三宅島のアカコッコ」とマジックで大きく書きました。そして、小平第十五小学校と書くことも忘れませんでした。募金箱は、印刷室の空のダンボール箱を見つけ出して、周りに色画用紙を張りました。新聞にのっていたアカコッコの写真もはりました。

いよいよ募金活動をする水曜日の午後になりました。二人は新小平駅前に立

ちました。森先生も一緒です。さとし君が募金箱を持ち、てつや君が説明書を持ちました。そして、
「三宅島のアカコッコのために募金をよろしくお願いします。」と、駅から出てくる人によびかけ始めました。二人はしっかりと声を出しました。
「三宅島のアカコッコに募金をよろしくお願いします。」
「小平第十五小学校です。」
電車が止まるたびに、どっと人がおりてきます。果たして、三宅島のアカコッコのために募金をしてくれる人はいるのでしょうか。
ふいにおばあさんが立ち止まり
「アカコッコって、どんな鳥なの。」
と聞いてきました。さとし君とてつや君は、いっしょうけんめいに説明しました。おばあさんは話を聞き終わると、買い物ぶくろをガサガサとさがしてサイフを出して募金をしてくれました。
「ありがとうございました。」
さとし君とてつや君は、晴れ晴れと言いました。
そうしているうちに、二人がふだんから仲良くしている友だちのだいすけ君がやってきました。
「手伝いにきたよ。」
だいすけ君は、自転車を止めると、二人のそばに立ちました。
三人はいっそう大きな声で募金をよびかけました。次々と募金箱にお金を入れてくれる人がいます。
夕方になりました。こがらしも吹き始めました。お父さんたちが電車をおりてくる時間帯です。そして、お父さんたちも次々募金してくれました。そのうちますます冷えこんできて、足元からジンジンと冷えてきました。
「さあ、寒くなってきたし、終わりにしよう。」
と、森先生はコートのえりをかき合わせておっしゃいました。学校へ帰ってお金を数えたら、たくさんのお金が集まっていました。
どこへとどけるのが一番よいのか、獣医の木村先生にお聞きしました。
「三宅島ふれあいセンターアカコッコ館がよいでしょう。」と、連絡を取ってくださいました。事務局の海野さんが、避難先の赤羽桐ヶ丘団地から十五小学校まで来て下さり、全校児童朝会で、三宅島の様子やアカコッコの話をしてくださいました。さとし君とてつや君とだいすけ君は、募金箱を海野さんにわたしました。
「ありがとう。大切に使わせていただきます。」
海野さんは日焼けした顔できっぱりとおっしゃいました。
さとし君とてつや君は、テレビで火山灰におおわれた三宅島の様子を見ると、以前の美しかった三宅島よもう一度と思うのです。

《評》
三宅島の噴火によってふるさとを離れた人たちのつらい思いと、島へのなつかしさとが文中にあふれていて胸を打たれました。頭の中で島を恋しがるのではなく、アカコッコという可愛い鳥への思いを縦糸として、人びとのやさしさを具体的に書き込んでいるからです。
さとし君とてつや君たちの募金活動の様子もその気持ちもよく描かれていますので、読んでいるうちにアカコッコが三宅島に早く戻ってくるようにとの願いが湧いてきます。

松永　伍一

柳川文化協会賞

勇勝丸の再出発

芦辺町立田河中学校　一年　佐藤　貴成

勇勝丸、これは僕の家の船の名前です。勇勝丸、船の大きさ十一トンのイカ釣り船です。僕の家は元来漁師の家です。ひいじいちゃん、祖父、父と三代続いた漁師一家です。僕が生まれた頃、祖父と父は夜イカ釣り漁に出て、僕が学校に行っている朝方帰り、また夕方漁に出るという一日でした。なので、僕は父とあまり遊ぶ事がありませんでした。幼い頃祖父と母に手を引かれ漁に出る勇勝丸を見送った事を覚えています。

ある日、父と母が昔の事を話していました。「あの頃はよかったね、一晩でイカを百箱もとってきていたし。今は十箱もとればいい方やし、なんでこえんなったんかね。これからの生活はどうなるとやろうかね。」

こんな話をしている事が多くなっていきました。それから、父の生活のリズムが変わっていきました。父は僕ら四人を育てるために船を降り、二年前から、真珠会社に勤めるようになりました。動かない勇勝丸はとても寂しそうでした。父は毎日勇勝丸のエンジンをかけに、船へ足を運んでいました。いつかまたイカ取漁が復活する事を信じているかのように。父の背中は慣れない仕事に疲れ果てていました。

それが二年間続いたある日、

「もうイカ釣りもダメばい、勇勝丸もかわいそうばってん使ってもらえる所にゆずろうか。」と祖父、祖母、父、母が話していました。

僕は漁師の祖父と父を見て「働いたら働いた分成果はあがる。」いつも一番漁をしてくる父の仕事をほこりに思って尊敬していました。

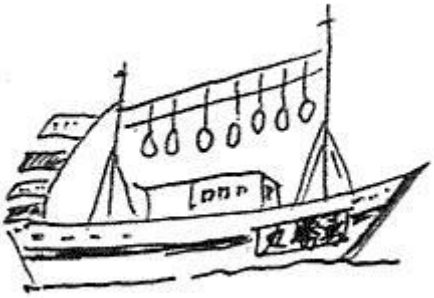
今年の七月、沖縄から勇勝丸を買いたいという人が来島されました。優しそうなおじさんが二人来られました。勇勝丸を見て一目で気に入られ、話はすぐ成立しました。僕は、それを聞いたとたん、心の中に穴が空いた感じがしました。でも僕は、「悲しい」なんて言いませんでした。だって父の方がもっと、もっと悲しいんだと思ったからです。父はあの時にが笑いをしていたのを僕は知っています。

それから、大安吉日に勇勝丸は沖縄に向け出港していきました。勇勝丸を見送っていると、祖母と母の目には涙が。そして、僕の目にも、心にも熱いものがこみあげてきました。「勇勝丸頑張れよ。」そう心の中で叫びながら涙をぬぐいました。父もどことなく元気がなく、肩をおとしていました。

そんな姿を見た僕は、ある決心をしました。「僕が大人になった時、必ず勇勝丸を復活させて、父にキレイなこの壱岐の海で、一番漁をして、大漁ばたをたてる漁をさせてあげたいな。」と。

僕が大好きだった父の漁をする後ろ姿をもう一度見たいからです。

僕は頑張ります。家族のために。そして、なにより僕らのために今も頑張って仕事をしてくれている父のために。



《評》

三代続いた漁師の家には歴史があって、それを物語るのが船です。その名は勇勝丸。このイカ釣り船が売りに出されることになって、家族の人たちがどんなにさびしい思いをしたかが、よく書けています。順調に行けば四代目になるはずのあなたの心理も複雑で、おとうさんの悲しみとそれが向き合っていて、読んでいて心に染みてきます。でも、持ち主は変わっても沖縄の海できっとこの船は活躍するでしょう。あなたも何年かたったら沖縄に行ってその姿をきっと見たくなるでしょう。それもまた歴史です。

松永　伍一

優秀賞

おじいさんの素敵なお店

福岡市立青葉中学校　二年　水城　優花

「あの店ときたら、本当に困り者よねぇ。」
「本当。こっちは大迷惑よ。あんな店は早くつぶれてしまえばいいのに。」
あの店、とは、この商店街の一番すみにある、靴屋さんのことです。その靴屋さんはとても古びていて、一体掃除などどれだけの間していないのでしょう。ほうきまでくもの巣をかぶっていて、おまけに店の前には大量のゴミ袋が山積みにされているという始末です。これじゃあ商店街の人たちに文句を言われても仕方がありません。このごろでは、
《幽霊が出るぼろ靴屋》という愛称までついています。
この靴屋に目をつけたのは、この商店街の花屋の看板娘、双子のメグとアミです。
「幽霊靴屋なんておもしろいじゃない。本当に出るかどうかたしかめてやろうよ。」
そう言い出したのはメグでした。
「でも、もしうわさが本当だったら・・・やっぱりやめとこうよ。」
アミは不安な気持ちを隠しきれないようです。
「いいから。大丈夫だって。決行は明日だからねっ。」とメグの方は期待に胸をふくらませているようでした。
次の日、メグとアミは例の靴屋の前に立っていました。メグは自分の頭には大きすぎるヘルメットをかぶり、片手にはおもちゃの水鉄砲をにぎりしめています。アミはやっぱりのり気じゃないようです。
二人はゆっくりと靴屋に入って行きました。こっちにもあっちにも、くもの巣がかかっていてほこりもすごい量です。アミが思わず「はっくしゅん！」とくしゃみをしてしまったそのときです。奥のほうから、ゴトッという音とともに
「だれじゃ・・・。」という声が聞こえてきました。
メグとアミはびっくりして息を飲みました。
次の瞬間、二人は、
「出た！幽霊が出たー！」と叫びました。
「おまえたち、何を言っておるんじゃ？」
と、さっきの声がまた奥のほうから聞こえてきました。
メグとアミは、ゆっくり、おそるおそる声のする方へ目を向けました。するとそこには1人のおじいさんが立っていました。
八十歳くらいでしょうか。あまり背は高くなく、あごに長いひげを生やした小太りの、サンタクロースのようなおじいさんです。
二人はそのおじいさんに、幽霊がこの靴屋に出るという噂が本当かどうかを確かめにきたことを説明しました。すると、おじいさんは、「ほっはっはっ。」と声を上げて笑いました。「いやぁ、こんなに笑ったのは何十年ぶりじゃろう。」
するとメグは、
「私たちは本気で幽霊が出たかと思ったんだからぁ！」と言い返しました。
「いやぁ、すまんすまん。でも、本当に久しぶりの来客じゃ。手ぶらで返すわけにはいかん。二人とも、少し待っていておくれ。」
そう言うとおじいさんは、鼻歌まじりで戸棚をごそごそやっています。メグとアミは、不思議そうに顔を見合わせました。
しばらくしておじいさんが帰ってきました。手には何かを持っています。おじいさんはその手の中のものを二人に差し出しました。
うさぎとくまのぬいぐるみです。
「あっありがとう。」と二人は言って一つずつぬいぐるみを受け取りました。おじいさんは、「わしは靴屋の前は人形屋だったんだよ。その人形もわしが作ったんじゃ。うまいもんじゃろう。今日は君たちが来てくれてなんだかうれしかったよ。」とにっこり笑って言いました。メグとアミもなんだかうれしくなって、
「じゃあ、明日も来ていい？」とおじいさんに聞きました。
「いいとも。今度はお友だちもたくさん連れておいで。そのときはお友だちの分も人形をつくってあげるよ。」

次の日、メグとアミが友だちを連れて靴屋に行くと、とてもびっくりする光景が待ちかまえていました。
店の前のゴミ袋は姿を消し、店は見違えるほどピカピカになっていました。そして、一番びっくりしたのは店の看板でした。古びた「靴屋」という看板はなく、真新しい、
「人形屋」という看板がかかっています。
おじいさんが店からでて来ました。
「どうだい？びっくりしただろう。きのう君たちに久しぶりにありがとうって言ってもらったのがうれしくてね。また人形で子供達の喜ぶ顔が見たくなったんだよ。」
そのおじいさんの顔はとても生き生きとしていました。
メグとアミもとびきりの笑顔でいいました。「じゃあ私たちは、この店のお得意さんねっ。」

《評》
人間は身なりや、汚い家に住んでいる事で、分けへだてするものではありません。茶目っ気の双子の姉妹メグとアミは商店街の人から爪弾きにあっている幽霊がでるという汚い靴屋のおじいさんを訪ねます。メグはヘルメットをかぶり、水鉄砲を持って出掛けます。アミは余り乗り気ではありませんでしたが、ウイットに富んだ会話でおじいさんを久々振りに笑わせて仕舞い、うさぎとくまの縫いぐるみを貰います。「ありがとう」と喜んだ事で、前の人形屋にくら替えするまでを、物語にした筆力は流石です。二人の心のやさしさが、幽霊（おじいさん）を綺麗な人形屋に立ち直らせたユーモア味のある童話に感じました。
佐伯　亮三

優秀賞

一期一会のホタルたち

久留米市立荒木小学校　五年　川島　早織

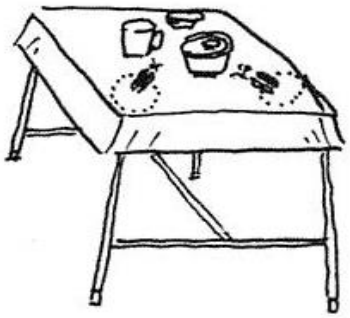
若葉が芽を出すさわやかな五月が終わると、ジメジメとむし暑い梅雨がやって来ます。けれど、この梅雨の合間に楽しみにしている事があります。六月になると美しいホタルの光が見たくて家族みんなででかけています。でも、今年はウキウキした気持ちよりもちょっと悲しいような、さみしいような気持ちでした。それは、今から五十七年前に、鹿児島の知覧から特攻隊として飛び立った、宮川三郎さんの話を聞いたからです。
夏の暑い日、久留米市の石橋文化センターで〝平和を語る夕べ〟が行われました。その中で、まだ二十才にもならない人たちが、五百キロのばくだんと片道だけの燃料を積み、敵の空母に体当たりをする特攻作戦があった事を聞きました。
鹿児島の知覧からは、約千人の人たちが愛する家族や、恋人、そして、お国のために飛び立ちました。もう二度と生きて帰って来る事はないのに。
現在、知覧の特攻平和館には、特攻隊の人たちの家族にあてた手紙がたくさん残されています。ある若者は
「飛び立つ前にお母さんの側でねむりたかったです。」
「これから、お母さんのいる博多の上空を飛んで行きます。その時、お母さんにお別れをしますね。」
と残しています。涙が出て止まりませんでした。そんな風に家族と別れなければならないなんて。どうして戦争をしなければならなかったのでしょうか。戦争から生まれるのは、悲しみだけなのに・・・・・。そう思うと、悲しい気持ちといっしょにくやしい気持ちがあふれてきました。
ところで、宮川三郎さんは、出げきの前夜、お母さんのようにしたっていた鳥浜トメさんに別れを告げに来ました。

「お母さん、大変お世話になりました。お国のために見事に散って参ります。そして、私はホタルになって、母さんのもとに帰って参ります。ホタルを見たら、私だと思って下さい。」

次の日、一匹のホタルが食堂に時間通りに来ました。トメさんや、そこに居合わせた隊員たちは、みんな声をあげてなきました。

来年も、再来年も、きっとホタルは姿を見せてくれるでしょう。けれど、ここにいるホタルは次に命をたくし死んで行きます。光っては消え、消えては光るホタルを見つめてると、命のとうとさ、平和への願いをより深く感じました。一期一会のホタルたちは、戦争という悲しみが二度とくり返されないようにと、私たちに伝えているようにもみえました。

世界中の人々の平和が、永遠に続きますように。



《評》

一生の間に一度だけの出会いを一期一会と言いますね。しかし二十世紀は戦争に明け暮れた年でした。二十一世紀になっても、世界はテロと言う恐怖におののいています。

あなたはホタルに託して、平和を説いています。蝉もホタルも他のあらゆる昆虫たちも短い一生を送るだけです。人間が命の尊さを自覚したら悲しい戦争は無くなる筈です。

若い世代にも平和の有難さが浸透している事をしって頼母しい気持ちになりました。作文の終わりの、「世界中の人々の平和が、永遠に続きますように」という祈りの言葉が全世界に生き続けるように祈るだけです。

佐伯　亮三

優秀賞

アイヌのくらしを見つめて

柳川市立柳南中学校　二年　高椋　草美

みなさんは北海道の先住民であるアイヌの人たちを知っていますか。私がアイヌのことを初めて耳にしたのは小学校の道徳の時間のときでした。その時はアイヌをくわしく知ったわけでもなく、私たちと言葉や生活の仕方が違うアイヌの人たちをやや差別的な見方で見ていました。

私がそんなアイヌのことに興味をもち始めたのは、つい最近のことです。北海道の地図にのっている地名などがカタカナでとても珍しく、この地名はアイヌ語からきているとわかったとき、アイヌの人のくらしなど、もっとアイヌについて知りたいなと思い、夏休みの間調べてみることにしたのです。

調べを進めていくうちにとても印象的なことが二つありました。一つ目は、アイヌの人たちはコタン（集落）をつくり、狩りや山菜などの採集をして暮らし、共同で働き、獲物がとれるとみんなで公平に分けて平和に過ごしていたということです。ところが、私たちの身の回りを見つめてみると、海苔づくりや米づくりでも機械の発達により共同でする姿はなくなってきました。また、テレビ、ゲームなど文明の発達で、近所のつながりがなくなってきました。文明の発達が人とのつながりを失くしてきているような気がします。

二つ目は、アイヌの人たちは自然を大事にし、敬って生きてきた、いきとしいけるあらゆるものにカムイ（神）がやどっていると考えて暮らしてきたということです。私はこのことを知り、アイヌの人たちの心の豊かさにすごいなと感心しました。それと同時に私たちの現在のくらしの考え方と、アイヌの人たちのくらしや考え方の違いを実感しました。一番違いを感じるのが「食べ物」です。アイヌの人たちは食べ物を与えて下さったのは神様だと感謝し、狩りでは必要な量しかとらずに大切に食べていました。それに対して現在の私たちは、食べ物はあるのがあたり前だとぜいたくな暮らしをしたり、食べ物を無駄にし

たりしています。私たちはアイヌの人たちの生活を見習ってもっと自然を大切にした生き方をしなければならないと思いました。

十四世紀ごろから和人(本州からの移住者)が北海道に移り住むようになり、アイヌの人たちは自由で平和な生活や文化をおさえられ、勢力がおとろえていきました。現在はアイヌの人たちの数もすっかり減ってしまいました。私は、生活や文化をせばめられてきたアイヌの人たちがとてもかわいそうに思えてなりません。でも、アイヌの人たちが今でも祖先から伝えられてきた祭りやくらし方などの自分たちの文化を誇りに思い、守り通す心に感心します。アイヌの人たちのように、自分たちの文化と共に暮らすということは現在失われつつあると思います。私も文化について深く考えたことがありませんでした。でも、私たちにはなくしてはならない自然、文化、生き方があるはずです。それらを守るためにもこのアイヌの人たちの自然と共に生きるというすばらしい考えを、もっとみんなに知ってもらいたいです。今後はアイヌの人たちも私たちも同じ人間として、学び合いながら生きていきたい、それが私の一番の願いです。

《評》

着想のすばらしさに感心しました。アイヌを調べているうちに、コタン（集落）とカムイ（神）の存在をしり、現代の日本人が平和に馴れ、飽食の時代を送っている事に気付いた事は貴重な心の収穫でした。其の上、日常生活に文明の利器が溢れている事は、機械文明に押し流されるような危惧を感じます。

世の中に差別があってはいけません。アイヌの人達は共同で仲良く働き、自然も作物も神の恩恵を受けている事を知り、生活と文化を守り続けた事は偉大と言うほかありません。地球上に人種差別もなく、みんなが仲良くなれば、世界の恒久平和は実現することでしょう。特異な作文を一読して、心を打たれた事を書き添えておきます。

佐伯　亮三

優秀賞

きっと、大空を

小郡市立三国小学校　五年　大坪　裕美

九月一日、日曜日

夕方、父とサイクリングに行った。通学路のやぶの前で、黒い鳥のひなが、うずくまっていた。最初、私は何か分からなくて、よけて通った。後ろから来ていた父が、

「おーい、裕美。鳥のひなだよ。」

と、私をよんだ。

私は急ブレーキをかけて、父の所へとんでいった。鳥は、大きな口をあけて、私たちをおどそうとしているみたいだった。まわりを見ると、いたいた。親鳥らしき二羽が。そのひなをやぶの中へいれて、サイクリングを続けた。

ところが帰り道。

やぶの中をのぞいてみると、また、あのひながいた。親鳥の姿はもうない。ひなは、こちらをずっとうかがっている。私と目があった。このままにしておいたら、夜になって、ねこに食べられてしまうかもしれない。

自転車のかごの中にそっと入れて、家につれて帰った。
夜。
ひなは、私が作ってあげた巣の中で、グッスリねむっていた。
姉が、
「野鳥を拾ってきたらだめなんだよ。」
と、言ったけれど、私は、
「でも、羽もはえそろってるし、もうちょっとで飛べるんだよ。ほっといたら、犬やねこが食べちゃうよ。」
と、言い返した。
図かんをもってきて調べたけど、ムクドリにも似てるようで、ヒヨドリにも似ているようで結局分からなかった。
私にペットができた。ずっと前から飼いたかった鳥だ。明日は、えさを食べてくれますように。
九月二日、月曜日
朝、ピーピーという鳥の鳴き声で目が覚めた。
飛びおきて、見に行ったら、大きな口をあけて、まちかまえていた。ピンセットで、パンを水にひたして、口の中に入れてやると、急に鳴きやんで、ガツガツと食べ始めた。
えさを口の中にいれても、すぐまたその大きな口をあけ、えさをねだった。
こんなにえさを食べるのなら大丈夫。
ああ、夏休みだったら、一日中遊べたのにな。今日は、始業式。
帰ってきたら、えさをあげて、飛ぶ練習をするんだ。それから、えさをとる練習をすれば、もうりっぱに巣立っていけるな。
息を切らして家につくと、巣はからっぽ。
あたりをさがしてまわってもいない。鳴き声も聞こえない。
でも、私の願いはちゃんとかなったんだ。きっと大空を飛び回っているんだろう。

《評》
日記体にして作文をまとめた着想は流石です。

たった二日間の出来事ですが、文面には鳥類愛護の精神が満ち溢れています。
あなたは図鑑で、拾ってきた黒いひなの名前を調べましたね。ムクドリかヒヨドリかわからなかったようです。餌を与えて、自分のペットにしようと、可愛がる気持ちが読む者に伝わってきました。始業式から家に帰った時、巣は空っぽでした。そのひなに飛ぶ練習や餌をとる練習をさせようと張り切っていたのに・・・・・。裕美さん！ひなはきっと、大空に帰った、と思います。あなたの愛情に「ありがとう」と鳴いて、大空に飛び立ったのです。

佐伯　亮三

優秀賞

「いただきます」の意味

柳川市立東宮永小学校　六年　古賀　有美

食事の前になにげなく言葉にする「いただきます」の言葉。そのことばがどれほど大切か知っていますか。私は、「いただきます」というのは「食べます」という意味で言っているのではなく、「命をもらいます」という意味だと思います。私たちは食事をするたびに生き物の命をもらっているからです。

私たちは日ごろいくつもの命をもらっています。魚貝類や肉類などです。生きているのは人間だけではないのに。魚にも、牛や鳥やぶたにも命と生きる権利があるのに。人間のために食料となってくれています。そして、私たちは人間のために食料となる生き物に感謝し、心から「いただきます」を言わなくてはいけないのです。また、食べ残しもよくありません。大切な生き物の命をそまつにしてはいけません。命というものは、とても大切です。一生に一度の一番大切なもので、その命を食べ残すなど絶対にいけないことです。私たちは生き物に感謝しなければいけないのです。

また、魚貝類をとってくれる漁師さんや、牛や鳥やぶたを育ててくれる人たちにも感謝しなければいけません。その人たちがいなければ、私たちは魚貝類や肉類を食べることができないからです。漁貝類や肉類は、私たちが生きるために必要な食料です。そして、私たちだけでは魚貝類をとったり、牛や鳥やぶたを育てることはできません。だから、漁師さんや生き物を育ててくれる人にも感謝しなければいけないと思います。

私たち人間は、生きるためにたくさんの生き物の命をもらっています。そして、私たちが人間のために食料となってくれた生き物に感謝の気持ちを表すのなら、まず食べ残しをしないことです。また、好ききらいをしないことと、心から「いただきます」を言うことだと思います。これが私たちにできることです。このことで、生き物が救われるとはいえないけれど、私はできることをできるだけしたいと思っています。私たちは生き物に助けられているから、それくらい当然だと思います。また、生き物の命とひきかえに私たちはいきているのですから、命をそまつにしないことです。感謝の気持ちをこめて。

「いただきます。」

《評》

食事の前に「いただきます」という言葉を「命をもらいます」という意味だと思うあなたの考え方を正しいと思います

農業で米、麦や野菜類を作る人、漁業で魚介類を獲る人、また、牛や豚や鶏などを育てる人が居るから、人間は生命を維持することが出来るのです。

食事の時、感謝の気持ちで食べ終えたら、「ごちそうさま」と必ず言いましょう。炊事をして戴いたお母さんにも感謝の気持ちを持てば、きっと家族の平和となるでしょう。これから「いただきます」の意味を噛みしめて、「ごちそうさま」の言葉も忘れないようにすれば食べ物の好き嫌いも、食べ残しも無くなるでしょう。

佐伯　亮三

優秀賞

やさしさのおくりもの

北九州市立南小倉小学校　二年　小やなぎ　ゆみ子

クラスで、いやなことを言われてとてもかなしかったことを書いた友だちの日記を、先生が読んで聞かせてくれました。

みんなで話し合いました。先生がさいごに「やさしさってどんなことなのかな。」

とみんなに聞きました。

わたしは、よくわかりませんでした。

お家に帰って、お母さんに

「やさしさってどういうこと。」

と聞いたら、お母さんは

「人を思いやる心だと思うよ。」

と答えてくれました。でも、わたしは、人を思いやる心がどういうことなのかわかりませんでした。

わたしがなやんでいると、お母さんがこんな話をしてくれました。

赤ちゃんが生まれたばかりのころ、よ中におっぱいをのませていたら、ゆみ子がおきだしてきて

「お母さんたいへんだね。ゆみ子にもミルクが出たら、お母さんのかわりができるのにね。」

と言ってくれたとき、おもわずなみだがでてがんばろうというきもちでいっぱいになったことが今でもはっきり思い出せるんだよと言ってくれました。それから、

「やさしさってね、あいての人のことをたくさん思ってあげる心なんだよ。そうしたら、とってもしあわせになったり、ゆう気がわいてきたりするんだね。お母さんはゆみ子からたくさんのゆう気をもらってきたよ。それは、ゆみ子のなかにやさしさがたくさんあるからじゃないかなぁ。」

とにこにこしながら言いました。

八月二十四日はわたしのたんじょう日です。

お父さんとお母さんは、わたしがお母さんのおなかの中にいるときからずっと私にお話していたそうです。そして生まれたときは「元気に生まれてきてくれてありがとう。」

とおいわいしてくれたそうです。

このことを聞いたとき、私はうれしいきもちでいっぱいになりました。

わたしは、やさしさってとってもむずかしいことだと思っていました。なにがむずかしいかというと、いつのまにか人をしあわせにしたりゆう気をおくったりしているということです。

でも、私はいつもお父さんやお母さん、そして、妹や弟からやさしさをおくってもらっていたんだなと気がつきました。

だから、わたしも、

「はい、どうぞ。」

とやさしさをおくることのできる人になっていきたいなと思います。

《評》

ゆみ子さん。あなたの妹か弟が赤ちゃんの頃お母さんが赤ちゃんにおっぱいを飲ませていた時、「ゆみ子にもミルクが出たら、お母さんの代わりが出来るのに」と言ってやったら、お母さんは涙を流して喜ばれました。ゆみ子さん。その思いやりがやさしさなのですよ。

あなたの御両親が「元気に生まれてきてありがとう」と誕生日にあなたに言われた言葉。あなたもきっと感謝の気持ちを何時までも忘れないでしょう。

やさしさは思いやりの心だという事を思えば、友だちにもやさしさを持って接すれば「いじめ」などという事は無くなると思いますよ。きっと。

佐伯　亮三

優秀賞

「We are the bridge」

福岡市立城南中学校　一年　大鶴　翔貴

「イッツ、クレイジー!」

二〇〇一年九月十一日、僕は最高に楽しい四日間を過ごしていた。ニュージーランドから「ハオ」が僕の家にホームステイにやってきていたのだった。対面式で握手をした瞬間、僕らは親友になっていた。言葉なんかいらなかった。からかったり、ふざけたり、じゃれ合ったり、ただいるだけで楽しかった。そのハオと過ごす最後の晩だった。なんとアメリカでビルに飛行機が突っ込んだというのだ。僕らは凍った。やっと出たハオの言葉が冒頭の言葉だった。

「僕らが仲良くなることで、世界の架け橋になろうとしている時なのに・・・・・・」

実は僕はあの時何が何だか分かっていなかった。何が起こったのか。何が起ころうとしているのかも。実際、ハオとの別れで精一杯だったのだ。そんな僕でも連日の報道に、ようやく事態が呑み込めてきた。世界中がテロに怒り震え、戦争の恐怖にいるということを。

帰国したハオから電話をもらった。その声はとても近かった。僕の横にいないのが不思議なくらいに。母は言った。「地球の裏側の家族・親友」と。本当にその通りだ。言葉が通じなくとも、たった四日間しか一緒に過ごせなくても、親友にも家族のようにもなれるのだ。分かり合おうとするのだ。

あの事件から一年・・・・・・。いまだ苦しんだり、悲しんでいる人がたくさんいる。こんな世の中は嫌だ!今僕ができることは何だろうか。

この夏、僕はハオに会うため十三時間もの飛行機に乗った。ついに一年ぶりの再会。あの日の続きのようだった。初めて会うハオの家族も最初から溶け込めた。中学生になった僕は、少しは英語に親しんでいたので、辞書を片手に身振り手振りを交え、たいていのことは通じ合っていたように思う。ぼくにとって信じられないほど自然で積極的なチャレンジだった。スクールステイでも積極的に友だち作りを試みた。ニュージーランドは移民の国だ。肌の色、出身国、宗教それぞれ違う人々が共存し、美しい自然を損なわず、早くから環境問題に取り組んでいる。教室にもいろんな友だちがいる。そしてお互いの文化や歴史を学び尊重している。僕もすんなりとその一員になれていた。

「友だちや家族のように身近な存在を大事にすることから、小さな平和の輪を作り、それを世代や国境を越えつなげていく平和のリレーランナーになります。」と八月六日広島平和記念式典で子供が誓った平和の誓いも同じ考えだと思う。ハオとの別れは悲しかったが、気分はサッパリしていた。この滞在に満足していたし、何より小さな平和の輪を作ることができた僕は、ハオや友だちと共に世界の架け橋になることに自信が持てた。これが今僕にできることの第一

歩だ。

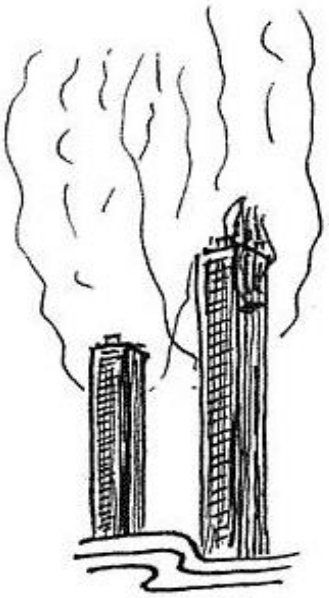
《評》

二〇〇一年九月十一日、ニューヨークでの同時多発テロが起こった時、あなたの家にホームステイしていたニュージーランドのハオ君は「イッツ、クレイジー！」と怒りを込めて叫びました。

現代の世界は狂っているようです。翔貴くんという点とハオ君という点を結べば線となります。線が延長していくうちに世界の平和の輪は結ばれていきます。

二十一世紀に生きる君たちは世界の民族が仲良くなり、お互い架け橋になることで、世界の平和の花の大輪が咲くことになるでしょう。あなたはニュージーランドのハオ君の家を訪ねました。言葉より平和な心で接したあなたの勇気に敬意を表します。

佐伯　亮三



第六回長谷健賞＝平成十五（二〇〇三）

長谷健賞大賞

主将腕章

福岡県福岡市立三宅中学校　三年　池田　香織

雲の多い、蒸し暑い日だった。

「サッカーには、勿論個々の判断が必要だ。だが、一番大切なのは、チームワーク。良いチームワークを作るにはリーダーがいる。実力があって、頼りになる、リーダーがな。…今日から、そのリーダーがお前だ。」

長い前置きの後に渡されたのは黄色の腕章。マジックテープで留める、ソレ。軽いはずなのに、受け取った右手がやけに重たく感じた。

「…皆を、引っ張って行くんだぞ。」

「…はい。」

先生の言葉も重たく感じた。キャプテンもこんな思いをしたのだろうか。キャプテンは、中学生とは思えない落ちつきで、負けている時でも冷静だった。

「慌てるな、よく相手の動きを見ろ。チャンスはいくらでもあるはずだ。」

フィールドの端から大きな、よく通る声で、俺たちを冷静にさせてくれた。

―キャプテンが居なかったら、こんなに強いチームに成れなかっただろう。彼は…『完璧なキャプテン』だったのだ。普段はチームの一人一人を見てくれて、何かに悩んでいたら、直ちに気づいてアドバイスしてくれる。そんなキャプテンを、皆信頼していたし、大好きだった。

俺も、皆も『完璧なキャプテン』を知っているから、だから…俺は、キャプテンになりたくない。――俺は、キャプテンの様になれないから。

腕章ってこんなに重かったんだ。俺、知らなかった。左腕が動かない感じ。こんなのじゃ、走れもしないよ。

雨が降ってきて、息苦しいのが更に増した。
俺は、パスをもらって突っ走ってシュートする点取り屋。だから後ろを気にしていたら、俺のあのプレーができない。
それで良いのか？
先生が俺に腕章を渡したのは、今までの俺のプレーを信頼していたからでしょう？
キャプテンになったからってプレーが変わっちゃ、意味がない！

ねえ、重くて潰れそう。
先生の言葉が、左腕の腕章が。
周りが、後ろが。
今まで俺を震い上がらせていた皆の期待が。
オモイ、おもい、重い。

こんな重さに耐えてきた今までのキャプテンの皆様を、改めて尊敬します。
凄いです。強いです。俺はそんなに凄くなれません。強くなれません。
試合中に降った雨で作られた水溜りに、自分の姿が写る。
――ミットモナイ。
雨に濡れて、泥まみれで、髪の毛もペッタンコで。なにより、重さで垂れさがった腕章がみっともない。
「似あわねぇー。」
仲の良かった先輩の口調を真似てみる。先輩なら絶対こう言う、とか思いながら、何度も。
似合わねー、似合わねー、似合わねー。
自然とクククッと笑いが出た。
本当にその通りですよ、先輩。
俺にキャプテンマークは似合わない。
何故だか知らないけど涙が出た。

《評》
どんなスポーツでもそうですが、チームをリードするキャプテンの力量が問われます。そのことは、誰でも知っていますが、いざその役についてみると、予想とははるかにちがって、身も心も苦しみに襲われるものです。その心の揺れが、競技の情景とうまく重なって描かれています。
キャプテンは大変な任務を背負っているということを、本当は軽いはずの腕章の重さで表現しようとしたところが、とてもすばらしいと思います。「似合わない」と感じながらも、「なぜだか涙が出た」という結びの一行ですべてが読み取れて、胸にじーんときました。

松永　伍一

福岡県知事賞

「私の八月六日」

福岡県柳川市立柳南中学校　三年　高椋　草美

真っ青な空にどんといすわった太陽が、じりじりと私たちの夏休みを照らしている。校庭の木々は葉裏ひとつ見せず、まるで空気は固まったまま。そんな重くムッとした空気は、体育館までも包みこんでいた。体育館の全校生徒は静まりかえり、この暑さとはうらはらに、ひんやりとした緊張と恐ろしさの糸が、ピンとはりめぐらされている。そんな中、体育館で詩の朗読が、始まろうとしている。

平和学習で聴衆者に、原爆の恐ろしさを当時の子どもたちにかわって訴えることが、生徒会で詩の朗読を立ち上げた理由であった。

熱気でみたされた生徒会室で、また、いつものように、詩の朗読の練習が始まった。生徒会室には、人々の嘆く声や爆弾の音、戦争へのいかりとにくしみ。そんな情景や心を、必死に描こうとする声がとびかっている。私は、女の子が悲惨な広島の光景を描いた詩を、朗読することになっている。詩を書いた女の子になりきって読もう、と心に決めて読み始めるが、どうしても女の子の思いに近づくことができない。それよりも、汗が体中からふき出してきて、今すぐにでも風のシャワーを浴びたいと体が叫んでいる。暑さとこの大変さから逃げ出したいという、という気持ちばかりをひきずっていた。

八月六日。今日は広島に悲惨な歴史がきざみこまれた日だ。今日の暑さは、戦争の悲惨な情景を語るのに十分な暑さであった。

「当時の人々は、私たちの想像をこえる暑さとふかい悲しみと闘ったんだ。練習の時のような弱い気持ちでは、戦争の恐ろしさを心から訴えることはできないんだ。」

そう自分に言い聞かせ、ステージのマイクの前に立った。原稿を持つ手が震えている。薄暗い体育館の中にステージの光がまぶしく私たちをきわだたせている。神経を当時の広島へタイムスリップさせた。焼け野原となった町の中を照りつける、夏の日差し。その中を、食料や寝るところを探して、ゆくあても望みもなく歩く人々。悲しくも死んでしまった人々。当時の子どもたちに刻まれたこの大きな心の傷は、私たちの想像をこえるほど深かったのだろう。そんな戦争へのにくしみが、ふつふつとわき上がってくる。このいかりをいつしか私は受けとめていた。わき上がってくる思いをそのまま声に出した。そうすると、自分でもわからない間に、なぜか女の子の思いに満ちた声が生まれてきたのだ。いつのまにか、みんなの声が、一つになり、重なっていた。その中からは自分の耳でも確かに、戦争へのいかりと平和への決意が、今まで以上に濃く、鮮明ににじみ出ていた。

体育館は再び静まりかえっている。カーテンがなびき、夏の日ざしが体育館にこぼれている。私のこの熱い思いが全校生徒に届いたことを信じて、マイクをおいた。

《評》

八月六日の「広島の日」に学校の体育館で詩の朗読会が開かれた時の模様が、よくかけています。

原爆のことを詠んだ詩を、耳できくだけでも心に迫ってくるはずですが、朗読する側に立てば、違った心理状態に置かれるのは当然です。いのちが滅んでいく厳粛な事柄を読み伝えていくのですから、朗読のし方の上手下手は二の次で、いかにそのときの思い、作者の悲しみや悔しさを自分の胸のなかに引き取っていくかが、先決です。

その努力の様が、素直な文章で表現されていて、詩を通じて語りついでいくことの大切さが、はっきり伝わってきました。

松永　伍一

柳川市長賞

赤い葉ひらり

福岡県福岡市城東高等学校　二年　田中　綾乃

「やあ、赤いかんざしだ」
「うふふ、ただの楓だ。落ちてきた」
「ああ、だまってろ。そうやってつけておけ」

少女は峠の茶屋で働いていた。男は町の反物商人で、よくこの峠を通った。いつも同じだんごを二串と、ほうじ茶を一ぱい。それから町の噂話とはじける笑顔。いつからか、少女の休憩時間に一緒にすごすわた菓子のようなひとときがお互い待ち遠しくなった。

春は白い花、夏は緑のかんむり。蒼き風がぬける森の草の上、男は少女のひざまくらで商いの疲れをふわりふわりといやして、また町へと降りてゆく。

「うん、きれいだ。町のどんなかんざしよりもきれいだ」
「ほんとか？」
「うん、ほんとにきれいだ」
「おらもきれいか？」
「うん、きれいだ。一番きれいだ」

風が吹くたび赤い葉っぱがひらりと舞い降り、二人の若者の気持ちに色を重ねる。

やがて山に雪が降り始めると、峠は一面の銀に染まり、何者も通ることができなくなる。少女はこの季節、山小屋でひっそり暮らすこととなるのだ。

楓もすっかり落ちて赤いじゅうたんとなり、うっすらと霜がその上をおおうようになった頃、男は少女に告げた。

「あのな。おら、この峠で暮らそうと思う。お前と二人でこの茶店ばやりてえだ」

「ほんとか？　本気でそう思ってるだか？」
「町のことはすっかりとりはらって、ここへくるから春まで待ってろ。必ず戻ってくるから」

二人並んで一緒に飲んだほうじ茶はほっこり甘く、忘れられない味となった。

男が山を降り、雪が山小屋を包んだが、少女の心は踊るようだった。いつもは風の音だけが友達の寂しい季節も、今年の少女にはきらきらとはなやいでみえた。

雪がたくさん積もれば積もるほど、愛しい想いも降り積もり、それがあふれかえらんばかりになった朝、凍っていた小川がせせらぎの音を響かせ、風が梅の匂いを運んできた。

ねこやなぎが咲くようになっても、男はこなかった。

ほたるぶくろがゆれても、木々が錦模様を織りあげても、男はこなかった。

〝どうしたんだべ。あの人体こわしてしまったんだろうか？　大けがしたんでないか？〟

次の春がやってきても、やっぱり男はこなかった。

いくつの色の風が通りすぎたことだろう。

ある秋の日、通りかかった町の行商人に少女は男のことをそれとなく聞いてみた。

「ああ、あの若い反物屋さんね。ずいぶん稼いだらしくて、すっかり店も大きくなっちまってなぁ。きれいな嫁さんもらって、外も内も幸せ盛りだあね。うらやましいこった」

少女の心の中で、何かがかすかに音をたてぱちんと割れた。楓の葉は知ってか知らずか、いつもと同じように一枚、また一枚と少女の髪を美しく飾る。

〝どうしてやろう・・・・・・〟

森の中でただ一人、少女は空を見上げ、はらはらとこぼれる涙をぬぐいもせずにいつまでもたたずんでいた。

〝どうやってあのひとにしかえししてやろう。いっとうひどいことをしてやろう。死ぬまでずっとおらのことをわすれないようにしてやろう〟

“いっとうひどいことをあのひとにしてやろう。だから、だから、いっとうやさしいことをしてやろう”
少女の心は風にのる。

男のいる町には、秋になると赤くなる葉がずいぶん多い。赤い葉は、風にひらりと舞い男の肩に静かに落ちる。
男はなんだかなつかしくなって、忘れていた何かを思い出そうとするたびに、しらず胸の奥がきゅん・・・ときしみ、涙をはらりとこぼす。
赤い葉はあとからあとから落ちてきて、男の方をたたくのだ。
次の秋も、その次の秋も、十年咲きの秋も、やさしくやさしく舞い落ちて、男の肩をたたくのだ・・・・・・。

《評》
時代小説の小さな物語としてまとまっています。純情な少女の片思いが実らなくて、男を復讐しようとしたり、反対にやさしくしてやろうと思ったりする心理の揺れ方も、常識を破っておもしろいのですが、一方の男の心がすこしきれいごとに思われます。秋が来て赤い葉が舞い落ちるのを見て、「なつかしい」と感じるだけでしょうか。少女を裏切った罪の意識が湧き上がって来るはずです。
純情物語としてはきれいに仕上がっていますが、男と心との恋の世界を書くには、まだあなた自身が若すぎ、経験が不足しているように私には感じられます。できるだけ自分の生きている現代を書いてほしいですね。
松永　伍一

東京都台東区長賞

いのちは見えるよ

浅草小学校　二年　和田　亮平

エリちゃんのとなりに目の見えないルミさんがすんでいて、もうすぐ赤ちゃんが生まれそうです。ルミさんが、ころんでびょういんに行く時、エリちゃんが一人でついて行ったので、ぼくは、ドキドキしながら「がんばれ」とおうえんしました。ルミさんが、のぞみちゃんを、生み上げた時、ぼくはなきそうになりました。ルミさん、赤ちゃんが見えたらどんなによかっただろう。のぞみちゃんの笑った顔や、ないた顔、見えたらいいのに。でも、ルミさんは、「いのちは見えるよ」と言います。生きていることが見えるのかなと、ぼくは思いました。
「いのち」って何だろう。あったかいものかな。心ぞうがうごくことかな。
ルミさんが、「これまで生きて来れたのは、みんなのいのちのおかげ、人間はたすけ合って、心をむすび合ってこそ生きていけるのね。」と。それで、のぞみちゃんを抱いた時、「いのち」と、かんじたのだと思いました。
ルミさんが、のぞみちゃんのうんちを、「何でへい気でさわれるのかな。」と思ったけれど、お母さんは、赤ちゃんのうんちをさわることでも、いのちのつながりをかんじているのかもしれないと、分かりました。
パパが、ぎゅっとエリちゃんをだいて、
「エリはパパのいのちさ。まるごといのちさ。」と言った所では、いのちは、人と人とのあたたかいつながりであって、みんなをやさしい、いい気もちにさせてくれるものなんだと、ぼくは、すこししあわせな気もちになりました。
ぼくのかぞくもいのちでつながっていると思いました。ルミさんのかぞくも、たくさんの人とつながればいいと思いました。

《評》

この題名を見たとき、私はドキンと胸を打たれました。そして一気に読んでいき、「ほんとにそうだ」と思いました。

目の見えないルミさんは「いのちは見える」と信じています。目の見える私たちは、見えるものだけを信じても、見えないものは疑ってしまうところがあるのです。ルミさんはもっともっと強い心をもって「いのちそのもの」をかんじとっています。

あなたは、そのことに気付いたのです。「あったかいものかな」「心ぞうがうごくことかな」。とても鋭い感想です。ルミさんの心はあなたを目ざめさせたのです。いのちは、きっと見えるはずですね。

松永　伍一

福岡県教育委員会賞

「ひまわりの種」

福岡県福岡市立箱崎中学校　三年　村山　紗織

僕の名前は大地です。ぼくの家では、毎年夏休みになると父さんと母さんと一緒に田舎のおじいちゃんの家に行きます。もう何年もおじいちゃんの家にいっている僕ですが、ある出来事をずっと忘れることができません。そう、それは小学校一年生。つまり僕がまだ十歳のころの出来事でした。

「おじいちゃん。」

ガラガラと音をたて僕はいきおいよく引き戸を開けました。

「よく来たな大地。」

おじいちゃんはいきおいよく現れました。おじいちゃんの名前は源造。名前とは違ってとてもやさしく今年で七十三歳になります。昨年、僕の大好きなおばあちゃんを亡くしたばかりですが、いつもと変わらない様子で僕を迎えてくれました。

家にはご馳走と柴犬のコロが待っていました。僕は父さん母さん、そしておじいちゃんとごちそうを食べました。僕はこの時間が大好きです。食事を終えた後、おじいちゃんの畑でコロと遊ぶ。これが僕の夏休みの習慣。くつを履きコロのひもを握りしめ、母さんから渡された帽子をかぶり外に出ようとした時、

「大地。」

おじいちゃんの声でした。

「大地。畑ではすきに遊んでいいが、近くに咲いているひまわりを折ったりして手をだしたりしてはいかんぞ。」

僕は軽くうなずき、かんかんの太陽の下へ飛び出しました。

畑までの道のりは山百合の咲く一本道を少し歩くだけ。今年も山百合は大きな白い花をつけ、いい香りをただよわせていました。しばらく歩くとそこにはおじいちゃんの畑が広がっていました。畑についたとたん、つないでいたひも

をはずし、コロと僕は夢中でかけまわりました。その時です。むちゅうになっていた僕はおじいちゃんにいわれたひまわりの花に飛びこんでしまい茎を折ってしまったのです。気が付くと僕はその場から逃げていました。

つぎの日。僕は朝早くから目が覚めてしまいました。ひまわりのことが気になったから。朝食の時間、おじいちゃんの様子がいつもと少し違っていました。心配した父さんが聞くと、

「ひまわりがな、折れてしまったんだよ。」

とだけいい、父さんも、

「そうか。」

とだけ返事をしました。

僕は何もいうことができませんでした。食事を終えた後、僕は思い切って父さんにあのひまわりはいったい何なのか聞いてみました。

「あの花はな、亡くなったおばあちゃんが昨年植えて、今年はじめて花を咲かせたらしい。」

僕はその話を聞くと、あのじまわりの下へ走り出していました。

息を切らし僕がひまわりにたどり着くと、折れたひまわりにはひもがくくりつけてありました。「きっとおじいちゃんだ。」そう思い、僕はいたたまれなくなり家に戻りすべてをおじいちゃんにうちあけました。

おじいちゃんは怒りませんでした。そして、

「大地。物を壊すのは簡単だが、もとに戻すことは難しい。あのひまわりもこれからどうなるかわからないが、きちんと見守ってやれ。」

とだけいいました。僕はそれから自分の家に帰る日まで一生懸命ひまわりを手入れしながら見守りました。しかし家に帰る日はついに来てしまい僕は帰る前、おじいちゃんに

「ごめんなさい。」

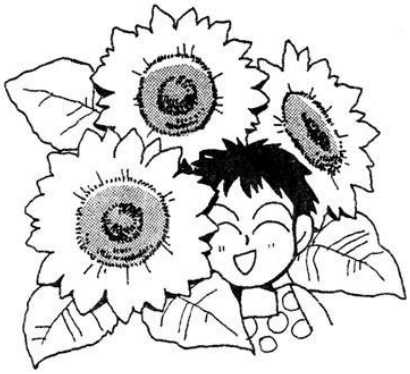
とだけ言い残し家に帰りました。

家に帰りしばらくしたある日、僕宛におじいちゃんから手紙とひまわりの種が届きました。手紙には「あのひまわりの種です。大地がきちんと見守ってくれたから種をつけることができたと私は思います。よかったら育ててみてください。」とあり僕は急いでスコップとじょうろを手にとり種を植えにいきました。

あれから五年。僕は今小学校六年生になります。あの出来事から僕には夏休みの習慣が一つ増えました。それは、僕が育てたひまわりの種をおじいちゃんにもっていくこと。今年も僕は種をおじいちゃんにもっていきました。おじいちゃんはいつも「ありがとう。これからもひまわりの種を続けてくれるかい。」

といい僕が深くうなづくと笑顔でその種をおばあちゃんの仏壇の上にそなえました。

もしもあの出来事がなかったら、僕はひまわりを育てていなかったと思います。「ひまわりの種。」これからも僕はひまわりを育てるでしょう。それが僕の役目のような気がするから。それが僕とおじいちゃんとおばあちゃんをつないでくれる気がするから。



《評》

おじいちゃんの家に遊びに行った小学一年の大地君の思い出が、とても丁寧に書き込まれています。幸せなことをなつかしがるのは当り前ですが、自分が失敗したことにどんな意味があったかをいまも考えつづけているところがすてきです。

思い出とは過ぎてしまったことではなく、いまの暮らしのなかにいきつづけているものです。大地君の思い出はそのよい例です。おじいちゃんのやさしさと教えが、ちゃんと大地君の心を育ててくれたのですね。恩返しというのはこういうことだな、と私も感心しました。ひまわりの花が見えるようですね。

松永　伍一

柳川市教育委員会賞

この一球

福岡県柳川市立柳城中学校　三年　野口　晴加

「ここでまけるわけには行かない。」
心の中で必死に叫んでいた。
中学校最後の試合、中体連のテニスの個人戦に私は挑んでいた。前日の団体戦でも、今戦っている相手チームにファイナルゲームの末負けていた。ここ数年、圧倒的な強さでいつも優勝していた蒲池中学校。
試合開始前、緊張する私達を尻目に、余裕の態度でかまえていた。相手はもちろん強い。でも同じ中学三年生。恐れるものなどなにもない・・・。そう心に言い聞かせながら〝プレーボール〟の合図を待った。
ゲームカウント三対一。あと一ゲーム落としたら、すべてが終わってしまう。
追いこまれ、どうかするとあきらめかけそうになる心を、必死に奮い立たせていた。
「自分を信じなさい。あなたなら絶対に勝てるから。」
朝、出掛ける時に母にかけられた言葉が、胸に響く。一球一球、全神経を集中させ、丁寧に白球を追った。勝ち負けよりも、今この一球を落とさないことだけにすべてをかけて。
思えば一年生の夏。八人いた部員は、半分に減り、猛暑の中での練習は、今思い出しても辛かった。毎日毎日朝早くから、テニスコートに向い、真っ黒に日焼けした体は、食事がのどを通らない日が続いた。時には、練習を休みたくて、泣きながらでかけたこともあった。それでも、勉強や学校行事と両立させながら、テニス部のキャプテンとして、今この日まで、頑張り続けて来た、自分がここにいる。そして仲間がいる。そして、それを一番良く知っているのは、やっぱり自分自身だ。
ゲームカウント三対三。とうとう、ファイナルゲームまで、追い上げていた。
「負けない。絶対負けない。」
自分を心の底から信じた時、私たちペアは、優勝カップを手にしていた。
仲間の拍手と、うれしそうな笑顔が私達を取り囲んだ。二人で、言葉にならない声を叫んでいた。
三年間続けてきた部活も、これで終る。テニスを通して、様々なことを私は学んだ。目標に向けて、やり続けること。全力を出し尽くすこと。粘り強く最後まで、あきらめないこと。自分の力を信じること。そして仲間との連帯。
これから、高校受験という新たな目標に向けて、スタートする私にとって、必ずこの経験を生かし、自分の夢を掴み取ろうと、強く心に誓った。

《評》
これが中学生活での最後の試合。その緊張感と試合の流れとが、無駄のない文章ですっきりと書きとめられていますので、私も試合そのものを見ているような気分になりました。
うまく書こうとしなくても、目に見えることと自分の心理の動きとを重ねて、余計なことを切り落していくと、いい文章になっていきます。そのこつをあなたは身につけているようです。
「私達ペアは、優勝カップを手にしていた・」と「二人で、言葉にならない声を叫んでいた」との感激のシーンの簡潔な表現が光りを放っています。くどい説明はいりませんね。

松永　伍一

東京都台東区教育委員会賞

見かけ

東京都町田市立鶴川第二中学校　二年　夏目　愛

夏休みのある日、友だちとの待ち合わせ場所に向かうために、私は一人電車に乗っていました。車内は、結構混んでいたけど、席が一つ空いていたので、そこに座ることにしました。次の駅で、五人の人が同じ車内に乗ってきました。そのうちの一人が、私の隣に座りました。その人の印象は、はっきり言うと、〝がらが悪い〟そんな感じでした。髪は金髪で、腰パンだったし、色々な所にピアスをしていて・・・正直、その人が座ってちょっと嫌だなぁ・・・と思っていました。でも、降りる駅まで立って行くのも嫌なので、気にしないことにしました。それから少し経って、隣の人は本を読み始めました。本の名前は「〇〇ヘルパーの心得」というような感じでした。私は「この人、こんな本読むの？びっくり・・・」とか、失礼な事ばかり考えていました。人は見かけによらないな・・・と思いつつ、良い人なのかな？　とも思っていました。

電車に乗ってから二十分くらい経ったとき、一人のおばあさんが電車に乗ってきました。そのおばあさんは、買い物の帰りなのか、大きくて重そうなビニール袋を二つ持っていました。その時は、シルバーシートも、他の席も、何処も空いていなかったので、おばあさんは荷物を持ったまま、つり革と棒に掴まっていました。私は、席を譲った方が良いのかなぁ・・・？　でも、断られたらどうしよう・・・とか、降りる駅まで、まだまだあるしなぁ・・・と、迷っていました。すると、「替わりますよ。ここどうぞ。」と言う声が隣から聞こえてきました。・・・もしかして？　と思い、横を見ると、あの怖そうな人が、おばあさんに席を譲っていました。そのとき私は、ええーっ？　この人がぁ？と、本当に失礼な事を思ってしまいました。

私は、前に「人を見かけで判断しちゃだめだよ。」と人に言ったことがあります。しかし私は自分でそれをやっていたんだ・・・と家に帰ってから、気付きました。それは、少しショックだったけど・・・どんなに怖そうな人でも、実はすごく優しかったりするのだから、人を見かけで判断してはいけない。これからは、そういう事が無いように、気を付けたい、と思うようになりました。

そして、私もどんなに簡単な事でも良いから、自分が出来るだけの「親切」を、人にしてあげたい。人には、どう思われるか分からないけど、〝あぁ〟この人は良い人なんだな〟と、思われるよう、人にありがとうって言われるような人になりたい。そう思いました。

《評》

「人は見かけによらない」とか、「人を見かけで判断してはいけない」とか言います。外見と中身が一致しないことが世の中にはよくあるからです。

ここで書かれていることは、外見とちがって中身がしっかりしている人に出会って、いままでの認識を改めることになった体験です。

電車の中での十分か二十分ぐらいの短い時間で、人間の本性に触れることができたことは、とても幸せでしたね。そんな経験をしてみたいと願って電車に乗ったとしても叶うものではありません。とても後味のいい文章でした。あなたの心の丈（たけ）も伸びたでしょう。

松永　伍一

福岡市教育委員会賞

祖父と私の暑い夏

福岡県久留米市荒木小学校　六年　川島　早織

せみが一斉に鳴き初め、太陽の日がジリジリと肌を焼く。夏、まっさかり。

祖父の父は、いまから六十年前、ビルマで戦死している。祖父が九才の時のことだ。曽祖父は、電気技師をしていた。暮らしは裕福で、何の不自由もなかった。とてもやさしい人で、よく遊んでもらっていた。仕事帰りに買って来る土産も珍しい事ではなく、その度に、大きな背中に飛び乗って、甘えていた事はいつまでも忘れられない。だが、そんな幸せな日々は長く続かなかった。ある日、召集令状が届いた。お国のため、家族のためにと、笑顔で手を振りながら戦場へと向かった曽祖父の顔、祖父は今でも忘れないと話す。

それから先は、父親不在の日々が始まり、豊かな暮らしが一変した。日々の暮らしにも困るようになり、幼い祖父も家計の手伝いをするようになった。同級生が遊んでいる時に、山でたき木を拾ったり、水を汲みに行ったり、アイスキャンデーを売る手伝いをした。父親の帰りを信じて・・・

しかし、やさしい父親は、二度とその笑顔を見せることはなかった。ビルマで戦死したのだ。曽祖父は、八女の山中にねむっている。お盆やおひがんに曽祖父の好きだったお酒やおかしを供えてお参りをする。祖父は、線香やろうそくに火をつけると、いつまでも、いつまでも手を合わせている。曽祖父と共に過ごした数少ない日々の・思い出や、今、幸せでいることを報告しているのだろう。私は曽祖父に会ったことはない。でも、祖父から話を聞いているうちに、まるで今の祖父にそっくりだと思うようになった。

祖父は、私にとってのスーパーマンだ。私が困った時には必ず助けてくれる。公園でハチにさされて泣いてしまった時、指をくわえて毒を吸い出してくれた。竹馬ができなくてくやしい思いをしていると、ノコギリやかなづちを片手に、とてもがんじょうな竹馬を作ってくれる。思い出せば数え切れない位だ。

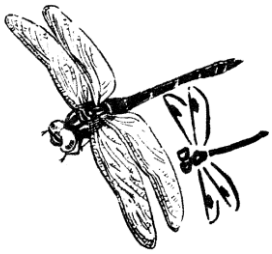
私には家族がいて、さみしい思いをした事もない。でも、祖父のやさしい笑顔の下には、いくつもの悲しみや苦しみが刻まれているに違いない。

戦争が終って五十八年経った今でも、戦争による心のきずは消えていない。ひばく国である私たち日本人だけでなく、相手の国でも多くの人がぎせいになり、その家族は私たちと同じように心のきずをかかえている。戦争から生まれる物は、にくしみ、悲しみだけなのに・・・。祖父が言う。

「お先にどうぞ。」

そういう気持ちがあればケンカは生まれない。相手の気持ちを理解し、思いやるゆとりさえあれば、二度と過ちを繰り返す事はない。

今年もまた、うだるような夏空に、命の重さをかがやかせ、ハタハタと飛ぶとんぼの中に祖父と私の道は続く。



《評》

作文の出だしの文章は秀逸です。思い起こせば二十世紀は戦争の連続でした。あなたの曽祖父はビルマで戦死されました。父を失ったあなたの祖父は苦労をされ、色々な仕事に就いて家計を支えられました。そのお爺ちゃんはあなたを可愛がっているのが、作文を読んでいて、目に見えるようです。

二十一世紀は平和な世界になるかと思ったら、戦争とテロの脅威にさらされています。戦争は人間と人間の殺し合いです。もう殺し合いは止めて、二度と過ちをくり返したくありません。「お先にどうぞ」という言葉は光っています。相手の気持を理解し、思いやりがあれば戦争は起らず、世界に平和がもたらされるでしょう。

佐伯　亮三

柳川市議会議長賞

キャプテン悠太郎

福岡県柳川市立東宮永小学校　五年　山田　悠太郎

今、ぼくは、少年野球をしている。そして、いつもいわれているのが、守備位置につくとき、ベンチにもどってくるときのダッシュ。流れをひきよせるための声出しである。でもなぜか他の人にたよってしまう。

ある試合の日、五年生以下での対戦があった。守備位置は、キャッチャー。一番チームをしめていくポジションである。そして、試合開始、集合という時に、

「悠太郎君キャプテンになって。キャプテンする人、他におらんもん。」

と五人の人から言われ、キャプテンを一度もしたことがなかったぼくは、

「えっおれが。」

と言ったが、心の中があつくなって、キャプテンか、いい機会かもしれない、やってみよう。キャプテンがチームをひっぱっていく。キャプテンがだらだらしたら、チームもだらだらする。だから気合入れてプレーするぞ、と思った。

「集合」

と審判の声。

「いくぞー」

精いっぱいの声を出し、全力で走り試合開始のあいさつをした。そして、キャプテンのあいさつとあくしゅ。相手のキャプテンに負けない声で言った。

「お願いします。」

そして、いよいよプレイボール。ぼくはベースの前に出て、

「しまっていこー。」

と、のどちんこがちぎれるぐらいの声で言った。そして、ピッチャーにいった。

「ピッチャー、遠りょせんで、ミットめがけてバシバシこい。ぼうとうしてもよか、おれのこの体でどんな球でも止めてやる。全力投球してこい。」

そしたら、ピッチャーもホッとしたようで、ストライクをドンドンいれてきた。ミットは、バシ、バシ音を立てながらとった。そして、三者凡退。

「ナイピッチング。」

とぼくは、声をかけた。

そして次は、打つ番。一番バッターがアウトになった。よっしゃ―見とけ。このキャプテンが、お手本になってやるぜ。バッターボックスに立って、大きな声を出し、自分自身に気合を入れた。カウント、ワンストライクワンボール。次の三球目。

「カキーン。」

バットのしんでとらえた見事なヒット。

きょうは、最高の試合ができた。それは、キャッチャーとしても、バッターとしても、そしてキャプテン悠太郎としての初めての日は、心に残る一日となった。

「いまのキャプテンを手本にし、来年は本物のキャプテン悠太郎をめざすぞ。」

《評》

題名がなかなかいいですね。キャプテンになってくれと、野球部員にいわれて、よし、よい機会だと自信をもって引き受けたあなたの度胸のよさに感心しました。

仕事はやりとげることが大切です。責任をもって部員を引っぱっていくあなたの姿が目に見えるようです。それにキャッチャーとして、ピッチャーの強球を受けるのは、さぞや痛かったでしょうね。

悠太郎君。快音を鳴らして、ヒットまで打ったんだね。きっと、甲子園出場も夢でないかも知れない。

名キャプテンとして、勉強も忘れないで下

さい。キビキビした文章を一気に読み上げました。

佐伯　亮三

柳川文化協会賞

家族のたからもの

福岡県柳川市立東宮永小学校　三年　山田　もも子

わたしはおとうさんにたからものをきいてみました。おとうさんはこう答えてくれました。

「三人の子どもかな。」

わたしは、うれしくなりました。

つぎにおかあさんにきくと、

「お母さんはね、いままで出会った人との思い出が大切なたからものだけど、その中のとくべつなたからものは、家族。」

わたしはまたうれしくなりました。

今度は、お兄ちゃんに聞いてみると、

「ともだち。」

「ともだちの中でとくにだれ。」

とわたしが聞くと、

「ともだち、全員。」

とお兄ちゃんは答えました。

こんどは、わたしの妹に聞いてみました。妹は、

「今まで、お兄ちゃん、もも姉ちゃんから、もらったもの」

と言いました。わたしは、またまた、とってもうれしくなりました。

つぎに、おばあちゃんと、おじいちゃんに聞いてみると、

「そりゃあ、あんたたち三人のまごが、元気に育ってくれるのがたからものだよ。それが、おばちゃんとおじいちゃんの大切なもの。」

わたしはとってもうれしくなりました。

さいごは、わたし。やっぱり自分が、一番おせわになってる家族です。

これからも、いままでどおり、楽しくにぎやかな家族がわたしの一番のたからものです。

《評》

お父さん、お母さん、兄さん、妹さんにたからものは何かと聞いた時、それぞれ「三人の子供」「今まで出会った人」「友達」「兄姉にもらったもの」と答えました。おじいちゃん、おばあちゃんは、「三人の孫」だと答えるあたり、ほほえましい光景が目に浮かんでくるようです。それぞれ年令によってたからものは違うようですが、やはり一番のたからものは家族の一人ひとりであるようです。これから家族の愛をはぐくんでいけばきっと立派な家庭になっていくでしょう。もも子ちゃんは、楽しい、にぎやかな家族が一番のたからものだそうですが、ご両親の言うことをよく聞き、兄弟仲よく、祖父母の方（かた）に思いやりの心を持てば、平和な家庭になるでしょう。頑張って下さい。

佐伯　亮三

東京浅草ロータリークラブ会長賞

ポンタの手じゅつ

東京都台東区浅草小学校　三年　久田　絢天

二年生のとき、家でかっている犬のポンタの体の一部分に「ガン」のかたまりができてしまいました。

病院に行ってしんさつしてもらったら、

「手じゅつをしたほうがいいですよ。」

と言われたので、手じゅつをすることにしました。

さいしょに先生に手じゅつをすすめられたとき、

「どうする。」

とみんなで相談しました。ポンちゃんは、年よりだから、ますいにたえられるかどうか心配だったからです。でも、「手じゅつをしたほうがいい」とみんなのいけんがいっちしたので手じゅつをすることにしました。

次の日、ポンタを病院につれて行きました。学校があったので、わたしは、行けるところまでいっしょに行きました。

家に帰ると、おばあちゃんが、

「手じゅつは、あしただって。」

と教えてくれました。私は、ランドセルをおいてきがえてからすぐに、ポンタのお見まいにいきました。ポンタはつかれているのか、グーグーいびきをかいてねていました。その顔は、とてもかわいかったです。ポンタの手じゅつのことをおばあちゃんと先生が話しているとき、先生のかっている犬がすりよってきました。そのとき「ポンタもげんきになってほしいなー」と思いました。

次の日はポンタの手じゅつの日でした。手じゅつをするところは見なかったのですが、終ったあと、目にいっぱいなみだをためていたそうです。

そのつぎの日、ポンタの様子を友だちといっしょに見に行きました。

先生から、

「ポンタ君は、よくねていましたよ。」

と聞いて、私は、ホッとしました。学校でも「ポンタが死んでしまったらどうしよう。」とずっと思っていたのです。ぐっすりねているということは、だいじょうぶということなので、とても安心しました。

ポンタが家に帰って来た日、私は、思わずだきしめてしまいました。ポンタのおなかを見ると、バンドエイドがはってありました。そのバンドエイドのがらが、犬とハートだったので、わらってしまいました。

今では、とっても元気です。でも、手じゅつをしたあと、ポンタの食事のりょうをふやさないといけませんでした。なぜかたべるりょうが、二ばいにふえたからです。おかげで体重が2。7キロにふえてしまいました。本当は、もっとへらさないといけないので、さん歩の回数をふやしてなんとか体重をへらしています。

いろいろなことがありましたが私は、ポンタにそんなハードルがたちはだかっても、ぜったいに乗りこえられるとしんじています。

《評》

自分のかわいがっている犬が、病気になり手じゅつすることになったのですが、どんなに心ぱいだったでしょう。そのことがひしひしと伝わるようにかかれています。

手じゅつが終ったあとポンタがなみだをためていたそうですが、そこがあなたを感動させたところでしょう。それ以上書かなくても十分です。

それから、いえに帰ったときしっかりだきしめたあと、バンドエイドのがらが目にとまって笑ったところで、あなたがどんなに安心したかよくわかりました。

心があたたまる文しょうでした。

松永　伍一

第七回長谷健賞＝平成十六（二〇〇四）年度

長谷健賞大賞

待っている光

福岡工業大学付属城東高等学校　三年　田中　綾乃

「彼女が光り輝くのが十代ではなく、二十代・三十代であるようにと願っています。」

伯父から母に宛てられたメールの文面は、そう締めくくられていた。

私は今、人生のなかでどれくらいの光をあびているところなのだろう。

一年前の春、「道」というテーマが課題の論文エッセーを公募していることを知り、私はそのころの思いを原稿に込めた。ちょうど学校のコース決めに悩んでいる時期で、文系に強い、と自他共に認めながらも、幼い頃からの獣医の夢は到底捨てきれず、ややもすると揺らぎそうな自分の気持ちを強引に原点に戻す意味でも必要なテーマだった。

「自分自身に負けることなく、あえて険しい道を歩きつづけたい。」

そう綴って原稿を投函し、その後進路を理系に決めた。誰でもいい…誰かに宣言することで、崇（たか）きを目指したかったのだ。

思いがけずそのエッセーは審査員の人たちの共感を得たのか、夏休みに入賞の知らせがきた。

気持ちに拍車がかかった。努力することは苦ではない。自分の思いが誰かの目に留まり、認められたのなら、ますます何がなんでも頑張らなくては、とファイトが湧いた。

しかし現実は思った以上に厳しい。得意教科は満足な結果を残すのに対し、苦手教科は割いた時間が空しくなるような数字で、毎回私をうちのめした。模試も、定期考査も、私にしっかりと現実を見据えろ、とたたみかけてくる。そんなつらい気持ちを素早くリセットし、呪文のように数式を唱え、問題と格闘する。もう、意地だけで毎日を過ごしていた。

自分が本当は何を目指しているのか、どんな未来を掴みたいのか、今やっていることが正しいのかどうかさえ分からなくなっていた十一月、件の論文エッセーの授賞式が東京の最高級ホテルで執り行なわれた。

指定された座に座り、テーブルの上を見ると、そこには新しくでき上がったばかりの作品集が置いてある。そっとめくると、四章に分かれたその本にはそれぞれの作品に似合った目次が設けられており、第二章に私のエッセーは収められていた。

”努力は裏切らない“　第二章の目次を目にした途端、思わず瞼を閉じた。泣きたくなった。

審査委員長の大学教授が、朗々とした声で、作品の講評を行っていく。

「苦手分野の克服・・・努力は買ってでもしろと言いますが、まさにその通りですね。」

私の前向きなエッセイの主旨に、うなずきながら語る教授の凛とした言葉が、澱んだ私の心を刺す。

作品を書き上げた頃とは微妙に違ってきている中途半端な自分の根性など、この場にいる誰一人知りはしない。

華やかなシャンデリアの下、きらきらした照明に照らされながら、私だけが他の受賞者たちから離れ、一人置いてきぼりになっている気がした。

授賞式は滞りなく終わり、場所を移しての祝賀パーティーで、次々と主催者や審査委員の人たちがやさしく微笑みながら私のそばへ寄ってきて、激励と賞賛の言葉をかけていく。

「君ならきっと、夢をかなえられるよ。」

「自信をもって頑張り続けなさい。」

「大丈夫。獣医になることを期待していますよ。」

はりついたような笑顔で、私はただ曖昧に頭を下げることしかできなかった。

きらびやかな光の中にいながら、心はどこか遠く暗い波間を漂っているようだった。

福岡に戻り、ふさぎ込むことが日に日に増えていった。父も母も私を信じ、我慢強く黙って見てはいてくれたが、どれだけ陰で心配しているか痛いほど伝わってくる。

「もうやめた、やめた！　なんもかもやめちゃおっと。」

と、休憩時間に突然大声で叫ぶ私に、

「そっかぁ、やめるか。おーし、やめちゃえやめちゃえ。」

と、笑いながらはやし立てる母の目は、私という人間を知り尽くし、確固たる信頼と自信に満ちている。横道に逸れる勇気などを持ち合わせていないことは、私と同じくらい母にも解っているのだ。そしてその信頼は、一人っ子の私にとって別に負担にはならず、絶対的な愛情で見守ってくれている両親が、むしろ最後の砦（とりで）だった。

「“夢“は破れるものではなく、捨てることにより失うものだ」

という言葉をテレビ番組で聞き、感動し、それ以来なにかにつけてその言葉を心の中で反芻（はんすう）しながら、自分に言い聞かせてきた。

私にとって“目標を変える人間”は、いつしか“情けない挫折者”と言うイメージになっていた。意志を強く持ち続けようと歯をくいしばるあまり、極端な考え方しかできなくなってしまっていたのかもしれない。勉強の合間、気晴らしに僅かな時間で書き上げた童話や小説等が、面白いほど次々と受賞してゆき、額に納まりきれずに増え続ける賞状筒と楯が自宅のリビングを飾る。

原稿の上で、大好きな動物たちが私の手によって、思い思いに跳ね回り、物語を紡いでいく。次から次へとアイデアが溢れ、犬が、うさぎが、きつねが、主人公になろうと自分の出番を待っている。

決して嫌いなわけではないこちらの方の道を選んでしまったら、私は“落伍者”になるのだろうか？　すぐそばまで届いている光の筋に手をかざしたら、それはもう“負け”なのだろうか？

毎日自問自答しながら、それでも立ち止まることもできず、足をひきずるように歩き続けた。苛立ちを諦めが飲みこんでいきそうな中で、わずか十八年間で染みついた“他人に見せない気の強さ”だけが、必死に自分を支えていた。

日ばかりが無常に足早に経ち、道の暗闇でもやもやと彷徨う私に、担任の先生が言った。

「綾乃、これでなければ何もかもが駄目なんだ、という考えは捨てた方がいいぞ。」

あまりにもさらりと言われたので、かえって心に留まった。

「頑固すぎると、何か考えが偏ってしまうこともある。これでなければすべてが無になるなんてことはない。獣医でなくても、理学部で動物関係を学び、研究することは可能だし、そこでもっと詳しく知りたくなったら、大学に紹介状をもらって他に派遣学生として行く事だってできる。文章を書くことが好きなら、文学部で腕を磨きながら、その傍らで生物関係のサークルに入ったり、活動をすればいい。もう少し肩の力を抜いて、視野を広げてごらん。道は決して一つだけじゃないんだぞ。」

くしゃくしゃっとわたしの頭を乱暴に撫でて、いつだってその先生は、大切なことをけろっとした顔で事もなげに言う。

融通のきかない頑なな私の考えに、ほんの少し違う色の光が、別方向から射し込んできた瞬間だった。

その日から、理学部や文学部の資料を取り寄せ、インターネットで学習内容を一から調べ直す作業が始まった。

応用動物学、生物学、遺伝学、さまざまな分野で日夜生物に携わっている学生たちがいる。文学部の方も、私が勝手に思い込んでいた退屈そうな必修科目の他に、興味をそそられる授業やゼミがいくらでもある。

ちょっと角度を変えてひと呼吸おいた気持ちで見るだけで、まだまだいろんな世界が私の前には広がっていることを知った。

きっと担任の先生のみならず、伯父もがむしゃらに馬車馬のごとく走り続けている私が気がかりなのにちがいない。メールには、

「あの子のまじめすぎる性格が心配です。もっと肩の力を抜いてゆっくり進むよう、導いてあげて下さい。」

と、母にアドバイスする言葉が添えられていた。伯父は能力の高い人で、どん

な場合においてもフレキシブルに対応することができる。父もそうだが、石ころ一つでもたくさんの見方をすることができ、私の理想だ。
突っ走ることだけが正しいのではない、もっと周りの景色を見て、楽しみながら色んな色を身につけていきなさい、自分が向きさえすれば、光はどの方向からでも降り注いでくるんだよ・・・そんな思いが、冒頭の言葉に込められているのだろう。母もそれを理解し、あの文面を私に見せたのだろう。
夢がある。でもその夢を、今ここには書くまい。肩で風切り、強い意志を持つことも大切だが、意地と見栄は紙一重だ。
「あなたの努力は才能の一つ。」
といつも私を認めてくれている両親の声援を背に受け、自己の能力を上手に見極めながら自分らしく歩きつづけていこう。
決して、ずる賢く人生においての損得ばかりを優先させたりせず、いい意味での意地を張りながら、気負わずに進んでいこう。
周りの人たちの大らかな助言で、ずっと長いあいだまとっていた、精一杯の強気で塗り固められた“見栄”が、自分にしか聞こえないほどの微かな音をたて剥がれていく気がした。
まだ十八歳。私の光は無限に用意されていると信じている。

《評》
初めに伯父さんの意見を持ってきて自分の置かれている立場を浮き彫りにした、そういう文章の組み立てに感心しました。いきなり「私は悩んでいます」という告白もできるでしょうが、そこから始めると後が単調になってしまい、ふくらみが出にくくなります。そこを直感的にわきまえていたからこそ、「努力は裏切らない」の入賞と表彰式の様子が生き生きと伝わってきます。自分の言い分だけを主張しても、読んだ人は「そうでした動きをイメージ豊かに描くと「なるほどそうだろう」と共感できるのです。田中さんのものをこれまでいくつも読んできて、今度のがいちばん優れていると思いました。

松永　伍一

優秀賞（福岡県知事賞）

何階ですか

柳川市立矢留小学校　四年　あらまき　かえで

わたしは、病院のエレベーターに乗っていた。おじいちゃんのお見舞いにきていたのだ。そこには、車いすに乗ったかんじゃさんも乗っていた。
私は、四階のボタンを押して、立っていた。車いすのかんじゃさんは、おしにくそうだった。
数日後、また病院に行った。エレベーターで、かんごふさんが、かんじゃさんに何か聞いている。耳をすますと、
「何階ですか。」
「六階です。」
と聞こえてきた。それを聞いて、わたしは、はっとした。いつも、自分だけ押していたからだ。何階ですかと聞かれたかんじゃさんはにこにこしていた。わたしも、かんごふさんみたいになりたいと思ったが、自信がなった。
その帰り、エレベーターに乗ると、かんごふさんが乗ってきた。チャンスだ。
でも、
「な、なん。」
声がつまって言えなかった。するとかんごふさんが、
「何階ですかって言う時は、はずかしがらないで言うのよ。」

と言っておりていった。看護婦さんは、わたしがなんと言いたかったか分かっていたのだ。うれしくなり、「わたしも言える。」と自信がついた。
チャンスがまたやってきた。ドキドキしながらエレベーターに乗ると、
「何階ですか。」
と先に言われてしまった。わたしは、がっかりした。もっと早くいえば良かった。
チャンスは、またまたやってきた。おじいちゃんの外泊のため、むかえに行った。エレベーターに乗ると、二人のかんじゃさんも乗ってきた。言おうとした時、次々とかんじゃさんが乗ってきた。こんなに多いと、はずかしくて言えそうにない。その時、かんごふさんの「はずかしがらないで言うのよ。」という言葉が頭にうかんできた。今言わなければずっと言えないような気がした。
「何階ですか。」
やった。ついに言えた。心の中がすっきりした。かんじゃさんたちもにこにこしている。言ってよかったなぁと思った。
帰りのエレベーターでかんごふさんにあった。わたしはまよわず、
「何階ですが。」
といった。かんごふさんもわたしも、にこにこしていた。
「何階ですか。」のたった一言が、人と人との心をつなぐ。わたしは、これからも、人とのふれ合いを大切にしたいと思う。

《評》
とても気持ちのいい文章です。読んでいて心が暖まる思いがしました。そのうえ余計なことが書かれていませんので、あなたの動きのまわりの空気が澄んでいるようです。そして明るいです。
「何階ですか」とたずねるのは、簡単なようで勇気のいることです。
あなたのなかには人に親切をほどこしたいという心はあったのに、勇気が出なかっただけです。でも「何階ですか」が言えましたね。エレベーターに乗っていた人たちも、それをきいて気持ちがよかったでしょうが、いちばんうれしかったのはあなた自身だったのです。
こうして人間は成長していきます。おめでとう。

松永　伍一

優秀賞　東京都台東区長賞

一人の人間として

調布市立調布中学校　三年　和田　さゆり

「障害があって何がいけないのですか?」
これは、私が小学生の時に担任の先生がクラスのみんなに言った言葉だ。私は多分、この言葉を忘れることはないだろう。

私のクラスには障害を持った子が一人いた。その障害とは知的障害などと呼ばれる知識が少しかけていたりする障害。なのでその子はみんなとは違う勉強をドリルを使って学習したりしていた。いつもへらへらと笑っていたりするためか、クラスのみんなからは違う目で見られたり、あまり近づく子はいなかった。自分もその一人だ。やはり障害を持っているというだけで自分たちとは違う人間、少し変わった人という目で見られていた。自分自身もそれでしょうがないと思っていた。

五月。運動会の季節。クラスごとにみんなでダンスを踊ることになった。もちろんその子も一緒。そうするとまたいくつか問題も出てきた。

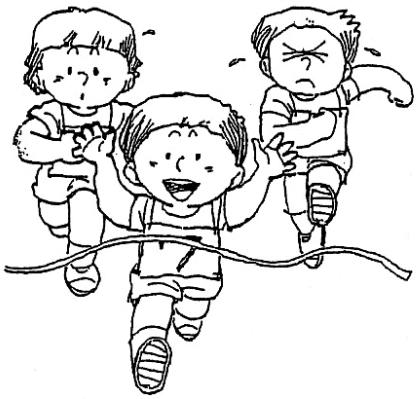
一つはその子が踊りについていけないということ。あまりうまく理解できないため一つ一つの振りを覚えられず、足を引っ張っている存在になってしまっていた。

二つ目は、その子が覚えられないため少し厳しく接してしまうとすぐに泣いてしまうということ。このようなことがあるとうまく指導できなくて指導している人もやる気がなくなり、大きな壁ができてしまった。クラスのみんなが、「あの子は障害者だから。」といいながら無理だと決めつけていた。そんな時だ。担任の先生があの言葉を口に出したのは。クラスのみんなが何も言えなくなった。とても真剣な表情で話を聞いていた。

その日の放課後。みんなでもう一度やろうという気持ちになり、少しずつ少しずつ教えていった。もちろんこれは先生の話を聞いて同情したのではなく心の底からその子のことを思っての行動だった。私もみんなと一緒に教えながら同じ気持ちになっていった。

私がその子と生活したなかでいちばん心に残っていることは運動会での出来事だ。徒競争を行うことになっていてみんなが次々と終わり、その子の順番になったころ。その子はスタートした直後、転んでしまったのだ。それでも、最後まで走りきってゴールしたあと、手でピースをして、笑っていた。みんな「何やってるの。ビリだったのに。」とつぶやいていたが、私にはその子がとても輝いて見えた。

今だにどうしてピースをして笑っていたのか私には分からない。けれどあの子の笑顔に勇気をもらい、あの子の涙には心を打たれた。知らぬ間にあの子のことで心が一杯になっていたのだ。障害者としてだからではなく一人の人間として。



《評》

障害をもった人に対して差別や偏見が世間にはまだあります。学校のなかでも同じです。あなたの場合は幸いなことに優れた先生から人間の見方を教えてもらいましたね。そこであなたは人間を深く見つめることができたのです。

この文章がすぐれているのは、あなたの思いやりの心と障害を持つ友達の動きとがピッタリと重なっているところです。とくに心を打たれたのは運動会の場面でした。最後まで走りつづけて、笑顔でピースのサインをしたその光景はほんとうに輝いています。あなたは、そこに人間にとって大切なものを発見したのです。それが私にも伝わってきました。

松永　伍一

優秀賞（柳川市長賞）

涙が笑顔にかわる時

久留米市立荒木小学校　五年　川島　茜音

　真青な空に入道雲、朝から競い合うように鳴いているセミ。さあ、夏休みの始まりだ。今年の夏休みの目標は、早ね早起き、一学期の復習、家の手伝いと決めている。

　母が仕事でいない日、私はひとりで留守番をしている。今年から中学生になった姉は、毎日部活でお昼すぎまで帰って来ない。宿題が終わると、する事がなくなり、退くつな日々が続いていた。そんなある日、

「お母さんが仕事にいってる間、お手伝いをしてくれない？」

退屈していた私は、頼まれたそうじ機かけとふきそうじをがん張った。そうじ機をかけていると、少し大人になったような気がしたし、ふきそうじをすると、床がさらさらになり気持ちが良かった。母も帰宅するなり、

「わあ、家の中がぴっかぴか。ありがとう。」

お礼の言葉をくり返しながら、私を抱きしめる母。私は母から感謝される事に喜びを感じ、手伝いをすることが大好きになった。でも、手伝いのなかで、そうじ機かけとふきそうじは、汗だくになるし一番きつい仕事なので、その手伝いをたのまれると、

「いやだなぁ。お風呂そうじの方がいいな。」

と思うようになった。

　そんなある日の夕方、帰宅した母が夕食の準備をしながらとつ然、

「ねえ。そうじ終わったと？」

「したよ。」

ちょっとどきどきしながら答えた。

「ねぇ。本当にしたと？」

「……したよ。」

母の顔を見ずに答えた。母がもう一度

「正直に答えてね。本当にした？」

「……。」

何も答えられなかった。本当は、そうじ機かけもふきそうじもしていなかった。

　両親は、うそをつく事のおろかさを、私たちによく話してくれた。

一つ嘘をつけば、その嘘を本当の事にするために、うそをつき続けなければならない。いくつものうそを重ねていくうちに、うそをつくことが平気になってくる。うそをつくという事は、相手の信らいをうら切ることで、人間として一番してはいけないことだ。

　その話を聞くたびに、私はうそなんかつかないと思っていた。なのに、どうしてうそをついてしまったのだろう。涙、涙が止まらない。母の顔をまっすぐ見られない。誰の言葉も耳に入らない。ただ、あふれてくる涙のしずくが足元に落ちていく。

「何でうそをついたのか分からないけど、きっとお母さんを喜ばせたかったんだと思う。ごめんなさい。」

母は私の顔をじっと見つめ、

「母さんはね、茜音がお手伝いをしてくれるけん『好き』なんじゃないとよ。お手伝いをしてもしなくても大好きなんだよ。だから正直に話して欲しいな。人間は誰だって失敗もするし、うっかり忘れることだってある。ただその後に、どう行動するかが大切なんだよ。」

本当にそうだ。うそをついたしゅん間、胸がちくっと痛んだ。そして、その痛みはどんどん大きくなっていった。

「きっと、お母さんがあんまり喜んだから、本当の事が言えなかったんだね。ごめんね。」

母に抱きしめられてそう言われたとき、止まっていた涙がまた流れた。

　涙で始まった今年の夏、終わる頃には、ちょっとだけ大人になった私の笑顔がかがやいているだろう。

《評》

五年生ぐらいになると、お留守番もできるし

部屋のそうじだってできるようになります。そうじ機をかけていると大人になったようだ、というのも正直な感想です。しかし、ある日、そうじをしないのに「した」とうそをついてしまったのは、大人をだます結果になってしまったのです。はじめから計画してうそをついたわけではありませんので、「悪いことをした」とすぐに反省することができました。そこからこぼれ落ちた涙がどんなに美しいものか、初めてわかったのです。こういう失敗は早いうちに気がつけば、これからの人生にとってかえって大きなプラスになって生かされていくことでしょう。

松永　伍一

優秀賞（福岡県教育委員会賞）

いつもとちがう夏休み

柳川市立柳南中学校　二年　松藤　貴之

二〇〇四年、中学二年の夏休み。ぼくは、三年生が引退した後の部活をがんばっていた。先輩がいなくなり、二年生が主体となって野球部をひっぱっていかなくてはならないと考えているのは、皆いっしょのようで、毎日暑い中、部員全員が汗まみれになってがんばっていた。

しかし、今年の夏はどうかしている。とにかく暑くて暑くてどうかなりそうだ。ついなまけ心が出て、「さぼろうかな。」と思ってしまう。そんな時、ぼくの頭に、ある人の言葉がよみがえった。「気温四十度を超す猛暑の中でも、厚い防護服を着て、命がけで撤去作業をする女性隊員がいます。」そう言ったのは、大谷賢二さん。カンボジア地雷撤去キャンペーンの代表者である。

学校の平和授業で、大谷さんの話を聞くことができた。その内容に、ぼくはおどろいてしまった。カンボジアでは、長年続いた戦争のせいで、今でも地雷によって苦しんでいる人々がたくさんいること。世界に約七千万個もの地雷が埋められ、毎日七十人もの被害者が出ていることなど、信じられないような事実があることを教えてもらった。特に地雷は「悪魔の兵器」といわれ、手足を吹き飛ばすなど、人をボロきれのようにすることを目的とした残虐性。男・女、子供・動物の区別なく傷つける無差別性。そして、永久的に効力を保つ残存性などがあり、人々を苦しめているのである。このような非人道的な兵器を一日も早く地球上より無くし、一人でも多くの被害者を救済することを願い、活動しているのが大谷さんたちなのだ。

地雷によって負傷した子供や、足をなくした人、義足を作る人や、酷暑の中で撤去作業をする人など、たくさんのスライドを見せてもらった。こんなに多くの人がつらい目にあったり、がんばったりしているのに、日本にいるぼくらには、何の協力もできないのだろうか。そんな気持ちになった。すると、大谷

さんは、募金や寄付金を手渡しでカンボジアに届けているという。百円玉一枚で一平方メートルの地雷原をきれいにすることができて、三千円～八千円で義足ができるという。なんだかうれしくなってきた。中学生のぼくでも、世界平和のために協力できるのだ。地球人として地球人のために。

暑い夏の午後、なんとか部活が終わり、汗まみれになったぼくは、ジュースの自販機の前にいた。いつもなら百二十円でジュースを買い、のどを潤すのだが、今日はちがう。ぼくの百円で、地雷撤去の協力ができるのなら…。百二十円をポケットに入れ、自転車をこいで帰った。風が気持ち良かった。

《評》

原稿用紙三枚足らずの文章ですが、中身のぎっしり詰まったもので、読みながら胸にひびく力を感じました。暑い夏にうんざりしている自分の中によみがえってきたのが大谷健二さん（カンボジア地雷撤去キャンペーンの代表）の言葉だったのです。「悪魔の兵器」と言われる地雷についてもきちんと書かれていて、その残虐性もよくわかりましたが、私が感心したのは募金で少しでも役に立ちたいと腹を決め、ジュース代百二十円をそれに回したところでした。暑い夏。部活が終わった時間。自動販売機の前。そういう背景のなかでの百二十円が心に光ります。小さなことでも大きな意味を持っているのです。

松永　伍一

優秀賞（台東区教育委員会賞）

ドはドングリのド

文京区立誠之小学校　二年　島貫　真亘（さだのぶ）

ぼくはピアニカがうまくひけない。いえでれんしゅうしようとしたけど、お兄ちゃんが

「うわ、へたくそ」って笑うかられんしゅうする気にならない。だから、近くの森でれんしゅうすることにした。切り株をみつけて、ピアニカをとりだした。そして、ぼくがひけるドの音だけを何回もきいていた。すると、子グマがやってきた。

「うるさいなあ、何やってんの？」

「音楽だよ。」

「音楽って鳥のなき声のことでしょ。」

「ううん。今ひいてたのは『ドの音はすてき』っていう曲さ。」

「鳥さんの歌はもっと楽しそうだけどなあ。」

「だってぼく、これしかひけないもん。他の音をひいたら、ドがどこだったかわかんなくなっちゃうんだよ。」

「ふうん、この音ドって言うんだ。ドドドドドー。ドングリのドだね。あ、いいことかんがえた。ちょっとまってて。」

子グマがドングリを見つけてくると、

「これをドのところにおいたら、いつでもドの音がわかるんじゃない？」

「でも見て。ドからゆびをじゅんばんにおいていくとここまでしかないのに、ピアニカのひくところはまだたくさんあまってるよ。ほかの音はどうやってひけばいいんだろう。それに、おねえさんゆびでひくとき、いつもほかのゆびもいっしょに動いちゃうんだ。本当にピアニカってむずかしいよ。」

すると、上からクモがおりてきた。
「話が聞こえてきたんじゃが、手足をあちこちバラバラに動かすことならわたしにまかせなさい。おねえさん指でひくときは、ほかのゆびについてきちゃだめって言うんだよ。そうすればゆびたちはバラバラに動く。ほらわしの足をみてごらん。こっちの足はえものを食べながら、そっちの足は巣のやぶれたところをなおしていて、あっちの足は頭をかきかきするってかんじ。そうじゃ、クモの糸でつくったそうめんとそれに土をまぶしたラーメンをあげよう。ソとラのところにおいてごらん。」

ぼくはドからじゅんばんにかぞえた。ド・レ・ミ・ファ・ソー！ラ！ここだ。クモの糸のそうめんとラーメンをそこにおいてひいてみた。
ドソラドソラドソラ……。子グマが聞いた。
「これはなんていう曲？」
「これはね『クモの糸はすてきだな』だよ。」
プーピープーフーフー。
「ちゃんとひいてるのに音が出ないよ。先生はトゥートゥートゥーってふきなさいっていうんだけど、そんなことできる人いるのかなあ。」
「クマくん何やってるの。」
こんどは子ブタがやってきた。
「音楽だよ。」
「ピアニカをいっしょうけんめいふいているんだけど、音がきえちゃうんだよ。おかしいなぁ。」
「ふーん。フーフーじゃなくて、ぼくみたいにブーブーってやってみたら？」
「ブーブーか。じゃあやってみるね。」
ブーブーブー。
「音がきえなかったけど、のどがヒリヒリするよ。もうふけない。」
「ああ、ぼくあめもってるよ。こっちがミカンあじでこっちがレモンあじ。」
「うわ、これちょうどミとレだね。」
ぼくはピアニカのミとレのところに子ブタにもらったあめをおいた。
「ドングリのド、レモンのレ、ミカンあめのミ、そうめん、ラーメンのソとラ。でも、ファとシがないなあ。」
すると、子ブタがえらそうにいった。
「ファはフワっと休んで、シはこんなおいしいピアニカはしあわせってのはどう？」
これで音が一目でわかるから、ぼくはきゅうにうまくなったような気がした。
それから、毎日ぼくは森でピアニカのれんしゅうをした。子グマとクモと子ブタがいつもきいてくれた。
ある日ぼくは、切り株の上に立って
「これから、ピアニカのえんそう会をします。だいは『みんなありがとう』です。」
と言って、ピアニカをひき始めた。ぼくがつくっためちゃくちゃな曲だったけど、みんなは立ちあがってはくしゅしてくれた。
ぼくはかっこよく礼をした。

《評》
ピアニカがうまくひけないので、れんしゅうは家のなかでしなくて森のなかですることにしました。それがよかったのです。れんしゅうを森のなかでやったところは本当でしょうが、そこへいろんなどうぶつが出てくるところからは、つくりばなしです。つくりばなしだったらおもしろくなくてはいけません。あなたは空想する才能にめぐまれているようで、出てくるどうぶつたちとものがたりをつくりあげるのがとてもじょうずですね。どうぶつたちとのことばのやりとりがかわいく、しゃれています。そして、おもいがけないところへお話が広がっていくからゆかいです。音もきこえてくるのでたのしくなります。
松永　伍一

優秀賞（福岡市教育委員会賞）

孤独なランナー坂を上れば

福岡市立三宅中学校　三年　太田　麿紀子

目的は無い。一緒に帰る人がいないからひとりで走って帰って来るだけ。中学三年生の溝口唯はいつもこうである。部活終了後の挨拶と同時に唯の八百㍍ダッシュが始まる。大股で勉強道具を詰め込んだカバンを肩にかけて夏服姿で町を走る姿は普通とは言えない。すでに暗くなった道を電灯を頼りに足を運ぶ。そびえ立つ電灯と横でなく蝉は目的もなく行っていて唯と似ていた。部活動を終えた生徒の間を走りぬけ、百メートルの坂を駆け上がる。現役陸上部の唯でも手応えのある上り坂。練習後はさすがに足取りが重かった。汗を流しても、足が痛くても決して走ることを辞めない唯は半年も前から「一人登下校」を続けている。そう、あの日のあの出来事をきっかけに……。

中学二年生の冬に行われた部活の駅伝大会。来年の冬は引退している唯たちにとって最初で最後の大会。唯はジャージにベンチコートを羽織りポケットにホッカイロを入れていた。冬の厳しい寒さを感じる一日だった。選手は全員二年生。三十三人の中から選ばれた上位五人は優勝に向けて厳しい練習をこなしてきた。円陣を組んで気合いを入れると、一走者はピストルの音と共に闘いの幕を開けた。競技は一キロメートルの公園を一人二周、五人でつなぐことになっている。市内からおよそ三十のチームが集まっていて、寒さで赤くなる唯の白い頬には緊張の赤色も混じっていた。そして、唯を襲ったのは緊張だけではなかった。急に激しい腹痛が唯を焦らせる。水色のユニフォームで一人たたずむ唯。結局そのまま一位で三走者からタスキを受け取った。顔も手も凍っていて足だけが前へ前へと。先走る。なんとか一周を一位のまま走りきれた。たくさんの人の歓声が唯の耳に届く。仲間の声も。だが、腹痛は容赦なく痛みを増してくる。もはやその痛みに耐える力は残っていなかった。自然とペースが落ちた唯の横を通り過ぎる他の選手たち。五走者につないだが三位との距離を縮めることはできずに結果は四位。必死で謝る唯を仲間たちは許さなかった。以来誰とも口をきくことはなかった。仲が良かった子も唯の周りから姿を消した。部長である親友の芽衣子も。唯は一人だった。どんな時も。いじめには及ばなかったが精神的に疲れていた。だけど、走ることは絶対に辞めなかった。走ると嫌なことを忘れられるから。花びらが散る桜の木の下のランニング。梅雨どきの校内練習。近くの神社の石段で一人、汗を流した自主練習。寂しさを紛らわすと同時に、唯は走ることを楽しんでいた。月日はながれ唯の部屋のカレンダーは次々にめくられていった。

引退一ヶ月前。顧問の先生は引退試合の説明をした。早速種目決めへと話は移った。すると、部長の芽衣子は鋭い口調でこう言った。

「先生。八百㍍は溝口さんが出るべきだと思います。」

他の部員は静まり返って驚いた表情で、話し続ける芽衣子を見た。

「自主練習を続けていてタイムも部で一位を争う程です。溝口さんの努力は他の誰にも負けていません。」

芽衣子の言葉は皆を納得させた。唯が後で芽衣子に礼を言うと、芽衣子は

「本当に思ったことを言っただけだから。」

と言ってその場を去った。芽衣子の素直な意見は唯の心の支えとなった。そして、最後の引退試合を迎える……。

「3年女子、八百㍍決勝。レーンと選手の紹介をします。」

アナウンスがながれると唯はレーンを前に立っていた。あっという間に終えた予選を五位で通過して十人が残った決勝。二つ隣のレーンには同じ部の松下沙耶香がいた。これまでずっと「一人登下校」を続けた唯。唯の思いは他人と自分に負けないこと。太陽が永遠に照りつけるなか、トラック二周のレースは始まった。唯はとにかく先頭についていった。沙耶香はすぐ横にいる。息をきらして二周目に入ると唯は決心を新たにした。あの日の失敗をばねに今、私は走る・・・・・・と。そして、ラストスパートで追いあげを見せた。軽快でピッチの速いその姿は部員を魅了して、いつのまにか身を乗り出して大声で叫ぶ仲間の姿が唯の目に映った。全身を振りはらってゴールした唯のもとに部員が駆けつけた。見事三位を勝ち取った唯。仲間から興奮したはしゃぎ声で

「おめでとう。」

と声をかけられた時には、唯はもう涙を目にうかべていた。その言葉は一人だった唯の心を明るく照らすほど温かった。

あの大会を最後に笑いあり、涙ありの部活を引退したが唯は今日も一気に駆け上がる。家までの上り坂を。大好きな友だちと共に……。

《評》

この文中の主人公「溝口唯」が作者の分身であるがどうか、私にはわかりません。気にはなりますが、それは実はどうでもいいことで、重要なことは主人公の心理をどこまで表現できているかです。

まず練習の仕方も仲間との関係からみても、孤独である唯の立場はよく描けています。それが暗くならなかったのは、部長の芽衣子の一声があってそれがその後の空気を変えていったからです。もちろん唯の人一倍の努力にもよります。そこのところを強調しただけでは人間関係のなかでの明るい希望は見えてきません。文章から希望が感じ取れるところが救いでした。もう孤独ではないのです。

松永　伍一

優秀賞（柳川市教育委員会賞）

白い運動靴

福岡県柳川市在住　一般　福山　修持

プルルルル、プルルル。夢の中でベルがなる。その音は子守唄のように僕の体の中に吸い込まれたはずだった。しかし、その後から僕に襲いかかってきたものは、今まで耳にしたことのない、怒ったような姉の声だった。

「おかあさん、本当？　本当なの？」

僕は、その声の様子が普通ではないことを察知して薄い毛布を払いのけた。目覚まし時計は、いつものように正確な時を刻み、午前五時と四十五分。つけっぱなしの扇風機のプロペラの音がやけにうるさい。ぼくは意を決して姉に話しかけた。

「今の電話、もしかして・・・・・・」

姉は、ぼくの顔をしっかりと見つめ、

「うん、じいちゃん、だめだった。」

と言い残し、自分の部屋へ走り去った。

ぼくは何をしていいのかわからず、その場に座り込んだ。悲しいとか、泣きたいとか、そんな感情は不思議と湧かず、「人が死ぬってどんなことなんだろう。」と不謹慎な疑問を頭の中でぐるぐる回していた。そして、もう一度、自分の部屋へ戻ろうとした時、着替えをすませた姉が出てきた。

「純平、あんた何やってんの。もうすぐ母さんが迎えに来るのよ。早く着替えて病院へ行く準備しなさいよ。」

怒鳴り散らした姉は玄関の格子戸を開け、外へ出ていった。僕は半分は夢の中、半分は現実の中にいる自分に気がつき、あわてて。パジャマを脱ぎ捨てた。

「純平、母さんがきたよ。」

僕は姉の声に急かされながらも、火の元を確認した後で待たせている車に乗り込んだ。
「昨夜は、ごめんね。帰って来るつもりだったけど、おじいちゃんの様子が急に悪くなってね。それから一度は持ち直したんだけど。」
母の声に元気はなかったが、僕たちが二人きりで留守番したことがうれしかったらしく、思ったよりも穏やかな表情を浮かべていた。その傍に姉は一つの紙袋をひざの上に乗せて座ったまま、じっとしている。
「麻子は、おじいちゃんの『お気に入り』だったから、信じられないでしょう。」
静かに切り出した母の言葉が車内に、どうしようもなくつらい空間を作り出す。普段の姉は、元気者で小学生の頃は幾度となく、いじめっ子から僕を助けてくれた。でも、今は違う。祖父にそっくりの横顔から血の気が失せ、細い指先は、かすかに震えている。母の言う通り、祖父は何かにつけて「麻子、麻子。」だった印象があるかもしれないが、僕のこともたくさん可愛がってくれた。今年の三月には、中学校入学のお祝いにマウンテンバイクを買ってくれたし、入学式には父親のいない僕が落ち込まないようにスーツに身を包んで母の隣に座っていた。祖父は七十五歳には見えぬ格好良さがあり、日本舞踊を四十年以上続けてきたことも手伝って背筋がシャンと伸びていた。また、二週間に一度は、必ず床屋さんに足を運び、いつも身ぎれいにしておくことが祖父が持ち続けた男の美学だったのだろう。
いつだったか、母が
「じいちゃん、ちょくちょく床屋に行くのはいいけど、どこを切ってもらっているの。」
と言った途端、明治生まれのハンサムボーイの表情は険しくなり、
「わしは、こうせんと気がすまないからやってるんだ。散髪のことまで娘にとやかく言われんでいい、黙っとれ。」
と、口げんかになったことがある。母は軽い冗談だと言い訳をしたが、祖父にとって、周りの人たちから「しゃれ男」と言われるのが快感だったとすれば、怒るのも当然と言える。
車の窓越しに、辺りの風景が少しずつ彩りを現し始める。運転手さんがラジオのスイッチを入れる。
「本日の予想最高気温は三十一度。時折、雷を伴った雨が降るかもしれません――。」
アナウンサーの声は、言葉ひとつひとつを流暢に読み進めるだけで、ぼくの気持ちを埋めてくれる鎮魂歌になるはずもない。すると、家を出てから、一回も口を開かなかった姉が、
「窓を開けてもいい。」
と、つぶやいた。母はとっさに「うん。」と返事をし、僕は、自分の座席の横にあるボタンを押した。「ふぅーっ」姉が大きなため息をついた。二学期が始まってから十日余り。学校の廊下や教室には「暑いね。」という言葉が我が物顔で飛び回っているのに、今朝の風は秋の到来をはっきりと告げている。
「お母さん、もうすぐ敬老の日だよね。私、おじいちゃんの必須アイテムの白い運動靴、買ってたんだけど……。」
「そう。おじいちゃん、家を出るときは必ず白の運動靴履いてたもんね。」
「うん、年取ると足元が不安定だから、これが一番いいんだって自慢してたよね。」
「そうだったわね。純平の入学式なんか、紺のスーツに白い運動靴。あれには参ったわ。」
今までどんよりと重かった車内の空気が、ちょうど虫の音を運ぶ風のように軽やかになった。
「ほら、着いたわよ。」
祖父が二カ月入院した白い建物は、まあるい光りに包まれて、誰かが屋上から手を振っているように見えた。僕たち三人はタクシーを降り、祖父の眠る病室へ向かった。しかし、三人の表情に暗さはなく、姉は、隠し持って来た紙袋を大事そうに抱きかかえて、
「純平、あんたは敬老の日のプレゼント用意してなかったの。本当に気がきかないんだから。」
と、小さく笑った。僕は、「しまった。」と思いながらも平静を装い、エレベーターが止まるのを待っていた。
「ガシュー」
姉と僕は一目散に病室へ向かった。廊下で良江おばちゃんたちが待ち受けてい

て、
「早く、早く。おじいちゃんね、あんたたちを待ってたのよ。」
姉が先に病室のなかへ入った。ぼくは一瞬、胸が苦しくなり、膝が震えかけたが、
「純平は気が弱すぎる。自分が見たいものがあったら、そこへ足を運ばんとだめだ。」
という祖父の言葉を思い出し、ベッドのほうへ歩き出した。
祖父の顔は、白い布で覆われ枕元に置かれた彼岸花の赤が目に痛い。姉は胸の上で組まれた祖父の手の上に自分の手を乗せ、
「おじいちゃん、ねえ、目を覚ましてよ。」
と声をかけた。もちろん、祖父が何かを話しかけることなどありえない。しかし、姉はそうするほかに、自分の気持ちを伝える方法がなかったのだろう。いつしか、そのしわだらけの手の甲に、涙が落ちていたが、姉は、それを拭おうとはしなかった。
「純平、あんたも何か言いなさいよ。」
姉に促されて祖父の顔に自分の顔を近づけた時、僕は突然、白い布を取り去った。
「おじいちゃん、今来たよ。顔に布をかぶせられて息苦しかったやろ。」
そして、自分のほっぺたを祖父の顔に当てほおずりをした時、僕は初めて泣いた。生まれて初めて大声で泣き叫んだ。
「どうしたんだよ、じいちゃん。なんでこんなに冷たいんだよ。なんでだよ。」
その声の大きさに驚いた母が、ぼくの背中を撫でてくれたが、ぼくの涙が止まらない。僕は本当に涙が枯れるまで泣き続けた。
僕は、三歳のとき、父を亡くしたが、その記憶は残っていない。時折アルバムを開いて赤ちゃんだったぼくを抱っこしているのが父だと思っても、アルバムを閉じてしまえば、それで終わってしまう。だから「お父さんの分まで頑張りなさい。」と周りの人たちに言われても「ん。」と気のない返事をするのがやっとだった。ただ、自分の気持ちを抑えすぎて、時に強がり、相手を受け入れず、また、泣いたり笑ったりすることを馬鹿げていると自分に言い聞かせる部分があった。しかし、今度は違った。ぼくにとってかけがえのない人、その宝物を失ったときに何ができるというのか。泣くしかない。叫ぶしかない。それでいい。いいよね、じいちゃん。二カ月前、風呂上がりに突然倒れた祖父。まさか、こんなことになるなんて考えていなかったし、それは母も姉も同じことだと思うけれど、四人で暮らす小さな家はぼくの大切な安らぎの場所だった。
じいちゃん、ぼくはわかったよ。人が死ぬことの意味が、少しだけわかったよ。きっと僕は、じいちゃんの生き方を受け継ぐために、涙を流したんだよね。だって、あの「ほおずり」は僕が小さい頃、じいちゃんがやってくれたことだし、姉ちゃんなんか「ひげが当たって痛い。」といって逃げ回っていたものね。
じいちゃん、ずっと昔にこの世を去ったおばあちゃんに会うことができたかな。あれほどの二枚目が、再婚しなかったのは、おばあちゃんのことを深く愛していたからだと思うんだ。こんなこと言うと、げんこつが飛んで来るかもしれないけれど、本当にそう思うよ。
祖父の死。それは僕に家族の絆や、今という時間の短さを教えてくれた。そしてなによりも大切なことは、「何かが見つかったらまっすぐに進む、そこから新しい世界が開ける。」ということだった。祖父がいたから、祖母がいたから、父がいたから僕がいる。そして、いつの日か、ぼくがいたからー。と言ってもらえると信じている。明日、姉が買った白い運動靴を僕は履こうと思っている。きっと僕ならば似合うはずだから。だって僕はじいちゃんの孫だもの。
追伸
じいちゃん、姉ちゃんは普通高校じゃなく看護コースを目指して勉強を始めました。そして僕は、校内マラソン大会で完走しました。

《評》
図のしっかりした絵を見ているような、安定感のあるいい文章でした。祖父の死を前にして、可愛がられた二人の孫がどういう心理で対応したかが、過不足なくよく描写されています。
ダンディだった祖父のおしゃれ感覚と白い靴との関係がわかっていましたので、敬老の日のプを形見の品として履こうと決めた純平の思いと

が、自然に結びついてきて胸にひびきます。そして「追伸」が効いています。「追伸」としなくてもこの内容はかけるのですが、こういう方法が新鮮味を出します。死者と生者の絆がいっそう光ってくるようです。

松永　伍一

優秀賞（柳川市議会議長賞）

育つということ

東京都立川市在住　一般　中村　万里

自分が子どもを育てるようになるということを、子供時代に想像できた人なんてきっといないのではないか。思えばずい分と長い間、私は茫洋と生きてきたようである。子供の頃大きくなったら何になりたいかと、卒業等折に触れてたびたび問われ、実感もないまま、「スチュワーデス！」とか「絵本作家！」なんて答えていたものだ。親だって、はいはい、なんてなんとなく聞いていたし、本人だって漠然とした未来を漠然としたまま、あまり意識もせず暮らしていた。それを実現させるために何か行動したり、調べたりすることもなく、夢のようにただ思っていた。だから、それは実現しなかったのかもしれないが、それはそれで良かったのだ。いずれくる現実の厳しさも知らず、オブラートにくるまれた未来をそのまま保って暮らした時代があった。思えばそれはとても幸せな時代だったわけだ。

今を生きる、ということは生き物の本質的な姿であり、自然に誰でもできるはずのことだ。放っておいても自然にそうなる。

昔、兄弟が多かった頃、子供たちは放っておかれることが多かった。それで時間をかけてそれぞれの時を生きて、大人になっていったように思う。その中で、下の子は上の子の様子を盗み見して自分のあり方を決めたり、上の子は遊びの中で下の子がついてこられるよう気をつけたり―それはよく「おみそ」と呼ばれたー、うんざりする程兄弟喧嘩を繰り返して、人との対し方を身に付けてきた。放っておかれて本音の自分を出し合っているうちにいつの間にかそうなった。誰も将来のことを考えて行動したわけではなかった。本当に幼い子供の頃は、泣いたり怒ったり、いつもその場限りでよかった。

この頃、自分の子育てをしていて、というか生活をしていてなんだか変な違和感がある。学校は土曜日休みになった。授業時間が足りなくなって、いろいろな行事が減らされている。子供たちが学校で人間関係を作っていくのには、こういった行事こそ大切なのに。子供の居場所がないといって、地域や自治体が新たな行事やイベントを企画している。子供にとっての活動拠点はあくまで学校であり、学校の友達と先生とで行うイベントこそ、心に響くものであるはずなのに、大人の視点で子供の時間をくくってしまうこの矛盾。

将来はＩＴ社会になるのだからと、子供にコンピューターやインターネット、携帯電話さえ与えられる。もともと、大人社会で仕事のために使われるべき目的をもってつくり出されたものたちで、それぞれに大人の立場で、知識と良識を持って扱われるべきものが、野放図に日常の中に入ってきて子供の世界にも持ち込まれる。大人の手によって。子供時代は大人になるための前段階でしかない。いつも先のことを考えて今という時間が割り出されている。子供のうちに何でも経験して、そして早く大人にならないといけない。何か気になることがあると、すぐ結果を出さないと気が済まない。なぜなら、結果を出す方法がすぐ手の届くところにある便利な世の中になったので。

英語の早期教育がブームと聞いたときも感じた違和感である。将来英語が使えた方が本人のためになる、そのためにはできるだけ早くから英語に触れさせるのが良いという親心。たとえネイティブのように発音できるようになったとしても、自分が日本人の何たるかを自覚していなければそれが何に使えるというのだろう。現在海外と係わりのある仕事をしている人のどのくらいが、子供の頃からの英語教育に触れた人だろうか。すべてはまず、自分が何をやりたいと感じるか、そこから始まるのではないかと思う。例えば、大学入試の時に英

語をやりたいと感じてスタートしても決して遅いことはない。むしろ目的があって始めることは必ず身に付く。自分のものになる。コンピューターだってインターネットだって必要と感じた時、勉強して覚えれば済むことだ。その時苦労したとしても、それはやり甲斐に通じるし、そうやって覚えたことは身に付いて使えるはずである。

二個か三個しか使わないのに、十個取っておいて、後で捨てればよいという考え方や、何でも先取りして準備万端整えておいてやれば苦労が少なくて済む、そしてそれは良いことであると子供に教える。どうもそれが拡大されて個人の生き方にまで浸透してきているように思えてならない。人生を、生まれてから二十年くらいの間に凝縮して様々なことを設定し、あとの何十年かはその結果として生きていくというのだろうか。大人が生きている現在の人生がそんなものであると、子供たちに思われているとしたら、大人として生きる人生には何の魅力も感じないだろうし、大人を尊敬するなんてできるはずがないだろう。大人になっていくということをその様に受け止めているとしたら、子供にとってとても不幸なことであろう。子供はどうしたって大人になっていくのだから。

未成年者を平気で顧客にするクレジット会社や携帯電話会社。人生のまだとば口にいる者たちを、悪く言えば食い物にしているのはまぎれもない大人たちである。大人が後進の者への庇護の気持ちを持たなくなって、大人扱いすることで一見子供の願いを叶えてあげる振りをして、実は冷たく第三者扱いをして突き放しているように思える。

時代遅れ、という批判を買うかもしれないが、そんなやり方に対して違和感を感じたならば、大人は断固としてそれを排除するだけの判断力と勇気を持つべきではないか。

自分自身に置き換えてみてこのことは自分にとって結局良かった、と実感できることの一つに、エスカレーター式の学校には行かなかったことがある。何年目かに必ず、自分のこれからを考える節目がやってきて、その都度その年齢で自然といろいろ考えた。漠然とした未来について、時間をかけ何度も何度も現実とやりたいことの摺り合わせをしながら、自分の身を置く環境を実感していった。それを親たちは受け入れ、待っていてくれた。その経験は大人になっても続いている。仕事を選ぶ、結婚する、子供が生まれる、子育てをする、さらに親の介護をする、といつまでたっても様々な節目がくるのである。そのたびに、今どうするのが一番良いのだろうかと、現実とこれからを考え、必要ならそれまでの自分を変えていく。それは男女を問わず、生きていくのに必要なプロセスである。たぶん、老人と呼ばれる年齢となっても、続いていくと思う。いつだったか、「七歳までは夢の中」というタイトルの本を読んだことがあった。すべてその通りと思ったわけではなかったが、何かとても大切なことを示しているような気がしたのを覚えている。子供はもっと、現実の中で漠然と生きていっていいと思う。ただあまりに現実世界を広げすぎて、大人でさえ戸惑うような複雑な環境を持つ必要などない。現実なのかそうでないのか、自分にとって何が大切なのか判断できなくなるような、あり余る情報や知識に触れるようなことはなくてもいいのではないか。六歳なら六年間生きてきての、十二歳なら十二年間生きてきた結果の、未熟であろう考えや悩みでいっぱいになっていてよい。それが当然なのだから。そうした事を子供が自由にできる環境こそ、大人が全力を傾けて守ってやらねばならないと、今とても思う。

《評》

日本人は「あるがままに生きる」ことを時代おくれと軽蔑し、目新しいものに向かって突っ走っているようです。いのちあるものはいのちの本然の力で育っていくのに、文明の技術を無理に取り込んで、かえって窮屈な思いをしているのが現状です。あなたはそのことをきちんと批評の目で捉えているので、文章の濃度が高く、終始斑がなく、共感をもって一気に読みました。「六歳なら六年間生きてきての、十二歳なら十二年間生きてきた結果の、未熟であろう考えや悩みでいっぱいになっていていい。それが当然なのだから」とあるのは、とても素敵な認識です。そういう大らかさの中にいのちが育くまれているのだ、と思いたいですね。

松永　伍一

優秀賞（東京浅草ロータリークラブ会長賞）

「たったひとつのたからもの」を読んで

台東区立浅草小学校　六年　横尾　将道

本を開いたとき、「あれ？　この写真の人たちテレビのＣＭで見たことがある。」「あなたに会えて本当によかった。」という歌の中で、海でお父さんが息子を抱きしめていた。寒そうな海だったので「寒いのかな。」と思っていた。

本を読んでまたビックリ、その男の子秋雪君は、ぼくたちと同じ平成四年生まれだった。生まれた時から障害をもち六歳でなくなってしまった。元気で生きていれば、同じ小学六年生だったんだ。ぼくは、なんて説明してよいか分からないけど、読みながら涙が止まらなくなった。読んだ後に、お母さんに「この本の人知っている？」と聞いてみた。お母さんも「ＣＭは見たことがあるね。」と言い本を読みはじめた。お母さんも読みながら泣いていた。生まれた時に、「二年の命」と言われてしまい、何度も病気と戦い大変な思いをして、やっと自分の力で、自分の足で歩けるようになったのに……。

ぼくも一歳一カ月の時に、気管の病気になり、秋雪君と同じように、何件も病院を回り、入院して、酸素テントの中に入れられ、手足をガリバーのようにベッドに縛られ、たまに目をさましては、お母さんの顔を見て笑っていた。お医者さんからは「危ない状態です。」「覚悟して下さい。」と言われたときの話をしてくれた。あの時は、神様、仏様、キリスト様に、祈った。「どうかこの子の命を助けて下さい。」「自分の命を削っても。」と話してくれた。二人で泣いてしまった。

二十四時間テレビを見ていたら、秋雪君のお父さんとお母さんがテレビに出ていた。秋雪君の写真と一緒に、本と同じ話をしていた。本には書いていない亡くなってからのこの五年間の間の両親の話も。お父さんは秋雪君が亡くなってしまい心の病になり、うつ病になってしまい薬を飲み続けているそうだ。お母さんも四十歳とは思えない位白髪頭で、老けていた。見ていて苦しくなった。僕もあの時、もし死んでいたら、お母さんや、おばあちゃん、おじいちゃんたちも、こんな苦しそうな姿になっていたのだろうと思うと、命の大切さ、自分の命、人の命、生き物の命の大切さ、これから先、どんなに大変なことがあっても、決して生きるのをやめてしまったり、命を奪ってはいけないと思いました。

ぼくもまだ将来、何になりたいか分からないけど、自分の夢を持って、辛い時が来ても、頑張って乗り越えて行けると思った。まずは夢を探します。最近、お母さんに何か言われると、「別に。」「何でもない。」などすぐ怒ったり、ふてくさったりしていた、そんな自分が何だか恥ずかしく思えた。もっと毎日毎日を楽しく素直に生きなくてはいけない事にも気付いた。

小学校最後の夏休みに、この本に会えて良かった。

これからも生きることの、すばらしさ、大切さを実感していきたい。

《評》

世のなかには自分の一生を変えるような力を持った一さつの本があります。そんな本にできるだけ早く出あうほうがいいですから、あなたはとてもすばらしいけいけんをしたことになります。

この本を読んでかんどうした人はたくさんいるでしょうが、あなたが秋雪君と同年の生まれだということと、あなたも重い病気にかかったこととが、つよいかんどうをよびおこし、こういういい文章を書かせたのです。あなたは命の大切さに気づきました。そのいのちから夢が生まれ出てくることがわかってきたのでしょう。力強く生きて下さい。

松永　伍一

優秀賞（柳川文化協会長賞）

おじいちゃんの忘れ物

佐賀県佐賀市立城西中学校　三年　清水　郁

「吾輩は猫である。」

ぼくのおじいちゃんの口ぐせだった。僕が小学校四年生のときに、おじいちゃんが夕日に向かってそれを連呼していたから、しっかりと憶えている。今になって思うと、おじいちゃんは人と違った感覚を持っているというか、とりあえず僕から見ると「変」だった。外見は色白で迫力は無いが、アーノルド・シュワルツネッガーの様にかっこいい。ちなみに、今年で七十九歳だ。でも、突然地べたに座り込んで「わしは花と話ができるんだよ。」と言って花と話し始めたり「空気がもったいない。」と言って息をするのを我慢してそのまま病院へ担ぎこまれたりと、やっぱり「変」なおじいちゃんだった。

昼休み終了のチャイムがなる。その瞬間、昼休みの賑わいが嘘のように、教室中に重苦しい空気が圧し掛かる。

そう、中学生は、ここからが地獄なのだ。受験生の最大の敵、睡魔と闘わなければならない。しかも、五時間目は超真面目な生徒指導の先生が教える、数学である。もしここで居眠りなんかしたら、確実に評価が落とされてしまう。だから、皆必死に眠気を堪えている。そんな授業に対する姿勢を見て、僕はまるで血に飢えた獣のようだ、と一人感心した。そして、雷が落ちることなく、無事に五時間目と六時間目が終わった。ぼくは韋駄天の速さで帰路についた。

学校の帰り道に、長い商店街がある。僕こと吉田達也の家は、その商店街を抜けたところにある。商店街の半ばには魚屋があり、そこでは、ぼくが帰りに商店街を通るときには、いつも魚屋のおじさんとぼくのおじいちゃんが値引き合戦を繰り広げていた。でも、僕はもう、あの光景を見ることはできない。

七月四日の朝、おじいちゃんは死んだ。

僕はこのことを思い出したくなかった。涙を見せぬようにと、空を見上げた。でも、不思議と涙は出なかった。僕は右ポケットを探った。そこには、小さな瓶が入っていた。とは言っても、某人気小説のように、おじいちゃんの骨が入っているわけではない。何も入っていない、空っぽの瓶だ。

これは、ぼくとおじいちゃんとの「約束」だった。

だいぶ昔のことになるが、僕が小学校に入学してからおじいちゃんは毎日のように僕を迎えに校門で待ってくれていた。その度におじいちゃんは「おや、タッちゃん。今から商店街に行こうと思ってたんだけれど、行くついでにランドセルを持ってあげようか？」と言っていた。家から商店街は歩いてでも行けるのに、わざわざ自転車に乗って。やっぱり孫の登下校は心配でたまらないのだろう、おじいちゃんの性（さが）というやつだ。でも、その時のおじいちゃんはとてもかっこよかった。ぼくは自転車で颯爽と現れるおじいちゃんに、ヒーロー的な憧れを抱いていた。友だちにも自慢できた。僕はとにかく、そんなおじいちゃんが好きでたまらなかった。

ある日の帰り道、おじいちゃんはいつものように

「商店街に行くんだ。」

と、自転車に乗ってやって来た。おじいちゃんの自転車には荷台が付いていたので、前のかごにランドセルを入れてぼくは荷台に乗ることができた。

「しっかりわしにつかまっているんだぞ。」

おじいちゃんの声が聞こえた。

僕はしっかりとおじいちゃんの腰をつかんだ。自転車はゆっくりと前進を始めた。

この自転車は派手だ。おじいちゃんの好きな野球チームのモチーフカラーで、黒と黄色の縞模様だ。前のかごには真っ白なプレートに燃えあがるような赤い字で「いてまえ打線」と大胆に筆で書かれているものが張ってあった。もちろん全ておじいちゃんが色をつけた完全オリジナル自転車だ。これがなかなか評判がよく、“商店街の重要文化財”とまで言われていた。

でも、僕はこの自転車に乗っているときの風が好きだった。びゅうびゅうっ

と吹く風が、最高に心地良かった。
おじいちゃんの自転車は少し速いペースで、ぐんぐん進んでいった。商店街が見えてきた。でも、おじいちゃんは商店街のほうへ曲がらずに、そのまま真っ直ぐに進んだ。
「おじいちゃん、商店街、通り過ぎちゃったよ?」
と聞くと、おじいちゃんは
「大丈夫だよ。」
と言って、そのまま老人とは思えない程の足の回転で自転車をこいでいった。
進んだ先は、小高い丘になっていた。おじいちゃんはそこで自転車から降りて、ぼくの手に小さな瓶を握らせた。僕は、
「これなあに? 空っぽだよ?」
と尋ねた。するとおじいちゃんは言った。
「この瓶の中には、わしとタッちゃんの『思い出』を入れるんだよ。わしとタッちゃんが遊んだりするときに、この瓶のコルク栓を抜いて思い出を詰めるんだ。どうだい? なかなかロマンチックだろう?」
僕はそれに対して大きく頷き、
「うん! じゃあ、これからもたくさん遊ぼうね!」
と、笑顔で「約束」をした。
あれからもう六年が経った。
今、僕の手には、おじいちゃんとの「思い出」が握られている。でも、持っているからといっておじいちゃんが戻ってくるわけでもない。この小瓶は、おじいちゃんがいないと意味がない。空っぽだった。
この小瓶の意味がなくなってから、もう三週間がすぎようとしていた。家に帰ると、お母さんが何やら荷物を整理していた。
おじいちゃんの荷物だった。
ぼくは切なかった。
いつもおじいちゃんが座っていた座椅子や大切にしていたレコードが、どんどん廊下に運び出される。お母さんは日頃の運動不足を解消するかのように、てきぱきと荷物を運んでいる。すると突然、
「そういえば達也。あんた宛てにおじいちゃんから手紙があったわよ。」
と、お母さんはぼくの前に封筒を出した。黒と黄色のストライプの入った封筒だった。宛名には「親愛なる孫、吉田達也へ」と、自転車に書いていたような大胆な字で書いてあった。お母さんに中を見たかと聞くと、首を横に振って「これはあんた宛なんだから、あんたひとりで読みなさい。」と封筒を僕の胸に押しあてた。ぼくは自分の部屋に入り、封筒の口を破った。手紙が入っていた。

達也へ

オッス、オラ、じいちゃん。タッちゃんがこの手紙を読んでるということは、タッちゃんはわしの机の中を勝手に開いて、ドロボウの第一歩を踏み出したな? なんて。
ところで、タッちゃんが小さい頃に約束した、あの小瓶はまだ持ってるかい? そう、あの小瓶。あれは、タッちゃんとじいちゃんの思い出しか入らないんだ。だから、もしじいちゃんが思い出を作れなくなったりしたらそれはあの丘に埋めてくれ。あの約束の丘だぞ。あそこはもともと病院があって、その病院でわしは「孫」というものをもらった。わしはその子に名を授けた。達者に生きるように、と願いを込めて、達也と。
だから、あの丘にはじいちゃんの思い出がたくさん詰まっているんだ。もしもわしが何も感じなくなってしまったとしても、達也のことだけは忘れない。
この世界で、おばあちゃんのつぎに大好きだぞ、達也。
タッちゃんのヒーローより

僕は、涙が止まらなかった。
お通夜の時もお葬式の時も涙は出なかったのに。
まるで、塞き止められた川の水が一気に流れ出たようだった。

次の日。
僕は今、約束の丘に立っている。
でも、一人じゃない。
おじいちゃんも一緒だ。

丘の一番高いところに、大きな穴を掘った。
あとは瓶を入れて埋めるだけなのだが、ぼくはここで瓶のコルク栓をあけた。
「おじいちゃん。ここがぼくとおじいちゃんが初めて出会った場所。最後に、これを瓶の中に入れて埋めるよ」
ぼくは静かにコルク栓をしめた。そして、瓶を穴の中に入れた。
ゆっくりと土をかぶせた。
やさしい風が吹いた。
となりのおじいちゃんも笑っていた。
・・・・・・・ような気がした。

《評》
達也君にとってこのおじいちゃんがどんなに大切でおもしろい人であったかが、よくわかって、ホットな気持ちになりました。いっぷう変わった性格の持ち主だったことが、いろんな行動で伝わってきます。でも、それだけでは面白くありません。なんといってもポイントは小さな瓶で、この小道具がなければ思い出は広がっていきません。ロマンチックすぎるくらいですが、亡くなったおじいちゃんとの約束ごとなので、けっして不自然ではなく伝わってきます。そうなると、学校での授業風景などはない方がよくなります。

松永　伍一

第八回長谷健賞＝平成十七（二〇〇五）年度

長谷健賞大賞

最期の言の葉（ことのは）

早稲田大学教育学部国文学科　一年　田中　綾乃

人魚は、切なく長い長いため息を吐き、悲しみの中で漂い続けました。死にゆく海に身を任せ、自分もまたいつ果てるとも知れない命を憐れみながら。

自慢の青緑色のしっぽ。かつては月の光が降り注ぐ夜更けの凪の中、うろこをステンドグラスのように輝かせ、ギリシャ神話のナルシスさながらに怪しげに　尾びれをくゆらせながら回遊したものでした。

朝、太陽が金の網を一面に広げると、翡翠を砕いたような碧い水は、風がそよぐたびにしゃらしゃらときらめき、どこまでも深い漆黒の昆布がいかにも重たげにゆらゆらとなびきます。その海藻の森をかきわけ、体にまとわりつこうとする小さな水の泡を断ち切りながら、つい・・・・・・っと進む心地よさ。

それがどうした、と言わんばかりにわざとらしく大きなあくびをしながら、醜いオニオコゼが赤黒い体をゆすり、眼下をゆっくり横切っていきます。白い砂の上を帆立貝が走り、乳白色のイソギンチャクは頼りなさげに手を振って・・・・・・。

あれはいつのことだったのでしょうか。そう遠い昔ではなかったのに。

アノ日ノ楽園ヲ返シテ・・・・・・。

人魚は、暗い炎を瞳の中に灯しながら、険しい顔で入江の方を眺めやりました。

どれくらい前になるのか、煙を空に噴き上げ、騒々しい機械音をまき散らす大きな工場があちこちに建ち並ぶと、その一角からごぼごぼと一筋の黒く太い線が沖に向かって押し出されてくるようになりました。

鈍く虹色に光るもったりとしたその液体は、やがて海深くひっそりと暮らしてきた人魚の体にもしのび寄るように迫り、はりつき、それ以来彼女はちりちりと焼ける痛みや息苦しさと共に生きなくてはならなくなったのでした。
もちろん、こんなしうちを受けているのは人魚だけではありません。
何千、何万とびっしり寄り添いながら泳いでいた小魚たちは、汚水に近づいた途端ぴたりとその群舞を止め、みな藻屑のごとくふわふわと腹を天に向け上へと昇ってゆき、それきりでした。
あおあおと繁った果てしない草原にも似た海藻達は、徐々に茶褐色にうなだれてゆき、潮に溶けて流れてしまいました。
そんな悲劇が長い間繰り返されたものの、それでも海はいつでも静かにそこにあり、全てを許しながら寂しげにゆらめき、水をたたえていました。
太古より命を生み出してきた母なる慈愛をもって、一部の精力的な環境保全学者たちの努力と治療を受けながら、ただ黙ってかっての力強い息づかいが戻ってくる時代をひたすらに待ち続けたのです、
しかし毒は、工場から吐き出される濁った水だけにとどまらず、事故で転覆したタンカーからも流れ出てきました。
息をすることさえ許さない、とでも言いたげに、ぬらぬらとした油膜が魔王のマントのごとく海面を覆いつくし、魚を獲ろうと舞い降りたカモメは見る間にその白い羽をどっぷりと汚し、飛び発つ力を失いました。
また、計り知れないほどの攻撃力と死を呼ぶ汚染力を抱えた核爆弾が、自国を守る鎧の名目で実験的に投下され、人魚が時折思い出しては訪れていた宝石のような南の小島の珊瑚礁を灰色の骨に変えました。
豊かな生活のため、満ち足りた毎日のため、そして自己の力を誇示するため、せっせとあらゆるものを創り出しその域を広げた人間たちは、同じ勢いで大切な宝物を破壊し、地獄絵図に塗り替えたのです。そして、その罪とやがて訪れる未来の絶望的な姿にうすうす気づいていながら、目先の快適な暮らしを手放すこともできずに、今なおその行進を止めようとはしないのでした。
海から遠く離れた森でも、鹿やキツネやふくろうが、なぎ倒される木々を横目におろおろと逃げまどい、刺すような雨が降るたび植物は病んでいくと、風が人魚に教えます。
さまざまな文化の産物は、地球を包む空の成分までをも剥がし取り、抉り取られた大気の隙間から神の熱い怒りがふり注いでいるかにみえました。
青と緑に溢れていたこの星に自ら容赦なく刃を突き立てる愚か者に弱き者はなす術もなく、小さな命たちの悲鳴は車のクラクションと工事のボーリング音にかき消され、奢った人間たちの耳まで届くことはありませんでした。
自然と「共存」するには彼らはあまりにも理不尽な行動が多すぎ、引き返す境界線をすでに踏み越えてしまったのかもしれません。
人魚は苦痛に眉をひそめ、そしてもう一度切なく長い長いため息をつきました。
赤い月が、人形の疲れきったシルエットをぼうっと浮かびあがらせます。
うろこが剥がれ落ち、不透明にふやけてしまったあわれな尾びれは、すでに腐り始めているようでした。
長い年月を経てぼろぼろに朽ち果てた人魚の体。それはそのまま今のこの星の姿を映しだしているのでしょうか。
浅く弱々しい呼吸に混ざって、かさつきひび割れた唇から、蒼き願いを込めた言の葉がこぼれます。
オ願イ、ダレカコノ星ヲ守ッテ・・・・・・・。

尾びれを上下にゆっくりゆらりと揺らし、それを最後にもう二度と人魚が動くことはありませんでした。
星くずのように蒼く輝く最期の言の葉は、人魚の亡骸からそっと離れ、風にのって街の灯の方へふわりふわりと飛んでいきました。
いつの間にか周りには、小魚たちの、貝たちの、そして森の動物たちの想いも集まっています。
オ願イ、ダレカコノ星ヲ守ッテ・・・・・・・。
オ願イ、ダレカコノ星ヲ守ッテ・・・・・・・。
ただ一つの願いを含んだ小さな光は、ひと雫、またひと雫と、都会に眠る人間の子供たちの胸に静かに落ちてゆきました。

いつの日か、この子らの中で再び強いきらめきを放つことを信じて……。

―　fin　―

《評》

文明の発達と引き替えに地球は汚され病んでいきます。その犯人は私たち人間です。

この作品は被害者として人魚を選び、その置かれている立場（環境）と思いを描いた力作です。

海中の様子も的確に書き込まれて自然界の美しさがイメージできます。そこが汚染されていくときの人魚の歎きと悲しみが、人間たちに向かって発せられる「オ願イ、ダレカコノ星ヲ守ッテ・・・・・・。」を、私たちは胸深く受けとめなくてはなりません。

文体も実にしっかりしていて余韻も残る見事な出来栄えでした。

松永　伍一

優秀賞（福岡県知事賞）

心の傷・心の支え

柳川市立柳南中学校　一年　森戸　愛子

その日、私はいつものように友だちと話をしていた。話の中に「プリクラ」という言葉が出たが、私はその言葉を聞きとれなかった。だから、

「今、何ていった？」

と聞いてみたら

「は？　うざ。死ねやん。」

と言われた。他のみんなは笑っていたが、私だけは口をぽかんと開けたままだった。だいぶしてから話しかけてみると、

「ん？　何？」

とさっきの言葉を忘れたかのような反応だった。私は怒って言ってみたが、さっきと同じような態度を示した。

私が口をぽかんと開けたままだったのは、驚いたからではない。ただ、ただショックだったのだ。「うるさい」いう言葉だけで、自分が全否定されるのに、「死ね」という言葉を、よくもあんなに簡単にいえるなと思ったのだ。その人には簡単にいえるのかもしれないけれど、そんな言葉を言われて、傷ついて、ひきずって本当に死のうとした人が何人いるのか教えてやりたかった。

私も小学校の頃少しいじめられてて、「生きている意味なんてあるのか」とまで考えた。そんな時、ダウン症の男の子をテレビで見た。ダウン症とは神経をマヒして、うまく喋れず、うまく動けない病症だ。その男の子が両親の愛にはぐくまれ、成長した様をつづったドラマだった。結局その男の子は亡くなってしまったが、短い間で、「会えて良かった」と思える両親は、素晴らしいと思った。

このドラマを見て、私は今まで思っていた事が恥ずかしく感じた。生きたくても生きられない人がいるのに、自分がこう考えるのはずるいと思った。

みんな、みんな平等なのに、「死ね」といえる人はよほどさみしい人なんだと思う。そんな事を言えるようになる環境で育ったという事なのだから。それに、自分から命を絶つ事は恥ずかしい事なのだと思う。

そして、生きたくても生きられなかった人のために一日でも長く生きようと思った。

《評》

日本語が乱れているとこの頃、よく言われていますが、ここで取りあげられたのは、もっと深刻な問題を含んだ言葉です。

他人に対して「うるさい」と言うのだってはばかられるのに、それを「うざ」と汚らしく言い変え、いきおい余って「死ねやん」と平気で言い放つ中学生の心を、恐ろしく思います。

「死ね」と言われたあなたの驚きと怒りが、この文章から伝わってきます。人を言葉で傷つけて何も感じない鈍感な人は、その愚かさにいつ気がつくのでしょう。

あなたのこの文章が多くの人に読まれることを私は望みます。

松永　伍一

優秀賞（台東区長賞）

生まれてはじめておよげた

台東区立浅草小学校　二年　ブラナム　アイラ

わたしは小さいころ、耳のびょう気にかかり、一年生の時まで水に入ることができませんでした。やっと今年、入ることができたのです。学校のプールははじめてだったけれど、みんなのおよいでるのを見てたので、そんなにふかくないことは、わかっていました。

でも、入ってみたら、かおはつけられたんだけど、すこしも体が浮かなくて、むずかしいと思いました。それで、夏休みに、家ぞくにおうえんしてもらいながら、およげるようになりました。はじめは、ばた足のれんしゅうをして、お母さんに、

「体の力をぬいてごらん。」

と、言われて、くらげをイメージして、やってみました。やってみたら、うきました。つぎに、ひらおよぎのれんしゅうやせおよぎのれんしゅうをしていきました。

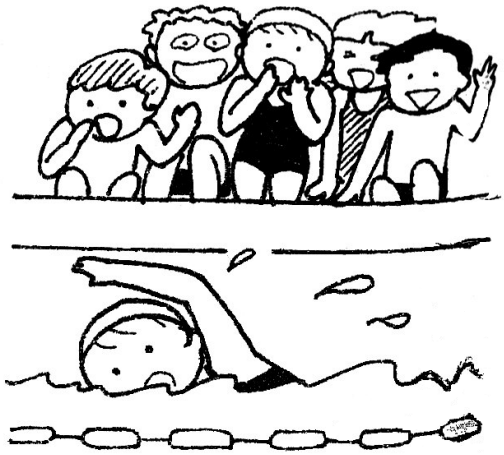
五歳の弟もわたしが教えたらすぐできるようになりました。もぐるきょうそうもしてみました。長くもぐっていられたほうがかちです。二たい一で、わたしがかちました。弟に、

「なかなかやるね。」

と言ったら、うれしそうに、にこっとわらいました。

学校のプールおさめでは、先生たちが、プールに本ものの、なしをたくさんしずめて、みんなでもぐってみつけるという、スペシャル宝さがしをしてくれました。わたしもはりきってもぐってみたら、おでこをプールのそこに、ぶっつけてしまいました。でも、もういちどちょうせんしてみたら、とれました。とてもうれしかったし、みんなといっしょにはいれて気もちよかったです。

来年は、いきなしで、25メートルおよげるようにがんばりたいです。



《評》

あなたがはじめておよげたときのようすが見えるようです。とてもよく書けましたね。プールははじめてだったからちょっとと不安だったでしょうが、みんなおよいでいるのを見ていて、そんなにふかくないことをたしかめていたのですね。

お母さんから「体の力をぬいてごらん」と言われて、くらげをイメージしたと書いてありますが、そのイメージの力できっとからだがういたのでしょう。耳のびょうきもなおって、およげるようになってよかったですね。家ぞくのみなさんもどんなにうれしかったでしょう。

松永　伍一

優秀賞（柳川市長賞）

スタートライン～風を感じて～

久留米市立荒木中学校　二年　川島　早織

夏休みが始まって十日目、まるで電池が切れたかのように、ふと何もせずボーッとしたいという気持ちになった。そして、自分の思いだけが大きな波のように押し寄せて、とうとうその波に飲みこまれていった。

私は疲れていた。午前中は部活動に出かける。「水の祭典」に参加するため、マーチングドリルの練習に参加する。夏の日射しが照りつける中、汗だくになりながらローリングやピンフィール等の確認をする。

太陽が真上にくる頃にはくたくたになり、家に帰るのがやっとだ。そんなある日、私の電池は限界にきた。

目覚し時計をセットするのもやめ、部活動さえそっぽを向く。父や母が仕事に出かけたあとで起き上がり、一日の大半をテレビやビデオを見て過ごす。手をつけていない宿題は山のようになって机の上を占領する。こんな日々を「夏休みはこうでなくちゃ」と心の中でくり返していた。

夏休みに入る前、

「お手伝いをいっぱいするからおこづかいちょうだい。」

夏休みが終わるときにまとめてアルバイト代をもらえるよう、母に頼んでいた事も心のどこかでひっかかってはいたが、「まあいいか。」とフタをしてしまった。

母が休みの日、あいかわらずの日々を送っていた私に、

「八月分のおこづかいと、今までのアルバイト代ね。」

と机の上に、千三百円を置いていく母。急いで、

「まとめてくれるんじゃなかったと？」

と少し怒ったように問いかけた。

「あら、アルバイトは終わったんじゃないと。」

母の返事に返す言葉が見つからない。そして同時に腹が立ってきた。
「約束したのになんで破るとー。」と、さっきよりももっと大きな声を出した。
そして次の瞬間、行先も告げず自転車にまたがった。行先を告げようにもどこに行くのか自分でも分からなかった。
家を出てすぐの国道の信号は「赤」だった。目の前を通りすぎていく車を見ていると、
「この信号、いつになったら変わると?」
と、イライラがさらに増していく。
そんなイライラした私を乗せた自転車は、まるで行き先を知っているかのように、車輪を前に進めていく。方向からすると、祖父母の家に向かっているようだ。
「まあいいか。」
とハンドルを強く握り直した。自分の意志を確認しながら、夏の風を思いっきり切ってみた。「暑いけど涼しい。」そんな言葉が口をついて出る。気分は爽快になり、私を乗せた自転車はぐんぐんスピードを増していく。
景色が変わった。長い一直線の道路の両端に青々とした稲が、一面に緑のじゅうたんをしきつめたように広がっている。その光景はとても美しく、思わず見とれて足を止める。大きく深呼吸しながら、
「家の近くにも、こんな場所があったんだなぁ。」
と改めて気付いた。
緑のじゅうたんの向こう側から吹いてくる風を頬に受けながら、しばらくそこに腰をおろしてみた。「こんな体験はテレビやゲームでは味わえない。」心の中で、自分の声がつぶやくのが聞こえる。そして、それをきっかけに色々なつぶやきが聞こえてきた。
「こういう場所でなら宿題だってすぐに終わるよな。お手伝いだって今からするつもりだったし、ちょっと休んでいただけだったのにさ。」心のつぶやきは、終わることを知らないかのようにあふれ続けた。そして、大きなため息と同時にそのつぶやきが聞こえなくなった。さわやかな風が全身をなでていく。
自分の空っぽになった「心」と向きあう時だ。自分の中で、正当化してきた事がまるで映画を見ているかのように頭の中をかけめぐる。そしてその映像と重なるように、心の声がささやいた。
行先は変更。さっきまで下り坂だった道も今度は上り坂だ。手と足に力を込めて坂をぐんぐん上っていく。さっきは「赤」だった信号が今は「青」。まるで私の背中の後押しをしているみたいだ。
勢いよく玄関のドアを開けた。すぐ側に帽子をかぶり、自転車のカギを手にした母が立っていた。
「おかえり。暑かったやろう。」
笑顔で迎えてくれた母を見たとき、さっきと同じ「風」を感じた。
冷たい水で顔を笑った。何もかもがすっきりして、自分のスタートラインが見えた気がした。
まだまだこれからだ。さぁ、位置につこう。

《評》
疲れと、苛立ちがつのって突然思いがけぬ行動に出た話がよく書けています。ふとどこかへ出かけたくなるのは思春期にありがちなもので、そのこと自体が悪事とは言えません。
本人は一生懸命で、「あれ、どうしてこんなことをしているのだろう」と感じたり、違った風景に入り込んですがすがしさを感じたりしています。その心の揺れが中学生らしい新鮮な感覚でよく描かれていますから、私も「いい経験をしましたね」と声をかけたくなりました。人はこういうことで成長のきっかけをつかみます。
松永　伍一

優秀賞（福岡県教育委員会賞）

八月十五日

柳川市立柳南中学校　一年　江口　莉加

二〇〇五年八月十五日。今日は、終戦記念日。「今年は、戦後六十年の節目の年」という今朝の新聞見出しに、私は思った。戦争体験した唯一私たちの祖父母の世代の方々が、今まで語り継いできた「戦争の記憶」を、今からは、戦争を知らない世代の私たちが、戦争の悲劇を繰り返さないためにも、しっかりと正確に語り伝えていくべきだと・・・・・・。

私は、この地で育った祖母に、この辺りの戦争の頃の様子を聞いた。祖母が、小学三年生の九歳の時、終戦。その頃の祖母は、両開小学校から下八丁の家まで、田んぼのわき道を歩いて帰ってきていたそうだ。すると、「プゥーン、プゥーン」という用心のための軽い警報のサイレンがまず鳴り、その後、「ウーウー」というけたたましく激しい本格的な空襲警報が、すごい勢いで鳴り響き、と同時に、頭上には、何機もの敵機が飛んで来たという。遠くの空では、米軍が放つ銃弾の爆音が、無気味に聞こえ、恐怖におののき、ただただ家路を走り帰ったそうだ。

祖母の心の奥には、六十年経った今なお、しっかりとあの「空襲警報」のかん高い響きが焼きついているかのように、涙をうかべ話してくれた。その涙の裏には、もう一つ祖母にとって悲しい事実があっのです。

それは、この終戦の夏、この集落・地域では、戦争による食料不足と衛生状態の悪化から、急激に「赤痢」が大流行し、祖母とその姉、妹の三人も病気に襲われ、今、私が通う柳南中学校の場所に、その頃、伝染病のための隔離された病院があったらしい。

戦争の苦しみとともに、怖い伝染病の不安と心配を味わった祖母。結局、祖母の姉と妹は終戦間際の七月二十六日、二十七日と二日続けて亡くなっていったという。姉は私と同じ中学一年生の若さでした。戦争の苦い思い出とともに、決して風化してはならない、我が家の歴史だと思う。

この時期、必ずテレビでは、アニメ映画「火垂るの墓」が再放送され、私自身もこの絵本やってレビを通して、戦争の恐ろしさや存在を初めて知った。まずは、今私たちが、忘れないこと―。戦争で悲しい体験をしたことを、そして現在なお、戦争の後遺症で苦しんでいる人たちがいることを忘れなければ、今後、平和で戦争のない世界が作れるのではないでしょうか。

「戦争」に涙せずにすむ日をこれから私たちが築いて行かなければなりません。今、世界は、複雑にもつれています。でも、みんなの心を一つにすれば、きっと「平和な世界」が生まれると思います。

母が、ぽつりと言った。

「戦後六十年というけれど、今が戦前なのかも・・・。」

ドキッとした。

《評》

今年は戦争が終わって六十年になりますので、それにちなんで戦争と平和について書かれた作文がいくつもありました。その多くが戦争に正面から切り込もうとした書き方で、戦争を体験したものから見れば、不満がありました。

その中では、この「八月十五日」が、祖母の体験を通じて戦争の悲惨さが一番よく書けていました。特に伝染病の話は胸に響くものがありました。こういう戦争の一面こそきちんと語り継いで行かねばならないと思います。

よく書いてくれましたね。

松永　伍一

優秀賞（台東区教育委員会賞）

ぼくも松井せんしゅになれるかも

文京区立誠之小学校　三年　島貫　真亘

「ストライク！　ゲームセット！」
しんぱんの手が高々と上がった。
「あーあ」
「またか」
二死まんるいで、さよならのチャンスだったのに、ぼくの三しんでまけた。
「くそ！　今日もぜんぜんうてなかった。それにあんなかんたんなフライはおとすし、だいじなところでゴロはトンネルするし、なんだよ、このバットとグローブ！　新しいの買ってもらわなきゃだめなんだよ。」
ぼくはげんかんにバットとグローブをなげすてると、ごはんもたべずにねてしまった。
みんながねたころ、げんかんでゴソゴソ音がした。
「いってぇ―！　また地面にぶつけられたよ。」
「どろはふいてくれないし、あちこちぶつけられてこぶだらけさ。おまけに新しいのを買ってもらおうとしているみたいだよ。ひどいね。」
「だってだいじにしてくれたのは、はじめの二・三日だけだったもんね。」
「その後はきたないままげんかんにほうりだしたままさ。だからはらがたっていつも三しんしてやってるんだ。あんなゆるい球、おれにまかせりゃ、かるがるホームランさ。」
「ぼくだって、あんなかんたんなゴロやフライ、ねてたってとれるよ。でもわざとエラーにしてやったのさ。かんとくにどなられてるときのあいつの顔といったら、真っ赤だったよ。」
「ハハハ、さいごのバッターボックスのときは真っ青だったぜ。」
「ぼくたちだって大切にしてくれなかったらがんばる気がしないよ。新しいのを買ったって同じことさ。」
「あーあ、もうねようぜ。」
次の日。
「ちょっと、このきたないバットとグローブ、早くかたづけてよー」
「わかってるー。これからヤンキースの松井せんしゅのとくしゅうやるから、あとでかたづけるようー」
「あ、松井せんしゅが出てきた！チームメートも出てきたぞ。キャッチボールをやるんだ。あれ？グローブをみがいてる。うわっ、こんなすごいせんしゅたちが自分でグローブなんかみがくんだ。」
「あ、そう言えば・・・、あった、あった、前にみつけた新聞の『かっとばし』の記じ。このはし、ほしいと思って切りぬいてとっといたんだっけ。なになに、プロ野球の試合で折れたバットで作ったはし『かっとばし』が人気だ。じゅれい七十年いじょうのアオダモの木から、バットは四、五本しか作れない、だって。七十年か、すごいなあ！」
ぼくはげんかんに走って行った。
「ぼくのバットも七十年かかってできたんだ。」
ぼくはバットとグローブをいっしょうけんめいみがいた。とても気持ちがよかった。松井せんしゅになったような気がした。
夏休みさい初の日曜日。昨年、市の大会でゆう勝したブラックタイガーとの試合だった。一回表、さすがにブラックタイガーは強い。早くも一死二るいのピンチ。バッターは強そうだ。
「どうかぼくのところにボールがきませんように・・・。あー来たー、いきなりゴロだー。たのむ、ぼくのグローブとってくれ！」
そのしゅんかんポトッとボールがぼくのグローブの中に入った。
「ランナーにちょくせつタッチだ！　やったー、ツーアウトだ。こんどこそ、どうかぼくのところにボールがきませんように・・・、うわーまた来たー！　今度はフライだー！左かな？　いやもうちょと右？　うしろかな？　もっと前か？」
「あれ？　ボールはどこだ？　あー入ってる、入ってる、ぼくのグローブにボールが入ってるー！」

「スリーアウト、チェンジ！」
その後、両チームともミスもヒットもなく、０対０でむかえた九回裏。この回も二死
ランナーなし。バッターはぼくに回ってきた。こんな時に回ってくるなんて運が悪い。
「ホームラン！　ホームラン！」
おうえんの声が大きくなる。
「どうかどうか、ヒットぐらいは打てますように！」
ぼくはどんなボールでも来いと思って、思いっきりバットをふった。空ぶりだ。
「次こそ、えーい」
また空ぶりだ。かんとくやチームメートがにらんでる。
三球目。カキーン！
大きいぞ、大きいぞ、あー！　入った！　サヨナラホームラン！

《評》
とても素直で、ゆかいな文章です。野球の試合のことばかり書いても、それは説明ですからおもしろくありませんが、あなたはスポーツをやる人の心がけができていなかっが反省から出直していますから、試合と気持ちとがぴったり重なって、そこが文章を生き生きとさせています。終わりの方がさわやかです。試合に負けた後、グローブやバットを玄関に投げ捨てて、夜になってかれらのつぶやきを聞くのですが、あれはあなた自身の反省の声でもあったのですね。よく気持ちを入れ替えました。いいことです。

松永　伍一

優秀賞（福岡市教育委員会賞）

歪（いびつ）な円

柳川市立昭代中学校　二年　河村　智里

教室は静まり返ったままだ。生徒は、依然として沈黙を続ける。それというのも担任の教師の問いかけのせいだった。
小学校、五、六年生ぐらいの出来事だったろうか。話の流れの中で、担任が突然、黒板に何かを書き出す。静かな教室にチョークのこすれる音が響く。担任が書いたのは、「円」だった。歪ではあるけれどしっかりした線。そこからは強い意志が感じられた。
「この円をケーキとして考える。四人に平等に分けてみろ。」
担任がそう言った。皆は、首をかしげた。同じ大きさに切ればよいのではないか。それが平等ではないのか。疑問がふくれ上がっていく。そのうちに生徒の一人が手をあげ前へ出る。黒板に向い、円を四分する。皆が思った通り同じ大きさに分ける。だが、担任は顔色を変えることなく言った。
「これは、平等ではない。」
この言葉は、私の既成概念を突き崩す。どこが平等ではないのか。本当の平等とは何だ。担任の考えを聞きたい。
「こちらが聞きたい。どうしてこれが平等なのか。」
担任はそう続けた。
「みんな食べられる量が違う。そのことを考えたか。」
「みんなが満足するように分けるのが平等ではないのか。」
「当然、分けるうえでゆずり合いが必要になるんだよ。そのことを分ってほしくてこの話をしたんだ。」
その考えの深さに感嘆した。平等とは、と聞かれれば、私は間違いなくこの話をするだろう。今はうけうりでも、いつか自分の考えとすることができればいいと思っている。あの静まりかえった教室は、私にとって大事な場所である。

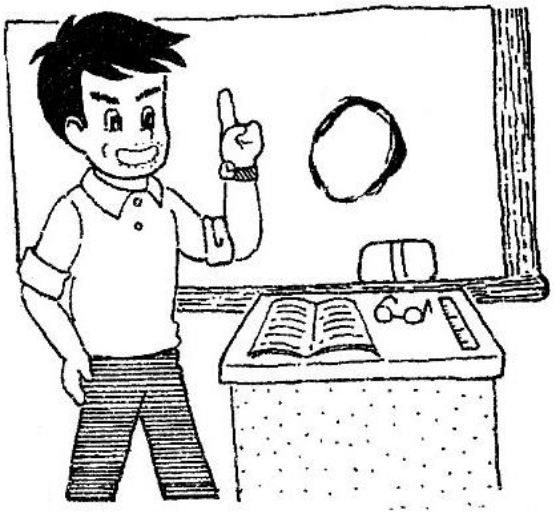
なぜなら、私がはまってしまった型をいとも簡単に崩した担任の言葉があるからだ。今の私たちに必要なのは、既成概念を崩す言葉、また、人ではないかと思う。

《評》

これは深い内容のテーマです。小学校の上学年の担任の先生がこういう大きな問題を出して、みんなに考えを問いかけたことは、あなたにとって幸せな思い出になったのですね。みんなもそこで同じ経験をしたはずですが、そのことをどれだけ覚えているでしょうか。

あなたは先生の話にショックを受けて、人生の問題に触れたわけです。「こんな考え方もある」から「こんな考え方を持ったら世の中のことが違って見える」へと広がっていったのですね。その喜びがよく書き込めています。

松永　伍一



優秀賞（柳川市教育委員会賞）

わが家はみんな祭り好き

柳川市立柳河小学校　四年　古賀　武尊

ぼくが、お祭りの練習に行っていると、

「あんたは本当に祭り好きねぇ。お祭りの練習の時は顔がイキイキしとる。勉強の時もそのくらい頑張ってくれるとよかばってんねぇ。」

と言われた。でも、ぼくは、言い返したりしない。だって本当に、お祭りが大好きだから。

お祭りは、ワクワクする。楽しい。そしてちょっとだけ、大人になれる気がする。

特に太鼓は、男らしくて、力強いし格好いい。ぼくのやりたい楽器のナンバーワンだ。

どん、どん、どん

どどーんこ、どん

祭りのはやしが聞こえてくると、さあ、大変。ぼくはいてもたってもいられない。頭の中は祭り一色になる。

実は、お父さんも、ぼくに負けないくらいのお祭り男だ。祭りの時期になると、話題はいつもお祭りの事だ。ごはんの時も、そわそわしながら、よくかまないで食べているのを僕は知っている。いつもは、のっしのっしと大またでゆっくり歩くのに、この時ばかりは、ちょこちょこと小またで回転も速い。そして、急いで家を出る。行き先は決まっている。

お母さんも、おはやしが聞こえてくると、料理を作りながらも、洗たく物をほしながらも、その音色に合わせて、足をトントンとならし、こしをクネクネとくねらせている。そのかすかな動きをぼくは見のがさない。そして何よりもやさしくなる。

妹も、ぼくの祭りの練習にいつもついてくる。そして、ケタケタとよく笑い、

こうふんしたようによくしゃべる。すぐすねるスネ虫もどこへやら。
なーんだ。そーなんだ。ぼくだけじゃない。わが家はみんな祭り好きなんだ。
近所のおじさんがぼくを見て、
「血筋だねぇ。」
と言って笑っていたけど、何だかわかったような気がした。
お祭りは、すばらしい。最高だ。一年中、お祭りだったらいいのになぁ。
どん、どん、どん
どどーんこ、どん

《評》
お祭りはたのしいものです。心がワクワクしてきます。あなたはそれをからだ全体で感じ、その通りに書いています。だから文章にリズムがあって、読んでいてたのしくなります。
余分なことは少しも書かれていないし、家族の人たちの動きも目に見えるようで、近所のおじさんがいった「血筋だねぇ」でピタッと決まっています。
結びを「どん、どん、どん」にしたのも、あなたの祭り好きをよく現わしています。そしてあなたの明るい性格もこちらに伝わってきます。

松永　伍一

優秀賞（東京商工会議所台東支部会長賞）

星空

町田市立金井小学校　五年　　小川　遥加

私は、家族で、生田緑地にある川崎青少年科学館へ行った。ここは自然や科学、天文に関するイベントを多くやっている。
私たちがきた目的はプラネタリウムを観るためだ。そこのプラネタリウムはすごいらしい。というのも、母が、
「ここのプラネタリウムはすごいんだよ。星好きには有名な場所よ。」
と言うのだ。
「へー、どんなところがすごいの？」
と聞くと、母は
「観てからのお楽しみ。」
と、教えてくれなかった。仕方ない、楽しみにしておくかと思いながら、プラネタリウムに入っていった。
プラネタリウムに入ってしばらくすると、辺りが暗くなりプラネタリウムは始まった。
「え？・・・これ？」心の中で思った。それは以前観たものとあまり変わらなかった。何がすごいのだろうと思いながら解説を続けるお姉さんの声に耳をかたむけた。
お姉さんは天の川の話を始めた。そして、「もう一つの小さな投影機で写します。」
と言うと、投影機を変えた。すると、大量の星が、ぱーっと写し出された。「わぁ、きれい！　星って本当はこんなにたくさんあるの？」と、心の中でさけんだ。天の川もはっきりと分かる。小さなたくさんの星が集まってちゃんと川のように見える。スクリーンいっぱいにすき間がないくらいに、大きな星、小さな星が、キラキラキラキラとかがやいている。観ているとすいこまれそう。そ

して、宇宙にいるような感覚になった。
その二つ目の投影機は、三十キログラムほどでとても小さいものだった。それは大平貴之さんという人が個人で作り上げたもので、四百十万個の星を写せるそうだ。私は個人で、こんなすごいものを作れるとはとてもおどろいた。
「とてもきれいだったね。」
私はプラネタリウムを出てからも、しばらくの間、頭の中は星空でいっぱいだった。
それからしばらくたったある日、この大平貴之さんをモデルにしたテレビドラマが放送されていた。そこで、大平さんは、小学五年生のときから投影機の設計図を描き、社会人になってからも趣味で投影機を作り続けたと知った。夢を持って、それに向かって努力すれば、何でもできるような気がした。
東京は夜になっても明るいのであまり星は見えない。けれど今、私の心の中では、大平さんが作り出した星空のようにたくさんの夢の星がかがやいている。

《評》
プラネタリウムで美しい神秘の星空を見ることができて、幸せでしたね。肉眼で見てもきれいですが、天体望遠鏡で観察すると星空のスケールの大きさが違った迫力で伝わってくるものです。
あなたはこの文章の中で二つのことを知りました。
一つは天体の不思議さについて。もう一つは大平貴之さんの天体に注いだ意気込みと情熱について。その二つがバラバラにならずに一つに統一されているから、「美しい星空にめぐり会えてよかったですね」と声をかけたくなりました。

松永　伍一

優秀賞（柳川市議会議長賞）

夢の中の炎

大牟田市立甘木中学校　三年　古賀　みか

「おはよう、真湖。朝よ、おきなさい。」
私はいやいやながら起きた。ゆっくりと顔を洗い、ゆっくり制服に着替える。下におりるといつもと変わらない風景。お父さんは新聞を読みながらパンを口へと運び、洋服を汚しながらご飯を食べているのはまだ二歳の弟の慎悟。お母さんは私のお弁当を包んでいて、テレビは我が家（と言ってもお父さんだけ）が毎日欠かさず見てる朝のニュース。今テレビにはどっかの国の有名な歌手が開いた世界平和を願うコンサートの事が伝えられていた。
「このコンサートでたまったお金は、世界のいたる所に埋まっている地雷を除去するのに使われます。それに各地域にある――」
女のアナウンサーが言っている。本当に全てのお金で地雷を除去するつもりなのだろうか？　そんな人間いるわけない。どうせ口先だけ。
「こんなのうそに決まってるじゃん。」
と言ってしまった。もう一週間以上も口を聞いていないお父さんが厳しい目つきでこっちを見ている。何かいいたそうだ。私は、またお父さんと喧嘩するのはめんどくさいと目を閉じた。その瞬間ものすごい音がして、バーンと私は吹き飛ばされた。熱い。ものすごく熱い。
「何？　お父さん？　お母さん？　慎悟、どこ？」
私は夢中で口走った。一体何があったのだろう。目を開けてみた。何も見えない。煙がのどまで入ってくる。ゲホゲホ、と咳が出てくる。もしかして家がつぶれちゃったのかな。
「もしかして真湖？　なんで？　あ　大丈夫？」
誰かが言う。お母さんじゃない。その人は私を立たせ、どこかへ連れていく。
「誰？　な、何があったの」

うまく声が出ない。のどがカラカラだ。水、水がほしい。
しばらく歩いた後、その人は私をとても熱い砂の上に座らせた。その人が言った。
「もう大丈夫よ。目を開けて。」
恐る恐る目を開けると、さっきよりちゃんと見えた。でも回りの風景に愕然とした。火の海だ。どこもかしこも火。逃げ惑う人々。時々見える、黒くて、こげているのは・・・・・・・・・・まさか、そんなはずはない―。自分に言い聞かせる。火の海から救ってくれた人の顔を見た。
「幸子！」
私は叫んだ。なんとそこには、転校して行った幸子がいた。
「なんでそこにいるの。」
私はたずねた。
「あたしが聞きたいくらい。ここ、たぶん、真湖とあたしの学校の真ん中ぐらいだよ。こんなに爆弾に吹き飛ばされて。真湖が生きてるの不思議なくらいだよ！」
「え　爆弾？　何言ってるの？　何で。」
声がまた出なくなった。
「だまってた方がいいよ。死にたくなきゃね。」
私は黙って、幸子とずっとそこに座ってた。お父さん、お母さん、真悟はどうしてるかな。死んでないよね、と思いながらも、私は幸子の言葉が頭の中でぐるぐる回っていた。「真湖が生きてるの不思議なくらいだよ」という言葉が。もしもお父さんが死んでたら？　喧嘩したままだ。最後に一言謝りたかった。ああ、まだ死んだと決まったわけじゃない。考えるな、考えるな―
「あっ！」
幸子の声がしたから振り返ってみると、
「お母さん！」
お母さんが走ってくる。うでにひどいやけどがある。お母さんの横にはたくさんの死体。私は気が遠くなっていくのを感じた。もう大丈夫だ。お母さんがいる・・・・・・お母さんが遠くの方で私を呼んでいる。
「真湖、真湖、大丈夫？　どうしたのかしら。」
どうしたのかしら、なんて、こんな時に何を言っているんだろう。誰かが私の頭に水をかけた。
「つ、冷たい！」私は目を開けた。回りは火がなく、それに家の中だった。何でなの。
「お父さん、大丈夫だったの？　爆弾は――」
「何言ってるのかしら、この子は。」
「夏バテしたんだよ、きっと。夜眠られなかったからだろう。」
え、もしかして今のって、夢？　そんな・・・・・・。
「――コンビニエンスストアで今、平和のための募金を行っております――」
女のアナウンサーの声。私はハッと閃いた。
「お母さん、お金ちょうだい。」
「え、もしかしてあなた募金するつもり？」
「うん。」
「それだったら自分のお金を使いなさい。」
お父さんが言った。いつもの私ならここで文句を言うだろうが、素直に従った。
「うん、分かった。じゃあ、行ってきます。」
私はバッグとお弁当袋をつかみ外へ出た。
「真湖はどうしたのかしら、おかしいわ。」
私は学校の側のある場所へと急いで走った。

《評》
誰でも夢を見ます。そこにあるのは現実にはない世界です。だから、信じられないような出来事がくり広げられます。それはそれでおもしろいのですが、現実に起きた出来事と夢の中の出来事とのつながりがないと、二つの世界が分裂してしまいます。あなたはどちらに重点をおいて書いたのでしょう。地雷除去の事に関心があるなら、そのことにしぼっ

て、夢の話などなくてもいいのです。表現力のある人ですから、これから注意していくと、きっといい文章が書けるでしょう。期待しています。

松永　伍一

優秀賞（柳川文化協会賞）

人と人の出会い

柳川市立昭代中学校　三年　高田　千穂

一日一日私たちは何気なく過ごしているけれど、その一日こそがとても大切な事なのだろうと私は思う。二十四時間、その時間で地球は一周する。私たちは地球が一周したなんて気づくことなくその地球のなかでいろんな人と出会っている。

例えば人が、外に出たとする。そうすると知っている人にも会えば、知らない人とも会うだろう。そのなかで知っている人ならば立ち止まって言葉を交わすことだろう。その一方で知らない人とは言葉を交わすことはないはずである。でも、その人といつかは言葉を交わすかもしれない。私は、小学生から中学生になり知り合いが増えた。今は、言葉を交わしている人でさえ前は知らなかったのである。その人と会う前にもしかしたらすれ違っていたかもしれないし。同じ電車に乗っていたかもしれない。

一日一日がなにげなく過ぎていくなかで私たち人間は何人の人たちと会っているのだろうか。現在、活躍している有名な人とも会っていた人がいるかもしれないし、一日に何回も同じ人とすれ違った人がいるかもしれない。それは、その人自身にしか分からないことであり、もしかしたらその人自身も分からないかもしれないのである。知っている人の顔はちゃんと覚えているが、知らない人の顔はわざわざ覚えたりはしないですれ違っているだけだろう。

私にはこういう経験がある。店などで歩いていると、

「今日は。大きくなったわね、前はあんなに小さかったのにね。」

と声をかけてくる人がいる。私はその人のことを覚えていなかったので、

「こんにちは。」

としか言わなかった。そして、その後に父や母に尋ねて分かるということが何回もある。

みなさんにもこういう経験はないだろうか。自分がまだ小さいときにだけ何回か会っていて、いつしかその人の事を忘れていて何年後かに再会して思い出すなんて事は、他にも友達が引越しをしてしまっていつしか忘れてしまっているということなどが、もちろん手紙交換や電話・メールのやりとりをすれば別だろうが、親しかった人としかしないはずだ。

人は幼稚園・保育園・小学生・中学生・高校生・大学生・社会人へと成長していく。こうならない人も中に入るかもしれない。でも、その中でたくさんの人と出会い、たくさんの人と交っているし、その中で別れもあるだろう。そして、その一つ一つの出会いや別れは偶然なんかじゃなく必然なのだと私は思う。人と人が出会うのは限られた時間や人の数ではなく、その時、その場所によって違いその人によっても違うことだろう。けれど、この地球にいる人たちは限られている。その中で何人の人たちに出会い、別れていくかはその人しだいな

んだと思う。クラスが一緒になっても、学年が一緒になっても卒業するまで話をしたことがない人がいるかもしれない。だから、その人に出会ったことに感謝し、ひと言でもいいから話し掛けることが大切なんだと思う。

今も、世界中でたくさんの人たちが新しい出会いをいろんな場所で見つけているだろう。その人にあった出会いのかたちで。

《評》

道で知らない人と偶然に会ってそのあと挨拶を交わすようになるという出会いと、運命的にめぐり会って生涯の友となるという出会いと、出会いにも二つのタイプがあります。あなたは、この文章では前者を扱っています。だからあまり感動が伝わってきません。

年をとっていろんな人生体験を重ねていくうちに、神様に感謝したくなるような出会いに恵まれるものです。「この人に出会えたおかげで私の人生は輝いてきた」と誇らしく思える出会いがあなたにもたられることを私は祈ります。きっとやってくるでしょう。

松永　伍一

優秀賞

（ＮＰＯ子どもの命と心のネット長谷健顕彰会東京事務所長賞）

何かが変わって…

町田市立鶴川第二中学校　二年　多田　詩織

中学校に入って二年目、私のまわりではいろいろなことが変わりました。

一番大きいのは、友達がたくさん増えたことです。二年生になって、最初にクラス替えがあって、初めはとても緊張しました。クラスには、話したこともない子もたくさんいて、不安でいっぱいでした。でも、クラスのみんなは優しくて、たくさん話しかけてくれて、クラスにもすぐになじめました。そのうちに、自分からもどんどん話しかけられるようになりました。一年生のとき、私は、自分から話したりすることが苦手でした。だから、これは大きく変わったことだと思います。新しくできた友達は、みんな一年生のときの友だちとは性格も、趣味も、ちがうことだらけだったけれど、それだけたくさんの友だちや、たくさんの考えを知って、それをうれしく感じました。友達の輪が広がると、それだけ笑顔でいることが多くなった気がして、学校がもっと楽しくなりました。

それから、部活でもたくさんのことが変わりました。初めて「後輩」ができて、私は「先輩」になりました。今まで、「教えられる」ことばかりだった私が、人に「教える」立場になって、部活に対する気持ちが変わりました。今まで、考えたこともなかった「責任感」を感じるようになって、もっと部活に真剣に取り組むようになりました。これも、大きな変化だと思います。去年、先輩にたくさんのことを教わりました。それを、今度は次の子たちに教えていかなければいけないのです。人に教える、ということは、思っていたよりもずっとずっと難しいことでした。なかなか上手に教えられなくて、悩んだりしたこともたくさんありました。でも、自分が教えて、できるようになった時には、とて

もうれしかったし、もっといろんなことを教えてあげたい、と思えました。
まだ、他にも勉強のことや、普段の生活のことなど、変わったことはたくさんあります。たぶん、これから三年生になって、高校生になって、もっといろいろなことが変わっていくんじゃないかと思います。でも、変わることは、いいことだと思います。何かが変わると、新しいことに気づいたり、また新しい自分や、友だちに出会えるような気がします。これからも、少しずつ変わりながら、充実した毎日を過ごしたいと思います。

《評》
友達が増えていくと自分の周りの空気が明るくなり、お互いの顔もほころびます。学年が変わりクラスのメンバーが入れ替わると新しい友達ができるわけですが、その当然のことがうれしくて感動につながったと、あなたは書いています。
それはそれでいいのですが、欲をいえば、起こった出来事を一つ二つ具体的に書いたら、もっとあなたの感動が読む者の心に入ってきたことでしょう。これからその点に気を使うようにされたら、すばらしい世界が広がっていくにちがいありません。
松永　伍一

第九回長谷健賞＝平成十八（二〇〇六）年度

長谷健賞大賞

詩のよさ

柳川市立東宮永小学校　六年　奥薗　真希

「雨ニモマケズ」
わたしは詩の音読で初めてこの詩を知りました。この詩をつくった人は宮沢賢治です。
「この詩は、とても長いな。」
と言ってしまうくらいの印象でした。でも、実際に何回も読んでいくうちに、だんだん意味がわかってきました。宮沢賢治さんは、強い体をもって、ぜいたくはせず、困っている人がいたら助けてあげたいという思いで、この詩を書いたんだろうと思いました。とくに、わたしは、

東ニ病気ノコドモアレバ
行ッテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ッテソノ稲ノ束ヲ負イ
南ニ死ニソウナ人アレバ
行ッテコワガラナクテモイイトイイ
北ニケンカヤソショウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイイ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
ソウイウモノニ
ワタシハナリタイ

という所が特に好きです。
一つ目の理由は、どこへ行っても、困っている人はたくさんいる、だから自分が助けに行かなくてはいけないという作者の心構えと、助けにいく自信にひかれました。二つ目の理由は、別にほめられなくてもいいけど、苦にされない人になりたいという作者の思いがこめられていると思えたからです。
宮沢賢治さんは詩をつくるのが上手だな、詩をつくる機会があれば、宮沢賢治さんを見習おうと思いました。
わたしはこの詩が好きになってから、宮沢賢治さんの伝記を読みました。宮沢さんは、一番仲の良かった妹をなくして悲しい人生をおくったそうです。そういう姿を見て、わたしはかわいそうと思ったけれど、だからこそ、こんな詩が書けるんだと思いました。
詩は自分が心で思ったことを自由に書き表わせるとてもいいものだと思います。これから詩を書くことにちょう戦したいです。これからも、詩のよさを生かして生活に役立てたいです。今までは、詩にあまり関心を持っていなかったけれど、宮沢賢治の詩などを読んで、詩が大好きになりました。
詩のよさは、たくさんあります。短いものも、長いものもあって、詩を書いた人のよさ、個性が出ると思います。
わたしの町にも有名な詩人がいます。名前は、「北原白秋」です。たくさんの詩を残しているのでとても尊敬しています。
もっといろんな人の作品をよんでみたいと思います。詩は、作者の人生がつまったすばらしいものだと思います。これからも詩をたくさんよんでみたいです。そして、わたしも自分の人生を、詩という表現方法で書いてみたいです。

《評》
宮沢賢治の「雨ニモマケズ」と出会って感動したあなたの気持ちがかっちりと書けています。この詩は子どもに向けて書かれたものではありませんが、作者賢治の考え方や生き方のすばらしさが、あなたの心を打ったのです。人のため世の中のために骨折った人でしたから、自分の欲を捨てていました。そういうタイプの詩人は日本にはあまりいません。
これから詩をたくさん読んでください。そこでいろんな発見もするでしょう。北原白秋は童謡から読みはじめることをすすめます。言葉の使い方の天才だった白秋から学ぶことはたくさんあります。

松永　伍一

優秀賞（福岡県知事賞）

ひまわりの種

福岡県立柳川市立東宮永小学校　四年　北浜　実樹

八女のおばあちゃんの家から帰ると中、わたしは、うっかり寝てしまった。車の中はとても気持ちがよくて、乗るとすぐに、眠りに誘われます。

家に着いたかと思って、あわてて目をさました。すると、そこは、ローソンでした。お母さんは、おにぎりを、二こ買いました。カウンターで、お金を払おうとしたら、レジの横に、五月二十一日は、ローソンの緑の日と書いてありました。一人一ふくろをもらえるとも書いてあったので、わたしもお母さんも一ふくろずつもらいました。

「本当に、芽がでて、花が咲くのかなあ。」

と思いました。

ふくろは、ひまわりの種の入ったふくろでした。お母さんといっしょにひまわりの種を植えることにしました。植木鉢を運んできて、第1かんせつの所まで、あなを開けて、そっと種を植えました。

わたしは、毎日水をやって、観察しました。

一週間、一カ月と月日がたちました。なかなか芽がでてきません。今年は春が速かったから、ねぼうしたのかなと思いました。土がわるかったのかな、種がわるかったのかな、水やひりょうが足りなかったのかなと、いろいろ考えました。

おばあちゃんに聞くと、

「種が、ただのけん、花屋さんのとくらべて、わるかとやろうね。」

と教えてくれました。

七月になったら、出てくると思っていたけど、やっぱりでて来ませんでした。そんなふうに考えて、どんどん月日がすぎました。

今も、あきらめずに水をあげて、芽がでてくるの楽しみに待っています。

《評》

お店からサービスでもらったひまわりの種が、なかなか芽を出さないので、どうしてだろうと考えているあなたの姿が見えるようです。おばあちゃんは「ただでもらったものだから」と、あきらめているようですが、あなたは芽が出るのを待って水をあげているのですね。そのちがいがとてもおもしろく、芽が出たらあなたはどんなによろこぶだろう、と私はそれをたのしみにしています。ただでもらったひまわりの種でも命があります。出ると信じましょう。待つこともやさしい心のあらわれです。

松永　伍一

優秀賞（柳川市長賞）

さくら

柳川市立蒲池小学校　四年　大坪　駿

一九四五年八月十五日。長い長いせんそうが終わった。このせんそうで、多くの人が血を流した。なみだを流した。心が傷ついた人がたくさんいただろう。

ぼくは、春休みに、鹿児島の知らんにある特攻記念館に行った。そこには特攻隊としてせん死した人たちの、数え切れないほどの写真や手紙などが展示し

てあった。手紙の内ようはぼくにはよく分からなかったけど、それをよんでいた人たちの目には、いつしか涙があふれていた。
こわれた飛行機も展示してあった。何を考えて飛んで行ったんだろう。やりたいことがいっぱいあっただろう。家族のことが心ぱいだっただろう。勉強したかっただろう。
せんそうでは、死にたくなくても死んでいった人たちがたくさんいる。それによって、たくさんの家族や友達が悲しんだ。悲しみが悲しみを生む時代だった。
今、ぼくは幸せだ。家族もいるし、友達もたくさんいる。いっぱい遊べるし、勉強もできる。好きな野球だって。
外にあるたくさんの桜は、前日の雨で散っていた。それを見てお母さんは言った。
「若くして亡くなった人たちみたいだね。」
なんだか、急に悲しくなった。

《評》
せんそうのことはどれだけ語っても語りつくせません。あなたは知覧の特攻記念館に見学に行って、せんそうのことを　深く考えたのです。
せんそうで死んだ人たちも「やりたいことがいっぱいあったろう。家族のことが心ぱいだったろう。勉強したかっただろう」と考えてみたとき、あなたは今の自分とくらべてみたのです。平和のありがたさに気づきました。そこで、さくらの花に目を注ぎました。
お母さんの言葉を聞いて、あなたのせんそうにたいする考えが一だんと深まりましたね。
松永　伍一

優秀賞・柳川市議会議長賞

言葉のチカラ

柳川市立昭代中学校　二年　吉丸　佳成

「言葉は未来、思い出、救い、勇気、夢。言葉・・・・・・。言葉に救われた。言葉に背中を押された。言葉に涙を流した。言葉は人を動かす。私たちは言葉を信じている、言葉のチカラを・・・・・・。」
これはテレビで流れている朝日新聞のＣＭだ。私は、このＣＭを見たとき、とても納得した。私にとっての言葉とはいったい何なのだろうかと思い、考えた。しかし、答えは見つからない。どんどん考えていくうちに、最近の出来事が頭の中へ浮かんできた。
ある日の教室、昼休み。私は、自分の席で本を読んでいた。ろう下でのおにごっこ、友達との楽しい会話、まだ昼食途中・・・・・・いろんな人がいた。たくさんの声が重なり、響きあって、一つの大きな音となり、教室やろう下、校舎全体が大きくどよめている。そんな中に聞こえる、いろいろな言葉や会話。
「今日は、暑かねえ。」
「うん。もうすぐ夏やけんね。あっ。そう言えばサ、この前はどうもありがとう。」
「いいえ、どういたしまして。・・・・・・それと昨日はごめんネ。急に用事できて遊べなくなった。」
「いいよ、いいよ。また今度ゆっくり遊ぼうネ。」
延々と続く、日常での何気ない会話。その会話はなんとなく温かいものでもあった。そのとき私は、まだ本を読んでいた。そんな時にチラッと聞こえた言葉がある。
「は？　何お前。うざっ。死ねやん。」
この言葉に、読書をしている私でさえも反応した。うしろを振り向く。誰が言ったのか分からない。結局、私はその日に三回以上もその言葉を聞いたのだ

った。

人は、一日過ごすために、どんな言葉を使っているだろうか。どれぐらい使うのだろうか。動物の中でたった一種類、人間だけが使える言葉。私は、言葉には力があると思う。言葉ひとつで、人は傷つき、感動し、支えられ、自信が持てると思う。自分の言葉で、相手に気持を伝える。するとその相手は、何か感じ取ることができるだろう。感じることはそれぞれ自由だったとしても、大切な何かは伝わるはずだ。人の心をいろいろな形や色に変化させ、感じて通じあうことができる言葉・・・・・。そんな風に考えれば、「言葉は魔法」ではないかと思った。支える言葉、励ます言葉、救い、勇気、夢、希望。傷つける言葉・・・・・。私は、「傷つける言葉」は必要ないと思う。もちろん、人が成長するための立ち直ることのできる程度の軽い傷つけは必要だろう。しかし、「うざい、死ね」などの無駄に傷つける言葉は必要ない。私は、絶対に使わない。

これからもっと広い世界に出ていけば沢山の人々に出会うだろう。私は、それらの出会いや人々をもっと大切にして、相手を思って大切に言葉を使いたいと思った。

《評》

私たちは毎日言葉を使って生きています。言葉がなければ意思が通じ合いません。その言葉は聞く人の心を安らげ、ふるい立たせることもできます。あなたはテレビで流される朝日新聞のＣＭに刺激されて「言葉のチカラ」に気がついたようですが、実際に自分の周りで聞こえる言葉はもっと複雑でいろんな要素を含んでいます。まずある日教室で聞いた「うざっ。死ねやん」にどれだけ人が傷つくかを知りました。人として使うべきでない、と気づきました。それは大きな発見ですね。

心のこもった美しい言葉によって人は育っていくものです。その考えを大切に。

松永　伍一

優秀賞（福岡県教育委員会賞）

有明海

柳川市立昭代中学校　三年　古賀　秀寛

「宝の海を返せ！」

「水門を開けろ！」

勇ましい声とともに、力強い漁師のうでが天上を指す。

みなさんもたまに耳にすると思うが、近年有明海の海苔が悪くなってきている。昔は宝の海で育った日本一の海苔と有名だったが、近年ではその声もなくなり始めている。ではなぜ、このようなことが起きたのだろうか。

その原因の一つ。二〇〇〇年の春、大きなしぶきをあげながら大きな鉄板が水門を閉めた。それも、一つのボタンによって。

その瞬間から、有明海は荒れてきた。海苔は色落ちをし、タイラギなどの貝も全滅の危機にさらされた。しかも、状態は年々、悪化していった。そんな中、これではいけないと、漁師たちが立ち上がった。デモを行うのだ。デモの一つに、海上デモというのがある。朝早くから、何隻、何十隻というかなりの数の船が、一箇所の場所へと進んでいく。その場所とは、諫早湾の水門があるところだ。到着すると、一列に多数の船が並ぶ。その時の波は、とても激しい。まるで、業種の怒りを表すような感じだ。さっそく、マイクでデモが始まった。

「宝の海を返せ」

「水門を開けろ」

「干拓工事を中止しろ」

大きな声が一つにまとまり、さらに大きくなる。

そもそも、なぜ水門を閉めたかというと、干拓工事をするためである。だから、工事を中止し、水門を開ければいいのだ。しかし、工事をしている会社は、なかなかやめない。そんな、漁師と、工事会社の戦いは続いている。

家は、海苔をしている。主に、一年中仕事だが、特に冬は忙しい。寒い中、海に行くのだ。手はこおり、朝は早い。五時には、父母は家におらず、帰りも夕方。そんな厳しいことをしているのに、まだ、工事を止めない。年をとっても、若いぼくたち以上にがんばる両親を見ていると涙が出る。だが、いつも笑顔でぼくたちに気を使う。そんな状態はもう続けたくない。

だから、みんなに分かってほしい。早く、ぼくたちの宝の海を見たいと……。

《評》

有明海は宝の海でした。とりわけ海苔は特産物でした。その海苔がとれなくなった原因が諫早干拓のための水門の敷設にあるとされています。あなたはそのことに強い関心を寄せ、反対運動に参加する漁民たちのことを書きました。その中にはあなたのお兄さんもは入っているでしょう。それだけに力がこもっています。

私はこの作文を読んで、有明海を愛する漁民の気持ちに打たれました。漁民の子であるあなたの胸の中に「漁民だましい」がたぎっているのを感じました。

松永　伍一

優秀賞（福岡市教育委員会賞）

祖父の命

柳川市立昭代中学校　二年　篠倉　理恵

「あと一時間から三時間げなよ。」

私はそれを聞いてハッとした。昨日の早朝に救急車で祖父は運ばれた。病院で祖父が、

「みんなを連れてこい」

と言ったそうなので、私たちは急いで行った。その車の中で、あと三時間ぐらいと聞いた時は、みんなに聞こえないようにそっと泣いた。しかし、声が聞こえるぐらいあとからあとから涙が出てくる。みんなは私をそっとしてくれていた。

病院に着くと、祖父の顔はやせこけていた。もう声を出すこともできず、目を開けることさえままならなかった。祖母が、

「手ばにぎってやらんね。」

と言った。祖父の手はこんなにも冷たくなるのかというほど冷え切っていた。祖母が、

「りえが来たよ。よかったね。」

と言うと、祖父は小さくうなずくことしかできないかった。するとまたあとからあとから大粒の涙がこぼれてくる。すると、祖母が、

「よかったね。最後にたくさんの人が来てくれて。あんた幸せやったね。」

と言った。私は、祖父と過ごした日々を思い出していた。保育園の時は、自転車の後に乗せて毎日送ってくれていた事、一緒に向こうの海まで行った事、言い合ったこともあった。たくさんの思い出が頭の中をよぎっていた。

そして、静かに祖父は息をひきとった。祖母は冷え切った祖父の手をにぎりこう言った。

「あんたがあたしのおじいさんでよかった。ほんとに幸せやった。」

私は、その言葉を聞いて私のおじいちゃんで本当によかったなあと思い、また涙がこぼれてきた。
その後、祖父は顔をキレイにしてもらい、たくさんの人からお別れに来ていただいた。
私は、お葬式でおじいちゃんへ手紙を書いて読んだ。自分で書いた手紙なのに、最初から泣きながら読んでいたので、何が何だか分からなかった。読み終わったあと、祖父の胸に手紙を入れた。祖父は読んでくれただろうか。亡くなる前にもっと話しておけばよかった。それだけを一番後悔している。
でも、亡くなる前に顔が見られてよかった。そして、たくさんの人に見守られて亡くなっていけたから幸せやったね。
最後に祖父へ。
「大好きなおじいちゃん。おばあちゃんは、私たちがしっかり守っていくけん、心配しないでね。だから、天国で私たちのことを見守っていて下さい。」

《評》
人は生まれ、老いて、病んで、死んでいきます。あなたのおじいちゃんもそういう運命をたどられたのです。
あなたは、おじいちゃんの最後の時に出会えてよかったですね。その満足感がよく書けています。とくによかったのは、お葬式のとき、お別れの手紙を読んで、それをおじいちを読むことはできませんが、心からの贈りものですからきっと通ずるだろうと思います。その気持ちが「悲しみのなかのよろこび」になります。きっと天国から見守ってくださることでしょう。

松永　伍一

優秀賞

暗闇の中で学んだこと

柳川市立昭代中学校　三年　梅崎　智子

今年の二月、私は修学旅行に行きました。初めての沖縄ですごくドキドキでした。でも大好きな友達と一緒の部屋で、とてもワクワクしていました。
沖縄に着いてすぐ糸数壕にバスで向かいました。糸数壕の中は真っ暗で、水で濡れていて、水の音しか聞こえませんでした。私は、片手に懐中電灯を握り、ももう一方の手で友達の手をギュッと握りしめていました。壕の真ん中の部分に到着したら、案内してくれた人が説明をしてくれました。その説明を聞いていたら、想像以上にひどくて涙があふれていました。
その後、ひめゆりの塔、ひめゆり平和祈念資料館に行きました。ホテルでは、宮城先生の話を聞きました。どれも胸がキューっと締めつけられ、また平和であることのありがたさを感じました。
二日目の夜、私がホテルのお風呂に入っていた時、いきなりフッと電気が消えました。停電したのです。そして私の頭の中に一日目に行った糸数壕の記憶がよみがえってきました。真っ暗で、狭くて、シャワーからポタッポタッと水が落ちて・・・・・・壕の中と同じでした。すごく怖くて鳥肌がたって友達の名前を叫びました。鍵をあけて、友達に入って来てもらい、電気がつくまでずっと一緒にいてもらいました。
私は暗闇の中で、いつも当たり前のように明かりがあることや、明るいところにいられるということが、とても幸せなことなんだと知りました。言葉で表しにくいけれど、本当に本当に真っ暗は怖かったです。そばに友達がいても、話していないと不安でした。私たちは、当たり前なことに感謝しなければならないと思いました。また、当たり前と思えるのは、平和であるからこそだと思います。だから、これからも戦争で亡くなった方々の死を無駄にしないよう、今を生きている私たちが平和を保たなければいけないと思いました。

《評》
沖縄に修学旅行に行った思い出がよく書けています。
糸数壕のせんそうを思いおこさせる「闇」とホテルの中の平和がもたらす「闇」とが、比較されながら語られています。
戦争がいかに惨めであったかを、宮城先生の話でよくわかったようですが、その悲惨こそがたとえていうと「闇」なのです。しかしいまの平和のありがたさの中での停電の「闇」はいのちにかかわるほどのものでもありません。それでも怖かったのですから、戦争の中での怖さは計りしれないものです。あなたはそれをかんじとったのです。

松永　伍一

優秀賞

私は料理するのが好き

柳川市立東宮永小学校　六年　古賀　由依

「トントントン」
とほうちょうの音が家中に広がっています。私は、料理をすることが前から大好きでした。料理をすることが好きになったのは、三年生の頃でした。お母さんが夜ご飯をつくっているのを見ていたら、お母さんが
「由依もきってみる」
といったので私はうきうきして切ってみることにしました。最初は、ほうちょうをもつだけでも、こわくてびくびくしていました。でもお母さんといっしょにゆっくり切っていたら、わくわくしてとても楽しかったです。最初のころは、ほうちょうで野菜を切ったりするだけでした。でも今は、カレーを作ったり、野菜いためを作ったりしています。
カレーを作る時、前はじゃがいもの皮を一つむくのに何十分もかかりながら皮をむいていました。一こ切るだけで、とってもつかれました。でも今では、じゃがいもの皮を早くむけるようになったし、あまり手もいたくならなくて、今は、楽しいの一言だけです。休みの日は私が昼ご飯にチャーハンを作ったりしています。お母さんとおねえちゃんがおいしいといって食べてくれるので、作ってあげて良かったなと思います。
私のお父さんはきゅうりがきらいでした。でも私が切ったと知ったら、
「由依が切ってくれたならおいしかろうね。」
といつもにこにこして食べてくれるので、うれしかったです。
私は休みの日におじいちゃんの家に行ったりします。私のおじいちゃんは、私が作る、ねぎのぬたが大好きといってくれるので、作ってあげたら、
「おいしか、由依が作ってくれるのはおいしい。」
といって全部食べてくれます。

私が今こんなに料理をすることが好きになったのは、お母さんのおかげでした。お母さんがいった、
「由依も切ってみる。」
の一言で、私は料理をすることが大好きになりました。私は、これからもいろいろな料理を作り、ちょうせんして、みんなから
「おいしい」
と笑顔でいってもらえるようにがんばりたいです。そして今まで以上に料理をすることが好きになって、上手になって、いつかは、自分の店を作って、お客さんがおいしそうに食べてくれたらいいなと思います。夢にむかって、これからもがんばって生きたいです。

《評》
お母さんの「由依もきってみる」の一声からあなたは料理好きになったのですね。
はじめはそれほどではなくても、やっているうちにだんだん上手になっていくもです。それば かりではなく、まわりの人が「おいしい」と言って食べてくれると、うれしくてまたがんばろうという気になるものです。そのあたりのことがよく書けています。
あなたはお手伝いをしていくうちに、将来おいしいものを食べさせる店を持ちたいという夢をいだいたのですから、すばらしいですね。その夢が実現することを私も祈っています。

松永　伍一

優秀賞

私のお父さん

柳川市立東宮永小学校　五年　堤　なつき

「ウー、ウー、ウー、・・・・・・」
真夜中にサイレンがなる。お父さんは急いで消防署にかけつける。そして、すばやく着がえ現場へ行く。すぐに火を消す。朝、汗びっしょりで家に帰ってくる。そして、
「あー。つかれた。でもけが人もいないし、無事でよかった。」
と言う。時々お父さんは、少しだけやけどをする。その時私は、
「だいじょうぶ。」
と、声をかけている。そしたら、
「こんなことたいしたことない。」
と、笑顔で答えてくれる。
私のお父さんの仕事は消防士だ。消防士の中の、レスキュー隊やけが人を運ぶ救急隊の仕事をしている。土曜日もお父さんは仕事だ。私は、
「よくがんばるなー。」
と思う。買い物の帰り、
「ピーポー。ピーポー。」
と、前から救急車がはしってくる。その中にお父さんがいた。顔はしんけんだった。私は心の中で、
「その患者さんを助けてあげて。一秒でも早く。」
と思う。
私のお父さんは、消防士の仕事だけではない。家のことも考えて、田んぼやうちの仕事もしてくれる。私たちは、
「いいお父さんがいて、うれしい。」
と思う。

お父さんは、地しんの時など指示をして、
「こっちににげろ。早くこい。」
と言う。お父さんは、自分の事だけ考えてなくみんなの事を考えているから、家族はとても助かる。
お父さんは、時にはおこる。
「なんしょっとかー。ふざくんな。」
この声は、市が習っているフットボールで、エラーをしたときの声。お父さんは、
「お父さんが、言わんとならんけんおこりよっとぞ。」
と、やさしくフォローしてくれる。私が、
「うん。」
とうなずくと、お父さんの顔に笑顔が浮かぶ。その時、
「がんばるぞ。」
とあらためて思う。
私は、お父さんががんばるすがたが好きだ。お父さんに、
「大好き。いつも私たちのためにありがとう。」
と伝えたい。
私は、お父さんといて、
「幸せ。」
と思う。
こんなお父さんがいて、とっても幸せだ。

《評》
消防士であるお父さんの姿が生き生きと描かれています。
レスキュー隊の仕事はきけんをともないますから、お父さんのことが心配でしょう。
買い物の帰りに救急車とすれちがったとき車の中のしんけんな顔を見て、あなたが患者さんを助けてあげて、と祈るところが、とてもよく書けています。
子どもをかわいがってくれるし、自分の仕事にまじめに取りくんでくれるお父さんを持って、あなたは幸せですね。気持ちのいい作文でした。

松永　伍一

優秀賞

飼育係の仕事

柳川市立蒲池小学校　六年　中村　紗耶佳

わたしは、五年生からずっと飼育係をやっています。五年生のはじめにわたしのクラスにメダカがきました。最初はとても元気で、えさもたくさんたべていました。でも二学期になると、元気がなくなって、ぜんぜんえさを食べてくれなくなりました。
「このごろ元気がないよね」
と、わたしは毎日のように友達と話していました。その友達も、

「そうだね。どうしたのかな。」
と言っていました。私はとても気になって調べてみました。
調べてみると、さむくなってくると、えさを食べなくなるということがわかりました。わたしはすぐに、
「さむくなってくると、あまりえさをたべなくなるんだって。」
と友達に話しました。
わたしは、えさを食べない理由がわかったので安心しました。
そして、三学期が終わり、六年生になりました。新一年生も入学してきました。わたしはメダカのことも忘れ、一年生と楽しく遊んでいました。
そして五月ごろになるとメダカの数がどんどんへってきました。五年生のはじめには、役二十ぴきいて、六年生のはじめには、十ぴきぐらいいました。五月は十ぴきもいません。八ひきぐらいにへってしまいました。
わたしは、
「このメダカ、かわいそうだから、どこかにうめてあげよう。」
と、飼育係の友達に言いました。
「どこにうめるの。」
と、友達がきいてきたので、わたしは、
「なか庭は。」
と言いました。
「じゃあ、中庭にしよう」
と友達が言ったので、中庭のすべり台の下に決めました。
わたしは死んだメダカをもって中庭に行きました、そして、穴をほって、メダカをうめました。
「こんどからは、えさやりを忘れないようにしよう。」
と友達に言いました。
そして六月に、また何びきか死んで五ひきになってしまいました。こんどは、水そうに入れていた、たにしがメダカを食べてしまいました。すぐにメダカをとりだして中庭にうめてあげました。もう、たにしがメダカをたべてはいけないので、ほりににがしました。
たにしも、元気でいてほしいです。

これからメダカが長生きできるように、がんばりたいと思いました。卒業式まで、メダカがいきているといいと思いました。そして、いっしょに卒業式をむかえたいです。

《評》
学校でメダカを飼っていくうちに、つぎつぎに死んでいくのを見つめていった体験がよく書けています。
死なせたくないという気持ちから、本で調べたりしましたね。理由はわかってもやっぱり死にます。飼育係としてできることは死んだメダカをちゃんと埋めてやることです。
おもしろかったのは、メダカを食べたたにしとほりににがしてあげ、「たにしも元気でいてほしいです」と祈ったところです。たにしも生きものですから当然のことでしょう。飼育係のやさしい気持ちが伝わってきました。

松永　伍一

優秀賞

ある日　～ＯＮＥ　ＤＡＹ～

柳川市立昭代中学校　三年　佐藤　稜

ある年の夏休みの昼前、毎日のように記録的な暑さを出しているのに、僕たち野球部は活気があった。練習も終わりにさしかかり、クールダウンも終わり、グラウンド整備をはじめた時に、野球部の同級生が僕にとある質問をしてきた。

「おまえってさ、どういうのがきっかけで、中学から野球始めようと思ったわけ。」

と言ってきた。僕はこう言った。

「なんだったっけなぁ、えーと。」

話す前にひとつ断っておく。これはなんでもない、ごく普通の話だ。ある少年が野球を始めたきっかけ、そう、なんでもない普通の話だ。もちろん僕にとっては特別なこと、いや、僕にとっては本当に本当に特別なことだったけれど。

「僕は、まだ小五でいつものように学校を終え、いつものように友達とがっこうで遊ぶ約束をし、学校へ行って野球を始めた。

その時、僕は、夏も終え、秋の涼しさを感じながら、のんびりセンターを守っていた。この回、一点取られたけれど三対二で、終盤になり、追加点がほしいところでワンアウトランナー一塁で僕にまわってきた。そこでとある少年が、

「バッター、まだヒット打ったことないよ。ボールゲッツーね。この間早く終わらせようー。」

そう、僕はまだヒットを打ったことがない。さすがに怒って力が入り、ワンストライクになった。だけど、次の一球甘い球を僕は見逃さなかった。ボールは、外野を越え、二塁打で一点追加となり、試合は五対三で勝った。僕は習い事の剣道に行き、疲れて帰ってきた。親がテレビを見ていたので、

「なんのテレビ見よっと。」

と着替えていると、僕の永遠のファンである城島選手がツーランホームランを打った。すると、父親が、

「プロ野球ば見よる。おまえも、もし野球ばするなら、だれでもいいから、目標ばもってしろよ。」

父親は笑いながら言い、そして、僕は、

「そうでもするかなぁ。でも剣道しよる。」

そう思いつつも、へたな言いわけをして、はなしを終わらせた。

その時、僕は城島選手の活躍を見て、僕は何か心に残り、こんな選手になれたらいいなと思い、中学校から野球を始めようと思った。それから野球に対して関心を持ち始め、野球を始めることになった。

グランド整備の時の同級生の質問に、語句は、

「うーん、忘れた。」

僕はうそをついた。話すことがはずかしくて言えなかった。そして、本当は、僕の心の中に

隠しておきたかった。プロ野球選手になる時までは、口に出して話したくなかった。

こうやって、今も普通に野球をやっている。たとえきつくても、やめたくなったときでも、僕はやきゅうを続けていくだろう。本当の気持ちをみんなに隠しつづけながら……。

《評》

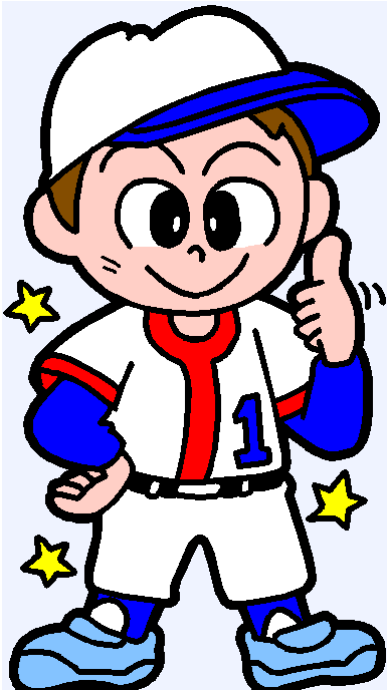
場面と心の動きとがうまく重なって厚みのある文章になっています。

小学校5年生の時のある日、二塁打で試合を勝利に導いた夜、テレビで城島選手がツーランホームランを打ったシーンを見て、自分も中学に入ったら野球をやろうと決めたのですね。でも同級生の質問に「うーん。忘れた」と嘘ついたところがとても面白くて、あなたの性格が見えてくるようです。

プロ野球選手になるまで、そのことを伏せて

おくという決心は立派ですね。夢を見るのにも秘密がくっつくのは味があっていいものです。

松永　伍一



第十回長谷健賞＝平成十九（二〇〇七）年度

長谷健賞大賞

天上の雫

（一般の部）　佐賀県唐津市在住　宮﨑　清子

今年も、スイカの出回る季節がやってきた。冷蔵庫の中をのぞき込み、

「スイカ、食べたあい。」

という息子の声が、私を七年前へと立ち戻らせる。

二〇〇〇年五月三一日午前八時。大声で泣き叫ぶあなたを抱っこして、新米の看護婦さんが手術室に入る。「ままあ」という声を残したまま、自動ドアはピタリと閉まった。そこでかけられた麻酔があなたの呼吸を奪い、ついには小さな心臓を止めてしまったのだ。再び鼓動を取り戻しはしたものの、ＩＣＵ室で目覚めたあなたは、海老反りの小さな体を大きなベッドの上に置かれ、母の顔にさえ全く反応しなかった。自ら動く事も、言葉を発することもできない。時折、獣性の泣き声を響かせるだけ…。

「すべてがリセットされたと思って下さい。」

と硬直し、抱きあげる事すらできぬ我が子の体は、幾本もの線で繋がれた。二歳十ヶ月にして第二の人生のはじまり。わずか一カ月先の未来さえ予測できる人は誰もいない。ゼロからの出発。

手術後、どれくらい経ってからのことだったろうか。笑い声を立てたと聞いた。毎朝乗せられる体重計のブランコの揺れに感じてたてた、たった一秒のかすかな声。

それからしばらくして、点滴だけの食事に、鼻から胃まで届くチューブを使った流動食が加わった。初めは少量を1日三回。そのうち量も増え、六回の食事になった。長いチューブを伝って白い液が胃に流し込まれる。それだけが命をつなぐ源。ふりかけご飯と肉が大好きだった胃袋は、きっと不満だったに違

いない。その証拠に、日に二度も三度もかなわぬ手をチューブに引っ掛けては、引き抜くようになった。その度に新しいチューブが入れられ、鼻の周りはテープ負けで真っ赤に腫れ上がった。それを見かねた看護婦さんは、手作りの布袋を作って小さな手にはめてくださった。

そんなある日のことだった。

「お母さん。家に帰ったらチューブの入替えをしてもらいますから、練習してください。今は、四十三センチです。」

と言われ、主治医の先生は、チューブの刻み目を指さされた。退院しても、このまま過ごす毎日なのか。ふと見たあなたの目が、確かに声を発していた。その日に後押しされるかのように、私は先生に問いかけた。

「何か、口から与えてみてはいけませんか。」

「とても危険です。誤飲で窒息しますよ。」

あなたに返す言葉が見つからなかった。その日は、一日中「チッソク」という音が、蝉時雨となって頭の芯まで響き続けた。

翌日、私の足は病院の裏門を目指していた。真夏の照り返しが足元から上がってくる。ひたすら歩き続け、ようやくたどり着いた小さな八百屋。その店先には、いろいろな果物が並んでいた。その中に何か…。

『スイカ』

そう、あなたが好きだったスイカはどうだろう。ゴロゴロと置いてある中から一番つやのいい一玉を選んだ。そして、汗を拭きながら、また裏門へと急いだ。

病院に戻り、スイカを切った。歩いて病院にきたあなたを、このままの姿で家へ連れて帰られるものか。せめてチューブをはずしてあげたい。その一念だった。

ＩＣＵ室に入り、切ったスイカを目の前に置いてみた。真っ赤な実。甘い香り。あなたの口が微かに動いたように見えた。私は、迷わず看護婦さんに耳打ちした。静かに抱き上げられたあなたの口に、一匙の赤い汁を近づける。すると口はみるみる大きく開いた。あなたの中に雫を落とす。口は閉じ、のどが波打った。体の中へと流れていく。もう一雫。それも、確かな流れとなった。神様がくださったこの雫が、あなたを蘇らせたことを確信した。

五カ月の入院生活を経て、チューブの要らなくなったあなたは、再び我が家に戻った。三歳の秋。好きだった曳き山囃子の音があなたをやさしく迎えてくれた。

あれから七年。あなたは、たくさんの方々の温かい心をいただきながら、命の炎を少しずつ明るいものにしていった。いつまでも鮮明なまま忘れることはできないと思っていた出来事が、いつの間にかセピア色を帯びてきた。目の前のあなたは、おいしそうにスイカにかぶりついている。テーブルのうえにも、ひざの上にも赤い雫を飛び散らせながら。その雫が、あなたの魂をここに戻してくださった。いつの日か、成長したあなたにこのスイカの話をしたいと思う。

天上の雫は、今日もあなたの中を流れていく

＜評＞

久しぶりに心を浄められる良い文章にめぐりあった感じです。

わが子への情愛に満ちあふれ、客観的に観察する心の視力も曇ることなく、簡潔にまとめて見事な出来栄えです。そこに私は「現代の母子像」の、典型を見ました。

読み進めていくうちに、母と子の息づかいとスイカの色や匂いまでが、こちらに伝ってきます。読後の快さの中で「こういう文章の書ける人は羨ましい」と思いました。

これからも魂にひびく文章を書きつづけてください。

松永　伍一

優秀賞（福岡県知事賞）

不　戦

柳川市立東宮永小学校　五年　荒巻　萌

私が、小さいころから行っている無名舎の子どもの家では、毎年行事で長崎サイクリングがある。私は、長崎サイクリングに毎年参加している。「原爆の地長崎へ　不戦」と書かれたゼッケンを付け長崎へ向かう。みんな必死に自転車をこぐ。とてもきついが特にきついのが、銀輪隊だ。銀輪隊は、柳川から長崎まで、全きょり自転車で走るからだ。ほかに、自転車隊といって、小学六年生までで、自転車に乗ったり、応援バスに乗って銀輪隊を応援する。そして、朝からずっと、銀輪隊と自転車隊を応援してくれる応援隊の人たちがいる。応援隊の人たちは、

「がんばれー。がんばれー。」

と応援してくれて、きつくても、がんばろうという気持ちになる。だから、自分たちが応援バスに乗った時は、いっしょうけんめいに応援する。私のお母さんは、

「自転車に乗っとるとき、きついけど、みんなの応援を聞くとがんばれるとよ。」

と言う。がんばれと言う言葉は、とてもいい言葉と改めて思った。

八月九日、松山公園に着いた後、「平和のつどい」が始まった。私は五年生なので平和アピールをした。今年は五人だ。みんなそれぞれ戦争のことをどう思っているのか、発表し、不戦をうったえる。

そして、十一時二分にもくとうをする。「これからも平和でありますように」と願う。

「平和のつどい」が終わった後、千羽づるをほうのうした。千羽づるには、子供の家の人たちの思いがこめられている。

日本に原爆が落されたのは、しょうがないと言っている人がいる。なぜそんなことが言えるのか私には分かりません。

なぜ戦争をするのかも分かりません。

食べ物もない。大事な家族も失ってしまう。つみのない人までも、死んでしまう。

私は、大切な大切なたった一つしかない命を戦争でなくしたくはありません。

今、私たちが住んでいる日本は平和だ。とっても幸せなことだ。けれど外国などでは戦争がおこっている。だから一秒でも早く、戦争がなくなってほしい。

これからも、長崎サイクリングに参加し、不戦をうったえ続けたいと思う。

《評》

戦争がどんなにむごいものか、を私たちはここ六〇年しっかり受けとめてきました。

きみは柳川から長崎までのサイクリングに参加して長崎の地を踏んだのですね。そこで平和を心から祈ったわけです。それだけなら旅の記録に終ってしまいます。きみはそれをやめて、大臣の発言にも触れながら、自分の考えを書いています。行動と考え方とがさりげなくつながって、とてもすっきりしたまとまりを見せています。

「大切な大切なたった一つしかない命を戦争でなくしたくはありません」というきみの気持ちが読んだあとも尾を引いています。

松永　伍一

優秀賞（東京都台東区長賞）

まゆげ事件

東京都台東区立柏葉中学校　三年　国分　霞

七月某日、事件が起こった。私が皿洗いを終えると、リビングで一息ついている風呂上がりの姉と目があった。あれ？　いつもと何か違うので、顔を凝視していると、姉が一言。

「何見てんの。気持ち悪いなぁ。」

そうなのだ。こういう奴なのだ。姉という女は。この少しわがままな姉は今年で高校一年生だ。夏休みはアルバイトと部活で充実しているようだ。

結局、何が変わったのか分からないまま食卓についた。しばらく、談笑をして盛りあがった。私の家は父子家庭だが、ご飯を噛む音だけが響くということは絶対にない。結構、幸せな家庭だと思う。

その時、気付いてしまったのだ。姉の眉毛が綺麗に整えられていたことに。普段は優しく真面目な姉がそんなことをするとは夢にも思わなかったので、とても驚いた。どうして眉毛を剃ったのか、聞こうか聞くまいか悩んだが、思いきって聞くことにした。ジェスチャーで。父がいる前では流石にまずいと思ったからだ。

私は自分の眉毛に左の人さし指をかざして口だけで聞いた。「どうした？」と。姉は私がしたのと同じように声には出さずに答えた。「変？」　私に聞くなよ、と半ばあきれながら苦笑いをし、その場をごまかした。

次の日、私は父と買い物に出かけた。花火大会の準備をする為に近くのスーパーまで行った。マンションから花火を見るのは毎年恒例の行事だ。しかし、夏休みの部活を満喫している姉はもちろん居ない。今のうちに姉の眉毛のことを言いつけてやろうかと思った。父は虫のいどころが悪いと、何かにつけて怒る癖があるのだ。

でもやめておいた。考えてみれば、何も変わっていないのだ。眉毛を剃ったからといって一日で不良少女に変わるわけではないのだから、わざわざ眉毛のことをとりあげなくても良いような気がした。だから、やめた。夏休みで、羽目をはずしてみたかったのかもしれない。学校で流行っているのかもしれない。どっちにしろ、姉はもう高校生なのだから心配する必要もない。放っておこう。

こうして、誰にも悟られないまま終わった。歴史には残らないけど、私の歴史に名を残すことになるだろう一連の事件に「まゆげ事件」と名付けた。歴史の中で小規模な戦さのことを事件と言うらしい。まゆげ事件発端の姉から聞いたので確かだろう。

この文を姉に見られたら困るので、机の片隅に隠しておこうと思う。大人になったら読み返して笑いとばしてやるつもりだ。それが、中学三年生の私にとっての救いになると思うから。

《評》

ある日、高三の姉さんが眉毛を剃ったことを「事件」と名付けたところもおもしろいですが、文章にも構えたところがなく、姉さんの性格さえわかるような書き方ですばらしいと思います。思春期から青春期に移ろうとする人の心の中が読み取れて、「素適な姉妹」だと感じました。

見落とせないのは「事件」というものの意味を教えてくれたのが姉さんだったという部分で、これがはっきりしたことでこの文章の中身が濃くなったようです。二人とも大人になるのがたのしみですね。

松永　伍一

優秀賞（福岡県教育委員会賞）

鬼女マリア

早稲田大学教育学部　三年　田中　綾乃

「え！　あんた今からバンニップ峠を越えるって？」
「ああ。今夜中に峠を越えて、リートルード協会まで行かなきゃならないんだ」
　山あいの湖畔のカフェで、若者と茶店のおばばが話している。
「やめとけやめとけ。今夜はここの奥部屋を貸してやるから、そこに泊まってった方がええ。あの峠にゃ、鬼女が出るんだ。ほんとに出るんだってば。明日遠回りして行けばええが」
「ありがと、おばば。だけど、少しでも早く着いておきたいから」
　麻袋を背に担ぎ、勢いよく立ち上がる若者を、おばばはため息をつきながら見送った。
「まだ若いのに・・・かわいそうなこった・・・」

　カフェを後にすると、不思議なくらいすぐに日は暮れ、暗闇がぬらぬらと若者の周りをはりつくようにおおい始めた。
〝やっぱりおばばの言う通りにしときゃよかったかな。なんとも、いやぁな雰囲気だ〟
　若者が少しばかり後悔し始めた時、山道の脇にころがった大岩の横に、人影がぼう・・・っと浮かび上がった。
「そ、そこにだれかいるのか？」
　おそるおそる消え入りそうな声で尋ねてみると、くるりと振り向いたのは美しい女だった。透き通るような白肌に赤い紅、漆黒の長い黒髪の上から、ふうわりとピンク色の薄衣をはおって、うずくまっている。
「なんだ、女か・・・」
「はい。靴のかかとが折れ、足をくじいて動けなくなってしまいました」
　女は小首をかしげ、本当に困ったといいたげな表情で若者を見上げた。
「どこまで行くつもりなんだい？」
「この峠を越えたメザレ村まで、ちょっと所用で」
若者の顔がふっとゆるむ。
「それならおれと行き先は同じだ。じゃ、おぶって連れてってやるよ」
　そう言って、女をおんぶしてやろうとした途端、暗がりに足下をとられ、ぺしゃんとつぶれるように転んでしまった。
「あいたあ！　おれも足くじいちゃった」
　・・・こうして、二人して誰か通るまで待っていなければならなくなった。
　美しい女は、心の中で舌打ちをしながらつぶやく。
〝こんなはずではなかったのに。こいつ、どうしてくれよう。いつ殺しゃあいいんだか〟
　横目でうっとおしげに眺めると、若者はにこにこしながら、感心した様子で話しかけてきた。
「君ってば、すごいね」
「え？　な、なにが？　なんで？」
　思いもよらない言葉に女があたふたすると、
「だって、この峠は鬼が出るって話だろ？　男のおれでさえ相当おっかなかったのに、君は女一人で、よくまあこの峠をこんな夜に越える気になったね」
「あ、ああ、そのこと？」
女は、曖昧にとってつけたような笑顔で、
「だって、わたしがここを通ったのは昼間だったから。なんも怖くはなかったわ。足くじいた時は、まだお日様も高かったし」
と答える。
「あ～あ！そっかそっか。なるほどね」
あははと脳天気に笑う若者に、うんざりしながら女は、
〝うるさい男だね。もしかして役人の回し者じゃないのか？　早くやってしまわねば〟
と策略を巡らせていると、またしても若者が話しかけてきた。
「あのさ」

女が地獄の悪魔の顔から、さっといかにも弱々しい女の顔に戻り、
「え、なあに？」
と振り向くと、若者は少し照れくさそうに、
「…君、きれいだね」
と言うではないか。
「うん。きれいだよ、君。本当にきれいだ。おれは、この峠を越えたメザレ村にある教会にマリア像を彫りに行く彫りもの師だけど、よければ君を彫らせてくれないか？　君の顔なら、きっと優しいマリア様が彫れる。きれいで慈悲深いマリア様が彫れるに違いないよ」
「…え……っ？」
女は思わず言葉を失い、あっけにとられて若者の目を見つめた。
「うん、間違いない。村の誰もがみいんな、思わずほうっと涙を流す、そんな優しいマリア様が彫れるだろうなぁ」
そう言うと、眠気に誘われたのか、若者はそのまま、うとうとと舟をこぎはじめた。

〝…このわたしがマリア様だって？　この男はなにしゃべってるんだろ？〟
〝このわたしがマリア様？　あの日照りの夏の日、生活のため生まれた子供を、狼の群れる森に置き去りにした…。旦那は、欲深い村長にだまされ殺された。わたしはその村長を刺して、家に火を放った…〟
女の頭に、過去が走馬燈のようによみがえってくる。
〝みんなが貧しくて、みんなが狂ってた。あれからずっと、わたしは血の海の中にいる。わたし独り、こうしておめおめと生きて、人を殺して、ものを盗って、金を盗って…〟
頭ががんがんと割れそうに響く。
〝ああ、この手で愛しいわが子を、捨てて殺した。かけがえのない命を粗末にした。このわたしをマリア様だって。こんなわたしがマリア様だって……〟
木々の隙間から月の光が、さらさらと銀の粉をふりそそぎ、若者と女を包む。
さらさら、さらさら…。なにかを溶かし、くずすように。
〝どうかわたしに優しい声をかけないで。優しい目を向けないで。わたしは鬼。真っ赤な血に染まった手を持つ、醜い鬼女だもの〟
鬼女は、声をころして泣いた。
〝帰りたい…帰りたい…旦那とあの子と三人そろったあの日に戻って償いたい。変わりたい…変わりたい…心に刺さったままの錆びた刃を抜いて真っ白な自分を取り戻したい。わたしのこの命とひきかえにしても…〟
夜更けの森の中、季節遅れのリラの花は、ほろほろほろほろと静かに散って、雪のように女の上に降り積もり、ふうわりと風に溶けていく。
若者は、ゆらめく淡い意識の中で、これはなんてきれいな夢なんだろう…と、なんだかとっても幸せな気持ちになった。

朝、目が覚めるとそこはリートルード教会の前だった。
あれはもしかして鬼だったんだろうか、と何度若者が考えても、どうもはっきりしない。
でも、だとしたらなんとも美しい鬼女だったなあ…と、彫りあがったマリア像を見ながら思い出すたび、若者はすこおし、心がぽっと熱くなる思いがしたという。
あれから、バンニップ峠の鬼女の話は、とんと聞かない。

《評》
ヨーロッパに根付いている民話や伝説を読んでいるような錯覚にとらわれました。過不足のない手慣れた表現です。中身も暗くないし、表現の技巧も身に付けてきていますが、惜しむらくは、「なぜ、いまこういうテーマで書かねばならないか」がこちらに伝わってこないのです。「大賞」をのがしたのもそこに原因があります。
私ならば、リートルード教会で偶然にマリア像を見てそれにまつわる伝説の謎に迫っていくという構成にします。これからの精進を期待しています。
松永　伍一

優秀賞（台東区教育委員会社賞）

本当の心の成長

台東区立忍岡中学校　三年　山口　佳余

私たち中学校三年生は十五年間成長してきました。それと同時に『心』も成長してきました。記憶がある所まで思い出すと、自分の事ながらもあの頃は無邪気で可愛い気があった、と思ってしまいます。そして、誰とでも仲良く、壁を作らずに接していたと思います。そしていじめという行為は全くなかったです。でも、私の周りで誰が嫌い。とかいう『嫌い』という言葉が飛び交うようになりました。これが小学校三年生の頃。小学校に入学し、世界が広がった、又はこれも心の成長なのかもしれませんが、いじめの一歩手前です。小学校四年生では、周りで『仲間はずれ』が自分のクラスで起こっていたのを知り、そしていつも一緒にいた五人の男子の一人が休んだ時、四人がその一人の悪口を言っていてとても驚いたのをよく覚えています。小学校生活の六年間は、身体の成長はもちろん、心の成長、変化を感じました。

中学に入学後、私は同じ小学校の人が居ない中学へ入学しました。小学校の時とは違い友だちが作りにくく、話しかけずらかったです。これも心の成長を感じました。しばらくたち、中学校生活にも慣れた頃、『いじめ』という話を聞くようになりました。三学期頃には、からかって遊んだり、その中には厳しい言葉も飛び交ったりしてました。中二では、「中一の時いじめられてた。」とかも聞いたり、三学期にはクラス中でのからかいにより、とても苦しんでいた人が居ました。でも担任の先生が、絶対いけないことだ。そういう空気を作るのも問題がある。と話してくれたのを私はよく覚えています。

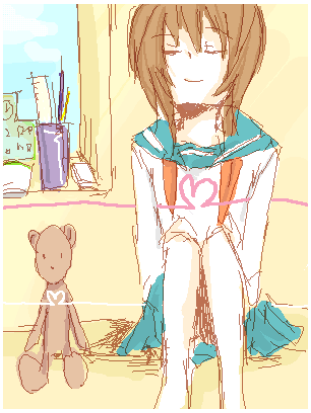
今でもまだ誰が嫌いだ。と聞きます。いつも仲良くしている子の事を言う人も居ます。ある子から一人の子の悪口をメールでずっと話してたんだ。となんの悪気もないように言われたときは唖然としました。堂々となぜこんな事言えるのだろうかと思い今まで言えなかった『やめなよ。』がその時言えました。中三になって私は周りが陰口言っていても一緒になって言わず、止められるようになりました。こんなことを書いていた私も、以前は陰口を友だちと言っていたこともあります。でも今は言わないようになりました。これも心の成長だと思います。今は心の成長にともない人の気持ちを考えられるようになっている気がします。なので、心の成長にともない、人には苦手な人はもちろん居るだろうけど、人の悪口ではなく良い所を言えるように、心に壁をたてるのではなく、それを壊し、広い視野で良い所を見ていけるようにしたいです。

《評》

「いじめ」の問題がこのところ大きくクローズアップされています。そのことを考えながらあなたの文を読みました。そこで「いじめ」を悪いことだと思わない人たちのことも考えました。

あなたは自分の過去のことを正直に語りながら、まわりの「いじめ」の問題に目を向けています。そして、悪いことをしたと反省できるようになることを「心の成長」と見ていて、読みながら納得ができました。とてもまじめな文章でした。こういう気持ちと意志をもってこれからの人生を歩んでください。

松永　伍一



優秀賞（福岡市教育委員会賞）

大空高く

福岡県小郡市立三国中学校　三年　大坪　尚美

晴れ渡った空の下、ひまわりの大きな葉のかげからひょっこり顔を出したのは、赤い小さな体に七つの黒い星が光る、てんとう虫。

お日様の暖かい日差しで目を覚まし、茎をつたって、てっぺんの黄色いお庭に登る。

「お日様、おはよう。ひまわりさん、おはよう。今日もいい天気だなぁ。」

彼はゆっくりと首をまわして、辺りを見わたした。前、後ろ、右、左、どこを見ても、ひまわりだらけ。そう、ここはひまわり畑の真ん中だ。

「うーん。いい気持ち。」

大きく背伸びして、小さな羽を広げた。本当なら、ここでブーンと空高く飛び立つところだけど、彼はそのままじっとしていて動かない。

実は、彼は飛べないのだ。

仲間のてんとう虫は、羽を広げ、風に乗ってピョンと跳び上がるだけで、ふわりと飛び立ち、大空を自由に飛びまわることができる。

ところが、彼は思いきって羽を広げても、「落っこちたらどうしよう」と思うと怖くて怖くて、とても跳び上がれない。

だから、いじわるなカブト虫は、

「君はてんとう虫なのに、飛べないのかい？　それじゃ、なぁんにもできないんだ。だって、オレのような大きなつのも、バッタ君のようなジャンプの上手な足も、ちょうちょさんのようなかわいらしい羽も、かまきりどんのような立派なかまも、何ももってない。あるのは、そのちっぽけな羽だけ。それも飛べないんじゃ、役立たずだ。」

と、からかってはケラケラ笑う。バッタもちょうちょもかまきりも一緒になって、いつまでも笑う。

それを聴くと、彼は悔しくて悲しくて、思わずポロリと涙をこぼす。だけど、やっぱり何にもできなくて、せっかく広げた羽をしょんぼりとじてしまうのだ。

今日も、羽は広げても、そのままじっとしていて飛び立たない。

そんな彼の頭の上に、優しいお日様の光がさんさんとふりそそぐ。

「悔しくないのかい？」

突然、声をかけられた。驚いた彼が、急いで辺りを見回すと、大きなサクラの木の太い幹に一匹のアブラゼミがとまっていて、こちらをじっと見つめていた。

「カブト虫君たちに、さんざんからかわれて、悔しいとは思わないのかい？」

「そりゃ悔しいですよ。でもカブト虫さんたちの言うとおりなんです。ボクは羽をもっているのに、ちっとも飛べないんです。からかわれても仕方ないですよ。」

「そうやって、仕方ないってあきらめるのがいけないんじゃないかな。こっちへおいで。私と一緒に練習しよう。」

そんなことを言われたのは初めてで、だから彼はとっても嬉しくなって、大急ぎでサクラの木に登った。

「まず、もう一度羽を広げてごらん。」

言われるままに、彼は羽を広げた。

「下を向いてはいけないよ。落っこちたらどうしようって怖くなるからね。なるべく高く、遠くを見てごらん。」

顔を上げた彼の目に、元気な空色がとびこんできた。

（なるべく高く、遠く…）

「そうそう。羽は、もっと思いっきり広げるんだ。思いっきり、だよ。」

「思いっきり？」

「そうさ。」

セミの言葉を心の中で何度も繰り返す。

（思いっきり……高く、遠く……）

彼はギュッと目をつぶった。

「そして勢いよくジャンプ！」

セミの声が届いた瞬間、パッと目をひらいて、空に向けジャンプ！

（思いっきり……高く、遠く……！）
ふわりと風に乗った。体は軽く、羽は勢いよく上下する。
「やった、やったぞ！　ボクは飛べたんだ！」
カーブをえがき、宙返りして急降下。それからもう一度上昇して、ゆっくり前進。どんな動きも思いのままだ。
（お日様ってこんなに近くあったっけ。空はこんなに広いんだ。）
「やろうと思えば、誰だって、何だってできるんだ。大切なのは、その気持ちだよ。」
セミの声が遠くから響いた。
てんとう虫はもっと高く、より遠くへ、ぐんぐん飛び立っていった。
空はどこまでも広く、青かった。

《評》
大へん良くまとまった文章です。広々としたひまわり畑が見えます。主人公のてんとう虫がいて、いじわるのカブト虫と、やさしいアブラゼミがいます。この三角関係からこのお話がくり広げられるのです。勇気のなかったてんとう虫が、最後はアブラゼミの親切とアドバイスで大空高く跳び上がることができる「サクセスストーリー」ですね。その骨組みがしっかりしていますから、読む側も安心できます。私は、読んでいるうちに、いじめにあった子どもが、友情に支えられて自立していく話と重ね合わせていました。

松永　伍一

優秀賞（柳川市長賞）

ブルースカイ

柳川市立昭代中学校　一年　江上　明里

ス――――
勉強している私の部屋の窓から風が入ってくる。きれいなレースのカーテンがゆれている。
「風もたいくつだからカーテンと遊んでいるのかな」
私がそう思ったとき、フフフというかわいい声がしてきれいな女の子が窓から飛び込んできた。そのときの私はおどろくでも、こわがるでもなくて、ちょっと不思議な気持ちでその女の子をながめた。
不思議な女の子だった。髪は少し長いくらい。今色のまざったうすい茶色でそのまま背中に流していた。着ているものはすけてしまいそうなほどうすい白のワンピース。くりっとして気の強そうな瞳を私にむけてその子は、
「あなたが、アカリちゃん？」
といきなり私に聞いた。
これには私もびっくりして、
「えっ？」
と聞き返した。女の子はじれったそうに
「そうなんでしょ」
とまた聞いた。私はおどろきながらもその子の質問に答えた。
「ええ、そうよ、だけど」
「よしっ、ならあたしと来て」
私の言葉をさえぎって女の子は言った。
「あたしの名前はスーよ。じぁ、しっかりつかまっててね。ちょっとゆれるから。あっ、忘れてた。ゴホン。ようこそいらっしゃいましたお客さま。どうぞ空の旅をお楽しみ下さい」

「えっちょっとまって。どういうことなの」
私がスーに聞こうとした時、飛行機に乗った時のように振動がはじまった。
スーはあれっ？という顔をする。
「聞いてなかった？　アカリちゃん。あっ、でも今はだめ。後で説明するから」
「えっ？」
「ほら、口閉じて」
スーが言ったとおり口をしめると、振動していた地面から遠ざかるような感覚がして・・・
私は空を飛んでいた！
私は口をポカンとあけてしまった。そんな変な顔の私のそばにスーはよってくると、フフッと笑い、
「ほら、口を閉じなさい」
と言った。私が口を閉じるとスーは
「私の兄から何も聞かなかった？」
と私に聞いた。スーのお兄さんがどんな人か知らなかったけれど、とにかく私は首をふった。
「まったく。兄さんたらまた仕事さぼって」
ぶつぶつと兄にむかって文句を言うと、スーは説明をはじめた。
「うーん、そうだな。まずは・・・おめでとうございます。あなたは六十二億人の中からえらばれました。この六十二億人の中から選ばれるっていうのは、私は空の旅っていう旅行会社に勤めているんだけど、毎年、人間界から一人だけえらんで空の旅を体験してもらうの。いいきかくでしょ。」
「・・・・・」
「どうしたの？」
「スーちゃん、今あなた、人間界って言ったわよね？」
「そうだけど？」
「・・・・・。人間界じゃないなら、あなたどこに住んでるの？」
「空の上よ」
スーはすました顔で言う。
「あなたは知らないかもしれないけど、私たちは空に住んでいるの。だから空の人と書いて空人って言うの。」
「・・・そんな話、聞いたことないわ」
「あたり前よ。人間に知られないようにかくれてるんだもの」
私はこれだけしんじられないようなことが起こったのでもう何を言われてもおどろかないと心に決めていたのに、またすごくおどろいた。ロケットが発明されて宇宙に行けるようになり、宇宙旅行も夢ではなくなった現代に空人なんて人たちが住んでいるなんて。
おどろいている私をまたスーはフフッと笑うと説明を続けた。
「それで、えらばれたあなたには、空を飛んでもらうんだけど・・・。困ったなあ。私、兄さんから行き先聞いてないのよ。兄さん私に仕事おしつけて、説明もせずにどっかに飛んでっちゃったから・・・。あ、そーだ。ねぇ、アカリちゃん、行きたいところってない？　今日は特別。好きなところにつれていってあげる。ちょっと兄さんを困らせたっていいでしょ」
あの気の強そうな目で私をのぞき込むようにしてスーは聞いた。そう言われて考えこんだ私は、たった今聞いたあの国を言ってみた。
「ねえ、スーちゃん、あなたの国へつれてって」
「えっ？　あたしの国？」
「うん。」
「・・・いいよ。じゃ、目つぶって。アカリちゃんが気持ち悪くなっちゃうと困るし」
スーの口調が少し気になったが、私は素直に目を閉じた。スーがとなりでなにかやっているのか、カチャカチャ音がする。
「いいわよアカリちゃん。期待してたのとはちがうかもしれないけど」
目をあけた私のところに飛びこんできたのは灰色の世界だった。ぼう然としている私を見てスーは
「やっぱ、つれてこないほうがよかったかな」
と心配そうにいった。私はあわてて、
「そんなことないよ。スーちゃん。・・・でもどうしてこの国、全部灰色なの」
「うーんと・・・。このところ、地球の温度が高くなってきてるのを知ってる？」
「うん」

「じゃあ、オゾン層がうすくなってきてるのも知ってるわよね？」
「ええ」
「それで、太陽の光が直接私たちの国へふりそそぐことになったの。太陽の光には直接あびると体に悪い物質とかが入ってるから、私たちはそれをあびないように国じゅうをこの灰色のまくでおおったの。だけど・・・。野菜は育たないし、毎日みんなカリカリしてるの。オゾン層をあつくしたり、地球の温度さげたり、とかそういう研究は、大急ぎで進められてるんだけどまだ解決できなくて」
スーの顔はくやしさでいっぱいだった。
スーの顔を見ていると私は、何か自分にもできることがあるんじゃないかと思えてきた。これまでは、地球温暖化なんてあまり自分に関係ないと思っていたけれど。
「ねえ、スーちゃん。私もそれに協力するよ」
「え？」
「だってこれ、地球全体の問題だよ。スーちゃんの世界だけじゃできないと思うの。そりゃあ私の世界でもこういう研究はされているけど、ふつうの人ってあんまり関心がないの。だからさ、私も協力する」
「ほんと！　人間と空人が協力したらきっともっとはやく解決できるよね」
「うん、いっしょにがんばろう」

スーとあの約束をしてから一カ月。夏休みに入った。約束を守るため、私は昼も夜も考えた。その結果、私はお話として夏休みの作文に書くことにした。
「一人でも多くの人が協力してくれるといい。」
そう思いながら。

《評》
とてもよくできたお話です。窓から入ってきた風を「涼しい」と感じるのはあたりまえのことですが、それを一人の人格としてとらえたのが、とてもおもしろいと思います。
の空想の人物（スーちゃん）と作者とが連れだって大空へ旅をする話ですが、それだけではありません。そこまでだったら空想好きの人なら誰でも思いつきます。あなたは自分の生きている地球が温暖化によって悩んでいることに目をつけました。そ
だから、これは世の中の「いま」に鋭く切り込んだ「批評」になっていて光を放っています。（スーちゃん）との会話がもう少し工夫されると、もっとよくなります。

松永　伍一

優秀賞（柳川市議会議長賞）

「沖縄」を見た

柳川市立蒲池中学校　三年　北原　いくみ

私は二年生の時に修学旅行で沖縄へ行きました。沖縄の街並みは、福岡とまったく違っていて、独特な家の造りや、田があまりなくてさとうきび畑が多いことにまず驚きました。でも本土で米軍基地の横を通った時にその大きさにもっと驚きました。ニュースなどで見たことはあったけれど、本当に大きくてびっくりしました。

沖縄に来る前に、学校で、沖縄の痛々しい「地上戦」のことは学習していました。だけど実際に来てみると、とても海が澄んでいて美しく、約六十年前に、この美しい沖縄が戦場だったなんてなかなか実感できませんでした。でもその日に、沢山の戦争の資料館などを見学したら、私と同じくらいの年の女学生が、いっぱい犠牲になっていて、とても悲しくなりました。他にも幼い子供や、兵の人以外にも沢山の人が愛する本土を犠牲にして戦争の餌食になっていたことが記されていました。私たちは壕にも行きました。中に入るととても暑く、何よりも懐中電灯の光が無ければ、何も見えない位真っ暗でした。その壕では沢山の人が避難していたそうです。地面などには人骨のあともあって、今では実感が薄れてきているけど、確かに約六十年前、ここに「戦場」があったと物語っていました。

その日に、ひめゆり学徒隊として沖縄の地上戦を経験した方の話を聞きました。その方の話はとても痛々しくて今の私たちにはとても信じられないようなことばかりでした。その人は、女学生として兵士の治療をしていたそうです。ほとんど眠れず、風呂にも入れず、食料もほとんどなく。治療するといってもきれいな包帯もありません。毎日いろんな人が死んでいくのを見ていたそうです。その人の友だちも、沢山亡くなってしまったそうです。　かけがえのない人を失ってしまう悲しみは、とても大きくて消えません。戦争はそのような悲しみを次々とつくります。生きる人間はみんな、夢を持ってその為に努力して輝く権利を持っていると思います。その権利を戦争は一瞬にして奪います。それは決して許されるべきことでは無いと思います。

沖縄の海は、とてもきれいでした。そのきれいな海でも沢山の人が亡くなっています。その海は輝いていました。沢山の命が、海に還って行ったのかもしれない、そう思わせるように、きらきらと、眩い光を放って。

《評》

持って廻ったような書き方ではなく、見た通り感じた通りを素直に書いているので、私は良い後味を覚えました。

あなたは旅行の前に「沖縄」のことを学習していたけど想像していた以上に海が美しかったと記しています。そして「この美しい沖縄で約六十年前に地上戦があったことなど実感できなかった」と書いて、歴史のうねりを心に留めたようです。

いろいろな人から当時の様子を聴いて感動し、結びを「沢山の命が、海に還って行ったのかもしれない、そう思わせるように、きらきらと、眩い光を放って」と締めているのは印象的です。

松永　伍一

優秀賞（柳川市教育委員会賞）

生きているということ

福岡県久留米市立城島中学校　一年　西村　仁菜

わたしが「生きているということ」について深く考えるようになったのは、小学六年生のころでした。

六年のときの国語の授業で、谷川俊太郎さんの「生きる」という詩を読んで、生きているということはどういうことなのか、と思うようになりました。生きるという詩には、生きていなければ出来ないことが具体的に書いてありました。それは生きるということを一言で説明するのは難しいからだと思います。この結論にたどり着いたときはとても感動しました。

「今生きているということはどういうことですか。」と質問されたら、たくさんの答えが出てくると思います。笑えるということ、お腹がすくということ、時が流れるということなど、答えはさまざまです。しかしこの質問の答えに間違いなどありません。思いつくことすべてが正解なのです。そしてこの質問の答えのように、一人一人生き方もちがいます。一人一人個性があるから質問の答えや、生き方などがちがうのです。

「生きる」の詩に関係する言葉、命、生きる、生き方についてよく考えてみました。わたしにとっての命は、生きるために必要なもの、生きるとは命があるからできること、生き方とは、一人一人ちがって楽しいことです。そしてこれをすべてまとめた詩が「生きる」だと思います。生きているから楽しい、生きているからおもしろい、そんな思いがこめられている詩です。

わたしが生きているということを一言でまとめると、「今ここに居るということ。」です。それは谷川俊太郎さんの「生きる」の詩に出会ったからたどりついた結論でもあり、ずっと探し続けてきた答えでもあるのです。これからも、答えを探し求めて、明るく楽しく生きていきたいです。

《評》

素直な、気持ちが澄んでくるような文章でした。

詩人の谷川俊太郎さんは私とほぼ同年で、友だちです。人生をいつも前向きで生きている詩人です。その人の「生きる」という詩があなたの心を刺激したということも、あなたにはとても有意義なことでした。そして、あなたは「今ここに居るということ」を「生きる」ということの結論といえるようになったのですから、あなたは幸せ者です。本気で探し物をしていると、堂々たる答えに出会えるのだと、この文章は教えてくれました。

松永　伍一

優秀賞（柳川文化協会会長賞）

責任と達成感と喜び

福岡市立元岡中学校　三年　中村　友香

私は中学二年の職場体験学習で幼稚園に行きました。幼稚園を選んだ理由は将来幼稚園の先生になりたいからということではなく、おもしろそうだという気持ちからでした。

五人で同じ幼稚園に行きましたが、一人ずつクラスを担当することになりました。私は年少クラスの担当になりました。年少クラスは一番小さいため、一番手がかかります。最初、一通りの仕事内容を聞かされた時、

「こんなに仕事があるの。」

と、とても驚きました。なぜなら私が覚えているのは幼稚園の先生は、ただ一緒に遊んだという記憶しかなかったからです。

さて、職場体験学習の初日、早速担当クラスの教室に入りました。すると園児が私の顔を見つめ始めました。そのクラスの先生からまず私の紹介をしてもらって、次に自己紹介をすることになりました。いつもよりもゆっくりはっきりと短めに言いました。とても緊張したけれど、園児が先生に言われたわけでもなく拍手をしてくれたのでうれしかったです。園長先生が、

「園児と遊ぶ事が一番の仕事です。」

と言ってくださっていたので、本当に楽しく遊ぼうと思いました。しかし、遊ぶ時間になると心では遊ぼうと決めていても遊び方がわかりませんでした。するとある女の子がひざの上に座りました。

「先生、遊んで。」

と言いました。その子と遊んでいるとたくさんの園児が話しかけてくれ、とてもうれしかったです。私は遊んであげたというよりも園児に遊んだもらったように思いました。

外に散歩に行った時は緊張しました。特に車が来た時は飛び出したりしないように注意して園児を見てなければなりません。この日は、私と担任の先生の二人だったけれど、いつもは担任の先生が一人で全てをしているのだと思うと、とても大変だろうなぁと思いました。

体験学習最後の日にはお別れ会をしてもらいました。二日間だけだったのに園児たちから抱きつかれた時は涙が止まりませんでした。

そして園児が帰った後、担任の先生に、

「私はみんながすごくすごく大好きでした。とてもとてもかわいくてしかたがありませんでした。本当にありがとうございました。」

と泣きながら言いました。

今回の職場体験学習で幼稚園の先生という仕事の責任の重さがわかりました。自分のクラスの園児一人一人の一番大切な命を一人で預かっているからです。園児たちの成長を見守り、卒園の日を迎えた時は最高の達成感と喜びを感じるに違いないと思いました。今回の体験から将来どのような仕事についても責任を持ち、責任を果たして、最高の達成感と喜びを味わえるようになりたいと思いました。

《評》

これを読んで、私は「あなたはいい体験をしましたね」と声をかけたくなりました。自分が望んでも、そう簡単に叶うことのない仕事ですから。

職場体験学習にはいろいろな選ばれ方があるでしょう。あなたは自分も幼稚園に通っていたことがあるわけですから、そこがどんなところか想像がつきます。あなたは幼児だった頃の自分と出会ったのです。そうは書いていませんが、私にはそう見えました。だから「だもらった」という言葉が書けたのです。

松永　伍一

優秀賞（柳川文化協会会長賞）

ボンジュール

福岡県みやま市立江浦小学校　六年　田中　真帆

七月十七日、いよいよ明日私の家に、ニューカレドニアという国からナタリーという女の子がやってくる。ニューカレドニアという国を調べたところオーストラリアの付近に位置しフランスの領土だそうだ。様々な国の人たちが暮らしている。海がとてもキレイで「天国に一番近い島」とも呼ばれている島だ。どんな子がくるのか胸がドキドキする。

そもそも、この活動は「アジア太平洋会議」の活動の一環で毎年、色々な国から日本にホームステイにやってくる。

そして七月十八日、とうとうナタリーがやってきた。初めは、お互いに緊張していた。私はどうにか会話しようと思い、身ぶり手ぶりで伝えた。心が通じあったとまではいかないが少し心の距離が縮まったと思う。

「ボンジュール」

という言葉から一日が始まった。この日は、私が通っている学校に登校する日だ。行く前は、ワクワクしていたけれど、いざ着くと二人とも固まってしまった。自己紹介の時、彼女の瞳には涙があふれていた。（そうだよね。十一才でお父さんお母さんと離れて、しかも知らない国に来るなんて。）と私は思った。それから元気がなくなった。どうにか一緒に笑う事ができないか考えたけれど私には、何もできなかった。

私たちが話しかけた時の事だ。

「ナタリー、一緒に遊ぼう。」

「うん。」と言ってくれた。

それから日本の遊びをたくさん教えた。お手玉、けん玉、おはじき、折り紙。思ったより上達が早く、その時は家族みんなでおどろいた。

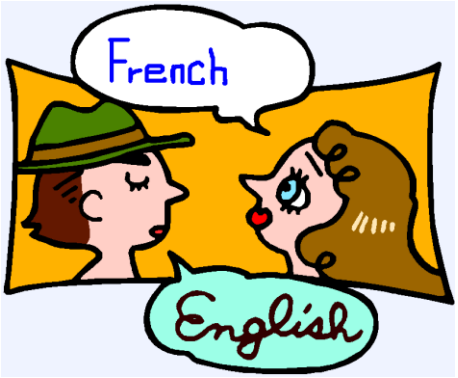
二十一日、アジアフェスティバル。二十二日そうめん流し。二十三日買い物。二十四日動物園。

そして、お別れの日だ。私たちは、家族で空港まで見送りに行った。

「バイバイ、また会う日まで。」

出会った時の緊張感はなく笑顔で見送った。

家に着いてから、ナタリーからもらった大切なものに気付いた。それは、言葉が通じなくても、友だちになろう、分かり合おうという気持ちがあれば、なんとなく心は通じるということ。ナタリーと本当に心が通じあったかというと、正直分からないが、もしまた今度こういう機会があれば、今回以上に分かり合える自信はついた。そして、これからの友だちや家族との関係につながっていくことにまちがいはない。そして、何よりも私の夢である言葉や文化のかべをこえて世界の人たちとの心のかけ橋になるということにまちがいはない。



《評》

ニューカレドニアからホームステイでやってきた十一歳の女の子ナタリーと出会い、遊んで数日間を過ごした体験が、淡々とよく書けています。

おたがいに言葉が通じないのに、精いっぱい努力していく姿が見えてくるようで、読み終えて私はちょっとばかり幸福な感じを抱きました。

人の心と心が虹のように美しくつながっていくことが求められている現代です。あなたの好意と愛情はきっとナタリーに通じたし、きっと彼女の人生にとっての宝物になるでしょう。

松永　伍一

優秀賞（東京浅草ロータリークラブ会長賞）

言葉を超えるもの

東京都文京区立第六中学校　二年　八幡　侑磨

言葉はいつも私の隣にいて、いつも支えてくれる大切なものです。何かに悩んでいるときは助言をくれて励ましてくれます。しかし言葉は使う人によってうそになり、相手を傷つけます。だから私は言葉がなくても通じ合う空間が好きです。

私はバスケ部に所属しています。この日は試合形式の練習をしていました。私はレギュラーではないので、試合にはあまり慣れていません。私のチームはレギュラーの人は一人もいませんでした。それでも自分なりに自分のできることを頑張っていたつもりです。それでも見ているほうからすればもどかしかったのでしょう。相手チームからアドバイスを受けました。それは向こうにしたら悪気のあってのことではありません。でも、私たちはその時とても見下された気分でした。こっちは頑張っているのに、相手チームは助言するほど余裕なんだ、と思ってしまいました。自分たちの弱さが悔しくて泣いていると、一人の子が私を抱きしめてくれました。特に何かしゃべるわけではなかったのですが、その気持ちが嬉しくて私はとても温かい気持ちになれました。

その後、ＯＢの方が色々と話を聞いてくれて、アドバイスをしてくれました。自分の気持ちを分かってもらえて、もちろん嬉しかったです。それより、私はその友だちが何も話していないのに理解してくれたことが嬉しくて仕方ありませんでした。

こういうことは人間だけにかぎらず、動物との間にもいえることです。動物はしゃべれませんが、こちらが話しかけるとそれに答えるように反応してくれます。時には自分からすりよってくれることもあります。ただの気まぐれだったのかもしれませんが、その行動にうそはありません。

言葉がなければ通じないものもあります。けれど、言葉がないからこそ伝わるものもあると私は思います。そこには本当の友情だとか信頼があるからこそのものだと私は信じています。

私は友達や動物たちから温かい気持ちをたくさんもらってきました。これから私も温かい空間を造っていけたらいいなと思います。

《評》

あなたはここで、人間が生きていく上で大切にしなくてはならないことを発見しています。そして「言葉がなくても通じ合う空間が好きです」と言い切れるところまで成長したのです。

これは大きなテーマです。あなたは頭の中でそういう考えをまとめたのではなく、自分の体験から導き出しました。それが大切なことです。その点で筋が一本通っています。言葉によって励まされることもあり、黙っていても行動だけで相手に通じることもあるのです。そのことをあなたはしっかりと伝えてくれました。

松永　伍一

優秀賞（東京商工会議所台東支部会長賞）

フジ子・ヘミング運命の力

台東区立浅草小学校　六年　清水　りさ

私は、フジ子・ヘミングの人生を書いた本を読んで、「そうだなぁ。」と思える所と、逆に、「そんなにしなくても。」と思う所と両方ありました。面白くて、本ぎらいな私でものめりこんで最後まで一気に読み終える事ができました。

私はピアノを習っています。私も、フジ子と同じように、時々いやいやながらピアノの練習をする事があります。でも、そうするとその気持ちがすべて音に出てしまいます。だから私はなるべく気持ちをこめてていねいにひくように心がけています。

フジ子の人生は、決して平凡なものではありませんでした。売れない画家の父と細々と子どもたちにピアノを教えて収入を得る母の元で育てられたフジ子はたくさんの苦労をします。そして、その経験から色々な事を学びました。「人の言う事をうのみにしないで自分の肉眼でちゃんと見る事。」「人に相談したって仕方がない事が多い。」「正直にやっていれば必ずいい事がある。」などです。

フジ子は、若い時からわずかな仕送りでピアノを学ぶために、外国に留学していました。貧しいので、十分な栄養やかん境が得られず、もう少しという大事な場面でチャンスをつかめず、どん底につき落とされるような経験を何度もしました。そんな時フジ子を救ったのは、自分の好きなものでした。絵を書いたり、動物をかわいがったりしました。又、食費をけずってでもバレエを観にいったりしました。「何があっても決してあきらめず、なげ出さないこと。」フジ子は他の人よりも大変な苦労をしていたにもかかわらず、どんな時でも一生懸命に生きていた。これは、何よりもすごいことです。でもフジ子ががんばれたのは周りの人たちやフジ子が大切に思っている大好きな物や動物たちがいたからこそだと思います。私もフジ子のように周りの人を大切にし、多くのことに興味をもてるようになりたいです。そして、自分を信じる強い心を持って生きていきたいと思います。

《評》

フジ子・ヘミングさんはすばらしいピアニストです。しかし広く知られるようになってからまだそんなに月日はたっていません。彼女はハーフです。それだけに苦労が多かったようです。彼女の人生がつづられた本をあなたは読んで感動もしたし、疑問も抱いたそうです。

しかし、フジ子さんの信念を持った生き方に魅力を感じ、「人の言う事をうのみにしないで自分の肉眼でちゃんと見る」ことをあなたはつかみ取っています。素直にそのことが書けていました。

松永　伍一

優良賞・佳作・努力賞・特別賞など入賞者一覧

第一回　長谷健賞＝平成十　（一九九八）年度

佳作「ふかふかふとんのだっこ」柳川市立柳河小学校一年　きのした　ゆうや
佳作「こうかんにっき」　東京都町田市立鶴間小学校一年　ひらきまいこ
佳作「田うえ」　三橋町立藤吉小学校二年　こが　みな子
佳作「みやざきの海」　柳川市立昭代第一小学校二年　江上　智恵実
佳作「わたしのおじいちゃん」　瀬高町立南小学校二年　盛田　あさみ
佳作「お父さんのたん生日ケーキ」　柳川市立東宮永小学校三年　森　しんや
佳作「花だんのすいか」　柳川市立昭代第【一】小学校三年　うめざき　ちえ
佳作「すいかさんこんにちは」　柳川市立矢留小学校四年　高椋　草美
佳作キーナムちゃんまた会いましょう」太宰府市立太宰府西小学校四年　久賀　幸恵
佳作「けんびきょうの観さつ」　三橋町立藤吉小学校四年　大橋　広美
佳作「弟の手術」　前原市立長糸小学校五年　西木　望
佳作「ミズクリセイベイ」　柳川市立柳河小学校六年　宮本　大資
佳作「環境問題について」　柳川市立柳南中学校一年　江口　泰教
佳作「絵本作り」　柳川市立昭代中学校一年　堤　喜恵
佳作「朝の散歩」　大牟田市立白光中学校一年　花籠　小百合
佳作「個性」　柳川市立蒲池中学校二年　松　本美雪
佳作「私の宝物」　柳川市立柳南中学校二年　堤　恵美
佳作「自転車と傘にまつわるこわい話」大牟田市立白光中学校二年　松本万葉子
佳作「中三の夏、私のなかの清少納言」　大牟田市立白光中学校三年　杉野　茜
佳作「自然の力はすごい」　柳川市立柳南中学校三年　日山　圭
佳作「大切なもの」　北九州市立足立中学校三年　三好　那由
特別賞「交換日記」　柳川市立柳河小学校六年　野口　朝加
特別賞「すずめ」　長崎市立片淵中学校三年　友内　祐介
特別賞「北京の一日」　北九州市立大蔵小学校四年　日高　健次郎

第二回　長谷健賞＝平成十一（一九九九）年度

佳作「なつやすみのおもいで」福間町立福間南小学校一年　じろうまるゆうき
佳作「はじめてのなつやすみ」　北九州市立千代小学校一年　いずも　げんき
佳作「あめをなめたら」　小郡市立三国小学校二年　大坪　ひろみ
佳作「二年生のおとうさん」　柳川市立柳河小学校二年　木下　ゆうや
佳作「富士登山」　柳川市立東宮永小学校三年　藤吉大樹
佳作「矢部川たんけん」　瀬高町立大江小学校四年　今村　綾希
佳作「一人っ子」　柳川市立昭代第一小学校四年　樽見　望美
佳作「情けない自分」　柳川市立東宮永小学校五年　田嶋　由加里
佳作「戦争と平和」　行橋市立泉小学校六年　片岡　裕美
佳作「外国人と友達になって」　筑紫野市立二日市北小学校六年　福田彩子
佳作「私の大好きなお母さん」　久留米市立城南中学校一年　岡村　知美
佳作「ぼけつと」　大牟田市立歴木中学校一年　鷲崎　清香
佳作「戦争から学んだこと、そして今」柳川市立柳南中学校二年　江口　泰教

第三回　長谷健賞＝平成十二（二〇〇〇）年度

優良賞「わたしのばあちゃん」　久留米市立荒末小学校一年　川島　茜音
優良賞「せきせいいんこのともちゃん」久留米市立篠山小学校一年　ゆげ　ひとみ
優良賞「新しいおうち」　小郡市立三国小学校二年　大坪　なおみ
優良賞「ちょうになったよ」　瀬高町立上庄小学校二年　ひらの　たかひろ
優良賞「夏がくる」　柳川市立東宮永小学校二年　山田　ゆうたろう
優良賞「お米のかんさつ」　三橋町立中山小学校三年　新開　聖也
優良賞「いい試合したよ日本武遭館で」那珂川町立安征南小学校三年　久賀　まみ
優良賞「弟のおふろ」　柳川市立矢留小学校三年　大やぶ　みやび
優良賞「ペン君のはじめてデー」　宗像市立日の里東小学校四年　鶴田　衣里
優良賞「『くろいべんとう』を続んで」　柳川市立東宮永小学校四年　後藤慎一
優良賞「コカリナの海」　東京都台東区立浅互小学校五年　千葉　拓耶
優良賞「ファイト・オーッ先輩がくれた宝もの」那珂川町立安徳南小学校五年　久賀彩紀
優良賞「羊さんはすごい人」　久留米市立篠山小学校五年　弓削　はるな
優良賞「ア・ナ・タ・二・ア・エ・テ・ヨ・カ・タ・デ・ス」

優良賞「原爆の恐ろしさ」　太宰府市立太宰府西小学校六年　久賀幸恵
優良賞「バスの席」　三橋町立藤吉小学校六年　内川　正也
優良賞「私が自慢したいこと」　福岡市立艮尾中学校一年　野崎　加奈
優良賞「将来の夢」　福岡市立友泉中学校一年　堤　智子
優良賞「日蘭交流に参加して」　柳川市立蒲池中学校一年　池上　千幸
優良賞「重み」　水巻町立水巻中単校二年　姫野　麻希
優良賞「夏休み」　福岡市立吉塚中学校二年　岩吉　浩一郎
優良賞「キャベツのせん切り」　柳川市立柳城中学校三年　古賀　つぐみ
優良賞「パラリンピックから学んだこと」　椰川市立柳城中学校三年　原田　喜美香
優良賞「僕の将来と米とぎ」　県立伝習館高等学校一年　松藤　俊輔
優良賞同「十六歳、今思うこと」　県立伝習館高等学校二年　池上　明日香
優良賞同「おじいちゃんの死」　県立伝習館高等学校二年　三小田　より子
優良賞同「ひつじのはなし」　県立伝習館高等学校二年　武藤　桂子
優良賞同「思い出の竈箱」　県立久留米高等学校三年　佐久間　倫子

第四回　長谷健賞＝平成十三（二〇〇一）年度

優良賞「むしのせわ」　瀬高町立土庄小学校一年　江崎隆一郎
優良賞「ぼくんちのねこ」　瀬高町立大江小学校一年　もろばやし　まさのぶ
優良賞「わたしのおとうと」　瀬高町立上庄小学校二年　まつもと　かなえ
優良賞「おかあさんの手」　久留米市立篠山小学校二年　ゆげ　ひとみ
優良賞「平和記念公園としりようかん」　瀬高町立上庄小学校一年　平野　貴弘
優良賞「さかあがりができた」　三橋町藤吉小学校三年　すみ　しょうた
優良賞「お父さんは大学生」　久留米市立荒木小学校四年　川島　早織
優良賞「ファイト　ファザー」　柳川市立矢留小学校　五年　木下　愛幸
優良賞「ホルンでサンバ」　東京都立浅草小学校五年　梁川　笑理
優良賞「戦争』を学んだ沖縄旅行と私の思い　大和町立大和小学校六年　白谷　美和
優良賞「　中国へ行って」　柳川市立矢留小学校六年　斉藤　真利佳
優良賞「水不足について」　東京都足立区立宮城小学校六年　武内　雄一
優良賞「おやじパワー」　柳川市立柳城中学校一年　永石　達郎
優良賞「　本と私」　福岡市立青葉中学校二年　上戸　咲弥
優良賞「おじいちゃんの家でのバイト」　柳川市立蒲池中学技二年　石日　米紀
優良賞「九年越しのマッサージ」　東京都中央区立日本橋中学校二年　山口温子
優良賞「私の町は緑色」　佐賀県嬉野町立嬉野中学校二年　藤川　春菜
優良賞「家族」　伝習館高校一年　角田　佳代子
優良賞「職場訪問から学んだこと」　伝習館高校一年　北原　絵美
優良賞「江津湖釣行日記」　伝習館高校二年　松藤　俊輔
優良賞「たおるの憂うつ」　伝習館高校二年　平川　由布子

第五回　長谷健賞＝平成十四（二〇〇二）年度

優良賞「ふしぎなまち」　三潴町立犬塚小学校一年　なかおか　まな
優良賞「ふたりたび」　三橋町立藤吉小学校一年　たかせ　さとみ
優良賞「ながさきサイクリング」　柳川市立城内小学校一年　さかぐち　りょう
優良賞　「いもうとのねつ」　柳川市立東宮永小学校二年　はら　けいすけ
優良賞「赤ちゃんが来た」　東京都台東区立浅草小学校二年　森上　貴仁
優良賞「天国へ行ったひいばあちゃん」　久留米市立荒木小学校三年　川島　茜音
優良賞「シロアリと家具屋のおじいさん」　北九州市立南小倉小学校三年　田中ゆい
優良賞「やさしい自分になりたいな」　東京都台東区立浅草小学校三年　松本麻実
優良賞「登山初体験」　三橋町立藤吉小学校四年　江口　祐以
優良賞「言葉と心」　大川市立木室小学校　四年　森　まい
優良賞「赤ちゃんの病院」　鹿児島県吾平町下名小学校四年　北之園　あやめ
優良賞「おじいちゃんの足」　和歌山県打田町立田中小学校五年　岩城　智也
優良賞「平和の鐘よなりひびけ」　久留米市立篠山小学校六年　井上万梨子
優良賞　『『経験する。』ということ。」甘木市立十文字中学校一年　田篭　知紘
優良賞　急すぎる別れに・・・・・・」東京都調布市立調布中学校一年　鈴木　麻子
優良賞「これからの生き方について」　福岡市立青葉中学校一年　鮫島　翔
優良賞「私の宝物」　佐賀市立成章中学校一年　武藤　静

優良賞「夏休みになると思い出す」　東京都町田市立鶴川第二中学校一年　仲本　智明
優良賞「お観音さん」　柳川市立柳城中学校一年　山下　葉子
優良賞「祖母の支えになろう」　鹿児島県加世田市立万葉中学校二年　吉田　早織
優良賞「いとこの病気から学んだこと」　柳川市立昭代中学校二年　椛島　麻衣
優良賞「平和への思い」　筑後市立筑後中学校二年　瀬戸　翔太
優良賞「猫と生きた犬」　高知県土佐塾中高等学校二年　前田　このみ
優良賞「神様への祈り」　熊本市立芳野中学校三年　西坂　智葉
優良賞「境界線」　福岡市立花畑中学校三年　帆高　美由紀
優良賞「平和を願って」　筑後市立筑後中学校三年　中村　友理香
優良賞「私の夢は・・・」　柳川市立柳城中学校三年　山田　実穂
優良賞「読書の旅」　伝習館高等学校一年　津村　雄介
優良賞「浮世絵と文化」　伝習館高等学校二年　大坪　俊介
優良賞「若者言葉に見られる現代の問題」　伝習館高等学校二年　石場　千裕

第六回　長谷健賞＝平成十五（二〇〇三）年度

優良賞「しあわせにっき」　前原市立前原小学校一年　さかたまこと
優良賞「ぼく　アフリカにいったよ」　東京都文京区立誠之小学校一年　島貫　真亘
優良賞「おかあさんのつうがくろ」大野城市立大野南小学校一年　いいのゆうせい
優良賞「ハムスターの赤ちゃん」　柳川市立両開小学校二年　つつみりょう太
優良賞「ぎ足のきりん　たいよう」柳川市立昭代第二小学校二年　くろ田まさたか
優良賞「夏休みのぼうけん？」　柳川市立両開小学校二年　園田しゅんすけ
優良賞「地きゅうからのおくり物」　茨城県八千代町立西豊田小学校三年　安部　武人
優良賞「平和が続きますように」　柳川市立城内小学校四年　江崎愛記
優良賞「私の願い」　柳川市立柳河小学校四年　原　愛梨
優良賞「夏休みの自由研究をして」柳川市立昭代第一小学校四年　黒田まさと
優良賞「天草の海」　柳川市立城内小学校四年　時　幸子
優良賞「僕が火星に一番近づいた日 8/22」　茨城県鹿嶋市立鉢形小五年　小山　莉央
優良賞「三日月の輝く夜は」を読んで」　東京都台東区立浅草小学五年　白井　真理奈
優良賞「真夏のひまわり」　茨城県土浦市立都和小学校六年　松崎　彩子
優良賞「夏の憂鬱」　東京都新島村立新島中学校一年　植松孝依
優良賞「折鶴に平和の願いをこめて」　福岡市立博多中学校一年　川原　陽
優良賞「平和への道のり」　柳川市立昭代中学校一年　白谷征也
優良賞「とんびとからすの知恵比べ」　東京都墨田区立本所中学校一年　荒川　美耶子
優良賞「みんなの上から　柳川市立柳南中学校一年　小野歩夢
優良賞「白猫ティルシー～頑固な王子と親友」　東京都調布市立第三中一　佐藤　望冬
優良賞「お母さん　ごめんなさい」東京都調布市立第三中学校一年　吉田なつき
優良賞「ありがとう」　柳川市立柳南中学校一年　田中希誉
優良賞「母と私の約束」　柳川市立柳城中学校二年　龍　育代
優良賞「ボランティア」　東京都町田市立鶴川第二中学校二年　岡田麻理乃
優良賞「達成」　柳川市立蒲池中学校二年　松藤由記子
優良賞「八月九日長崎・原爆投下の日」　東京都町田市立鶴川第二中二年　岡庭　啓太
優良賞「バリアフリー壁のない社会へ」柳川市立柳城中学校二年　高田哲聖
優良賞「今の中学生」　大野城市立大野中学校二年　奥村杏奈
優良賞「夏休みの挑戦」　柳川市立柳城中学校二年　古賀涼子
優良賞「日本の文化と日本の心」　柳川市立柳城中学校三年　志岐幸枝
優良賞「蝉時雨」　柳川市立蒲池中学校三年　金納史佳
優良賞「日本中の子供達に」　福岡市立城南中学校三年　渡司恭子
努力賞「とかげ」　茨城県龍ヶ崎市立松葉小学校四年　黒田祥平
努力賞「おいのりするカマキリ」　東京都杉並区立杉並第六小学校四年　井上　悠希
努力賞「野球の県大会」　茨城県石岡市立石岡小学校五年　熊岡賢人
努力賞「悠遠の夢」　茨城県石下町立石下小学校五年　山中瑛絵

努力賞「楽しいボランティア」茨城県下館市立五所小学校五年　水越未来
努力賞「ぼくはかなしい」茨城県金砂郷町立金郷小学校五年　細谷健太
努力賞「私と盲導犬」東京都府中市立府中第九小学校六年　古村雅大
努力賞「山に行ったこと」東京都大田区立池雪小学校六年　古沢洋介
努力賞「十二歳でも」茨城県日立市立久慈中学校一年　宮本侑季
努力賞「語り部妖精」東京都稲城市立稲城第二中学校一年　飯干海里
努力賞「森の秘密」東京都大田区立馬込中学校一年　渡辺　怜
努力賞「夢日記」茨城県下館市立西中学校一年　小森ちひろ
努力賞「私が今、がんばれる事」東京都調布市立調布中学校二年　篁　晴子
努力賞「ツヨシ君の冒険」東京都練馬区立石神井東中学校二年　下平拓真
努力賞「虹マス釣りの思い出」東京都練馬区立三原台中学校二年　倉持勇人
努力賞「大切なもの」東京都文京区立文林中学校二年　阿部琴美
努力賞「宇宙は一人一人の心の中に」東京都練馬区立中村中学校二年　岡美栄子
努力賞　古都奈良への旅日記」東京都墨田区立両国中学校二年　峯村裕介
努力賞「銀の翼」東京都台東区立御徒町台東中学校三年　高野友理香
努力賞「この夏頑張ったこと」茨城県石岡市立石岡中学校三年　石崎達巳
努力賞「イジワルな世界」東京都目黒区第十一中学校三年　藤巻沙里
努力賞「日記でわかる自分の変化」東京都江東区立南砂中学校三年　窪田　紗織
努力賞「あめ玉」東京都杉並区立高井戸中学校三年　三石　玄
努力賞「甲子園」東京都多摩市立貝取中学校三年　西槙亜紗美
努力賞「リアライズ」東京都大田区立安方中学校三年　山本夏葉
努力賞「私の人生」東京都中野区立第六中学校三年　川中美葵
努力賞「涙が変えた世界」東京都日野市立日野第二中学校三年　田崎杏奈
努力賞「日記」東京都葛飾区立葛美中学校三年　山下　藍

第七回　長谷健賞＝平成十六（二〇〇四）年度

優良賞「精霊舟にのせた思い」福岡市立野間中学校二年　溝上　茜
優良賞「引き出しからのおくり物」福岡県久留米市立荒木中学校一年　川島　早織
優良賞「家族の大切な宝物」福岡県春日市立天神山小学校五年　宮川　茉子
優良賞「つばめのちー」柳川市立昭代中学校一年　梅崎　名透美
優良賞「石炭と人々」柳川市立城内小学校三年　古賀　しょう子
優良賞「なぜ戦争なのか」福岡県城島町立城島中学校三年　永尾　友樹
優良賞「夕暮れ」佐賀県嬉野町在住　一般　井上　美津子
優良賞「宝箱」福岡市立香椎第三中学校二年　塩見　友梨
佳作「わたしのおとうさん」柳川市立両開小学校一年　こみや　れい
佳作「かぞくりょこう」柳川市立両開小学校　一年　うめざき　りょうへい
佳作「れリーとかめきち」柳川市立東宮永小学校　一年　ふじよし　せいか
佳作「かごしまにいく」東京都台東区立浅草小学校一年　はまだ　たくや
佳作「台風がきた」柳川市立両開小学校二年　くら本　りょう平
佳作「おじいちゃんとチャッキー」柳川市立城内小学校二年　ふく山　あいな
佳作「かわいいおとうと」柳川市立柳河小学校二年　上田　たいせい
佳作「ぼくはコックさん」柳川市立両開小学校三年　堤　りょう太
佳作「原ばくドームにいった日」柳川市立城内小学校三年　時　あや子
佳作「おとこどうしのやくそく」柳川市立柳河小学校三年　古賀　武尊
佳作「ぼくだけ」柳川市立東宮永小学校四年　村上　としかず
佳作「ピアノの発表会に向けて」柳川市立昭代第二小学校四年　小宮　茜
佳作「魔女の宅急便2を読んで」東京都台東区立浅草小学校四年　小池　紗恵子
佳作「すてきなハートをありがとう」を読んで　市立東宮永小学校五年　甲斐田　菜摘
佳作「家のひっこし」柳川市立昭代第一小学校五年　古賀　千尋
佳作「王様と春の妖精」那珂川町立岩戸北小学校六年　神埼　洵南
佳作「目指せ！　谷亮子選手」柳川市立東宮永小学校六年　藤吉　美穂
佳作「初めての仕事」柳川市立東宮永小学校六年　山田　安佳里
佳作「本と私」柳川市立柳城中学校一年　吉岡　真梨子
佳作「ぼくの家の犬物語」柳川市立昭代中学校一年　梅崎　充人
佳作「ぶどうの手伝い」柳川市立柳南中学校二年　山田　恵子
佳作「私のおばあちゃん」東京都町田市立鶴川第二中学校二年　山崎　由美子

佳作「夏の体験」　柳川市立柳南中学校三年　古賀　春菜
努力賞「ながの」　板橋区立若木小学校二年　田中　稀瑛（まりえ）
努力賞「二年生の夏休み」　台東区立浅草小学校二年　佐藤　里砂
努力賞「ジキル博士とハイド氏」　台東区立浅草小学校三年　加仁　聖乃
努力賞「牛の、野太郎」荒川区立尾久第六小学校四年　長谷川　尭旭（たかあき）
努力賞「二十四の瞳　作・壷井栄」　台東区立浅草小学校四年　佐藤　佑美
努力賞「すてねこタイガーと家出犬スポット」を読んで　浅草小学校五年　遠藤　裕策
努力賞「ハートボイス」いつか翔べる日を読んで　台東区浅草小学校六年　新山　沙也加
努力賞「命の大切さ」　台東区立浅草小学校六年　村井　麻乃
努力賞「猫の郵便屋さん」　稲城市立稲城第二中学校一年　森　千亜紀
努力賞「童話　試練」　新島村立新島中学校一年　小澤　由佳
努力賞「ちかこの夏休み」　金井市立小金井第一中学校一年　柴崎　美智子
努力賞「おじいちゃんのプレゼント」　町田市立町田第一中学校一年　上山　千翔（ちか）
努力賞「真夏の潮干狩り」　町田市立町田第一中学校一年　大塚　藍
努力賞「ピアノの存在」
町田市立町田第一中学校一年　竹重　翔馬（しょうま）努力賞「初めての乗馬」
努力賞「夢のカタチ」　町田市立町田第一中学校一年　山本　えり
努力賞「私の学校生活」　文京区立第六中学校二年　福田　仁美（ひとみ）
努力賞「青空」　新島村立新島中学校二年　植松　孝依（たかえ）
努力賞「広い空。黒い鳥。」　大田区立馬込中学校二年　東　実也子
努力賞「ＡＬＩＫＥ（似てる）？」　府中市立府中第三中学校二年　斉藤　瑛子
努力賞「東大寺」　町田市立鶴川第二中学校二年　川良　英里
努力賞「京都の旅」　町田市立鶴川第二中学校二年　町田　理恵
努力賞「皆にありがとう」町田市立鶴川第二中学校二年　宮田　真菜（まな）
努力賞「父さんが教えてくれたこと」　調布市立第三中学校二年　吉田　なつき
努力賞「夢物語」　大田区立馬込中学校三年　綱嶋　仁美（さとみ）
努力賞「大切にしたい」　町田市立鶴川第二中学校三年　池田　桃子
努力賞「最後まで言えなかった」町田市立鶴川第二中学校三年川﨑　菜奈世
努力賞「涙」　町田市立鶴川第二中学校三年　堤　和也
努力賞「ピアノの話」　町田市立鶴川第二中学校三年　山口　かおり
努力賞「夢への挑戦」　中野区立第六中学校三年　古後（こご）春佳

第八回　長谷健賞＝平成十七（二〇〇五）年度

優良賞「やさしさ」　柳川市立矢留小学校五年　荒巻　楓
優良賞「夢へ」　柳川市立東宮永小学校六年　山田　みずき
優良賞「花から教わった、たくさんの光」　柳川市立東宮永小学校六年　甲斐田　菜摘
優良賞「白球を追いかけて」　久留米市立荒木小学校六年　川島　茜音
優良賞「職場体験」　柳川市立昭代中学校二年　梅崎　充人
優良賞「生きる」　柳川市立昭代中学校三年　高田　奈津美
佳作「げんばく」　柳川市立両開小学校一年　ひぐち　しんや
佳作「ぐんぐんのびれあさがお」柳川市立東宮永小学校一年やまだ　ななこ
佳作「さんきんこうたいとほのたび」柳川市立矢留小学校一年えぐち　てつや
佳作「あさくさサンバカーニバル」台東区立浅草小学校一年ごとう　かりん
佳作「はじめてのヤマメつり」　柳川市立藤吉小学校二年　海田　光
佳作「わたしの弟」　瀬高町立大江小学校二年　香月　えり
佳作「マレーシアにいったこと」台東区立浅草小学校二年ふじしろ　まさかど
佳作「つんがすずだった」　柳川市立矢留小学校三年　河村幸輝（こうき）
佳作「盲導くんれん不合格の犬の活やく」台東区立浅草小学校四年奥山　魁成
佳作「誕生日について考えたこと」柳川市立東宮永小学校五年　古賀　悟
佳作「組体操の練習」　柳川市立東宮永小学校五年　奥薗　真希
佳作「たった一つのランドセル」柳川市立藤吉小学校六年　島居　桃子
佳作「秘密の牢獄」　東京都新島村立新島中学校一年　前田　裕美
佳作「友達がほしい」　柳川市立昭代中学校一年　田嶋　柚紀
佳作「私が私になれる時」町田市立鶴川第二中学校一年内野桜子（さくらこ）

佳作「戦争」　柳川市立昭代中学校二年　梅崎　智子
佳作「社会を明るくつくる運動」　柳川市立蒲池中学校二年　野口　直人
佳作「がんばれお父さん」　柳川市立蒲池中学校二年　池上　奈摘
佳作「戦後六十年」　柳川市立柳南中学校二年　鳥巣　亜衣
佳作「私の好きなこと・好きな時」町田市立鶴川第二中学校二年岩間　有香
佳作「戦争と向き合う」　柳川市立柳南中学校三年　弟子丸　愛
佳作「自然の世界」　町田市立鶴川第二中学校三年　木田　士文（しもん）
佳作「人には愛を」　町田市立鶴川第二中学校三年　宮田　真菜（まな）
努力賞「あした元気になーれ！」を見て　台東区立松葉小学校二年工藤　菜緒子
努力賞「自しんを持つこと」　台東区立浅草小学校三年　山下　ゆう大
努力賞「楽しかった思い出」　町田市立鶴間小学校四年　平城　愛子
努力賞「夏休みの思い出」　町田市立鶴間小学校四年　福田　仁子
努力賞「字のない葉書」を読んで　台東区立浅草小学校五年　新井　侑太
努力賞「佐賀のがばいばあちゃん」を読んで　台東区立浅草小学校六年早間　陽之
努力賞九州にて　北区立滝野川第五小学校三年　田中　まりえ
努力賞「音楽と物語と自分」　稲城市立稲城第二中学校二年　森　千亜紀
努力賞「みちこの夏休み」小金井市立小金井第一中学校二年　柴﨑　美智子

第九回　長谷健賞＝平成十八（二〇〇六）年度

優良賞　東京都台東区長賞
「私と杏」東京都台東区立浅草小学校五年　高橋　杏奈
優良賞　東京浅草ロータリークラブ会長賞
「つらかったこと、大切なこと」東京都台東区立浅草小学校六年　渡辺　友里加
優良賞　東京都台東区教育委員会賞
「トンジの尺八」　東京都小金井市立小金井第一中学校一年　柴﨑　智香子
優良賞「努力が実る嬉しさ」　柳川市立東宮永小学校六年　岡野　まい
優良賞「努力」柳川市立昭代中学校三年　大曲　未花子（おおまがりみかこ）
優良賞「人間とは・・・」　柳川市立昭代中学校三年　金子　未樹（かねこみき）
佳作「ごならべ」　柳川市立東宮永小学校　一年　いぐち　れいじ
佳作「ラベンダーえん」　柳川市立東宮永小学校一年　とつか　あやみ
佳作「やさしいおねえさんになりたい」東京都台東区立浅草小学校一年　よしえ　まりな
佳作「いちりんしゃにのれるようになりたいな」
東京都台東区立浅草小学校一年　すずき　ひろこ
佳作「田うえをお手つだい」　柳川市立東宮永小学校二年　今村　こころ
佳作「あさのさんぽ」　柳川市立東宮永小学校二年　森　文か
佳作「あげはちょうのふしぎ」　柳川市立東宮永小学校二年　ふじよし　大き
佳作「ごんぎつねを読んで」　東京都台東区立浅草小学校二年　赤坂　ゆうま
佳作「はばたいたモンシロチョウ」柳川市立東宮永小学校三年　古賀　ひろと
佳作「はばたけ」　柳川市立東宮永小学校　三年　ふじよし　せいか
佳作「けんどうでだいじなこと」柳川市立東宮永小学校　三年　園田　奈々
佳作「きゅう食で成長したこと」柳川市立東宮永小学校　三年　山田きょうか
佳作「がんばっていきているやさいのなえ」
長崎県佐世保市立相浦小学校高島分校三年　末永　史佳（ふみか）
佳作「バスケットボールがじょうずになりたい」
東京都台東区立浅草小学校三年　本原　直樹（もとはらなおき）
佳作「母の日のプレゼント」　柳川市立東宮永小学校四年　田嶋　里菜
佳作「お父さんとキャッチボール」柳川市立東宮永小学校四年　尾木　映斗
佳作「わたしの家族」　柳川市立東宮永小学校四年　山口みはる
佳作「最高のプレゼント」　柳川市立東宮永小学校四年　西山　大貴
佳作「じいちゃんからうけつぎたいこと」
長崎県佐世保市立相浦小学校高島分校四年　田口和賢（かずとし）
佳作「大切な人」　柳川市立東宮永小学校五年　藤吉　ちひろ
佳作「成長を見つめて」　東京都町田市立鶴間小学校五年　宮本　春乃
佳作「少年の翼で、中国へ」　柳川市立東宮永小学校六年　古賀　悟
佳作「平和な世界」柳川市立東宮永小学校六年　野口　栞菜（のぐちかんな）
佳作「人間のせいで」　柳川市立昭代中学校二年　高田　希（たかだのぞみ）
佳作「世界中の子どもたち」　柳川市立昭代中学校二年　山田　美樹
佳作「沖縄修学旅行」　柳川市立昭代中学校三年　梅崎　充人
佳作「梅雨」　柳川市立昭代中学校三年　島　太輝

佳作「ビニールハウス」　柳川市立昭代中学校三年　井上　将彰
佳作「勉強は必要なのか」　東京都稲城市立第二中学校三年　森　千亜紀

第十回　長谷健賞＝平成十九（二〇〇七）年度

優良賞・NPO長谷健顕彰会・東京事務所長賞
「ちょっとしたことで」　町田市立町田第一中学校一年　星　亮太
優良賞「お兄ちゃんのいない一週間」　鹿児島県鹿児島市立郡山小学校四年　有水　魁杜
優良賞「今、この時間世界中のどこかで」　柳川市立皿垣小学校六年　田中　奈瑠美
優良賞「かぶと虫」　柳川市立柳河小学校　三年　田中　千智
優良賞「一週間のもう特訓」　柳川市立東宮永小学校　六年　宮川　奈都美
佳作「あるく」　柳川市立東宮永小学校　一年　えぐち　みき
佳作「小がっこうに入がくしたこと」　福岡県みやま市立江浦小学校一年　まつお　しょうご
佳作「『ほたるのはか』をよんで」みやま市立江浦小学校一年　さとう　ゆうし
佳作「かえるがいたよ」　台東区立浅草小学校　二年　村田　一晟
佳作「ぼくのドラゴン日記」　台東区立浅草小学校　二年　松村　たいき
佳作「じいちゃんのくもで」　柳川市立東宮永小学校　三年　中原　光瑛
佳作「生きる」　みやま市立江浦小学校　三年　大坪　優馬
佳作「かご島の野さい市場に見学」　鹿児島県鹿児島市立郡山小学校　三年　大迫　勇士郎
佳作「わたしの弟、名前は『さとし』」　台東区立田原小学校三年　荒川　真衣
佳作「せんそうはこわい」　柳川市立東宮永小学校四年　岡野　雅央
佳作「私のおばあちゃん」　柳川市立東宮永小学校四年　鴨川　ゆうか
佳作「青いいのちのうたを読んで」　台東区立浅草小学校四年　河原　沙帆
佳作「およげたよ二十五メートル」　鹿児島県鹿児島市立郡山小学校四年　中曲瀬優里
佳作「最後の力」　鹿児島市立郡山小学校四年　田村　恭平
佳作「求菩提山から英彦山まで」　柳川市立東宮永小学校五年　泓原（ふけはら）菜々子
佳作「命」　台東区立東浅草小学校五年　田宮　玲奈
佳作「コミュニティ・ガーデン」　台東区立浅草小学校五年　森藤　元
佳作「カゴメの商品」　台東区立忍岡小学校　五年　打方　夏菜
佳作「心の成長」　みやま市立江浦小学校　六年　松尾　悠（はるか）
佳作「大切な友達」　柳川市立昭代中学校　一年　椛島　なつみ
佳作「新しいスタート」　柳川市立昭代中学校　一年　藤丸　裕佳
佳作「祖父の初盆」　柳川市立蒲池中学校　二年　河口　莉紗子
佳作「手伝い」　柳川市立昭代中学校　二年　古賀　巴子
佳作「成長するための階段」沖縄県浦添市立浦添中学校二年　具志堅　優美子
佳作「心の成長」　沖縄県浦添市立浦添中学校二年　比嘉　菜津美
佳作「君に降り注ぐ太陽」　佐賀県太良町立多良中学校三年　大石　菜都美
佳作「地球と人間」　柳川市立昭代中学校　三年　山田　美樹
努力賞「やさしいひとになりたい」台東区立浅草小学校一年　たなか　もえか
努力賞「ゆめの島ねったい植物館」台東区立東浅草小学校一年　木村　瑠夏
努力賞「つめのはたらきのひみつ」台東区立東浅草小学校三年　工藤　風花
努力賞「捨て犬ポンタの遠い道」　台東区立浅草小学校三年　本橋　萌佳
努力賞「私のがんばり楽しみできること」　台東区立忍岡小学校三年　竹内　桃子
努力賞「私の夢は、ピアニスト」　台東区立田原小学校三年　前川　未来
努力賞「昔の遊びを調べて」　台東区立忍岡小学校四年　根本　萌香
努力賞「昔に使っていたもの」　台東区立忍岡小学校　四年　長谷川義隆
努力賞「ハワイアンズ旅行記」　台東区立浅草小学校五年　宮本　結衣
努力賞「和紙作りについて」　台東区立忍岡小学校五年　細見　秀峻
努力賞「カゴメ富士見工場に行って」台東区立忍岡小学校五年　渡邉　千尋
努力賞「カゴメの名前の由来は？」台東区立忍岡小学校　五年　兎澤　映美
努力賞「命の大切さ」　台東区立浅草小学校六年　宮澤　夏穂
努力賞「お姫様のお願い事」　町田市立鶴間小学校六年　平城　愛子
努力賞「動物たちを救うために」　台東区立忍岡小学校六年　金田　理子
努力賞「愛犬と初めての夏休み」　練馬区立豊玉中学校一年　楽野　雄輝

努力賞「成長」　小金井市立小金井第一中学校　二年　柴﨑　智香子
努力賞「きれいなくじゃく」　台東区立忍岡中学校　三年　鈴木　まりの
努力賞「みち子の想出Ⅱ」東京都立小金井北高等学校　一年　柴﨑　美智子

資料

「初めての方へ」松永　伍一審査委員長自筆の経歴書

「追悼のことば」

長谷健顕彰会専務理事　堤　輝男

「長谷健賞の十年の歩み」

編集後記

東宮永小学校校長　今村　公昭
保健医療経営大学教授　川島　秀樹

ご協力をいただいた方

（団体）

柳川市

東宮永小学校

ありあけ国際学園　保健医療経営大学

白秋を歌うコーラス欄の会

（個人）

ＮＰＯ子供の命と心のネット長谷健顕彰会

長谷健賞子どもの命珠玉の作品集

発行日　二〇一〇年三月三十一日

編集人　ＮＰＯ長谷健顕彰会出版委員会

発行者　特定非営利活動法人長谷健顕彰会

連絡先　〒八三二―〇〇五九

福岡県柳川市下宮永町一一七の一

TEL〇九四四―七四―〇五二七番

ユーカリの子

松永　伍一

大きな木はいいね
ユーカリを見ていると
うたいたくなるね
きみたちもそうだろう
ぼくもあの木の下で
夢をみてたよ
はる
なつ
あき
ふゆ
こころとからだを　きたえていたよ

〈詩人松永伍一が、母校大莞小学校に贈呈した詩「ユーカリの子」より抜粋
写真は大莞小学校ホームページより〉